
クライ・クライ・クライ

池野さざなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クライ・クライ・クライ

【Nコード】

N4047I

【作者名】

池野さざなみ

【あらすじ】

家出した女子高生が変な奴らに絡まれて、最終的に異世界に飛ばされる話。
挿絵付き。

第一章 家出決行

見上げると転落してきそうに大きな積乱雲が真青な空を我が物顔で占拠してる。

「夏休みの友」とかぬかしてちっとも友達なんかじゃない冊子の課題をこなすために、遅れたファシズム体制にかぶれたイガグリ頭の少年達が「命は大切にしましょう」なんて何処へやら、凶悪な殺虫兵器なる一本五百円の網を振り回して夏を必死に生きる蝉を追って土手を駆けていった。あの小学校の先生たちは教育方針を変えたほうがいいと思う。

そんな日記にすら書けないお馬鹿なことを考えつつどろどろに溶けたアイスという名の氷菓子を舌の先っぽで舐めるあたし、花の女子高生つす。

> i2479 — 386 <

生きるのが大変なほど上昇し続ける気温の中、こんな寂れた片田舎に何か良いことあるものでしょーか？ 断言しましょう。あたしが満足するようなことは絶対ゼツタイ起こらない。

ろくに食べられずに液体になってしまったアイスの棒を駄菓子屋のゴミ箱にやる気なく投げると、あたしはこれまたファシズムを感じさせる全校生徒強制所持の学校指定鞆を担いだ。

「田舎に住みたい」

なんて言う都会人がいるらしいが、あたしに言わせりゃその人は狂ってる。頭のネジが一本どころか十数本ぶっ飛んでるね、こりゃなるほど確かに田舎に住む人々は純朴かも知れない。そこには沢山

の美しい自然と心を慰める小動物が存在するだろう。

けどね、そんな半端じゃない田舎なんていまじゃテレビで見る天然記念物っすよ。殆どの田舎は最早不自由な生活を捨て、遅ればせながら文明開化の波に乗り始めたのです。

あたしが住むここ、久留米里町だつて、ここ数年やれ新リゾートだのアウトレットパークだのと機材を乗せたダンプカーがひっきりなしに農道駆け巡つて臭い排ガスをいたいけな小学生達にぶちまけてるんだ。不便なだけの空気の汚い片田舎つて虚しい。

そこであたしは決心した。どうせ空気の汚い場所に住むんなら、あたしの大嫌いな毛虫がうようよいるこんな山奥の盆地より、もっと便利で一晩中カラオケルームやゲーセンが開いてるところへ行こう、と。

うだるような暑さの中ダンプカーが作った轍にコケそうになりながら歩くあたしの向かい側から、能天気な笑って手を振るクラスメイトが近寄ってくる。

どこの世界を見回しても、日本の女子高生くらい常時ハイテンションな奴らは居ないだろう。本人達は「これでも結構悩みがあるんだよぉー」なんて主張するが、薬もやってないのに「いや、やってるかもな。あの様子では」あそこまで一日中笑い転げることが出来る彼女達は一緒に居ると背筋に悪寒すら感じる。

からまれたくない唯それだけのために、あたしは手を振るクラスメイトを完全無視して歩き続けた。笑っていたクラスメイトは手の平を返したように怒り出し、通り過ぎざまにご親切にもよく聞こえるように悪態をついた。あつという間に後ろに過ぎ去っていくクラスメイトを背後に、あたしは二年目突入して大分くたびれた鞆から

高校入学時から買い換えていない携帯電話を取り出し時間を確認した。

この携帯電話というのもまた非常にけち臭い謂れがあるもので、高校入学と共に念願のケータイを買ってもらったはいいものの、その後は宥めても賺しても自分の小遣いで買うと言ったにも関わらず、家から車で片道2時間かかる家電量販店に行くのを面倒臭がる親のせいで塗装が剥けても使い続けているという代物だ。

毎日充電を繰り返すために電池の寿命は最早風前の灯で、最大まで充電しても半日と持たない。仕方ないから授業中に教師の眼を盗んで学校から盗電しているのだが、こんな不良娘になった原因は一途に両親の怠慢にあるのだ。

そんな既に電池残量一になっているケータイを仕舞うと、あたしは少し早足になる。銀行と郵便貯金からありったけのキャッシュを引き下ろしいつもより大切に思える肩掛け学生鞆を担ぎなおし、太もも丸見えのスカート揺らして目指す先は町の中心にあるローカル線の駅。

つまりはこういうことだ。あたしは学校でケータイいじっているところをクラスメイトに告げ口され、学校から両親の呼び出しをくらい、担任に口頭注意され、不機嫌絶頂の両親の前だから新しいケータイを買えと言ったのにと生意気を言い更にまたまたケータイをねだったのだ。

前々からあたしのことをとんでもない不良学生だと目の敵にしてきた担任は両親と共にあたしをこってこてに叱り、いや怒り、激昂した父親は「おまえなんか勘当だっ！」と汚い唾撒き散らして全校生徒をギャラリに宣言した。何もそこまで怒られる筋合いは無

いと、あたしは教科書を教室の床にぶちまけて扉を蹴破り学校から走り出た。

親から勘当だと言われたから、もう家に帰る理由なんか無い。唯一あたしをこの腐った片田舎に縛り付けていた鎖が切れて、あたしは下校し一直線に町で一つしかないATMに走り、貯金を全額引き出した。家出決行。あたしが理想とする生き方を貫くのだ。

こんなこともあるうかと何ヶ月もかけて探し出しておいた、正規の手続きなんか踏まなくても即日入居できるボロアパートには既に半年分の家賃を払っておいたから、住む場所なんかには困らない。

父親に隠れてバイトした給料は半年の家賃を払っても余裕綽々で、街に着いて仕事を探す間まで楽に食い繋げるだろう。そんじょこちらのプチ家出なんかと違ってあたしの家出計画は準備にぬかり無い。去年二ヶ月だけ祖母の介護のために家族揃って久留米里町に住んでいた都会育ちの元クラスメイトの怪しい伝手を辿って保険証まで偽造したけど、多分使うことはないだろうな。

三時間に一本しか電車の来ない駅に辿り着くと、まだ時間があると思ってコンビニで充電池を買おうとガラスの自動扉を通過した。体感温度が五度くらい一気に下がり、最も近代化の進む駅のコンビニに入るレジ手前に目的物がある。早速買おうと手を伸ばしたあたしの動きが止まった。

何も電池の値段が高かったからじゃない。今の手持ち金ならこんな額痛くも痒くもないけれど、まてよ、とあたしは考えた。こんな身元が割れてるケータイを持ってたら、一瞬にして居場所がばれてしまう。それなら電池が切れるまで十二分に有効活用させてもらって、あとは高架の上から投げ捨ててしまえばいいじゃないか。パケット代は親に請求されるんだし。

手を伸ばしたまま固まるあたしを見て万引きでもするのかと思っ
た店員がわざとらしい咳払いをした。あたしは振り返って思い切り
そいつを睨みつけると大股でコンビニを出た。

ケータイがいらないんだったらこんな町もう用がない。あたしは
一台しかない券売機の前でもたもたと切符代を計算している爺さん
を押し退けると迷うことなく都心行きの切符を買った。

券売機はつり銭を出すだけなのに大袈裟にがごと音を立て、な
かなか小銭を吐かない。古くて整備もされていない赤字ローカル線
の券売機なんてこんなものだろうか。ついに券売機の赤いランプが
点灯し、お釣りが足りません、係員を御呼びくださいと金切り声を
上げた。五千円札なんか突っ込んだのが間違いだっただんどうか。
そうこうしているうちに列車が来てしまった。

小銭のために乗り損ねて三時間も待たされるのは御免だ。あたし
はおろおろする爺さんと叫び続ける券売機に背を向けると慌てて改
札を通り抜けてホームに足を着けた。

寂れたホームには人っ子一人居なかった。人口五千人以下の過疎
地、しかも平日の真昼間なんだから当然といえば当然かもしれない。
風速三メートルくらいの生暖かい風が、がらんどうのプラットフォーム
を通り、明治始めに建てられたのかと見紛うほど腐敗した雨除
けを鳴らしながら去っていく。券売機の音が心成しか遠ざかってい
き、まるでそこは切り離された宇宙空間だった。ロケットに見立て
られた銀色の車両の扉がぶしゅーと音を立てて開く。

都心へ向かうローカル線車両は見ていて哀しいくらいに誰も乗っ
ていない。まあ平日昼間っから三時間に一本しかやってこない電車を
待ってまで都会へ行きたがる人間がいるほうが珍しいもんだ。あ

たしは踵を踏み潰したローファアを車両入り口に掛けた。車両先頭から誰もいないと決め付けている車掌が出発を合図するけたたましい鐘を鳴らした。

追い討ちを掛けるように扉が閉まりかけ、あたしは挟まれたくない一心でもう一步を踏み出した。ついにあたしはこの町から開放されたのだ。動き出した汚いだけの街路樹の背景がそれを証明していた。

「……ふー、^{つか}疲れたア」

緊張が一気に解けたあたしは車内のベージュともクリームともつかない薄汚れたシートにばふん、と腰掛けて鞆を放り出し、自分自分の肩を揉んだ。

「お疲れさんだねーおじょーさん」

誰もいないはずの車内から、奇妙な声があたしの耳に届いた。あたしははつとして肩を揉んでいた手を止めて左右を見回す。やっぱり誰も車内には居ない。ストレスのせいで遂に幻聴が聞こえ始めたかと二度目の溜息を吐きかけたその時、あたしの視界の端っこで何かが動いた。

「そおんなに溜息ばかり吐いちゃってえー酸素が足りてないんじゃないのお?」

声のするほうに顔を向けた。きっとその時のあたしはそれまでの生涯で一番間拔けな顔をしていたと思う。兎に角それぐらい、有り得ないことが超現実臭い片田舎を出発したばかりの赤字ローカル線で起こっていた。絶叫しても、おかしくない。

「ういーす、始めましてっか？」 > i 2 4 8 1 — 3 8 6 <

日光で退色した車内の吊り下げ広告の一枚が、あたしに向かって皮肉な笑みを浮かべていた。いやいや正確には、吊り下げた広告の中の奇天烈な格好をした人物が、だ。

そいつはあたしにウィンクしてけたけたと笑った。あまりに驚いてシートからずり落ちたあたしを見て、そいつはまた笑った。存在意義が理解できない広告な中の喋るそいつに、あたしは開いた口が塞がらなかった。

第二章 電車の中で

「な、なななん何なんだおまえっ」

頭の中が非常事態になったあたしは普段のお行儀は何処へやら、思わず地の喋りで人差し指をそいつに向けて叫んだ。電車の中には線路を走る車輪の振動音と車体と外気の摩擦音が在るのみ。至極当然なことを訊かれたそいつは意外や意外と円く剃られた眉を上げておちよぼ口を尖らせた。

「よろしくないぞおー。まず自分から名乗りたまへー」

そいつは緑とピンクのまだらになった髪を掻き揚げ、これ以上ないほど偉そうにふんぞり返ってあたしを見下ろす。そいつのどこぞの社長張りに偉そうな態度にあたしはむっとして立ち上がり、広告に顔をくっ付けて大声で名乗った。

「丙盟^{へいめい} 魅首^{みしゆ}、十八歳だっ！ 何か文句あるのか、ああ？」

ドスを効かせてそう言うと、折角人が言われたとおり自己紹介してるのに広告の中のそいつは耳を押さえて眉を顰めた。

「うるさいのおー。疲れた疲れたって言うわりには元気そうじゃん？ じゃんじゃん？」

ふざけた顔でにまっとなつと笑うと、そいつはあたしに広告の中から精一杯顔を近づけた。どうなったかかって？ ショウウィンドウに顔を引っ付けた子どもがなるみたいな顔になったわけだ。分からない奴は誰かに頼んでやってもらえばいい。

あたしの脅しに全く動じず、そいつはマイペースにのらくらと自己紹介を始めた。

「おいらの名前はスイフィだよん。名前の由来ってのはあ、話すと長くなるんだよねー。え、聴きたい？ んじゃー話そっかなあ」

「誰もおまえの話が聴きたいなんて言っていないっつもの」

「この髪の毛、ナイスなストライプになっちゃってるでしょん？ 特にこのピンクの量が絶妙なんだけどねえ……」

「だからおまえの名前の由来なんかどうでもいいんだよ」

「……が、だからここでこうなってさあ。んでもっておいらの伯母さんが言ったんだよね、おまえさんそれじゃ空飛ぶパンプキン・オツズだって。はははホント笑っちゃうよね、でしょ？ でしょ？」

「聞こえてんのか？」

「それからさ……うん、これが一番大事なトコなんだけど……うへへ笑えるうー。いくらなんでもそれは無いよねい、ジャキンミツシユーンって、それでも謝ってるつもりかっての！」

「シカトもいい加減にしるよテメエ」

「……って、これがおいらの名前の由来。分かったかねい？」

忍耐力をフル稼働させているあたしの努力など露知らず、そいつはにやりと笑ったまま人差し指を広告の表面にぐりぐり擦り付けた。

そんな仕打ちをされて不機嫌も当然なあたしに、そいつは当たり前のように上から目線で神経を逆撫でする口調で訊いた。

「んん？ 分からなかった？ んじゃあもう一回話してあげようかあ」

「分かった！ わかったから、もう一人で話すのやめろ！」

また長い与太話を開始しそうになる広告の中の奇天烈人間を制止して、あたしは混乱した頭を何とか整理しようとする。 が、出来るわけがない。この状況で。

考えすぎて煮詰まり頭痛が始まった頭を押さえ、あたしはぐったりとした眼でそいつに訊いた。

「えーと……スイフィと言ったな。おまえ何でそんなところにイカれた格好で居るんだ？」

あまりの非日常に気分が悪くなって顔色が青ざめてきたあたしに気を遣うような素振りを見せて、そいつは今までの能天気から少し声のトーンを落とすと落ち込んだ様子で話し出した。

「ん……おいらこの中に閉じ込められちゃまったんだよう……。そりゃー、いつものおいらの力を持つてすれば、こんなちゃっちい檻なんてすぐ出られるんだけどさ……」

てつきりあたしを待ち伏せして物好きにも広告の中に自分から入っていたと思っていたが、どうやら違うみたいだった。そいつはよく見ると『中学一年生』なんてナンセンスにもほどがある昭和初めの挿絵作家が描いたような黄ばんだ広告の中に入って、少しだけ悲しそつに見えた。

「閉じ込め……られてんのか」

「あるお方から呪われちゃったんだよねい……一人ぼっちは嫌だねい」

さっきまでの元気が嘘のように、そいつは広告の中で肩を落とす背中を丸めて小さくなっていった。緑とピンクの縞髪で隠れた顔からは、くすんと鼻をすする音が聞こえてくる。

つまらない古い色褪せた広告に閉じ込められた場違いなド派手人間。外の世界を恋しがっても決して出られないその姿が、何故かさっきまでのあたしとダブって感じた。あたしだって、居たくも無い場所に縛られる苦しさはよく解かる。憧れる外の世界がすぐそこなら、なおさらだ。

超常現象の恐怖を超えて同情が心に芽生えたあたしは、吊り広告の中で電車の振動に合わせ揺れるそいつの背中に、不覚にも優しい声を掛けた。

「あたしが一緒に居てやるよ」

俯いていたまだら髪の頭がぴくりと動いた。傾きかけた昼の日差しは埃で曇った電車の窓を通して赤みのとんだ広告とあたしの後頭部を照らす。

「……ほ、ホント？」

長い前髪を掻き分け意外に素直にそいつは頬を染めて顔を上げた。一度言ってしまったあたしは言葉を引込めるわけにもいかず、照れ臭いけれど頷いた。

途端に、広告の中から色とりどりのリボンが飛び出してきて、あたしの眼前でうようよとくねりだした。啞然とするあたしの前を断末魔を上げるミミズみたいのにのたうちまわるリボン達。よくよく見るとその先の一つひとつに、薄桃色の変てこな形をした物体が巻き取られていた。

全ての物体が巻き取られると、賑やかな色のリボン達は色褪せた広告の中へ音も無く戻っていく。呆気に取られているあたしの耳に、広告の中の奇天烈人間が笑い転げる声が聞こえてきた。

「契約成立う！ あつりがとねえーい！」

狡猾そうな顔でそう言うと、そいつは手に持った銀色に輝く金属板をあたしに見せ付けた。そこに踊る意味不明な象形文字にあたしは眼を白黒させながら眼を通す。見ても全く読めなかったが、文字が眼に入ると頭の中でさっきの言葉が独りでに再生された。

つまり。

騙されたってわけだ。あたしは。

「これはれっきとした契約書だからねいー。誰がどんなことしたって契約が果たされるまで破棄できないよーん！」

緑とピンクの髪を振り乱して狂喜乱舞するそいつ。広告の中で上下するキラキラ輝く契約書を取り戻そうと、あたしは紺のハイソックスを履いた足で蛙よろしくびよんびよん飛び跳ねる。

「ふ、ふざけんなよ！ そんなのサギだぞ！ あたしはそんなつもりで言ったんじゃないっ」

誰がどう聞いても正当性溢れるあたしの言葉を聞いて、そいつは

小生意気な笑みを浮かべたまま人差し指を振った。

「ちゃんと確認とったよお。ほらさつき、『ホント？』って訊いたじゃん。……じゃん、ジャンパースカート！」

なんてレベルの低い駄洒落を吐いて、そいつは笑い転げながら広告の奥に契約書を仕舞いこんでしまった。視界から消えてしまった契約書を見つげ出そうと、あたしは必死に背伸びして寒い宣伝文句が踊る広告の中を覗きこむ。

こんなクレイジーにも程がある奴と契約なんかしてしまって、何されるかわからない。お先真つ暗だ。何としてでもあの契約書を取り返さなくては。

不屈の精神で広告の中に眼を走らせるあたしを見て、そいつはにやにや笑って言う。

「契約書取り返したいのねー？ そしたら契約書に書かれた責任を果たさないとねい」

「せ、責任？」

そいつが上から目線で放った言葉にあたしは思わず鸚鵡返して訊き返した。責任、この世で一番面倒臭い言葉。悪いことが起こったとき、皆を代表して罰をうけたり、一人だけ束縛されてしまう厄介なモノ。これまでずっと避けて通ってきたそれをあたしに押し付けるっていうのか。

「そおだよーん。それが果たせないまでは、おいらと魅首は二心一体なのねい」

「一心同体じゃなくて……？」

理解し難いことを言われ、あたしは今朝一時間かけて麗しく整えた眉を寄せた。うんうん、とそいつは悦に入って頷き、そして突然はっと目を見開いた。

「どーしたんだよ」

「次の駅についちゃうぞっ！ 魅首う、早くおいらをこの檻ごとそのぼろっちい鞆に入れてくりっ！」

そいつに言われて揺れる電車の窓を見ると、外の景色が緑生い茂る山から小さい町へと変わっていく。駅に着けば一人くらいでも他の乗客が乗ってくるかもしれない。吊り下げられた広告と向き合い一人で喋ってるあたし……史上最低にかっこ悪い。

「……今度は何もしないだろうな」

「はやくはやく！ 他の人に見られるの、魅首だつて嫌でしょー？」

念を入れて問いたただすあたしの質問に答えず、そいつは緑とピンクの髪をぱたつかせてあたしを急かす。睨みあうようにしているうちに、電車が駅のホームへと入ってしまった。

序々に速度を落とす電車の曇った窓ガラスを通して、駅のホームに立つ半そでノータイのクールビズな、でも顔は暑苦しいサラリーマンが見える。丁度あたしが乗る車両がサラリーマンの前で止まることに気付いたあたしは、切羽詰った結果急いで電車の吊り広告を引き千切り肩掛け鞆の内ポケットに捻じ込んだ。

「痛たた！ んもー、乱暴すぎるよお」

「静かにしろよっ」

喚くそいつを鞆の上から押さえつけると、あたしは至って平静を装って乗り込んでくるサラリーマンと目を合わせないように窓の外を見た。サラリーマンはあたしなんか全く気にかげず、入ってきた昇降口に一番近い7人掛けシートに偉そうに踏ん返り返って三人分の場所を占拠した。あたしはなるべくサラリーマンの気を引かないように、鞆をしっかり押さえたまま伏し目がちに電車の床を見詰め続けた。

終点までの四時間半の間、結局この車両に乗っていたのはあたしとサラリーマンだけだった。

第三章 奇妙なこと始まる

スイフィなる広告に閉じ込められた二次元人間を学生用肩掛け鞆に入れて、あたしは都心のプラットホームのコンクリートを踏んだ。転落事故防止のため設置された、列車が来たときだけ開く自動扉があたしの後ろで大仰な音を立てて閉じた。

流石都会の人口過密地だけあって、夕暮れ時のプラットホームは人で賑わっていた。いわゆるアフターファイブを楽しむためにはっちりメイクをキメたOLのお姉さま方がミュールの踵をこつこつ鳴らして女子高生よりは少し長めのスカートを揺らしエスカレータを降りてくる。キャッチーなお兄さんや住所不定そうなおっさんの中、急にスイフィが喋りださないようにあたしは肩掛け学生鞆をしつかりと握り締めた。

手垢が沢山ついて赤黒くなったエスカレータの持ち手を心細い気持ちで握るあたしを、ケータイで話しているばりばりの営業マンが追い越していく。広すぎてどこからでたらいいのかわからない改札に切符を通し、あたしは電気で溢れていて、けれどもゴミも地面に溢れているキレイなんだか汚いんだかよくわからない都会の駅を見回した。

まるであたしの気持ちを代弁しているような暗雲垂れ込める空を見上げるあたしの肩を、後ろから男が思い切り突き飛ばした。

「うわっ！」

タバコの吸殻だらけの地面にもんどりうって倒れるあたしを跨いでピアスだらけの男は横断歩道を渡っていく。かっとなったあたしはすぐさま起き上がるとその男へ一直線に走った。

「なんだよテメー、人のことナメてんのか？」

男にガンつけて凄むが、白黒縞々の横断歩道を歩く男は道路の向うを見たままで全然こつちを向かない。頭に来て男のジッパーだらけの服を掴むと、男はあたしが掴んだところを見て無言でジッパーを下げた。柔らかなあたしの手の皮がジッパーに挟まれる。

「痛^{いた}つ！」

思わず手を離してしまうと、男は点滅し始めた青信号に少々早足になりながら横断歩道を渡っていつてしまった。慌てて赤信号の中のみらから歩く人間達を掻き分けて後を追うと、男は既に何処かの角を曲がって見えなくなっていた。

「くっそー……」

人のこないゴミ箱の横でジッパーに挟まれて赤く腫れてきた手を摩りつつ行儀の悪い言葉を吐いていると、地面に置いた学生鞆の中からスィファイがけらけら笑う声が聞こえてきた。

「ああそーそー。言うの忘れてたけどお、おいらを所有している間は普通の人に魅首の姿は見えなくなっちゃうからねい」

「はア？」

顔を歪ませて学生鞆を睨むと、またけらけらと笑い声が聞こえた。あたしは四つん這いで鞆に近付き、電車から盗ってきた古い吊り広告を取り出してその中で笑っている緑とピンクの髪の間を覗みつけた。

「どづいつことだよ」

「どづいつて言われてもあー。生きる波長が違うおいらと契約交わした魅首の波長がおいらと一緒にになって、他の人に見えなくなっちゃった、それだけのことだよん」

「それだけって　もの凄く重要なことじゃんかよ！そーいうことは早く言えっ！」

生死に関わる重要な事をさも軽そうに話すスイフィにあたしは激怒する。どこが生死に関わるかって？　人間から見えないんだったら、青信号で横断歩道渡っていても、カーブしてきた車に轢かれて死ぬかもしれないってことですよ。骨折でもしてごらんさい、病院に行ったって姿が見えないんだから名前を呼ばれて診察室に行っても診てもらえないんだから。

そんな見えない状態で死んだら誰も死体を片付けてくれない。何処かで野垂れ死んで誰にも気付かれず腐って異臭を放つ……考えただけでも身の毛がよだつ。

見えないことで起こる様々な危険を想像して鳥肌を立てるあたしの横で笑い転げるスイフィ。何をしても神経に障るこいつを睨みつけるあたしの頬に、冷たいものが当たった。

「……？」

反射的に見上げると、空まで聳えるビルの間から小粒の雨が幾つもいくつも降ってきていた。突然の雨に傘を持っていないあたしは二つの手で頭を覆う。間抜けな格好で雨を凌ごうとするあたしの耳に絹を裂くような悲鳴が聞こえた。

学生靴の上から聞こえた叫び声にあたしは首を回してスイフィを見る。同じように頭上に両手を翳すスイフィがこの世の終わりが来たような顔で雨が降る空を見上げていた。

「た、助けて濡れちゃうよー！」

涙声で懇願するスイフィの腕に一滴の雨粒が落ち、水彩インクで描かれたイラストのようにスイフィの輪郭が滲んでいる。散々あたしをコケにしたスイフィの困る様子をいい気味だと面白がって見ていると、広告中で濡れていない場所を逃げ回るスイフィが怒った声であたしに命令した。

「なにぼーっとしてるのさ！早くおいらをこの靴の中に入れてくれよっ！」

「ふん、今まで偉そーにしてたから天罰が下ったんだよ。二度とあたしを騙さないって言うなら、この中に入れてやってもいいけど？」

「

そう言っつてスイフィを学生靴から下ろしてポリバケツの蓋の上に置き、あたしはスイフィに学生靴を見せびらかす。得意になるあたしに、スイフィはとんでもないことを言い放った。

「ふんだ、いいもんねい！雨に滲むのは魅首だって同じなんだから」

「な、なんだつて？」

スイフィの悪い冗談としか言えない発言を真に受けてあたしは自分の身を眺め回した。小雨で湿った地面に肩掛け学生靴が音を立て

て落ちる。

あたしの肘が、濡れた水彩画のように滲んでいた。丁度スイフィに雨粒が当たったところだ。あたしとスイフィは同じところが同じように滲んでいた。

「ほーらねい、言ったとおりでしょ」

拗ねたように腕を組んでそっぽを向くとスイフィは偉そうに言った。そして降って来た雨粒がその胸に当たった。スイフィのトータルコーディネート完全無視のでたらめな服装にじわじわと染みが広がっていく。

「ひ……！」

胸にぬめつとした感触を覚えたあたしは自分の胸元を見た。紺と白のセーラー服が輪郭を失って空間に溶け出していく。溶ける恐怖に歯の根が合わなくなつたあたしは即刻スイフィの入った広告を掴み取ると、持っていたハンカチで水分をふき取り防水加工の学生鞆に放り込んだ。

広告を雨から隔離して染みの侵食は収まったけれど、胸と肘の溶けた部分は元に戻らない。兎に角濡れないところに避難しようと早足に歩くあたしの横で、学生鞆の中からスイフィの怒った声が聞こえる。

「だから言ったじゃん。この染みは乾かしても取れないからねい。勿論魅首の溶けた部分も戻ってこないよ。これを治せる人はこの世界でたった一人しかいないんだから」

只でさえ理解不能で奇怪な人生未曾有の事件に巻き込まれて意気

消沈しているあたしに、スイフィは無慈悲な勧告をする。憤慨と混乱で頭がいつぱいいつぱいになってしまったあたしは、取り合えず雨に濡れない安全な場所を目指した。

行き先は、あたしが借りたボロアパートだ。

第四章 最悪の管理人現る

少々雨足が強くなってきた街の中を、あたしは感熱紙に印刷された地図を頼りに雨水を滴らせ歩いてきた。全身濡れていくらか胸に広がる気持ちの悪い感触は緩和されたけれど、ふと目線を胸に落とせば、そこにはホラー映画の如き溶けたあたしの身体が存在している。

肘も、胸と同様滲んでいるけれどそれほど不快な感じではなかった。違いがあるとすれば、半袖のため肘は肌丸出しで輪郭がぼやけていることだろうか。服と肌が混ざって溶けている胸は見た目におぞましい。

「おーい、まだなのお？ おいらもう眠くなってきちゃったあ」

一々癩に障るスイフィの偉そうな声が聞こえ、続いてふわあああ、と身体中から気の抜けるような大きな欠伸が聞こえた。滲んだ広告の中で緑とピンクの髪を弄びながら偉そうに寝そべっているスイフィの姿があたしの頭に浮かび、思わずむかつときたあたしは腹いせに道路に唾を吐いた。

「うつせーよ！」

「言葉遣いが荒いねー。うら若き乙女がそんなことでいいのか、いやはや世も末よのう……」

急に爺さんじみた口調になりぶちぶちと説教を始めたスイフィを出来るだけ無視して、あたしは茶色く変色し始めている感熱紙の線を指で辿り目的のポロアパートまであとどれ位か確かめた。うかう

かしているといくら感熱紙といえども雨に濡れて使い物にならなくなってしまう。それに肩掛け学生鞆の防水がどこまで持つかもわからないし。

降り注ぐ雨の音にも負けず耳に届くスイフィに適当に相槌を打ちつつ、街灯も疎らになってきた裏街のアパートの前で、あたしは足を止めた。

「……すつげえボロい」

一応二階建てのボロアパートを見上げ、あたしは感じたことを素直に言葉で表現した。

目の前の建物は雨に打たれ今にもあたし目掛けて倒れこんできそうだった。基礎がイカしてるのはまず間違いない、道路のほうに全体が前傾している。間取り図と築年数しか見ていなかったあたしは、まさかここまでボロいとは、と間抜けにも口を開けて化粧版の剥がれ掛けたアパートを見上げた。

久留米里町でもこんなシヨボイ建物見たことがない。それは古い時代に立てられたというよりはむしろ、戦後物不足の真っ只中闇の商売が横行していた頃に、どさくさに紛れて建てたものだった。

鞆が揺れなくなったことに気付いたスイフィが興味津々な声で啾然と立ち尽くすあたしに話しかける。

「もう着いたんだねい？　ねえねえ、どんなカンジ？」

肩掛け学生鞆の中から聞こえる子どものような声に、あたしは口の中に雨が振り込むのも構わず馬鹿面下げて呟いた。

「……寝てる間に死ぬかも。家が倒れて」

「えっ、そうなのお？ そんなにボロっちいの？」

何故こいつが驚くか不明だが、スイフィは素っ頓狂な声を上げて暫し静かになった。

双方が沈黙して、雨粒が地面を叩く音だけが灰色の空間に響く。郵送してもらった鍵を手に持ち、入るか入るまいか悩むあたしの肩を、雨粒ではない誰かの手が叩いた。

「う、うわっ！」

驚いて振り向きざまに肘鉄を繰り出してしまったあたしに、背の高い男が微笑み掛けていた。鳩尾を摩りつつ、引き攣った笑顔を浮かべてそいつがあたしに話しかける。

「丙盟へいめい 魅首みしゅさん、だよな？」

初対面でいきなり背後から肩を叩き、鳩尾に肘鉄されたのに微笑みを取り繕い続ける怪しい男に厳戒態勢を取るあたしは、顎を引いて男を睨みつけた。

「……だったら何だっただよ」

男はまだ痛む鳩尾を骨ばった手で摩りながら苦笑し、あたしの後のボロアパートを指差した。振り返ってアパートを見るあたしの肩を気持ち悪い程優しく掴んで自分のほうに顔を向けさせると、自分でこれが一番カッコいいと思ってるらしき笑顔でそいつは自己紹介した。

「初めまして。オレはこの管理人、三高^{みたか}好男^{よしお}。これからよろしくな」

そう言うてにっこりと笑うそいつの口元は雨の日なのに僅かな光に反射してキラリと白く輝いた。高級そうな香水の匂い漂うそいつは驚くあたしに写真のように動かない笑顔を向けている。少しだけ脱色された髪をワックスで流行りの髪形に固め上げているそいつに、あたしは訝しげに訊いてみた。

「お、おまえ……あたしのことが見えるのか？」

「うん？ 見えるよ、そりゃ。何言ってるのかな」

絶妙に焼けた小麦の肌に笑った皺を寄せ、そいつはあたしの質問を笑い飛ばした。さつきスイフィが言ったことと矛盾する展開に頭を悩ませるあたしの横、肩掛け学生鞆の中からスイフィの明るい声が聞こえてきた。

「その声はヨツシイだねー。ってことは、アズアちゃんも一緒かなあ？」

学生鞆に視線を移すそいつからスイフィを隠そうと、あたしは慌てて鞆を身体の後ろに回した。空々しい声で弁解するあたしに構わず、そいつはあたしの後ろに首を回して鞆に、いや鞆の中に居るスイフィに親しげに話しかけた。

「きみがスイフィだね。いやあー、よかったよかった。ずっと待ってたんだよ」

と、百点満点の笑顔で言うと、そいつはあたしに向かって礼を言った。

「スイフィを無事連れて来てくれて、ありがとう。よかったよ、きみとスイフィの相性が良くって」

喋る鞆を目前にしても動じるところか余裕綽々のそいつの言うことにあたしは首を傾げたが、その意味を理解して愕然とした。

「おまえ……あたしがスイフィと会うこと知ってたのか？」

「んー、まあそういう込み入った話はこんな雨の下じゃなくて、暖かい部屋でしょうよ」

質問に答えずあたしの肩に手を回して部屋に連れ込もうとするそいつの手を振り払い、あたしは口を尖らせる。びしょ濡れになった髪が反動で揺れ、大粒の雫が散った。

「ちゃんと答える！」

土砂降りに近くなってきた雨の中あたしは目の前の怪しい管理人に叫び、そいつは少し驚いた顔を見ると笑顔から一転険しい顔であたしの滲んだ手を掴むと無理矢理軒下に連れ込んだ。

「何するんだよっ」

さつきよりも数倍も強く握られた手から滲んだ手を抜こうとあたしがもがくと、そいつは真剣な表情であたしを見下ろした。その怒ったような眼差しにあたしは気まずい思いで静かにする。

「兎に角濡れた身体を乾かすんだ。いいね？」

有無を言わせない強い口調でそいつは言い、一階の右端の玄関扉を開けると中に入るように促した。これ以上逆らったら本当に怒られかねないと感じたあたしは、大人しく家の中に入った。

「なあ、何て呼べばいいんだ？」

予め客が来ると想定されて暖められたリビングの中、椅子に腰掛バスタオルで濡れた頭を拭きながらあたしは好男に尋ねた。スイフイはヨツシイと呼んでいたけれど、そんな言うのを憚るような恥ずかしいあだ名で呼ぶつもりなんてさらさら無かったからだ。

「……好男。単に好男でいいよ」

あたしが歩いて付けた水の足跡をハンドタオルで拭いつつ好男は答えた。本人が敬称無しでいいと言ったんだから、あたしはそうさせてもらうことにした。

糊の効いた白いテールブルクロスの上では、まるで金箔のように大事そうにスイフイの入った吊り広告が広げられている。その横に置かれた高そうなハーブティーの匂いを幸せそうに嗅ぐスイフイがあたしに甘えた声で言った。

「魅首う、そこのお茶取ってちょっとだけここに垂らしてくれよお。そしたらおいらもお茶が飲めるからさあー」

それくらい我慢しろ、と言葉が喉まで出かけたが、今までの経験上逆らったら何されるか判らないので黙って言われたとおり雨で湿

気っている吊り広告の白い場所に一滴だけハーブティーを垂らした。紙の中のスイフィは緑とピンクの髪を揺らして嬉しそうにお茶の染みに近付き、どっから出したのか透明な薄桃色の耐熱ガラスコップでそこを二、三度、まるで桶の水をコップで汲むような動作をした。見る間にスイフィの持つカップに湯気の立つハーブティーが溢れ、スイフィはこの上なく優雅にお茶を啜った。

またまた超非現実的な光景を目の当たりにしてしまったあたしの頭に、白い乾いたバスタオルが濡れたバスタオルの上から被せられる。

「もうそれは洗うから。こっち使って」

「ん……わかった」

濡れたバスタオルを好男に渡し、あたしは首筋を伝い落ちる冷たい雫を拭き取った。両手に濡れたタオルを持った好男が洗濯機に向かうのを、あたしは呼び止める。

「で？ さっきの話は何時再開するんだよ？」

モノクロタイルの脱衣所でタオルを洗濯機に放り込む好男が振り返り、ああ思い出したと呟いた。値の張りそうな車の模型が飾られたショーケースの横を通り過ぎ、好男は白いクロスが掛かったテーブルを挟んであたしの向かいに座る。イラついて机を指で叩くあたしに微笑みかけると、自分専用のモノクロカップからお茶を啜った。

「えっと、きみとスイフィが会うことをどうして知っているかって話だったかな」

ワックスで立てた髪の先を弄り、好男は顔を傾けてあたしに笑い掛ける。あたしはぶすつとした顔で頷くと、正面から好男を睨み付けて無言で先を急かした。

洒落たバーの照明のようなライトの下、好男は勿体付けてキザっぽく笑い、雨で濡れて着替えた下ろしたてのシャツの襟を直した。それから色素の薄い茶色の目でこっちを見ると、薄く整った唇から白い歯を覗かせて話し始めた。

「要するに、知ってたっていつか……仕組んでたんだよ、オレが。親に内緒できみが一人で街にやってくるって聞いて、スイフィに連絡したのさ」

好男がタイトなジーンズからケータイを取り出し、それを振ってみせた。傍らで優雅にお茶していたスイフィも目を上げて、あたしにむかってにんまりと歯を剥き出している。

好男の言葉にあたしは今世紀最深な皺を眉間に寄せて、片や文明最先端の利器、片や非現実の最骨頂なる紙切れに住む二次元人間を交互に見た。このイカレヤローがこの世で最も合理的かつ利便性に優れる携帯電話ケータイを使いこなすことなど出来るだろうか？ 断言しよう。無い。絶対ない。有り得ない。

信じる気の無い視線を感じたのか、好男はまた白い歯を覗かせて決まり悪そうに微笑すると冗談だよ、とケータイを仕舞った。それから深く背凭れに身体を預けると大分崩れた調子でジーンズの両ポケットに手をつ込み本当のところを話し始めた。

「流石にケータイは使わなかったけど　もつと特別な方法で連絡を取ったのさ。だってオレもきみと同じだから」

「は？」

いきなり目の前の軽そうな男と同等扱ひされたことに対して、あたしは思い切り迷惑そうな顔をしてしまった。我に返って眼を泳がせるあたしに構わず、好男はまたモノクロカップから一口お茶を飲むと高級そうな時計を着けた左手をあたしのほうへ差し出した。……さっきまで時計なんかしていなかったのに。

それは不思議な時計だった。いや、今まであたしが安っぽいありきたりのデザインの時計しか見たことが無いからかもしれないけど、兎に角、時計の中心が大分左上に寄った変な造りの時計だった。普通だったらその開いている箇所に温度計やら世界の都市に合わせた時計やら付いているのに、その時計には他に何も機能がない。西暦や曜日を表す小窓さえも。

奇妙な時計をしげしげと覗き込むあたしの眼に、時計のぼっかり空いた場所が映りこむ。

一瞬、その鏡のような黒い板の上を不審な陰が過ぎった。

「…………？」

朝からイカしたことばかりに遭遇していたあたしは、何となく嫌な予感を感じながらも疲れているんだ、と自分に言い聞かせ目頭をぐっと押さえ、再び文字盤の空いた箇所を見た。

今度は間違いなく、文字盤に何か映っていた。長い髪のシルエツトだ。初めはあたし自身の影が映りこんでいるのかと思ったが、あ

たしの髪は肩に掛かるくらいだし、こんなにうねっていない。

「な、なんだよ？ この黒いの」

不気味な影を指してあたしが言っていると、好男は時計の中の影を指して言った。

「これがオレの相棒。アズアっていうんだ」

それから手首を少し上げて時計の中の影に好男が話し掛ける。

「ほら、ちゃんと正面向いて挨拶しろよ」

「……もう向いている」

「あ、ゴメン」

背筋がぞつとするとするほど冷たい声が時計の中から聞こえ、影が僅かに動いた。じつと見詰めていたあたしに好男が肩を竦めて笑い、軽く溜息をつく。

「アズアは全身が黒いから、どっち向いてるのか判り辛いんだ。よく見ればわかるんだけど」

そう言ってあたしと一緒に時計を覗き込む。近寄ってくる頭が接触しないように少し身を引くと、あたしは全身黒尽くめの陰気な影を警戒しつつも眺めた。暫らく眺めていると目が慣れて、只の影じゃなくて、ちゃんとした顔があることが判明した。だけど髪も服も肌も、黒目どころか白目さえも真黒だなんて、一瞬で表裏を見分けるほうが無理だろう。

生物の実験で顕微鏡を使って微生物を見るよりも真剣に観察していたかもしれない。やがて影が動いて、少々怒り気味の声であたしに言った。

「何時まで眺めている気だ。無礼だぞ」

開いた口から覗く歯まで黒かった。

「……悪かったよ」

高圧的ながらも気高さを感じる物言いに、あたしは素直に謝った。同じ理解不能な生命体でも、どうやらスイフィとは違って物静かな奴らしい。声は冷たいけど、正直契約するならこっちのほうがよかったなと思うあたしの耳に、氷に塩をかけたような冷たい声が聞こえた。

「わたしの名はアズアールメイデン。そなたの名は？」

「へいめい丙盟 みしゅ魅首。んでもってこっちは」

スイフィを見せようと卓上に干してある紙にあたしは眼を移す。二次元に生きるスイフィが、必死に三次元の世界にある時計を覗き込もうと、ノミかカエルのようにびよんびよん跳ねまくっていた。

「アズアちゃん！ スイフィだよー！」

知人に会って狂喜乱舞しているスイフィの声を聞いて、影が少し動いた。顔を俯けたように見える。スイフィは始めの挨拶を軽く黙

殺されたのにも関わらず、マシンガンのように黄色い声を張り上げて自分の存在を精一杯アピールしている。

「久しぶりだねーこないだ会ったときからどれくらい経ったかな？ あ、そうそうリーリがよろしくって言ってたよ勿論おいらがこの檻の中に入れられる前の話だけだおー」

「……ああ、久しぶりだな」

影が動いて喋り続けるスイフィに返事をした。さつきよりも数倍冷たさが増してると感じたのは、あたしだけだろうか？

イロハのイの字も知らない新米セールスマンの如く脈絡の無い言葉を捲くし立てるスイフィにうんざりしながら、親切なあたしはまだ湿気る紙の両端を持つ。感動のご対面に一役買って、吊り広告と時計が向き合うようにした。

ここで初めてあたしは広告の裏側を見たけど、スイフィって「こつち」には居ないらしい。ひよつとしたら、無防備な後ろ姿が見えるんじゃないかと期待してたつてのに。

アズアと向き合ったスイフィはびたりと喋るのを止め、静かになった。思うに、黒い影から発せられる、冷めた雰囲気を感じ取ったからだろう。コイツでも空気を読むことはできるみたいだ。

「え、えーとあ……元気にしてたあ？」

痛い沈黙に耐えかねてスイフィが苦笑いしつつ、アズアに声を掛ける。顔を合わせるまではいかにも親友のような態度をとってたのに、こつちも下手に出るとは他人ながらに情けない。まあ、あたしでもこんな陰気そうな奴と面と向かって話すことになったら、似たよ

うな状況になるだろうけど。

スイフィのピンクと緑の頭を掻くその手をアズアがちらりと見た。……多分。何しろ紙が影になって時計に覆いかぶさってるせいで、何処が眼か余計に判り辛くなってるし。雨で滲んだその手を見ると、アズアはスイフィに全身鳥肌の立つような声で話しかけた。

「……まさか紙に棲むとは　そなた……阿呆だな」

冷たく、しかも呆れきった声でそう言われてスイフィが頬を膨らませる。

「おいらだって好き好んで紙なんかに棲まないもんねい！　これは色々あって……」

「　成程。棲家の選択権すら与えられなかったわけか。よほど嫌われているんだな、あのお方に」

言い訳より先に事情を悟ったアズアが静かに腕を組み、黒い瞼を閉じた。最初スイフィに会ったときも『あるお方に閉じ込められて』って言ってたけど、その「お方」っていったい誰だ？　疑問符を頭上に浮かべつつあたしは二人の話に耳を傾ける。

図星を突かれたスイフィは、ほんのり紅色の頬をぷくつと膨らませてみせた。

「紙は紙なりで良い事だつてあるもんねい。時計の中のアズアちゃんと違って紅茶も飲めるしクッキーだつて食べられるんだからあ」

そう言つて、偉そうに胸を反らせて鼻で指を擦るスイフィ。紙に

吸い込まれた紅茶だけじゃなくて、接触しているクッキーも食べられるのか。これからは迂闊にこの紙を触らないようにしよう。紙の中の人間に指を齧られるなんてナンセンスすぎる。

紙のお家を自慢するスイフィを冷めた眼で見ると、アズアは呆れるというよりは、むしろ怒ったような口調で呟いた。

「己の……一時的な享樂のために魅首殿を危険に晒そうというのか」
黒い眉間に一瞬皺が寄ったように見えたけれど、単に照明が揺れて影が動いただけかもしれない。一言も聞き漏らすまいと耳を澄ましていたあたしが首を傾げると、好男が説明してくれた。

「ほら、さっきの雨でスイフィが滲んだ所と同じ場所が、魅首ちゃんも滲んでるだろ？ 紙の中のスイフィに起こったことが全て所有者である魅首ちゃんにも起こるってことさ。……って契約のときにスイフィから言われなかった？」

雨に濡れて身体が滲んだときから薄々感付いてはいたけれど、そんなこと契約のときには一言も聞かなかった。所有すると一般人に姿が見えなくなるにしろ、二人で同じ運命にあることにしろ、こいつは隠していることが多すぎる。

怒りに燃えた眼でスイフィを睨むと、慌てて広告の絵の後ろに隠れてしまった。時計の中のアズアが厳しい顔つきで、さらに詳しく教えてくれる。

「もし棲家であるその紙が焼かれたりでもすれば、スイフィだけでなく、そなたも死んでしまう。そなたとスイフィは契約が果たされるまでは二心一対だから……」

衝撃の説明に、あたしは忌まわしい電車の吊り広告を見詰めた。こんな薄っぺらい紙に自分の生死が掛かっているだなんて、考えるだけでも悪寒がする。腕に立った鳥肌を摩るあたしに、好男はここぞとばかりに優しい声でフォローを入れた。黒い時計をさして明るい笑顔を見せる。

「オレだって、この時計の文字盤が割れたらお終いさ。気にすることないよ、殆どの人には魅首ちゃんが見えないんだし」

「好男みたいにあたしが見える奴もいるんだろ」

ぶすつとした顔で言うと、好男は苦笑いして眼を逸らした。否定できないってことは実際そいう奴が他にもいるってことか。せめてそいつが契約の内容を知らないといいな、とあたしは一縷の希望に縋ることにした。

思わず溜息を漏らすあたしの心を少しでも晴らそうと、好男は椅子から腰を浮かせてあたしの顔を心配そうに覗き込む。下心見えみえで白けるけど、一応聴いておいてやるか。

「何か欲しいものあったらいつでもいつでもいつてくれよな。昼間だったら普通の人間でいられるから、オレ」

「は？」

しまった。いつもの癖で思い切りガンつけて聞き返すなんて。流石の好男も笑みが一瞬凍って、無理矢理笑ってる感じだ。……無理もないか……。もともとは何かにつけて濡れ衣を着せようとしてくる担任に抗議するための手段として開発した技だもんな、これ。もう二度と人前でこんな顔しない、と品行方正なあたしは一人心に誓

うと、咳払いをして好男を真正面から見据えた。

「……昼間は普通の人間ってどーいうことだよ。きちんと説明しろっ」

むむ、こんな口調じゃちっとも反省した意味が無い。

「あ、ああ……。アズアの能力の一つなんだ。昼はオレの姿を、夜はアズアの棲んでる腕時計を、自由に人目に映したり消したり出来るってこと」

気を取り直して得意そうに好男が腕時計の中のアズアにウィンクすると、腕時計は跡形も無く消えた。驚くあたしの目の前で、腕時計がまた好男の手首に現れる。

「特殊能力……ってやつか」

有能なアズアに感心するあたしの脳裏を、ふとある思いが過ぎる。さつと横に置いてあった吊り広告に眼を向けると、スイフィがこそこそと広告の絵の陰からこちらの様子を覗き見していた。あたしは広告を素早く掴むと、驚いて出てきたスイフィが絵の後ろに隠れられないように紙を折り曲げて凄んだ。

「アズアにあるってことは、勿論おまえにも何かあるんだろ！ 隠してないで教えろっ」

「うきゃー怖いようー助けてヨッシーー」

「はぐらかすなっ！」

人目を憚らずに怒鳴りつけるあたしに、好男もアズアも助けてくれないと悟ったスイフィが恨めしそうな顔で右頬を膨らませた。身体の後ろで手を組むと、拗ねた様子で後ろを向く。

「魅首に教えても使いこなせないもんねい。それに、必要なものはこつちに来るときにあのお方から取り上げられちゃったし」

「そんな言い訳……！」

満足出来ずに食い下がろうとするあたしを遮り、アズアがスイフィに話しかける。

「其れは真か？」

「うん」

さっきまで後ろを向いていたのに振り返り、アズアには素直に答えるスイフィ。あたしのとくと全然態度が違うじゃないか、と思わず血圧が上がってしまう。鋭い目付きで睨むあたしの眼とスイフィの不機嫌そうな眼と合い、互いに眼を逸らした。刺々しくなってきた雰囲気におろおろしていた好男がわざとらしく腕時計をしているのに壁掛け時計を見て言う。

「もうこんな時間だし、今日は寝たらどうかな」

はぐらかされてばかりで納得のいかないあたしは固く腕を組んで拒否の姿勢を示したが、スイフィはもろ手を挙げて賛成した。

「そおしよ、そおしよっ！ 早く自分の家が見たいしいー」

「家賃払うのはあたしだっつの」

ぶすつとした顔で呟くあたしの言葉は、能天気なスイフィの奴には聞こえなかつたらしい。今月の付録やら何やらに囲まれたご機嫌な広告の中をはしゃぎまわっている。好男はあたしの顔色を窺って立ち上がると、自ら率先して玄関に出た。改装されて綺麗な大理石張りになっている広い玄関までスイフィを持って行くと、好男はおもむろに紳士用傘をあたしに差し出した。

「……？ 廊下には雨除けもあつたよな？ 何で傘がいるんだよ」

「念のためさ。一応スイフィもここに置いていったほうがいい。念のためにね」

腑に落ちない説明に首を傾げながらも言われた通りに嫌がるスイフィを靴箱の上に置くと、好男は玄関を開けて二階へ続く階段を昇り始めた。雨足は弱まることを知らず、好男の家で休んでいた間にさらに勢いを増したようだ。「バケツをひっくり返したような」つてのはこういうことを言うんだらう。きっと明日は記録的豪雨としてニュースに流れるに違いない。

そんなことを考えながら足を踏み外さないように濡れた階段を昇ると、めでたく二階に着いた。管理人である好男が住む一階は一戸しかないのに、二階は二戸に区切られている。

微妙に差別を感じつつ、好男が合鍵であたしの部屋を開けるのをぼんやりと眺めていると、ふと隣の部屋に視線が向いた。別に物音がしたからとか、痛いほどの視線を感じたからとかじゃない。ただ急に、隣は誰か住んでるのかと気になっただけだ。

視線の先に、「誰か」が居た。
朽ちかけた木製の扉の前で。
雨にぐっしより濡れて。

「……！」

気配も無くそこに現れた「誰か」に、あたしは驚いて息が止まった。長い長い髪だ。しかし手入れどころか梳くしることすらしていない様子で、ぼさぼさだから男だか女だか判らない。見えるのは長い髪に覆われた顔と、髪の間から覗く痩せ細った手足だけだ。

恐らくほんの一瞬の出来事だったのだろう。けれど「誰か」は永遠をかけるほどゆっくりと顔を上げ、髪の奥からあたしを見た。

「魅首ちゃん、開いたよ」

がちやんと扉の開く音と好男の声であたしは止まっていた呼吸を取り戻し、好男を見た。電気が付いていない暗い玄関の中で好男が手招きしている。玄関の前で固まったまま、あたしは震える声で好男を呼んだ。

「よ、好男……今、そこに……」

「ん？ 何？ 誰か居た？」

怪訝な顔で好男は玄関から顔を出して左右を見回した。生唾を飲み込むあたしの背後にも真剣な眼を向ける。が、拍子抜けした感じ
で玄関の中に首を引込めた。

「誰もいないじゃないか」

「え」

振り返ると、隣の玄関の前には本当に誰もいなかった。吹き付けの強い風に煽られた大粒の雨が、腐って変色した木の廊下に降り注ぎ、大きな水溜りを作っているだけだ。

「……疲れてるのかな……」

今日一日、あまりにも非日常に接しすぎたせいかも、と自分に言い聞かせる。ぶんぶんと頭を振って恐怖を振り払うと、あたしは好男が待っている玄関に入った。

敷居を跨いで部屋を見たあたしの顎が外れそうに開く。

「な？ やっぱり傘が必要だっただろ」

へらへら笑ってそうぬかす好男の手には、しっかりと広げられた傘が握られていた。外と変わらない、いやもう外より大粒の雨が降っていた。家の中、なのに。

使い古して表面の爛れきった畳の上に、数え切れないほどの空き缶が並べられている。それが天井から染み出してくる水滴を食い止めようとしているが、完全に焼け石に水状態だ。缶からは溜まった水が溢れ出ている。あまりに激しい雨に、床に小川が出来ていた。ここでメダカが数匹楽しそうに泳いでいても誰も文句が言えないだろう。

「うわー、今日は特に酷いな……。おっと、危ないあぶない、踏み抜くところだった」

玄関から靴を脱がずにそのまま土足で畳を歩き、もはや何色だったのかすら判らない天井の壁紙を見上げる好男。拳句の果てにはそこらへんに落ちていた多分どこかの窓枠だった木片を拾い上げると、雨の重さで垂れ下がってきた天井を突いている。

呆然として口を開けたままのあたしにふと気付くと、好男は不思議そうに首を傾げた。

「入ってこないの？」

「ふ……」

「ふ？」

好男が木片を捨ててあたしのほうへ歩いてくる。その裾の濡れたズボンが歩く度に、ばしゃばしゃと水を跳ね返す音がする。雨漏りの水でいっぱいになった缶に降り注ぐ雨のどぼどぼという音が。傾斜しているために部屋から玄関、玄関から廊下へと流れる水のちよろちよろという音が、音が、音が……アあああああああああああああ！

「こんな場所に住めるわけねーだろこのタコがあツツツ！」

あたしは紳士用傘を好男に向かって思い切り投げ付けた。

「……あれ。もう帰ってきたの？ はやいねいー」

靴箱の上に置き去りにされて暇そうにしていたスイフィが広告の中で跳ね起き、遙か上方にあるあたしと好男の顔を交互に見て言っ

た。背後で平謝りを続ける好男を完全無視、スイフィも無視して居間に上がりこむと、腹の虫が治まらないあたしは大きな音を立てて椅子に座った。

二次元から外を見上げていたスイフィは訳が判らないといった顔で好男に説明を求めるけれど、好男は眼を泳がせるだけだ。好男の手に着けられた腕時計からは、あれじゃ怒って当然だ、と冷め切ったアズアの声が幽かに聞こえた。

第五章 住処を確保せよ

「スイフィは黙ってるよ。これはあたしと大家の問題だ」

と、不機嫌絶頂で言ったあたしは、無言で背後に居る好男にハンドタオルを要求した。別に再びぐしょ濡れになった身体を拭こうってんじゃない。あたしも好男も、手を拭かないとスイフィが中に入ってる紙に触れないからだ。その意図を察した好男が、バツが悪そうに後頭部を掻きつつタオルを取りに行く。

「なにになに？　つまりなんか問題があったってこと？　教えて魅首」

それが自分にも関係があるなど露ほども思わず、スイフィが紙の中で飛び跳ねて好奇心剥き出しの声で言った。おまえに言っても何の解決にもならねーよ、と一人口の中で声を出さずに毒づく、機嫌を取るためか好男がへこへこした姿勢でハンドタオルとバスタオルを各二枚ずつ持ってきた。

両手に恭しく掲げて運んでいる様子は、まるで何処その宗教団体の儀式みたいだ。そのあまりの仰々しさにあたしは怒りというか呆れの気持ち胸に湧いた。

「いやあ、ほんつとゴメン！　いつもはあんなじゃなくてさ、極々フツの部屋なんだよ。今日はたま
たま雨が強かったからこの間直した屋根の穴から雨漏りしてたけど、夕立くらいなら平気なんだって」

白々しく弁解を述べつつタオルを手渡す好男の軽そうな茶色い目を効果音が出るほど睨み付け、糊の効いたおろしたての純白タオル

をひったくるあたし。

そーかい屋根の穴は修理しといたのね。でもそれ以前に穴が開きすぎてことには気付かなかったのかね？ 大工の親方を呼んで修理してもらおうとは思わなかったのかね？ いやいやそれより外側から見て「ああ基礎が傾いてるなあ・こりや匠にリフォームしてもらわないと」とか思つて フォーア ターに応募の電話をかけたのかね？

テメエの部屋を完璧なる男のサンクチュアリにするより、電話を一本掛けるほうがよっぽど労力使わないと思いますけど。

ピカピカに磨き上げられた硝子ケースの中にお行儀良く陳列されている、アンティークの嗅ぎタバコ入れを恨めしそうに見ながら、あたしはびしょびしょになって冷たくかじかんだ両手を拭いた。水を拭き取ると、触りたくないけどしょうがなくスイフィを持ち上げる。

流石のザ・空気読めない野郎スイフィも、さつきから垂れ流しになつている好男の言い訳を聞いて事態を察してきたようだ。能天気そうな顔に不安の色が過ぎり、恐る恐る上目遣いであたしを見上げている。

「つ……つまり、今二階は雨漏りジャングルってこと？」

どういうセンスを持ってたらそういう比喩が飛び出すのかはわからないが、とりあえずコイツにつっこむのは無意味だから止めておき、頷いた。すると今まで重そうな雰囲気を負っていたスイフィがいきなり、ハジケた様子でぶんすか怒り出した。

「ひどいよっヨッシー！ 連絡くれた時は『極上のスイートルームさ……ロスの高級ホテルにも引けをとらないよ』って言ってたじ

「やんかあー」

しゃがんで靴の泥を落としていた好男が、サギ被害にあつた老婆のような声で糾弾するスイフィから顔を逸らして遠くを見詰める。なるほどこの男、仲間まで騙してたつてことか。初対面から最低ランクだった好男の高感度が、今ゼロのラインを遥かに超えてマイナスの域へ突入していく。三次関数で言うなら「xが全ての値において単調に減少」って感じだなこりゃ。

スイフィがロサンゼルスを知っていることは軽くスルーして、脳内で三次関数のグラフの描き方を思い出す。ワックスをかけたばかりのフローリングを見詰めるあたしの顔に、いいことを思いついたと微笑が広がる。

「……最高級とまではいかないけど、ちゃんと用意してくれてるよな」

「へ？」

「え？」

「……」

スイフィと好男が間抜けな声を出してそれぞれ左と右に首を傾げる。アズアが黒い時計の中で何かを悟つたらしく、無言で漆黒の双眸を細くする。不良債権者から借金を取り立てに来た慇懃無礼な回収人が浮かべるような笑顔で好男を一瞥すると、あたしはスイフィをつまみ上げて部屋の中を一望させた。ふ、と時計の中からアズアの笑う声が聞こえ、好男は阿呆みたいにぼかんと口を開けている。

腰に手を当てできる限りふんぞり返ると、あたしは滑舌絶好調高らかに宣言した。

「上の部屋が住める状態になるまで、ここがあたしの寝るところだ！ 雨漏り直して畳張り替えてついでに壁紙新しくするまでは、梃て子こでも動かねー！ 覚悟しとけっ」

鼻息荒く漢気溢れる宣言をしたあたしに向かって、スイフィがおおー、ぱちぱちと賞賛を送る。どうやら今日初めてまともに意見があつたみたいだ。

今の宣言にさぞかし驚き狼狽するだろうと期待して、あたしは玄関で靴を磨いていた好男に眼を向ける。が、残念ながら好男にはさっきの脅しは全然効いていないみたいだ。 いや むしろこれは。

「じゃ、これからは魅首ちゃんのもーニングコールを聞いて一日が始まるのか……うん、悪くないな。いや良い。むしろ凄く良い」

靴墨を乗せた豚毛のブラシ片手に好男は鼻の下を伸ばしている。喜んでる。コイツ変な想像して喜んでるよ絶対。

ふふふ、という好男の気味の悪い笑いに、体のあちこちで鳥肌が出現した。駄目だ、この変態ナルシストにはあたしの脅しを通じない。このままでは壁紙を張り替えるのはおるか屋根の穴をガムテープで塞ぐことさえも行われないう。というか、自分の身が危ない。

本能的に迫り来る危機を察知したあたしは、じりじりと後ずさりしながら後方を確認して、“寝室”と書かれた鍵付きの部屋に一目散に走り、その中に引き籠もって鍵をかけた。

「あ、魅首ちゃん！」

少々焦りを帯びた好男の声が聞こえ、次いでぱたぱたとスリッパを履いて走る音が近付いてきた。軽く、けれども拳で扉を叩く音がある。

「困るって！ それじゃオレが寝るところ無くなるじゃないか」

「知るか。ソファにでも寝とけ」

「この家はスタイリッシュをコンセプトにコーディネートしているからソファを置いてないんだって」

「じゃあそこらへんのタオルを掻き集めてそれにくるまってる。タオルなら沢山あるんだから」

「そんな！ いくら今が夏でも寝冷えしちゃうじゃないか。肺炎にでもなったらどうする？」

泣き落としを使う好男に釣れない態度で答えていると、閉めたはずの鍵が半分ほどまで開いていた。好男が意味不明な病名を並べ立てて同情を煽ってる間にも、サムターンがあたしの目の前でゆっくりと回っていく。数秒凝視した後、我に返るとあたしは鍵をまたしつかりと閉めた。外で好男の小さい舌打ちが聞こえる。

「あと少しだったのに……」

「マイナスドライバーでこじ開けようとしてるなっ？ ハッ、無駄無駄！ ここですつと押さえてるからな」

策を見破り勝ち誇って言うあたしの耳に、好男の挑戦的な言葉が厚めのドアを通して入ってくる。

「果たして、一晩中起きていられるかな？ 今日半日ずっと電車に乗って長旅だったし、雨に打たれて体力も消耗してる。……百歩譲って、若さの力で徹夜できたとしても、それを毎日続けられるかな？ こっちは隙さえあれば昼だろうと夜だろうとその鍵をこじ開けることができるんだよ」

「く……！」

姑息な、と心の中で呟いて手の中で滑って回りそうになる鍵を必死に押さえつけるあたしの横で、何もわかってないスイフィが暢気に、降参すれば？ などとほざいている。向こう側の好男が遂に本腰で鍵を開けようと力を入れ、あと三十度ほどで鍵が開きそうになったその時。痛て……と好男の半泣きの声が聞こえた。

「？」

不審に思っただけ扉に右耳を当て、しかし両手は鍵をしっかりと固定したまま、耳を澄ますと背筋も凍るような冷たい細い声があたしに話しかけた。

「好男はわたしが見張っておこう。怪しい素振りを見せたらこうして手首を絞めて懲らしめておく故、魅首殿は御ゆるりと休みたまえ」

「アズアっ！ オレの味方じゃないのかよ？」

ドアの向こうで好男の涙声が聞こえ、一瞬で全身凍結しそうな声

が冷然と答える。

「か弱い娘に実力行使とは不埒千万。元を辿ればこの事態はそなたの管理不行き届きが引き起こしたものの、そなたが責任を負うのは至極当然であろう。それに魅首殿が病に罹ったら如何する？ そなたと違い、魅首殿は完全に人の世から隔絶されているというのに」

「アズア……ありがとう。怖い奴だと思ってたけど、見直したよ」

つまんなーい、とエンドレスで言い続けるスイフィの声と痛みに呻く好男の声をBGMに、あたしはドア越しからアズアに礼を言った。こんなイカレた家の中で唯一良識のあるアズアは礼には及ばない、と静かに、けれど硝子を注射針で引っかいたような声で応える。

「じゃ、そういうことだ。いい夜を、大家さん」

「………たく………で………じゃないんだから………」

あたしの皮肉に、好男は良く聞き取れなかったが悪態らしきものを吐いて、ドアの前から去っていった。危機が去ったことで安堵したあたしはスイフィの置いてあるナイトテーブルを通り過ぎ、ふかふか過ぎる好男のベッドに倒れこんだ。勿論服も髪もさっきの雨漏りでぐしょ濡れだから、ウォームグレーのシーツに大きな染みが沢山ついた。それを見ていい気味だ、もっと付けてしまえ、とごろごろ転がるあたしにスイフィが声を掛ける。

「魅首う、流石にその服で寝るのはマズインじゃない？ たしか交差点でこけたり、ごみ収集所に直に座ったりした汚い服だもんね」

そういえば、雨と土埃に紛れて微かに生ゴミの匂いがしなくも無

い。スカートの端を摘んで謎の茶色い染みが出来ているのを見つけたあたしは、仕方ないかとベッドから起き上がる。灰色と黒の市松模様塗られた好男の筆筒を引つ掻き回し、夏用の寝巻き一式を取り出すとあたしはセーラー服を脱いだ。
……いや、正確には、脱ごうとした。

「う、ぎいああああああ　　っ！」

好男が観念して淹れたてのハーブティで心を静めようとしていたとき、厚めのドアを通して明瞭に聞き取れる音量の悲鳴が家中に響いた。普通ならばアパートにも、敷地ぎりぎりまで家を建てたお隣さんにも聞こえていることだろう。しかしその声が一家で楽しく団欒しているお隣さんに聞こえることはなかった。彼女、魅首の声は好男とアズアにしか聞こえないのだ。

突然の異様な奇声に驚き、好男は優雅に飲んでいたハーブティを無様にも口から吹き溢した。厚めのドアの向こうからは、声にならない呻きが続いている。次いで何か硬いもの、恐らくは好男の自慢の特注筆筒であろう　　を拳で思い切り殴る音が聞こえた。手の痛みで何かを紛らわそうとしているのだろう。

好男は平常心を取り戻し、懐から四つ角が全て九十度にプレスされたハンカチを取り出すと口元を拭った。

「今の悲鳴は……」

何も映っていなかった黒い文字盤の中にアズアが現れ、黒い無感情な眼で寢室を一瞥する。好男は白い台拭きで机を拭きつつ答えた。

「ああ。きつと物凄く痛かっただろうね。完全に皮膚と融合した服を無理矢理剥がそうとするなんて、生皮を剥ぐのに等しい」

「……」

文字盤の中、無言で顔を少し俯けるアズアに、好男がおどけた調子で尋ねる。

「なあ、何でさっきオレ達が魅首ちゃんのアレを治してあげられること、言わなかったんだ？ あの子のことずっと庇ってたけど、それはまた別問題ってか？」

眼を合わせて会話するため時計に顔を近づける好男の前で、アズアが感情を出して嫌そうに顔を顰めた。

にやにや笑う好男を一瞥すると、アズアは苦虫を噛み潰したような顔で永久凍土を思わせる声を発する。

「何故って……魅首殿を治すためには患部に触れなくてはならないから……」

うんうん、と好男が頷いた。眼を輝かせている好男を見たアズアは物憂げな溜息を一つ吐き、続けた。

「そんなことになったら、そなたが魅首殿に何をするか分からないだろう」

アズアが尤もな事を言い、好男は残念そうにちえ、と呟いた。

「ぐおおあーっ……好男……あの大家……！　いつか絶対ぶちのめしてやるっ……！」

腕と胸の痛みにした打ち回りながらも呪詛の言葉を吐きまくるあたしに、スイフィはまるで他人事のように爽やか、且つ楽しそうな声で遅すぎる忠告を垂れていた。

「あー、言うの忘れてたけどお、それ治してもらったまでは着替えられないんだよねー。それに今は、魅首が勝手にやったことだしヨツシイは関係ないよねー」

「違うっ！　おまえが『その服で寝るのはマズインじゃない？』なんて言ったからだ！　……ていうよりも、スイフィ！　おまえ、こうなる事を知ってて着替えるって言ったんだな？　どうなるかちゃんとしてるじゃねーか！」

「えーうーんまあ人間ど忘れてって大切だよない」

「貴様の何処が人間なんだ！　文句あったら反論してみる二次元の奇妙な生命体っ！」

負け犬の遠吠えを精いっぱい上げるが、スイフィはハイになって広告の中を笑い転げて聞く耳持たない。戦っても無駄だ、と感じたあたしは血が滲むセーラー服をきちんと着直すとベッドに横になった。

「くそう……好男め……伸す。絶対伸す」

やり場の無い怒りをとりあえず今一番、いやスイフィを除いて一

番、大嫌いな奴に向けた呪詛に乗せると、あたしは疲れと痛みで情報の許容量を超えた脳みそで安らかな眠りへと落ちていった。

第六章 無敵の刺客、現る

「魅首う。起きてようー朝だようー」

ふかふかの布団に包まれて天国のような夢の国に行っていたあたしを、スイフィの非情且つ生意気な声が現実世界へと引き摺り落とした。

爽やかな夏の朝日が、昨日占拠した好男の寝室の窓に掛る小洒落たカーテンの隙間から差込んで、天敵の紫外線をあたしの肌につけていく。このままじゃ二十年後のお肌が危ないと感じ、がばと跳ね起きるとあたしは致命的なことに気がついた。

白と黒を基調に統一されたダイニングルームに、電子音が響いている。その決して耳障りではないけれどはつきりと主張している音に、椅子を三脚連ねた簡易ベッドで眠っていた好男が眼を覚ました。黒い腕時計をつけた手が宙を漂い目覚ましを止めようとするが、音源となるものに触れることは無い。

よく耳を澄ますと、音はどうかやらその部屋全体から染み出すように流れている。暫く未練がましく宙に手を泳がせていた好男が、眠たげな眼を擦って渋々と起き上がった。

「……わかった、わかったって。もう起きるからその音止めてくれよ」

「そっか」

腕時計の文字盤から背筋も凍る冷たい声が聞こえ、何処からとも無く聞こえていた音はぴたりと止んだ。欠伸を一つすると、好男はうつすらクマが出ている眼の下を擦り椅子の上で胡坐をかいた。あまり寝覚めが良いとは言えない好男にアズアが氷のような声で忠告する。

「酷い顔だ。今すぐに洗面所へ行き顔を洗った方がいいぞ」

「んー……そーだな。魅首ちゃんも居ることだし」

畳二枚分はあろうかという特大タオルケットからのそのそと這い出ると、好男は背伸びをしながら魅首の居る寝室を振り返った。

魅首が、この世の終わりが到来したような顔でこちらを見ている。

「ど、どうしたんだ？」

やや驚きつつも、気前が良く頼りがいのある人物に見えるよう表情を作って訊くと、意外な答えが返ってきた。

「コスメ、全部家に置いてきちゃってたんだ……」

溜息に乗せてあたしは好男に打ち明けた。昨日と態度が百八十度違う、そんなのはわかってる。けどこの際恥も外聞もかなくなり捨ててあたしは好男に情けない声で哀願した。

「頼むっ！ コンビニで & のメイク落としと化粧水、乳液買って来てくれ！」

寝癖で爆発している茶髪の頭を音がするほどの勢いで下げ、ほぼ同時に右手に握っていた五千円札を差し出すあたし。それをぼかんと口を開けて見ていた好男はしばらくそのままの姿勢でフリーズし、視線を宙に泳がせ始めた。

「えーと、 & ……」

「フツーの人にはあたしが見えないから 確か昨日言ってたよな？ 『昼の間なら普通の人間だ』って。」

朝が駄目なら今じゃなくてもいいんだ、兎に角今日中に頼む」

他人が聞いていたらそれが物を頼む態度か、とつつこみたくなるようなふてぶてしさで言葉を続けるが、これは昨日のことを引き摺ってるからだ。本当なら空腹に耐えられなくなるぎりぎりまで寝室にこもって好男とは顔を合わせたくなかったけど、今は緊急事態だから仕方ない。お肌はあたしの唯一の心の拠り所なんだから。

好男はフリーズしたまま動かない。昨日のバトルで体力消耗して電池でも切れたのかよと思いつつ、次いでにパックも買ってきてと追加注文が口から出そうになったその時、好男は無事再起動した。ぼん、と拍手よろしく手を叩いていかにも何か思いついた、という仕草をしている。話を聞いていたのかと疑うと、好男は寝不足なのに満面の笑顔で嬉しそうに答えた。

「それ、洗面所に一式置いてあるよ」

「へ？」

あまりにさらりと言ったので脳の理解力が追いつけなかった。コ

ンマ五秒後にその意味をやつと理解したあたしは眼前でにこにこ笑っている好男の顔を凝視する。まさか、女物の化粧品を使っているのだろうか、こいつは？

まああんまり人前にも出てなさそうだし、変体ナルシストだから多少奇妙な事はあるだろうと考えていると、好男はあたしの思いを察したらしく簡潔な説明を加えた。

「前の彼女が置いていったんだ。よかつたら使いなよ、他にもいろいろ揃ってるから」

「前の」

とりあえずオカマ疑惑は晴れたものの釈然としない説明を受け戸惑うあたしの前から好男は立ち上がり、自らも酷い無精ひげを剃るために洗面所へ向かう。途中でタオルケットを忘れたことに気付いた好男が振り返り、複雑な心境のあたしを一瞥すると輝く白い歯を見せて付け足した。

「あ、大丈夫だいじょうぶ。出てってから一週間しか経ってないから」

そして掛け布団代わりに使っていたタオルケットを回収して洗面所へと去っていく。あたしが気にしているのは化粧品の消費期限じゃなくてオマエの交際暦だよ、と内心冷や汗を掻きつつ、あたしはその後が続いた。

背後にドラム式洗濯機の音を背負いつつ、あたしは真白なハンドタオルから洗顔したての顔を上げた。好男の元カノが置いていった化粧品類はどれも封を開けていないものばかりで、その他も一度か二度使った程度の状態だ。しかも何個も買い置きしてあるところから、おそらくは長く付き合うつもりだったんだろう。一週間前に出て行ったというけど何があったんだろうか。好男のことだから二股でもかけてるのがばれて修羅場になったのかな。

とかなんとかくだらない事を考えつつ、化粧水に手を伸ばす。これも未開封。これじゃ洗面所がコンビニ状態だな。横から男物の化粧水を髭剃り跡につけていた好男がさり気無くコットン箱を渡してくる。そのコットン毛羽立たなくていいよって、これじゃまるで学校のトイレでクラスメイトと化粧してるみたいじゃないか。

やっぱり好男はちょっとオネエ系なのかもしれないと脱力しつつも化粧水をコットンに染み込ませるあたしの横で好男が思いつきで提案を口にした。

「そーだ、今日オレ仕事休みなんだ。どっか遊びに行く？」

「……いいよ。どーせ他人に見えない人生ですから」

能天気な好男の誘いを素気無く断るあたし。これでも結構人に見えないってこと気にしてるんだ。だってもう気の合いそうな店員に『この服似合いますか？』って訊けないし、マックでレジ待ちしても順番無視されるしファミレス入っても誰も注文取ってくれない。

気持ちが顔に出たんだろう、好男は心配そうにあたしの顔を覗き込むと慰めた。

「そんな落ち込むなって。オレが色々仲介するからさ」

「男一人でーストーイ入って白のハイソックス何本も買っても？」

「平気だよ」

「ビューラー、マスカラ、マニキュア買ってって言ってても？」

「彼女へのプレゼントです、で通るだろ」

「汚れた制服の代わりに買って来いって言うても？ 女の子用の力ワイイ寝巻きは？」

「う・・・まあ」

「じゃあじゃあ、替えの」

「魅首ちゃん、オレをからかって遊んでるんじゃないか？」

ちっ、ばれたかと好男から顔を背け舌打ちするあたしに好男は懲りることなく外出を勧める。どうしてそんなに外に出したがるんだ？ もしかしてあたしを家の外に追い出したら二度と入れないつもりなんだろうか。そしてあの廃墟同然の二階で暮らせとのたまうんじゃないだろうな。

この男ならやりかねん、と心中失礼なことを考えていると、好男は人畜無害そうな顔であたしの返事を待っている。何故そこまで外出したがるのか、最早直接聞いた方が速いな。

「なんでそんな外行きたいんだよ？ 連れてきたいところもあるの」

か？」

勿論変な所だったら絶対ついていけないけれど、と釘を刺して尋ねるあたし。好男はセット前の所々跳ねた髪を弄びつつ歯切れの悪い調子で答える。

「そりゃ……ずっと家の中に居ると気持ちが悪くなるからさ」

「そーか？　こんなに居心地のいい家なのに。ゲーム機もネットもあるし家でも十分遊べると思うけど」

洗面所のドアからリビングルームを眺め、そこに置いてある大型液晶テレビや最新型のリングマークの白いパソコンをもの欲しそうに見詰めていると、その視線を好男の身体が遮った。少々むっつとして顔を上げると、好男が意外にも沈んだ表情をしている。

「家にいると思ひ出すんだ……」

「な、何を」

初めて見る好男の悲しそうな顔に気まじくなり思わずどもる。好男は顔を俯けて頭を振ると、ぼそりと呟いた。

「前の彼女とケンカしたこと」

それは好男の責任であってあたしには関係ないだろ！　と心の中で思い切りつつこみを入れてしまった。たかがオマエの失恋くらいで見えない身体を危険な外へ運べるかっつもの。

胸中で目前の女たらしに毒を吐きつつ三白眼の顔を背けるあたしの背後で、好男はどこから出したのか、黒い革財布からひらりと一

枚の紙切れを取り出した。ちょっと長めのレシートくらいのそれを、好男は指に挟んでひらひらとさせている。

「せっかくランチの予約取ったのに……一人で食べるのは寂しいなあ」

どーせ何処かの三流レストランだろ……と思いつつも好男の残念そうな口振りにつられ、ついあたしはその紙切れをちらっと見てしまった。純白の羊皮紙に、金の文字。

「そ、そ、それは……っ！」

田舎もんのあたしでも知っている、今年『一年待っても食べてみたいレストラン』で第二位に五千票の差をつけて、堂々の一位を獲得した超一流レストランのお得意サマだけが持つことを許される、それさえ見せれば予約なしでも食事できるらしいと伝説のゴールド・チケツトなのでした。

まあ、ゴールド・チケツト貰えるくらい通いつめてるんだから、大抵の場合チケツト無しでも顔パスOKらしいけど。

「残念だな……ゴールドでも取るの難しい最上階の特等席用意してもらってたのに」

最上階。特等席。

「ランチとは言え最上級の食材を使った超絶美味な絶品が用意されていたんだけどなあ」

最上級。超絶美味。

「い、行くよっ！ 行けばいいんだろ？ ていうか連れてけ！」

鼻先にぶら下げられたゴールド・チケットという人參の誘惑にあつという間に負けてしまったあたしに、好男は満足そうにっこり微笑んだ。

数十分後。未だ一週間前に出て行った彼女の香水が匂う外車から降りたあたしは、目の前の巨大なビルを見上げた。

天高く雲の上まで突き抜けていそうなビルの最上階を見ようと目を凝らすあたしの横に、文句の付けようが無い服装の好男が車の鍵をホテルマンに渡している。ちなみに、あたしはスイフィのせいので服が着替えられないので昨日のままの薄汚れた制服を着ている。まあどーせ他人には見えないし構わないんだけど。

「さあ参りましょう」

なんてキザ（気に障る、略してキザ。正にコイツの為にあるような言葉。）な台詞をさらりと吐きつつ、好男があたしに手を差し出す。一人で歩けるっつーの。

凄みを効かせて睨み返すと、背後でホテルマンが奇妙な顔をしていた。そりゃそうだ、いきなり一人で居もしない女性をエスコートし始めたんだから。しかし上得意様だからなのか都会の経験値の高さからなのか、ホテルマンは何もっつこまず静かに車を駐車場まで運んでいった。

なんて大人で冷静な対処なんだろう。あたしも少しはスイフィに對してあんな態度を取るべきだった、と密かに悔やみつつ、持って

きた学生カバンに目を遣る。

鞆の中にはスイフィが透明なファイルに挟まれて入っている。洗面所でのあたしと好男の話を聞いていたらしく、リビングへ戻るなり『自分もついていく！』の一点張りで三歳児顔負けの駄々をこねたので連れてくることになってしまったのだ。常識人なアズアならともかく、この生きた無作法のような輩を今から一流レストランに連れて行かなきゃならないなんて考えただけで、流石のあたしも胃が痛くなる。この破壊力はピロリ菌を凌ぐだろう、医者に行けたら診てもらいたい。

絶対喋るな！ と口を酸っぱくして言ったものの、スイフィにどれだけ効くかは正直判らない。いきなり喋りだしてフロアの人間を卒倒させないことだけを祈ることにしよう。

滅多に祈らないあたしが静かに神仏への困ったときの何とやらを囁いている横から、好男が顔を覗き込んでくる。

「もしかして緊張してる？ 大丈夫だよ、オレがついてるから」

「してない。というか顔を近づけるな」

男性モノのフレグランスを薄ら匂わせている好男の顔を左手でぺち、と叩きあたしは綺麗に掃除された石畳の上を歩く。が、如何せん薄汚れた制服に踵を踏み潰したローファーの女子高生がいくらか格好良くしようとしたって限界がある。硝子の窓に映る自分の姿に、あたしは溜息を吐くとスカートの端を摘んで苦い顔をした。馬子にも衣装と言つように、こんなあたしでも、着る服着ればなかなかだと思っただけどなあ。

再び溜息を吐くあたしの肩に好男の手が置かれる。不用意に触る

んじゃない、と睨みを効かせつつ振り替えると心配そうな顔をしていた。

「本当に大丈夫か？」

「何が」

「いや……その……」

抜け落ちた主語を訊いただけなのに答えることを渋る好男は、ワックスで固めた髪を指先で弄った。いったい何をそんなに悩んでいるんだろう？　そもそもあたしには先程の『大丈夫か？』の「何が」大丈夫だと訊きたかつたのかさえ解っていないというのに。自慢じゃないがあたしの現代国語の読解力は全国平均から見てもかなり低めだ。言いたいことははっきり言ってもらわないと。

好男は未だ何を言うか悩んでいるらしく、茶色の目を泳がせている。良く見ると泳いでいる視線が時々こちらの胸や足に及んでいるところから、とても白日の中言えたことじゃないコトを考えているんだろうか？　じれったくなつたあたしは、もういいと言って好男を置いてビルの中に入った。誰も居ないのに扉が急に開いたことに驚くドアマンとすれ違い、あたしは建物内の赤いカーペットを踏みしめた。

「あのねえ魅首う……」

天井から釣り下がる豪華なシャンデリアに暫し心を奪われていたあたしの右脇下から腑抜けた声が囁き、あたしはびくんと身体を振るわせた。咄嗟に両手で学生鞆を押さえつけ、出来うる限りの小声でスイフィを叱りつける。

「建物の中では喋るなって言っただろ！ 聞こえなかったのかよ！」

勿論小声で。カーペットのど真中から端まで一気に移動ししゃがみ込むあたしの苦労など何処吹く風と、スイフィは謝りもせずどころか悪びれもせず、相変わらずマイペースに話を進める。

「言つの忘れてたけど……おいらの声も魅首の声も、実は他人に全然聞こえないんだよね」

「は？」

あまりにいきなりの発言だったので、一瞬眉間に皺が寄ったままで凍り付いてしまった。

よくよく思い返してみれば、確かに昨日駅を出て直ぐあたしにぶつかったジツパー男にあたしの声は聞こえていなかった。ということとは、すべてあたしの杞憂だったということか……。余計なことは言うくせに大切なことは言わない天邪鬼なスイフィのせいでまた一杯喰わされたと落ち込むあたし。体操座りでカーペットの上に座り込むと、背後から影が差した。好男だ。

「おい、大丈夫か」

「……じゃない」

「そっか……。やっぱりな……。だから昨日の内に言っておこうと思っただんだ」

苦笑いのまま二の句を継ごうと息を吸った好男の胸板に一発打ち込むと、あたしは鞆を持ち上げ立ち上がった。

「それならそうと早く言えっの！ おかげでまた取り越し苦労しちゃっただろ」

好男の言う大丈夫、がスイフィのことだと思ったあたしはさっきまでの大人しさは何処へやら、やのつく自由業の人顔負けの迫力で台詞を吐くと、啞然としている好男を置いてカーペットの上を歩き去った。

「機嫌、直ってきたみたいだな」

金糸が織り込まれたテーブルクロスに乗り出して、好男があたしの顔を覗き込み微笑みかけている。超絶美味と形容されるに相応しい至高の絶品を食べて図らずもにやけていたあたしは、また不機嫌そうな顔にもどると生意気言った。

「アンタのおかげで直ったわけじゃねーよ」

「おいおい、ここで食事ができるのは俺のおかげだろ？」

こりゃ参ったといった様子で苦笑いし、好男は一本十数万するワインを口に含むと静かにグラスを置いた。そのワインを物欲しそうに見るあたしの視線に気付き、またまたキザに人差し指を振ると好男があたしを窺める。

「いくら姿が見えてないからって、魅首ちゃんはまだ未成年だろ。駄目ダメ楽しみは大人になるまでとっておこう。ね？」

そう言っただけまた一口ワインを飲む好男。くそう、コイツこれみよがしに見せびらかしやがって……。既に少々酒が回ってきた好男を三白眼で睨み付けると、あたしはフォークを置いて周りを見回した。

好男が最初に言ったとおり、案内された席はこのレストランの最上階、前方一八〇度が窓の、他の客から一切姿が見えないように仕切られた特等席だった。たった二人、いや正確にはたった一人のためには広すぎるスペースに雰囲気合った室内音楽が流れ、特別さを殊更に演出している。

窓から見下ろす景色は壮観で、夜に見たら本当に見惚れてしまうだろう。そしてきつとキザな好男のことだから酒が回ってステキな気分になった彼女の肩を抱いて窓の側に立ち、この百万ドルの輝きを全て君に捧げよう……。なんて歯どころか歯茎まで浮きかねないくっさい台詞を言うんだらうな。

そこまで想像すると、あたしはそんなことを考えてしまった自身に悪寒がして身震いした。こんなメロドラマみたいな話、普段のあたしなら絶対考えない。好男と一緒に居すぎたせいで寒い考えが伝染ってしまったんだらうか。

「どうした？ あ、もしかして魚嫌いだった？」

自らの妄想にげんなりするあたしの顔を好男が怪訝な顔をして覗き込む。その顔はうつすらと桃色に染まり、だいぶ酔ってきたようだ。グラスに一杯半しか飲んでないのにこれとは、コイツ酒に弱いんだな。よし、これで弱点一つゲットだ。

「うっん。むしろ大好き」

魚を頬張りほくそ笑むあたしを見て好男はますます怪訝そうな顔になる。何時までも他人の顔をまじまじと見詰めてくる好男に少々いらつときだが、口の中に広がる白身魚と特製ソースのハーモニーがそれを打ち消してさらに幸せな気持ちへと導いていく。

そう、このときあたしは人生で最も幸せな時間を過ごしていたのだ。但しそれは僅か十秒後に脆くも崩れ去ってしまう幸せなのだ。

美味しい料理をもう一口食べようとあたしが皿に目を遣ると、ちらんと音を立てて白っぽい何かが食器の上に落下した。一瞬思考が固まるが、あたしはすぐにそれが落ちてきた方向を見上げた。天井だ。

小振りのシャンデリアが吊るされた天井は、ちょうどシャンデリアが吊ってあるところを中心に、クモの巣状に輝が入っていた。あたしが限界まで見開いた目でそれを見詰めるうちにも、輝は刻一刻と大きくなっていく。あたしの自慢の桃色の頬に、剥げた天井の塗装がぱらぱらと降り注ぐ。

このままだと、シャンデリアに潰される。

瞬時にそう判断すると、あたしは椅子を倒さんばかりの勢いで立ち上がり、後ろに下がった。勿論、机の上に置いてあったファイル入りスィーフィも忘れずに。

あたしが上を見上げるのにつられて好男も天井の輝を見たらしく、椅子から立ち上がるとそのまま後ずさりして、腕時計の中にあるアズアに情けない顔を向けていた。

「アズア、これが例の……？」

好男が言い終わらないうちに、天井がド派手な音を立てて崩れ落ちた。予想通りにシャンデリアはキラキラ輝きながらさっきまであたしたちが食事していたテーブルに直撃し、そこに載っていた最上のランチを台無しにした。大量の埃と破片が舞い上がりあたしと好男の顔に容赦なく降り注ぐ。

「げほっごほっ！ なんだよコレ！ 一体何が……」

埃に咽かえり涙目で文句を垂れるあたしの右目に赤い光が刺すように当たる。近所のガキ共が猫を失明させて回収騒ぎになったレーザー光線だ。あたしはすぐに手で光を遮り、その場にしゃがみ込んだ。

直後、さっきまであたしの頭があった場所を弾丸が掠め飛んでいった。頭上に弾丸から出た風圧を感じ、あたしの肩が強張る。ファイルを握り締める手に思わず力が入り変な音をたてた。本当に、一体何が起こっているんだ？ 立ち込める煙の中から誰かがあたしを狙っている。何の目的で？

次第に晴れ行く煙の中で二つの影が動く様子が見えた。さっきの銃撃で窓ガラスに小さな穴が開いたらしい。ひゅっひゅっとう風が吹き荒れる音が鼓膜を震わせる。

「魅首ちゃん！ 無事か？」

煙の中から好男の身体が現れた。問いかけとは裏腹に、あたしがいるのとは違った方向を見ている。いや、アズアのいる腕時計を嵌めたほうの手を誰かに突きつけているようだ。

「あたしは平気だ。好男こそ大丈夫なのか」

本当は撃ち殺されかけて全身の震えが止まらないが、無理に強がって答える。好男は安堵するわけでもなく、険しい表情を変えずにそうかよかった、と呟いた。ちつともよくないだろ！と心の中で叫ぶあたしの前で好男の顔が驚きに満ちていく。

「きみは　　？」

もうもうと立ち込めていた埃と煙が収まると、あたしたちの前に襲撃者の姿が現れた。

どうみてもあたしより小さい女の子が、あたしに銃口を向けて震えていた。

「ウエジュ＝サマンテ。貴様らを葬りに来た」

女の子の中から慈悲など欠片もない声が聞こえた。かたかた震える女の子の唇はその間、一度も開くことは無かった。

第七章 ビルの最上階で踊ろう

突然の少女の出現に、破壊しつくされたレストランの最上階は時が止まったようだった。

事実、この異常事態の中ちゃんと動けるのはこの女の子と好男、それにあたしの三人だけだった。他の人達はいきなり天井が崩れ落ちたことでパニックを起こし、次いで聞こえた銃声に腰を抜かしている。

女の子の中の何かが物騒な言葉を吐いてから二分が経った。好男は相変わらず緊張した面持ちで時計を嵌めた手を女の子に向けて開いている。あれで威嚇しているつもりだったら呆れて口が塞がらない。いくら相手が小さな女の子だろうと、その手に持っているのは紛れも無く本物の銃だ。少なくとも何十階もある高層ビルの丈夫なガラスを軽々と撃ち抜くくらいの威力は持っている。

人間が撃たれたらどうなるか……あたしは途中まで想像してやめた。低級スプラッタ映画はスクリーンで見るから面白いのであって、実際に見るなんてナンセンスだ。

空から降ってきた女の子に銃口を向けられて恐怖のあまり思考が麻痺してきたあたしはそんな戯けたことを考えつつ、さつき聞こえた台詞を反芻する。なんかよくわからん名前を名乗っていたな。そういうえば、どこぞの誰かさんも似たようによくわからん名前だったような……。

そこまで考え、あたしははっと気がついた。しっかりと握り締めていたファイルを睨みつけると案の定、お寒い広告の陰に隠れてスイフィが縮こまっている。

「うああー……ウエジユが来たあーによりよってウエジユ＝サマン
デがあー」

「おい！ 知り合いなんだな？ またオマエのせいなんだな！」

「うう知らないようーてか知らない振りしないとヤバイようこの場
合い……」

頭を振りつつスイフィは三角定規とコンパスのイラストの後ろへ
逃げ始めた。こいつ、自分だけ助かるつもりなのか？ 冗談じゃな
い、こんな悪いジョークのような奴に巻き込まれて死ぬのはお断り
だ！ どうせだったら今まで利用された分利用し返してやる！

非常事態で頭に血が上りすぎたせいか、気付くとあたしはスイフ
イが入った広告をファイルごとぶん投げていた。生まれてこの方聞
いたことが無いほど無茶苦茶な悲鳴を上げながらファイルは女の子
のほうへ落ちていく。あたしの奇想天外な行動に驚いたのか、女の
子が一歩後ずさりした。

「アズア、今だ！」

体勢を崩した女の子を見て好男が合図する。と同時に好男の腕時
計から黒い髪の毛のようなものが溢れ出た。黒い繊維状のそれはあ
つという間に少女を捕まえ、手に持つ銃を取り上げる。

「ぎゃあっ」

少女が小さな悲鳴を上げた。小柄で華奢なその子は相変わらず何
かに脅えていて、銃を取り上げて黒い髪で少女を縛り付ける好男の
ほうが悪人みたいだ。好男もアズアも、か弱い女の子を無理に捕縛

するのは良心が咎めたらしく、彼女を締め付ける髪の毛が少し緩んだ。

「銃さえ取り上げれば、もう大丈夫だろ……？」

小鹿のように震えるかわいそいな女の子を見て、好男は時計の中にいるアズアに確認を取る。空中に縛り上げられた少女の眼がうるうる涙に満たされていく。

「来るぞ！ 下がれ！」

アズアが背筋も凍るような声で叫んだと同時に、少女の眼から一粒の涙が落ちた。瞬間、停電した薄暗いフロアを眩しい光が包む。

「な、なんだっ？」

痛む眼に手を翳しつつ、あたしは光の源を見た。あの少女だ。縛り付けられた黒い髪を彼女の背後から後光のように湧き出る光の筋が断ち切って、そのまま空中に浮かんでいる。倫理の時間に見た宗教画みたいだ。とあたしは思った。

その眩しく輝く姿は天使とかなまっちょろいもんじゃない。神。まさしくそう呼ぶに相応しい姿。

「おい、アズア！ 何だよあれは」

「以前説明したものだ。それより早くその銃であの娘を撃て！ 大惨事が起こってしまう」

「だ、だけど、相手は生身の女の子なんだぜ？」

いつになく弱気な好男が尻込みして後退りした。そりゃそうだ、光の中心にいる少女は相変わらず苦悩の表情で涙を流していて、まともな神経してたら撃つなんてことできるわけがない。あたしが好男と同じ立場でも撃てないだろう。

目の前の圧倒的な存在に遂に腰が抜けたあたしの耳に、アズアが短く舌打ちする音が聞こえた。クールキャラのアズアでも舌打ちするのか いや、それだけ状況が切羽詰ってるってことかな。

「……ならば、わたしが闘おう。好男、少し体を借りるぞ」

「え？ え？」

黒い腕時計から大量の黒髪が湧き出て好男の手を、そして身体を包んでいく。訳が判らないといった表情で、好男の顔が黒髪に覆いつくされた。人型をした髪の塊が、光の中ですすり泣く少女に銃口を向ける。

鋭い銃声に、あたしは耳を塞いで顔を伏せた。その耳に、さっきの偉そうで冷酷そうな声が聞こえる。

「他愛ない……やはり、こちらの武器は弱いな」

少女は無事みただった。少女の後ろの光が大きく揺らいで、傍にあったテーブルセットを翳めた。光が通った後には丁度その形に机と椅子が削り取られている。あんなのに当たったら、ひとたまりもない。そう思っただけで震えるあたしの前で、涙を流す少女の両手が広がった。それに合わせて光の翼が開き、完全な円形の後光となって天井いっぱいまで広がる。巨大な光円の周りに小さな光が煌き始め

た。

「アズアルメイデン、貴様の命貰い受ける」

光の粒の先が一斉に黒髪に包まれた好男に向き、発射された。無数の光に対抗しようと好男を包んでいた黒髪が空間いっぱい広がるけれど、それを突き破っても光の勢いは衰えない。

「好男　　っ！」

あたしは思わず絶叫していた。蠢く黒髪は次々と形を変えてフロアの上を逃げ惑いなんとか光の追尾を引き離そうとしているが、どう見てもやられるのは時間の問題だ。しかも悪いことに、黒髪の装甲に守られる好男は失神しているらしい。隙間から一瞬だけ見えた白目を剥いて泡を吹いている情けない顔を見たあたしの心が奮い立つ。

このまま座ってるだけじゃ駄目だ。あたしもスイフィと協力して、あの子の中に居る何かを追い出してやる！

震える膝を無理矢理動かして、あたしは光を背負う少女の足元へ走り出した。ファイルまであと少し、手を伸ばすあたしの頬を光弾が霞める。

「うっ　　」

「自ら敵の陣地に踏み込んでくるか。その勇氣、気に入った。先におまえを始末する」

涙を流す少女の内側から聞こえる声がふざけたことをぬかして、少女の手が背中の中を光を一筋掴む。抜き取られた光は一本の太刀にな

ってあたしの首筋に当てられた。耳元で、機械の調子が悪いときの
ような音がする。絶対泣くもんか、無意識にあたしはファイルを掴
み取った。このイカレ殺人未遂野郎をぶちのめして、二度とこんな
こと起こすまいと思うようにしてやるんだ。

ファイルを握って見えないそいつを睨むあたしの眼と、泣いてい
る少女の眼が合った。少女の涙で光る目は何かを訴えかけているよ
うだ。絶対助けてやるから。あたしは少女に頷いた。少女が内
側からの声に抵抗しているからなのか、太刀を持つ手はぶるぶる震
えて止まっているけど、均衡が崩れるのもあと少しだろう。

ファイルを握る手が汗ばむ。吊り広告の中で、三角定規の後ろに
隠れて怯えるスイフィの姿が見えた。頼れるのはこいつしか居ない。

「スイフィ、頼む！ あたしに力を貸してくれ！」

「で、でででも……」

「なんでもいいから！ 早く！ 『今』しかないんだ！」

首筋に当てられる太刀の力が強まった。どんな契約でも受けてや
る、とにかく強くなりたい。あの偉そうな声よりも、強く。迫り来
る危機に観念したのか、スイフィは嫌々ながら頷いた。手の先から
力が身体に流れ込んでくる。

新しい『色』の概念^{ビジョン} 混沌の中に渦巻くそれがあたしを導く。
でも、これは……。

人知を超えた新たな概念に触れて困惑するあたしの脇を光の太刀
が切り裂いた。余りに一瞬のことで声も出せずにその場に倒れるあ
たし。少女の身体を支配する声の主は光の太刀を構えなおし、泣い

ている少女の顔を左右に見回させている。

「……どこに消えた……？」

きよるきよるとフロアに眼を走らせる暗殺者の前であたしは息を潜めた。わかった、スイフィの能力はステルス機能なんだ。けれどそこから先どうしたらいいかわからない。今動いたら物音で相手に気付かれてしまうし……。

「！」

悩むあたしの前で光の翼を針のような黒い剣が突き刺した。剣はすぐに光の中で蒸発し、少女の頬から血が一筋垂れるのが一瞬だけ見えた。旋風が巻き起こり少女の身体が光の翼と共に一回転する。ウン、と何かが焼き切れる音が聞こえた。

「くっ……」

アズアの声だ。黒い装甲が破れ、すっかり気絶してしまっている好男の肩がぱっくり割れている。血は出ていない。髪で出来た黒い鎧が焼切れた黒い剣を捨てて新しく剣を造り出そうとしている。涙を流す少女の腕が上段の構えを取った。

「邪魔をするな！」

太刀の動きで突風が吹き、真白なテーブルクロスが木の葉のように何枚も吹き飛ばされた。その上に乗っていた高そうな皿達が床に当たって一度きりの楽曲を奏でる。演奏会が終わって静寂が訪れたフロアに、腹から二つになった好男と散らばった黒髪が転がっていた。

「好男！ アズア！」

思わず叫んでしまったあたしの鼻先に太刀の切先が突きつけられる。

「そこにいたか。逃げたのかと失望したが、見直した」

「……」

思い切り睨みつけたあたしの眼は相手に見えるのだろうか。お互いに無言のまま対峙が続き、堪えきれなくなったあたしは一步踏み出した。切先が喉仏に触れている。

「てめえ、最低だな」

あたしは声の主に憎まれ口を叩いた。負け犬の遠吠えなのはわかっている、でも、どんな方法でもいいからこいつに一矢報いてやりたかった。持ち手の振動が伝わっている太刀はふるぶると震えている。もう一步踏み込もうと足を上げると、声が聞こえた。

「……自ら死に急ぐとは面白い奴だ。名乗れ、名を覚えておいてやる」

「丙盟へいめい 魅首みしゅだ」

自分の名前を吐き捨てると、あたしは少女の背後の光に人差し指を突き出した。

「そんなか弱い女の子を盾に闘って楽しいか？ さっきから偉そー」

な口きいてるけど、そういうことはためえが自分の身体で闘ってか
ら言えつての！」

「ふっ」

何が可笑しいのか、ムカつく声が泣いてる少女の中から響いた。
いや別に少女は悪くないんだけど。

「勝てばいい。そのためには手段なぞ構わん」

百人の悪役が居たら九十五人が同じことを言いそうな台詞を吐い
て、声の主が少女の腕を動かした。肩から袈裟切りに太刀が抜け、
身体のバランスが崩れたあたしは床に倒れる。

こんなところであたしの人生は終わるのか……。光に包まれ何処
か別の場所に転送されていく少女に手を伸ばしてごめん、とだけ咳
くとあたしの意識は途切れた。

第八章 電波受信中

誰かから頬をしつこく叩かれて、あたしは眼を覚ました。天国つてもっと人に優しいところだと思ってたんだけど、と迷惑ぶつて前に座っている人物を睨む。眼鏡を掛けた少女が満面の笑みであたしの顔を覗き込んでいた。

> i2480 — 386 <

見てはいけないものを見てしまった、と眼を逸らすあたしの前でそいつは嬉しそうに両手を叩いた。

「ああーよかったですー！ 気が付かれたんですね！」

「誰だよ……」

鬱陶しそうなタイプの人間だな、と思いぼそつと呟くあたし。一言訊いただけなのに、そいつは眼鏡がずり落ちるほどの勢いで自分のことを語り始めた。

「わたくしの名は香椎^{かしい} 刈子^{かるこ}です！ 選ばれし巫女として世界中の皆々さまに素晴らしき天からのお告げを知らしめる使命を背に精一杯頑張ってるのです！ さああなたも一緒にありがたい天啓を受けましょう！」

「はあ？」

初対面なのに電波爆発な眼鏡少女が分厚い本を取り出して執拗にあたしに勧める。くそっ、宗教系の痛い子か……これは面倒なことになりそうだな。とにかくこういうのは最初が肝心だと、毅然とし

た態度で本を断るあたし。少女は薄桃色の頬をぷっつと膨らませると今度は説教を垂れ始めようとする。

「どうして教えを拒むのですか？ あなたの命が助かったのも天啓のお陰なのですよ！」

「なんだって……？」

あたしの脳裏に、涙を流す華奢な少女とその内側から響くムカつく声が過ぎる。そうだ、あたしはあいつに身体を斬られて。はつとして身体を見下ろすけれど、そこに傷跡は見当たらなかった。それどころか、雨の一件で滲んでいた身体の輪郭が元に戻っている。

「これは……どうして……」

「好男さんがあなたを治療したんです。もちろん、その好男さんが助かったのもわたしが天啓の通りに行動したから」

「好男、無事なのか？」

がばと跳ね起きて相手の肩を掴むあたしに、刈子と名乗った少女はきゅっ、と声を上げて頷いた。光の太刀で真つ二つにされて死んだとばかり思っていた好男が生きてるなんて。本当に、いつたいどうなってるんだ？

「あいつは……好男は、今どこにいるんだ」

「隣の部屋です。男として一番大切なところを取り戻してる最中なので、絶対に扉を開けてくれると言ってました」

刈子の言葉を聞いて、あたしはちょっとでも好男を心配したことを後悔した。解らないからって、何をいたいたけな少女に吹き込んでるんだ、あいつは。ここでやっと落ち着いたあたしは部屋の中を見回した。白で統一された神殿を思わせるようないかにも宗教っぽい部屋。多分この刈子って子の家だろう。自作らしい白い石膏の神像に薄ら寒いものを感じながら好男の再登場を待つあたしの前で、急にああっ！ と刈子が大きな声を出した。

「来ましたわ！ 新しい天啓です！」

おいおい勘弁して頂戴よ、と生暖かい眼で真剣な表情をする刈子を眺めていると、彼女の眼鏡にあたしとは別の人影が映るのが見えた。まさか、こいつも。身構えるあたしの目の前で、眼鏡に映った影が鮮明に人の形をとっていく。現れたのはあたしと同じ歳位に見える金髪の青少年だった。眉間に皺を寄せて凝視しているあたしに、気恥ずかしそうに手を振っている。

「……………どうも。テンキイっていいます」

ああ、名前を挨拶もじって天啓ね。ってやかましいわ！ などと一人心の中で乗り突っ込みをかまして、あたしは自分の名前を言った。それから少し間を置いて、天啓とやらに酔ってトランス状態になっている刈子を指しテンキイに尋ねる。

「こいつがこんな風なのは、最初から？」

「うん……………まあ……………」

弱ったなあと眼鏡の中で呟いて、テンキイは金髪の頭を掻いた。なんか、こいつからは苦労人の匂いがするな。取り敢えず助けてく

れた礼を言つと、あの状況からどうやって助かったのかをテンキイに尋ねてみる。うーん、と金髪が眼鏡の中で揺れる。

「僕達一人ひとりが特殊な力を持つてゐることは、もうアズアから聞いたかな。僕の能力は至つて簡潔、任意の未来像を数分間相手に見せることができる力なんだ」

「へえー」

スイフィのただ透明化するだけの能力よりもよっぽど複雑そうじゃないか、と心中愚痴りつつも相槌を打つ。あたしのじとつとした視線を感知したのか、テンキイは慌てて能力の説明を付け足した。

「ほら、君もウエジユに斬られたと思つただろう？ あれ、僕が見せた『君が斬られる未来』の像。シヨックで倒れちゃつたみたいだけど、別に斬られても痛くなかつたでしょう」

「ああー、最初の一撃は斬られた痛みがあつたけど、二撃目は確かに痛くなかつたな……。でもさあ、それって普通に幻覚を見せる能力でいいんじゃないの？」

と、的確な突っ込みを入れるあたし。我ながらなかなか冴えてる。身体の不快感が無くなつたせいかな。相変わらず恍惚状態で心酔してる刈子の眼鏡の中で、テンキイが人差し指を振つて、一寸違うんだなあー、と言っている。

「幻覚みたいにも何でも好きなものを見せられるわけじゃないんだ。相手にこれから起こり得る確率が高い事象を見せる、ただそれだけ。大抵は一つか二つしか見せられる像が無くつて、それもお互い似てることが多いから、見せる像を選べることなんて滅多にないんだ」

随分使いづらい能力だな……。あたしだったら、その力であの少女を操っていた声の主に対抗しようと考えただけで、頭が茹だつてしまっただろう。つまりウエジユにも同様にあたしを斬つたという未来を見せ、命を絶つたと確信させて帰るように仕向けたんだ、とテンキイが解説を続けてるが、正直理解できそうにもない。

「まあでも、ウエジユのことだから、生きてるって分かつたらすぐにでもトドメを刺しに来るだろうけど……」

「けど、何だよ。テンキイが幻覚を見せてる間に、あたしとアズアの二人掛りで襲い掛かつたらあいつを負かせられるんじゃないのか？」

うーん、とまたテンキイは頭を掻く。じれったい奴だな……。言いついてる間にちらりとファイルに入った吊り広告を見ると、スイフィがど真ん中で気持ちよさそうに爆睡していた。まったく、呑気なんだから。

「この能力、ほんとにただ像を見せるだけだから 相手が気付いて無差別範囲攻撃を仕掛けてきたら、意味が無くなっちゃうんだよね」

首を傾げるあたしに、目隠ししてスイカ割りしても、やたらめつたら打ち下ろしてたらいつかは当たるでしょう？ とテンキイが説明してくれる。なるほど、視界を奪っても身体の内は奪えないわけか……。眼鏡の中でテンキイが肩を竦めた。

「多分、今回のことでウエジユは僕のこと気付いちゃったと思う。同じ作戦はもう使えないね。あーあ、困ったな」

眼鏡の奥で頭を抱えるテンキイに、今まで恍惚状態だった刈子がはっと目を覚ました。

「わたくしに出来ることはありません、何なりとお申し付け下さいませ！ 巫女の務め、立派に果たしてみせます！」

「あ、うん……」

なるほど刈子はテンキイの命令に絶対服従つてわけか。ある意味一心同体と言ってもいい二人の関係は一寸、いやかなり気持ち悪いけど、いろいろ物事がスムーズに運びそうだ。あたしも二人を見習ってスイフィの言うことを聴いてみるか……。

傍に置いてあったファイルを手に取ると、いびきをかいているスイフィを叩き起こす。

「おいこらっ！　なんで襲われるのか説明してもらおうかつ！」

うん、まあ、急に態度を変えるなんてできないし。吊り広告の中で、地震でも来たのかとスイフィが飛び起きた。なんかよく判らない言語を早口で喋ったけど、英語も解らないあたしに言うだけ無駄だ。

「むうー。気持ちよく寝てたのに起こすなんて酷いねー。で、なにか言ったかねい？」

「だから、どうしてあたし達が変な奴に狙われなきゃならないんだよ」

寝惚けるスイフィは欠伸を繰り返して、返事をしてくれない。つたく、肝心な事は絶対喋らないんだよな、こいつ。うんざりして溜息をつくあたしの肩を、刈子が叩く。

「その説明でしたら、わたくしがして差し上げますわ」

親切にそう言ってくれるのは嬉しいが、これ以上電波な言葉は聴きたくない。丁重にお断りしようとするあたしを無視して、刈子は例のトランス状態の目で話し始めた。なんかいきなり天地創造とか言っちゃってるので、最初のほうは適当に聞き流すことにした。

「こことは違う世界で、そこを治める女王がおりました。女王の権力は余りにも強大で、女王の名を呼ぶのは余りにも恐れ多く、『あのお方』と呼ばれるようになりました。」

女王の治める世界は繁栄していましたが、ある時を境に世界に亀裂が入るようになりました。亀裂は時が経つほど大きくなり、外の世界から沢山の異物が流れ着くようになりました。それらは女王の治める世界を蝕むものでした。

蝕まれた世界は変容を始め、女王の力もそれにあわせて弱まっていきました。女王は世界から力を得ていたからです。亀裂を元に戻そうとした時には、嘗ての半分ほどしか力がありませんでした。

自分一人の力では亀裂を直せないと気付いた女王は、配下のもの達にも手伝うように御触れを出しました。多くのものが女王に従いましたが、変容した世界に馴染んでしまったもの達は女王に逆らいました。女王は彼らの力の一部を封印し、亀裂の外の世界へと追放

しました。

世界にできた亀裂はたった一つを残して全て塞がりましたが、女王の力は弱まるばかりでした。女王の身を案じた側近達は頭を寄せて相談した後、女王自身を変容させてしまおうという結論に達しました。一番安全な方法として、既に変容した世界に馴染んでいる追放者達の全ての力　つまり魂を、女王に食べさせることが選ばれました。

「　という訳で、わたくし達は女王の配下のもの達から命を狙われているのです」

「なんつっー勝手な話だ……」

まるでおとぎ話のような刈子の語りに愕然とするあたし。普段ならこんな事聞いても一笑に付すんだけど、スイフィやアズアのような非現実を實際目にしてるから肯定するしかない。

兎も角『あのお方』の正体はよくわかった。あたしの眼が、まだ広告の中で寝惚けているスイフィに向く。変なのに取り憑かれてその上命まで狙われるなんて。やっぱりこいつは疫病神だ。

部屋の扉が開く音がして、好男が現れる。なんだ元気そうじゃん、よかったよかった、と思うあたしと好男の眼が合った。妙に嬉しそうな表情の好男にあたしが眉を顰めると、聞いてもいないのにでれつとした様子で口を開いた。

「いやあー、一時は死ぬかと思ったけど刈子ちゃんのお陰で助かつ

たよ。ありがとう」

そう言っただけであつたという間に刈子の傍に寄り、肩を抱く。夕日の綺麗な場所を知ってるんだ、よかつたら二人で見に行かない？ とかふざけたことを言っている。この女たらしは……。好男の手をぺち、と刈子が叩き、態度を窘める^{たしな}。

「駄目ですよ、好男さん。素敵なものは皆さんで分かち合うべきなのです。行くのなら魅首さんも一緒でなくては」

「ああ、そうだね。両手に花を持ちながら夕日を見るのも、悪くない」

電波と変態が交じり合うとこんな会話が繰り返されるのか……。傍で聞いているだけで脳みそが溶けそう。痛む頭を抑えながら、まだ刈子の肩に触っている好男を引き剥がす。

「やめる、犯罪だぞ」

「ははっ、やきもちを妬くなんて魅首ちゃんも可愛いところがあるじゃないか」

こつちは好男が警察のお世話にならないように気を遣って言うのに、何を寝惚けたこと言ってるんだ。口をへの字に曲げるあたしを、好男は妙ににやにやして眺めている。この男、恐怖で頭のネジが飛んじやったのか？ へらへら笑う好男の左手から背筋も凍るようなアズアの声が聞こえる。

「魅首殿、済まない。そなたの怪我を治すには、他に方法がなかった……」

詳しく聞こうと腕時計の中で俯く影に顔を近付けると、好男がとんでもないことを口走る。

「そうそう。俺が患部に触って傷を治してあげたから。ね？」

……患部に、触って？ そうだ、滲んだ輪郭も斬られた脇腹も治っている。でも、ということは、つまり……。あたしはその場からよろよろと後退りした。目の前では好男が最高のキメ顔で微笑んでいる。なんてこった、あたしはこの変態ナルシストに。

「大丈夫ですよ魅首さん。治療は服を着たままでしたので」

「そーいう問題じゃないだろっ」

刈子に突っ込み、あたしは頭を抱えて蹲る。いや、まだ服着てただけマシか……。なんて大分毒された感覚で思っていると、吊り広告の中からスイフィの声が聞こえてきた。

「魅首う、ちゃんとヨツシイにお礼言おうよおー」

「うづくぐ……」

抱えた頭を上げると好男が笑って白い歯が輝いた。好男がどう思っているかは兎も角、助けてもらったことに変わりはない。両手を拳にして立ち上がるとあたしは好男と、そしてアズアに頭を下げた。

「……あ、ありがとう」

「全然気にしなくていいよ！ むしろこれからも怪我したら遠慮な

く俺に痛^{いて}ててて
」

左手を押さえて呻き声を上げる好男の横で、刈子が時計を見て咳いた。

「あら、そろそろ天啓に導かれて求道者さんがいらっしやいますわ」

また電波を受信してるのか……。そう思って軽く流したあたしの耳にチャイムの音が響く。ぱたぱたと走っていった刈子の悲鳴を聞いたのは、それから僅か数分後のことだった。

第九章 暗黒爆練武闘 前編

きゃあつ、と玄関から刈子の悲鳴が聞こえて、あたしは顔を上げた。まさか、もう追手が来たのか？ 嫌な予感に部屋を飛び出し廊下を抜けると、大理石で出来た白い玄関に刈子がぺたんと座り込んでいた。その向こうに人影が見える。

「俺に……触れるな……！」

低く抑えた声が俯く顔から発せられる。黒い髪を銀色に脱色した少年が、震える右手を左手で抑えていた。カラーコンタクトを入れているのだろうか、左目が赤い。一目見た瞬間にわかった。こいつはヤバイ。しかも刈子が見えてるらしいってことは、あいつも何か特殊な力を持っているってことだ。いざとなったら透明化して刈子を手助けすることが出来るように、あたしはファイルを握り締めた。

「あの、でも、武宮さん」

腰を抜かしたまま刈子が話しかけるが、少年の赤い眼に睨まれて口を噤んだ。震える右手を握り締め、少年が大袈裟に痛そうな振りをしている。

昔、中学生だったところに一度だけ同じよーなことをする奴を見たことがある。あーいう人種を何て言うんだったかな……。迂闊に話しかけたせいで何故か逆ギレされて、しかもその後一年間ずっと「俺たちは選ばれた戦士だ」とか意味不明なことを言われ付きまとわれて以来、ああいう人間には二度と関わるまいと思っていたのに。

演技だってバレバレなのに、少年は肩で息をしてあたし達を睨みつける。自分ではかっこいいと思ってやってるんだよな、突っ込ん

だらまた逆ギレされるよな。どつきたい心を必死に抑えるあたしに人差し指を向ける少年。

「解っているぞ……おまえ達の狙いは俺の持つ強大な力……。だが
屈するものか……！ エント・オブ・ザ・ワールド 世界の破滅は俺の暗黒爆錬武闘で……。防いで
みせるっ……。！」

痛々しい台詞を吐いて、少年は右手が疼く……。！ と一人芝居を
続けている。もう我慢の限界だ。あたしは座り込んでいる刈子の前
に出ると少年を睨んだ。

「おーい、何があったんだ？」

一発ぶちかましてやるう、と拳を握ったあたしの背後から気の抜
けた声かして、好男が現れた。腰を抜かしている刈子と、銀髪の少
年を交互に見る。

「駄目じゃないか、女の子に乱暴しちゃ」

「……その女は……不用意に俺の名を唱えた……当然の報いだ……」

ああ駄目だコイツ、完全にぶつつんしてる。一度殴るか何かして
正気に戻さないと。好男も同じことを思ったのか、腕時計の中のア
ズアに囁いて黒髪で出来た剣を構えた。

「ふん……やはり……。敵か……。晴天を彩る塵芥となって……。命散
らすがいい……」

イライラする台詞を吐きながら、少年も身構える。緊迫した空気が
流れ、あたしも思わず身構えた。好男が目配せして口を開かず囁

く。

「俺が囿になるから、魅首ちゃんの透明化する力であいつを後ろから捕まえてくれ」

りょーかい、と呟き、吊り広告の中で眠そうにしているスイフィを見る。睨まれたスイフィは面倒臭そうに肩を竦めて見せると大袈裟に溜息を吐いた。身体に力が漲ってくる。

「さあー、何処からでもかかってこい！ 年季の違いってもんを教えてやるよ！」

大声で芝居掛かった台詞を言い、好男が少年にこれ見よがしにポーズをキメている。いやいや、そんなあからさまな挑発に乗る奴なんていないでしょーが……。なんて突っ込みを心の中で入れて少年を見ると。

「ソックアー・オブ・セブンサウンズ

「ふっ……七音の征服者に挑んだこと……すぐに後悔させてやろう

リブレット

……」

案外ノリノリだった。格好付けてる割には煽りに弱いんだなあー。なんて気を抜いていると、少年が片足でリズムを取り始めた。え、まさかここで踊りだすとか、さらに痛い行動を取るのか？

眉を顰めて状況を見守るあたしの耳に、十六ビートの心地良い音楽が聞こえてくる。聴いたこと無い曲だけど、結構いい感じだ。あたしの知らない間にこんな名曲が世に出ていたとは。

「ぐわっ！」

好男の叫び声で、あたしは正気に戻った。何時の間にか身体がリズムを取っていたみたいだ。棒立ちしているあたしの前で、少年に思いつき殴られて好男が仰け反っている。ころん、と白い何かがあたしの足元に落ちた。これは、まさか。

「ひえーヨツシ歯が取れちゃった痛そうだねー」

やっぱり歯か。飛び起きたスイフィの言葉を聞いて納得するあたし。血が出る口を押さえて好男は涙眼になっている。少年は銀髪を揺らして後退し、またビートを刻んでいる。

「うつつ……どーいうことだよアズア！ 相手はあんなひよろいガキなのにさあ」

「恐らく、彼はクワイと契約を結んだのであろう。音を操って自分の身体能力を大幅に上昇させている。それより好男、歯を回収しておかないと。治せなくなってしまう」

アズアに言われ、口を押さえたまま好男が地面をきよるきよると見回す。親切なあたしは足元に落ちた歯を拾ってあげた。好男に見せるけど反応が無い。ってことは、もう能力が発動してるってことか。にい、とあたしの口端が上がる。

くるりと振り向くと、あたしは銀髪の少年に眼を遣った。心地良い音楽が少年の身体から流れ、攻撃準備は整ったみたいだ。次がおまえの最期だ、とか好男もびつくりのキザ発言をする少年にこっそり歩み寄るあたし。笑いを堪えすぎて頬が痛い。

「いくぞ……第六の音　　っ？」

ザ・シックス・サウンド

急に後ろから羽交い絞めにされて、少年が声を詰まらせた。じたばたと無駄な抵抗をする少年からは音楽が止まってしまつて聞こえない。

「はははははー！ どうだ思い知つたか！ さあ、態度を改めて刈子にちゃんと謝れ！」

「くっ……ステルスだと……！ おのれ……！」

「おい！ 返事！」

もがく少年が逃げ出さないようにしっかりと押さえつけるあたし。能力で強化してない只の子どもなんかあたしの敵じゃないし。悔しがる少年をいい気味だと見下ろしていると、諦めたのか頭を垂れて静かになった。

「ん？ 謝る気になつた？」

「違う……こんなの俺じゃない……気高き指揮者コンダクターがこんな野蛮な奴にっ……負けるわけが……っっ！」

や、野蛮だと？ ほほう……この少年、いい根性してるじゃないか。血管が浮かぶほど拳を握り締めて、あんたのこめかみをぐりぐりしてやるうか。思考を実行に移そうとしたとき、あたしの眼に少年の表情が映つた。カラーコンタクトのオッドアイは潤み、今にも泣きそうだ。ちよつと虐めすぎたかな……。良心が痛んで腕の力を弱めた途端、少年が虚空に咆哮を上げた。

「もつと もつと俺に力を！ 立ち止まらないために 永遠の
リズム
音律を！」

さつきまでとは違った悲痛な絶叫に、思わず手を離してしまった。少年の眼からキラキラした涙が零れ落ちる。なんだ、子どもらしいところもあるんじゃないかな。そう思うあたしの耳にアズアの声が聞こえる。

「また……来る！ 魅首殿、伏せるんだ！」

「え？」

「おおおおおおおおおおお つ！」

少年の咆哮にアスファルトの大地が揺れ、身体を包む空気が震える。尋常じゃない雰囲気を感じたあたしは言われた通りその場にしがみこんだ。

「喰らえ！ ダイク・エクスプロージョン 暗黒爆錬武闘ツッ！」

叫びに応えるかのように大気が波打ち、少年を中心に衝撃波が迸った。空気の刃がアスファルトを砕き破片を巻き上げ、巨大な牙となつて長閑な住宅街とあたし達を襲った。

第十章 暗黒爆練武闘 後編

少年の起こした衝撃波で家々のガラスが次々と粉碎されていく。真正面から来るガラスのナイフに腕で顔を庇うあたしの身体を、アズアの黒い髪が包みこんだ。足が地面から離れて、高速で好男達の方へ引つ張られる。

「魅首ちゃん、大丈夫か？」

「なんとか ありがと好男」

あとこれ歯だから、と胸ポケットに入れておいた歯を好男に渡すと少年の方へ振り返る。クレーターのように大きく抉れた道路の中心に、少年は右手を押さえて蹲っていた。苦しそうに肩で息をするその頬からは涙と一緒に汗も流れている。今度は演技じゃなさそうだ。

「武宮さん……どうしちゃったんでしょうか？」

おどおどと尋ねる刈子の眼鏡に人影が過ぎる。 テンキイだ。

「あれはクウイの得意技、共振の刃じゃないか。でも、僕たちは皆、異世界ここに来るとき力の殆どを『あのお方』に封印されたはずなのに……」

「そうか 涙、だ」

テンキイの説明口調な台詞を、アズアの冷たい声が遮った。黒い髪が湧き出る腕時計の文字盤から、背筋も凍る声が更に続く。

「ウエジユと戦った時、さつき好男が歯を折られた時、そして今……。いつも、涙が目から溢れるときに、膨大な力が空間を渡るのを感じた。間違いない、『流れる涙』は故郷むこうと異世界こゝろを繋ぐ橋の役目をしている」

一息にそこまで言うと、腕時計から生えるアズアの黒髪がうねった。うーん、つまり、泣くとパワーアップするってことか？ なんだか格好悪いな……。馬鹿馬鹿しい事を考えていると、アズアが好男に、即刻涙を流すべし、と命令していた。

「ええー……。もう一寸早く言ってくれれば　もう涙引込んだじゃったよ」

アズアの注文に好男が口から血を流して愚痴っている。ほら、全然痛くなくなっちゃった、と歯が折れたところを指でぐいぐい押ししている。……いくら脳内麻薬が出てるとはいえ、そこまで痛みを感じないものだろうか……。

呆れるあたしの耳を、ガラスの破片が掠めていった。銀髪の少年がクレーターの中で立ち上がり、暗黒爆錬武闘ダーク・エクスプロージョンとやらをまた撃ってきそつだ。

「ああっ大変だ！　このままじゃ街の人達に被害が出てしまう！」

刈子の眼鏡からテンキイの切羽詰った声が響く。いやいや、とつくに被害は出てるでしょう。砕けたガラスや剥がれたアスファルトを眺めながら心の中で突込みを入れる。テンキイの声を聞いて恐怖が吹っ飛んだのか、いきなり刈子が立ち上がって少年の前に立ちはだかった。

「武宮さん、もう争うのはやめましょう？ わたくしは只、貴方と幸せを分かち合いたいだけ……。教えを受け入れ、天啓の通りに行動すれば必ず約束された未来が」

「……今の俺に……未来なんて……」

銀髪を揺らし、少年が拳を握る。カラーコンタクトのオッドアイから、真珠みたいな涙がぼろぼろと落ちた。顔を俯ける少年に、刈子がブーツを鳴らして近付く。

「武宮さん……あなたのその涙の訳を、わたくしにも教えてくださ
いませんか？ 苦しみの枷を共に背負うのも、巫女の務め きゃ
っ」

「触れるな！」

差し伸べられた刈子の細い手を、少年の手が弾く。後退りする刈子を睨み、少年が文字通り牙を剥く。午後の日差しが少年を照らし、脱色した銀髪がキラキラと煌いた。

「現在いますらまともに直視できない輩に……この気持グレイフちを知る資格な
ど……無い……っ」

少年の口から紡がれる言葉が旋律を奏で、吐息が空気を踊らせる。身体の奥深くで鳴る鼓動さえも、空間のリズムを操っているようだ。目の前で両手を組んで憐れみの視線を投げかける刈子に、少年は右手を翳した。

「刈子危ないっ！ 下がれっ」

走り出そうとするあたしを、轟音と共に紅蓮の炎が遮った。急に現れた燃え盛る真赤な壁に、前髪がちりちりと焦げる。熱さに耐え切れず身を翻すと二人が炎に包まれ対峙しているのが見えた。

「どうなってるんだ？ この炎もあいつの能力なのか？」

「……クウイの能力で炎は起こせない。多分これは、ウエジユが差し向けた刺客だろう」

アズアの冷たい声に被せて、あたしの耳に誰かの高笑いが聞こえてきた。はっと声のする方へ顔を向けると、痛んだ茶髪にド派手な真紅のドレスを着た女が、ブロック塀の上からあたし達を見下ろしていた。

「ほーほほほほ！ これで更に二人の命を頂いたわよ！ 御覧なさいカンツァー！」

女の髪に刺してある巨大な櫛に一瞬、影が映った。愉快そうに高笑いを続ける茶髪の女の言葉に、あたしも好男も硬直する。そんな……。

「大丈夫だよ魅首う。ほら、炎の向こう側をしてみるねー」

でも、こんな炎の中じゃ……。同じことを思ったのか、業火を前に暢気な声を出しているスイフィに、ブロック塀の上から女が嫌味な笑顔を見せつける。

「可哀想に……仲間が死んだことを受け入れられないのね。いいわ、すぐ後を追わせてあげる　ッ？」

余裕たっぷりに嘲笑の表情を浮かべていた女の口が歪んだ。炎の壁が、風に煽られるように揺らいた。いや、実際に風が起こっている。それも炎の中心から何度も何度も、重低音と共に。力強い八ビートの音楽にあたしの鼓動も強く波打ち、胸が期待に膨らむ。

「…………貴様、今、何と言った…………？」

真紅の炎の中から、オッドアイの少年が片膝を付いて、女を睨み付けていた。その左手に気を失った刈子を抱きとめて。

> i 2 6 1 1 — 3 8 6 <

「くっ…………しぶといわね！　すぐに後を追わせてあげるって言ったのよ」

「違う…………その『前』だ…………」

少年の赤い瞳が炎に照らされ真紅に輝く。はあ？　と茶髪の女がルージユを引いた唇を歪めた。少年の身体から聞こえる音楽が次第に転調し、テンポを上げて炎を蹂躪する。

「…………『更に』、と言ったな…………貴様…………」

少年の銀髪が風に靡き、逆立った。響く音は最早心地よい環境音楽ではなく、身体が軋むような爆音となって炎を完全に消してしまった。自分の能力を完封してしまった茶髪の女が狼狽してブロック塀の上で後退りする。

「な、何よ。確かに、一週間前に仲の良さそうな三人家族を始末したところだけど、あなたには関係ない話だわ」

女の迷懷を聞いて、少年のカラーコンタクトの赤い瞳がぎらつく。ギリ、と齒軋りの音が聞こえ、刈子を抱きしめる少年の手に力が入った。ぐったりしていた刈子の目が薄らと開き、少年の名を呼ぶ。

「あれ……？ 武宮……さん……？」

「武宮？ そういえばあの家族もそんな苗字だったかしら」

真赤なルージユを引いた唇に指を当てていた女が、はっと気付いて冷たい笑みを浮かべた。これまた赤く塗られた爪を少年に向け、これ見よがしに嘲笑う。

「はーん、さてはアンタあの家族の生き残りってわけ？ 愛する家族の仇を討つために、能力を手に入れて放浪していたと……泣かせるねえー」

出てもいない涙を拭く仕草をして、茶髪の女は高笑いした。……あいつにそんな事情があつたなんて……。刈子を抱いて齒を食い縛っている少年に、あたしは心の中で彼の珍妙な風体を小馬鹿にしたことを後悔した。それとこれとは別問題な気もしたけれど。

胸に手を当てて反省するあたしの身体を、女の出す紅蓮の炎が照らす。

「でもお、残念ながらアンタの復讐の物語はここで終わり。一般人ならいざ知らず、『契約者』となった今度は逃がさないからね！」

炎に包まれた両手を振り上げ、女が高笑いした。紅蓮の炎が空中に弧を描き、そのまま真直ぐに少年と刈子に襲い掛かる。二人を助けようとしてあたしと好男が走り出した直後、俯いていた少年が顔を上げその唇を開いた。紅潮した頬を一筋の涙が伝う。

「例え審判の神が貴様を赦したとしても……俺は……貴様を許さない！」

銀髪が揺れ、白く華奢な手が炎に向けられる。

「ダイク・エクスプロージョン
暗黒爆錬武闘！」

紡ぎだされた審判の言葉に、少年の手の平から走り出た爆音が空間を切り裂いた。

第十一章 涙の流し方

音の衝撃が閑静な住宅街を貫き、遠くで電線に止まっていた小鳥達が空へ羽ばたいた。揺れる大地に足元を掬われ、あたしと好男がその場で尻餅をつく。あまりに一瞬の出来事に呆然とするあたしの頬に、ぱらぱらとコンクリートの破片が降り注いだ。

静まり返った空間に何処かから、学校の終業を告げるチャイムの音が響く。そろそろ小学生の下校時間だ。

こんな攻撃を真正面から受けて、さっきの変な女の人は大丈夫なんだろうかと心配するあたしの耳に、舌打ちの音が聞こえた。どうやら彼女は無事みたいだ。いくら人殺しをしたと自分から公言してる嫌味な奴でも、目の前で死なれるのは気分が良くないし。

抉れた民家の屋根の頂いたたきで、茶髪の女は乱れた髪を手櫛で梳いていた。

「……ふん！ 今のは単なる偶然よ。次はもうこんな好運無いからね」

悔しそうに減らず口を叩く女の手が紅蓮の炎に包まれる。対する少年も、意識を取り戻した刈子を放り出して立ち上がり、右足でリズムを取り始めた。あたしの視界に集団下校する小学生達が映る。これ以上被害が拡大する前に、早く二人の争いを止めないと。

「お二人共、争いはお止めください……！ 何も生み出さない憎しみよりも、幸せをもたらす愛をもって接しましょう？」

青い目を潤ませて刈子が説教を垂れている。よしよし、そうやって雑音を立ててくれる間に透明化してどちらかを押さえつけよう。

心地良い十六ビートの曲を聞き流しつつ、あたしは二人に眼を走らせる。この場合、どちらを捕まえることを優先したらいいのだろうか？

銀髪の少年は一々回りくどい喋り方をして話が通じないけれど刈子を助けていたし、明確な殺意を持ってここに来た茶髪の女性の方が危険度は高い、かな。スカートのベルトに挟んでおいたファイルを取り出し、スイフィに目配せする。

「もしかして二人を止めるつもりなのねい？ ……やめておいたらあー？ 触らぬなんとかに祟りなして、よく言っじやん」

「……おまえ、どーせ他人事だと思っただろ。よく考えてみるよ、どっちが勝っても次に矛先が向くのはあたし達。万ーあの炎の女が勝ったらどうする？ 下手したらこの広告が燃えてあたしもスイフィも御昇天、ってことになりかねないんだぞ」

乗り気じゃないスイフィを焚き付けるためにちよつと脅してみた。広告の中でピンクと緑の編髪を揺らしてスイフィが考え込んでいるこいつ、自分のことになると急に一生懸命になるんだから、今の台詞を聴いて断るはずが無い。思惑通り、スイフィは溜息を吐きつつ頷いた。

「わかったねいー。面倒臭いけど協力してあげるねい」

上から目線でそう言って、スイフィが広告の向こう側から手を翳す。音楽に乗ってるあたしの身体に未知の力が流れ込む。勿論捕まえるのは真赤な女の人のほうだよ、とスイフィが小声で尋ねて、訊かれなくてもそうするつもりだ、とあたしは返した。

身体中を血流が巡ってはち切れそう。どうやらあの音楽は本人だけじゃなく近くにいる人間にも影響を与えるらしい。敵味方問わ

ず身体強化するなんて使い勝手の悪い能力だなあなんて考えながら、電波な言葉を言い続ける刈子の脇を通り屋根によじ登る。

背後からそつと茶髪の女に近付くと、両手の炎が大きくなって大人用浮き輪くらいにまで膨れ上がっていた。キャンプファイヤーに近付きすぎた時みたいに顔が火照る。

「魅首^{みしゅ}うーやっぱりやめようよー燃えちゃうよー」

「！」

しまった、気付かれた。ベルトに挟んだファイルから聞こえたスィフィの情けない声に反応して、茶髪の女が振り向きざまに両手の炎をあたしのほうに投げつけてきた。スタントマンよろしく屋根の上を転がったけれど、避けきれずにスカートが焦げてしまった。この制服って結構高いんだぞ。もうあの学校には行かないつもりだからいいけど……。

「どこにいるのかしら？」

綺麗に化粧をした額にくつきりと皺を寄せて、茶髪の女があたしを探そうと辺りを見回している。きゃーこわーい、とか戯言をぬかすスィフィをファイルの上から小突いて黙らせ、轢かれたカエルのように屋根にへばりつくあたし。

こいつ、透明化した時に下に置いてくればよかった。

未だ小声で喚いているスィフィの声に、相手の様子を窺うあたしの米神から冷汗が流れる。相手を捕まえるには距離が開きすぎてるし、その距離を詰めるために音を立てたら炎の雨を浴びることになる。

息を潜めて女の動向を窺うあたしの眼に、空を翔る黒い影が一瞬映った。あの少年だ。

「祈れ！」

太陽を背景バックに格好つけた台詞を叫び、少年が包帯を巻いた右手を前に出す。いや、それ悪役が言う台詞だろう、と一人心中の中で呟いたけどそんなことしてる場合じゃない。

あれは暗黒爆錬武闘ダーク・エクスプロージョンを使う構えだ。そして恐らく、その軌道は茶髪の女と、あたしの上を通る。アスファルト同様粉みじんになるのは間違いない。更に、この距離からだともう逃げようがない……。あたしはぎゅっと目を瞑り、物理の実験で音波粉碎機音波粉砕機を使った実験を思い出して自分を慰めようとした。むしろ凹へこんだ。

真つ暗な世界に暗黒爆錬武闘の爆音が響き、振動で身体が宙に浮く。ああ、さよならあたし。結局あの女の子を救うどころか誰かの役に立つことも無いままこの世を去っていくんだね。

鼓膜も破れる勢いで絶叫するスイフィの声を背後に、次いで訪れる激痛を覚悟して、あたしは空中で拳を握った。

来ない。

これまでの人生が走馬灯のようにぐるぐる頭の中を巡っているけれど、痛みは一向にやって来ない。もしかして痛みを感じる間もなく死んじゃったのかな、と目を開いた途端、眼前のアスファルトに激突した。視界に星が飛んで一瞬目の前がブラックアウトしかけたけれど、なんとか気合で持ちこたえて何が起こったのかと顔を上げる。

「だから、女の子に乱暴しちゃ駄目だって言っただろう」

鼻につく声、高く掲げられた左手。その手首に着けられた腕時計から伸びる黒い髪が少年を拘束している。びしっとキメ台詞を言った好男を見て、不覚にもちよつときめいてしまった。キザな笑顔を作る口元から歯の折れた歯茎が見えて血が垂れているのが玉に瑕きずだけ。

「そなたの能力はまず最初に足で音を出す必要がある……。宙に浮いた今、音を創ることはできまい」

ガラスを針で引掻いたようなアズアの声が冷静にそう述べる。身じろぎしていた少年は悔しそうに下唇を噛むと俯いてしまった。

「さて、次は貴女の番だな」

無駄に紳士ぶって、好男が茶髪の女にキメ顔を向ける。なんか、心強い味方だつて判ってるんだけど……時々無性に腹が立つんだよな、こいつ。

黒髪で出来た剣を構える好男に、茶髪の女は口元を歪めて目の下に皺を作った。

「あーあ、折角盛り上がったのに白けちゃったじゃない。……責任、取ってもらおうかしら」

一際大きな炎が女の両手を包み、辺りを赤く照らす。足元からも炎が巻き上がり、紅い炎の欠片が近くの民家数軒に飛び火する。

「なっ 何するんだよおまえ！」

「何って？ こころへん一帯を焼き払っておまえ達の命を頂くのよ」

踊り狂う紅の炎の中で茶髪を靡かせ、女が愉しそうに口端を上げる。ほーら、ここにもそこにも、と茶髪の女は止める間も無く火の粉を街にばら撒き始めた。下校してきた小学生達が、その惨状を見詰めて呆然と立ち尽くしている。炎の海と化していく住宅街を見下ろし、女がけたたましい笑い声を上げた。女の前に立つ刈子が腕を広げ必死に呼びかける声がする。

「やめてください！ ここの人達は何も関係ないじゃありませんか」

至極真つ当な刈子の主張を聞き、あたしも痛む身体を立ち上げらせる。瀕死の虫みたいなあたしの無様な動きを見て、茶髪の女は更に悦に入った様子で嘲り笑った。

「関係無い？ それはどうかしら。別にあたしの目的は異世界ういせの女王サマのために謀反者の魂を集めることじゃあないの。この命尽きるまで暴虐の限りを尽くす、只それだけ。あんた達の相手をして上げるのもその一環ってことよ。せいぜい醜態を晒してわたしを愉しませて頂戴」

茶髪の女の手に燈ともった炎が揺らめき、奇妙な陰影を顔に作り出す。彼女の頭に着けられた大きな櫛に、また人影が見えたのは気のせいだろうか。耳障りな高笑いをして女が炎を辺りに撒き散らす。

「ほら、踊れ踊れ！ もっともつと燃え上がれ！」

嗤いながら火柱を上げる女の手から放たれた火球が風に煽られ、

少年を捕捉するアズアの黒髪に当たった。

「熱っ……………」

頭を抑えて蹲る好男の左手首から伸びていた黒髪が腕時計の中へ吸い込まれ、少年が道端に投げ出される。着地した瞬間、その足で素早く拍子を取ると少年は一気に茶髪の女の懐まで迫った。火傷も恐れず繰り出された拳を軽々と避けて女が笑い声を上げる。

「あんたみたいなガキがさあ、わたしに勝てるんでも思ってるの？」

「

けらけらと嗤い、女が少年の腹へ炎を纏った拳を当てる。黒い血を吐いて吹っ飛ばされた少年に近付き、立ち上がるうとする頭を真赤なピンヒールで踏みつけた。以前英語教師に逆らったときに同じようなピンヒールで足を踏まれたことがあったけど、きっとその比じゃない痛さだろう。思わず顔を片手で覆って目を逸らすあたしの耳に、少年の押し殺した声が微かに聞こえる。

「……………貴様だけは……………絶対に……………」

黒い包帯が巻かれた右手が固く握り締められ、拳を作る。包帯に覆われた手首の辺りが僅かに発光しているように見えるけど、単に炎の照り返しかもしれない。相変わらずピンヒールで少年の頭を踏みつけている茶髪の女が、負け犬の遠吠えにも聞こえる少年の言葉を嗤った。

「そんなに家族が死んだのが悲しい？ 人間はさ、ううん、生きてるものはいつか必ず死ぬんだよ。死ぬときがちょっと速くなったくらいで何をそんなに怒ってるわけ？ 馬鹿なんじゃないの？ 命、

命ってさあ。そんなに生きることが大事？　どんだけ凄いこと成し遂げたって、死ねば意味無いんだよ。わたしの言ってること何処か間違ってる？　悔しかったら何か言い返してみなよ、ほら」

こつこつとヒールの先で少年の頭を小突き、茶髪の女が応えを促す。銀髪に血が滲み、少年の眼に涙が溜まっている。色が変わるほど唇を噛み締めている少年を見下して女が手の平の炎を揺らす。

「何我慢してるの、泣きたかったら泣けば？　そして強くなったら？　それしか頼るものが無いってのも、笑っちゃうけどね。ほほほほ！」

今時珍しく頬に手を当てて高笑いすると、女の表情は一変して激怒に変わった。

「さあ、無様な泣き顔晒しなさいよ！　涙を流さなくても、わたしの方があんたよりずっと強いつて証明してあげる！」

広がり続ける炎の中心で啖呵を切つて、茶髪の女は少年の頭を蹴つた。抑えるものの無くなった少年は即座に立ち上がり女を睨めつけたまま右足でリズムを刻み始める。血と煤で汚れたその頬を透明な涙が一筋伝い落ちた。拳を握る両手が震えているのが遠くにいるあたしにも分かる位だ。

「魅首さん、手伝ってください」

後ろから肩を叩かれ、はっと我に返ると刈子が水の流れるホースを何本か抱えている。その傍らには大量のバケツをアズアの黒髪で運ぶ好男の姿が。

「消防に連絡を入れておいたよ。つても、今からじゃとても間に合
いそうにないから……気休め程度だけど、俺達に出来ることをしよ
うと」

「そっか……そうだよな……」

目の前で燃えていく民家を振り返り、あたしは眼を伏せた。燃え
盛る炎の勢いは衰えるどころかますます激しくなって全てを焼き尽
くしてしまいそうだ。屋根の上で死闘を繰り広げる少年と茶髪の女
の後ろでは、火事に気付いた住民の悲鳴が上がっている。プラスチ
ックが焼ける独特の臭いを嗅いであたしは思わず鼻に皺を寄せてい
た。

「ああ、でも魅首ちゃんはスイフィの居る広告が焼けたら危ないか
ら下がってね」

隣で話しかける好男の声がやけに遠い。わき腹に鈍い痛みを感じ
て触ってみると、手に真赤な血がべっとりついていていた。慌ててベル
トに挟んだファイルを取り出すと、広告の端に少し血が染みている。
スイフィは　と探すと、イラストの影に隠れて縮こまって震え
ていた。

「おい、スイフィ」

振り返った姿を見てあたしの口が止まる。はあはあと苦しそうに
肩を上下させるスイフィの腹からも、同じように赤い血が染み出て
いた。いつも生意気な表情の顔は蒼白で生気が無い。そういえばこ
いつ、実際の大きさは分からないけれど幼い顔からしてまだ子ども
だろうか。ほぼ成人と同じ体格のあたしと違って、こいつはこれぐ
らいの出血量でも死ぬのかもしれない。

失血死するにはどれ位の出血が必要だっただろう、と考えるあたしの視界がぐるぐる廻る。耳元で好男が何か言ったような気がしたけれど、よく聞こえない。足から力が抜けて抉れたアスファルトの上に座り込むと、地面が振動した。

あの少年が例の技を使っただろう。遙か遠くで悲鳴が聞こえる。さっき近くで怯えていた小学生達は無事にどこかへ逃げられただろうか？ 激しい脱力感に負けてそのまま道路へ倒れこむあたり。額が粗い粒のアスファルトに当たって、自慢の肌がぼろぼろだ。

電池の切れたおもちゃみたいに地面に転がって、次第に暗くなる空を見上げるあたしの視界が滲んだ。やっぱり、何も出来てない

。好男とアズアみたいに強い力があるわけでもなく、刈子とテンキイのように他人を思い遣る余裕も無く、あの少年のように貫き通す激しい意思も無い。ひよっとしたら、あの変な女にさえ行動力で負けてるかもしれない。

セピア色の世界で降り注ぐ火の粉を見詰めるあたしの手に力が入る。あたしの人生、こんなのでいいのか？ ただ享楽を求めて都会に来たはいいけれど、それ以上の志は何も無い。自堕落な人生の果てに待つのは、あの女が言ったような虚無の死だけじゃないのか？

閉じていく瞼の裏側に、涙を流す少女の姿が映る。あの時も、ただ何もせずあの子に謝るだけだった。どれだけ後悔した？ 暗い視界の中で、あたしは自問自答する。今まで、いったい何回後悔してきた？ 氷のように冷たい手を動かし、地面を探る。……そう、もう後悔するのはごめんだ。

誰が何と言おうと構わない。

「スイフィ……」

重い唇を動かして、スイフィに呼びかける。返事は無い。

力が欲しい。二度と後悔しないために、あたしの大切なものを守るために。手に触れたファイルを握り締め、擦れた声で続きを喋る。

「泣けば……強くなれるんだな……？」

そのためなら何だってする。あの女が言ったみたいに、無様な泣き顔晒してやるんじゃないか。腹の奥から込み上げる熱いものは、感極まったあたしの心だろうか。それとも逆流する血潮？冷え切った顔の目頭だけが熱くなり、閉じた睫を濡らす。そうだ、泣いてやる。泣いて強くなってやる。気のせいだろうか、身体が再び熱を取り戻してきた。スイフィがあたしを呼ぶ声がする。

もつと力を 。目を閉じたまま上半身を持ち上げたあたしの頬を、暖かい涙が伝った。

閉じた瞼を貫いて、眩しい光があたしを包む。何処かわからない遥か遠くの世界から巨大な力が身体に流れ込み、冷たい身体を熱く滾らせる。指の先まで光に満たされ、身体がはち切れそうだ。再び訪れる色の洪水に、あたしは両足でアスファルトを踏締め立ち向かった。この間とは違う『概念』が脳内を駆け巡る。そうか、これは。

異世界の光景と現世界の光景が重なった視界に両手を広げ、それに合わせて空間に自らの意識を広げる。身体中の血を沸かせる熱が指先から溢れ、暖色の線を描いた。線が次第に形を変え、見慣れたものを形成していく。

「え？」

目の前に現れたそれを見て、あたしは眼を円くした。田舎こきやうにいるはずの家族が揃って、あたしに微笑みかけている。よく見ると数年前に二人して他界した祖父ちゃんと祖母ちゃんもいる。驚いて意識の集中が切れた途端、家族の肖像は空中に掻き消えてしまった。

合わない乱視用眼鏡を掛けたようにブレていた視界は元に戻り、破壊された民家が並んでいるだけだ。……いや、何時の間にか炎が消えている。いったい何が起こったのかと首を回すと、屋根の上で茶髪の女が頭を抱えて膝をついている。額から冷や汗が幾つも垂れて、震える唇で何か言っているようだ。何だかよくわからないけど、あいつを捕まえるなら今しかない。

すっかり痛みが消えた身体で屋根によじ登り、女の肩を掴む。

「……なんで……なんで今頃出てくるのよ……！」

意味分かんないこと言ってるなあ、と思いつつ、逃げないように茶髪の女の首根を掴むあたしの眼に、女の髪に刺さった櫛の中の人影が見えた。アズアみたいに全身真黒な影だ。遅しいシルエツトからして男だろうか？ 櫛の中の人影が低い声で呪文のようなものを唱えた。それと同時に、茶髪の女は屋根の上から消えてしまった。

「あつ！ 待て！」

叫びも空しく、掴んでいたうなじの毛一筋さえも残さずに茶髪の女の姿はどこかへ行ってしまった。あの女の子を操っていた奴も、似たような感じで何処かへ移動していたような……。決着をつけられず腑に落ちないあたしの傍を、少年がふらふらと歩いている。そ

うだ、そういえばこいつも。はつと見ると、少年はカラーコンタクトが取れるほど大粒の涙を流していた。

とてつもない一撃が来るかもしれないと身構えたけど、茫然自失状態で闘うどころじゃなさそうだ。オッドアイから普通の眼に戻った少年の手を引いて好男達のところへ戻ると、二人の様子もなんだかおかしい。

「……好男？」

バケツから水を零しっ放しで佇む好男に声を掛けると、急に我に返った様子できよるきよると辺りを見回した。あたしと眼が合うと気恥ずかしそうに焦げた髪を弄る。

「あ　ごめんごめん。ちょっとぼーっとしちゃって」

慌てて水が半分位に減ったバケツを民家に向け、そこで火が消えたことに初めて気付いたようだ。

「あれ？　何時の間に……」

「好男、もしかして今何か見えた？　例えば……家族とか」

一寸潤んでいる茶色の瞳を覗き込んで尋ねると、好男は恥ずかしそうに頭を掻いてぼそぼそと呟いた。

「うん、まあ……家族っていうか……前の彼女……」

彼女かよ！　と心の中で目の前の女たらしに突っ込むあたし。勿論きみのことも大切に想ってるんだよ魅首ちゃん、とかふざけた弁

解を始める好男を適当にあしらうと、今度は刈子の様子を見る。好男同様、水の出るホースを抱きしめたまま、刈子は眼鏡の奥の瞳を潤ませていた。肩を揺すってみると、すぐに気付いて涙を拭う。

「すみません、こんなときに……わたくしったら」

「刈子も何か……？」

首を傾げる刈子に好男と同じ内容で尋ねてみると、急に家族の姿が目の前に現れたんです、と涙声で答えてくれた。

「もう何年も会ってなくて……懐かしくて、つい……すみません」

「いや、刈子が謝ることじゃないし」

隣でひっきりなしに嗚咽を上げる少年に注意を削がれつつ、刈子の頭を上げさせるあたし。何が何だか分からない……。握っていたファイルの中のスイフィを覗き込むと、さっきまでの様子は何処へやら、けるつとした様子で寝転がって下手糞な鼻歌を歌っていた。

「……おい、新しい能力が使えたのはいいけど、どーいう能力かさっぱりわからないぞ？」

蒼褪めた顔を見たせいもあって普段より優しく訊いてみるけど、予想通り答えるつもりは無いらしい。そんなことよりプラナリアの話しようよお、と、はぐらかされてしまった。どうしておまえがプラナリアを知っているんだと胸中で突っ込みつつ、途方に暮れるあたしの肩越しに、液体窒素のようなアズアの声が聞こえる。

「皆の言葉から察するに、魅首殿が使った術には、対象者にその者

が一番大切に想うものを見せる力があるのだろう。異世界から渡ってきた力を上手く制御出来なかったために敵味方構わず効力が発動したのでは……」

「大切に想うものを見せる……か」

また使い難そうな能力だ。しかも透明化と違ってコントロールする力が必要らしい。どうやって制御するんだよ、とぼそりと愚痴るあたしを、だから魅首には使いこなせないって言ったんだねい、とスイフィが茶化す。……絶対使いこなせるようになってやる。

思案に耽るあたしの横で、急に刈子が手を叩いた。

「そうだ！　こんなところで油を売ってる場合じゃありませんわ！　次にいつ刺客が現れても対処できるように、わたくしも好男さんも『泣く』練習をしましょう！」

「え、俺も？」

情けない声で自分を指差す好男に近付き、刈子が頷く。

「この中でまだ新しい能力が分かかっていないのって、わたくし達だけじゃありませんか。さあ急ぎましょう、時は金なりです」

「ちょ、ちよつと待って刈子ちゃん　俺は泣くのも泣かせるのも苦手で嫌いなんだってば」

嫌がる好男の腕を掴んで引き摺っていく刈子に、今のは微妙に用法が間違ってるんじゃないかと心の中で呟いて、あたしも泣き続ける少年を引っ張り後に続いた。

Another World the 1st chapter

現世とは違う何処か他の世界。黒い空に灰色の雲が浮かび、薄桃色の月光がゼリー状の大地と其処に建つ角砂糖のような家々を照らしている。

その家達を見下ろすように、逆三角形の城が小高い丘の上に聳えていた。

静かな夜を過ごす城下町の中央通を、マントを羽織った人影が二人、城のほうへ歩いて行く。白いマントを着た人影は遅しく、高い襟元の上から鋭い眼光が見える。黒いマントを着た人影は華奢で、もう一人に腕を掴まれて無理矢理城へ連れて行かれるようだ。

固く閉ざされた城門の前で二人は立ち止まり、居眠りをしていた門番が足音に気付いて目を覚ました。二人の顔を見るや否や、門番が弛緩していた顔を引き締めて敬礼する。

「ウエジュ様、お帰りなさいませ。……そちらの方は……？ 随分変わった格好をしていらっしゃる」

背筋を逸らせて挨拶する門番に、ウエジュと呼ばれた白いマントの男が鷹のような眼を向ける。背後で震えている黒いマントの少女を右手でさらに後ろへ下がらせ、門番から見えないようにする。

「異世界むいせいで使う器だ。……それより、女王陛下のご容態は」

尋ねられた門番が悲しそうに首を振り、小さく溜息を吐いた。

「それが……悪くなる一方らしいですよ。国中の医者呼び寄せた

のですが、やはりあの方法しか解決策は無い、と結論が出たくらいで……」

「……そうか」

灰色の髪を揺らして、ウエジユが頭上の空を見る。弱々しく輝く月以外、黒い空に天体の影は無い。女王陛下が臥せってから日が経つ毎に、一つ、また一つ、と星が消えてしまったのだ。以前は無数の星が暗い夜の道標となってくれたが、今は月しか夜闇を照らしてくれない。その頼みの月さえ、太陽の光が弱まるに合わせ暗くなつていくのだ。最後の恒星が光を失うのもそう遠くないことだろう。

消え行く光を見詰めるウエジユの双眸が細くなり、眉間に薄らと皺が寄った。

「あの、城内へお入りになるのですか」

思案に耽るウエジユの顔を恐る恐る覗き、門番が尋ねた。見上げていた眼を門番に戻し、そうしてくれ、とウエジユが言う。すぐに門番が傍の鈴を鳴らし、内側の門番に城門を開ける、と指示を出した。

開く門の隙間から人工的な光が漏れ出し、ウエジユの前に白く輝く道を作る。後ろで震える少女に顎で付いて来るように命令し、光の道を進んで行く。白のマントをはためかせて歩みを進める毎に、城に灯りが点いて暗い空を、そして静かな城下町を照らした。

「お母さん、空が明るくなったよ！ お星様に戻ってきたんだね」

「いいえクレア、あれはお星様の光じゃないわ。女王陛下を護る騎

士団長のウエジュ「サマンテ様が異世界むにうからお帰りになったのよ」

蠟燭の炎で灯りを取っていた家々の窓が開き、人々の顔が城へ向けられる。城から降り注ぐ希望の光が彼らを照らし、人々はその唇から彼らの希望の名を呟いた。

光の騎士サマンテよ、どうか我らの女王を護ってください、と。

第十二章 素直になれない

橙色の夕暮れの中、先を歩く刈子と好男の背中を見詰めたまま、あたしは黙々と足を進めていた。隣を歩く銀髪の少年はまだ泣きじやくつていて、ふらふらして危なっかしいので手を離すに離せない。すぐ近くで消防車のサイレンが響いている。きっと好男が呼んだ消防だろう。

「……なあ刈子、何処に行くつもりなんだ？」

住宅街の凄惨な風景を思い出して、あのまま放ってきてしまったよかったのかと憂うあたしの声はいつもより覇気が無い。まるで猪みたいに脇目も振らず目指す場所に歩き続けていた刈子がびたりと止まり、好男の手を握ったまま振り返った。痛てて……、と好男が泣き言を漏らす。

「あれ？ わたくし言っていないませんでしたっけ？」

澄んだ青い目をこちらに向けて刈子が首を傾げた。聞いてないから訊いてるんじゃないか。頷くあたしの前で、刈子はそうでしたかと眼鏡を掛けなおした。

「図書館に行くところなのです。やっぱり、調べ物をするには図書館が一番かなと思いました」

「でも、もう閉まってるんじゃないか？ こんな時間だし」

あたしが夕焼けの空を見上げて言うと、好男も腕時計を示して刈子に時間を伝える。

「今、丁度六時か……。市営図書館が閉まるのって五時半だったよね？」

時間を聞いた刈子が慌てて財布から図書カードを取り出し、閉館時間を確認する。書かれた数字を見詰める刈子の肩が下がり、黒いお下げを揺らして頭が垂れる。

「そうです。……ごめんなさい、やっぱりまだ動揺してるみたいですよ」

刈子がぺこりと頭を下げた。別に謝るほどのことじゃないけど……、と言おうとした矢先、同じ言葉をさらにハイテンションに好男が喋って刈子にフォローを入れた。つたく、機嫌取るのは巧いんだよな、好男って。ちゃっかり刈子の肩に手を回してまでいる好男が明るいい声で提案する。

「じゃあさ、オレの家近いからそこで休もうか。よかつたら泊まっていきなよ」

ふーん、ここは好男の家兼あたしの家の近所なのか。来たばかりでちつとも地理の分からないあたしがぼんやりとそんなことを考えていると、今度は好男が刈子の手を引いて行く。好男達の後を付いて行くと、すぐに見覚えのある傾いたボロアパートに辿り着いた。ああ、やっぱりいつか倒れそうだなあ、このアパート……。

流石の刈子も倒壊しそうな建物に生命の危険を感じたのか、中へ招く好男に玄関前で二の足を踏んでいる。

「こ、ここが好男さんのお家なのですか？」

「そそ。あ、大丈夫だよ中は綺麗だから」

どうぞどうぞと刈子を無理矢理家の中へ連れ込む好男。いやだから、中じゃなくて外を改装しろってば。……というか、いつそのこと建て直してしまえ。そよ風が吹いただけで二階の窓が軋むボロアパートを前に佇むあたしの腹中から忘れていた怒りがふつふつと湧き上がってきた。あたしがちゃんと二階に住めるように、絶対改装させてやるんだからな。覚悟しとけよ好男。

「魅首うー早く家に入ろうよおー」

決意を新たにボロアパートを見詰めるあたしを、ベルトに挟んだスィファイが急かす。密室に世間知らずそうな刈子と女たらしの好男の二人きりっていうのは危ないかも知れない、そう思ったあたしは金メツキの玄関ドアノブに手をかけた。開いた扉から見えた家の中では、案の定好男が刈子を口説いている。困惑している刈子を助け出さねば、と一歩踏み出すあたしの手が後ろに引っ張られる。

「……？」

頭に疑問符を浮かべて振り返ると、さっきまで泣いていた銀髪の少年が口を真一文字に結んで玄関前で立ち止まっていた。

構わず中に入るうとするあたしの手を少年が振り払い、ぶすつとした顔をこっちに向けている。今の今まで幼児みたいに泣いてたくせに急に態度が変わるとは。腹立たしい気持ちと呆れた気持ち半々で、あたしは両腰に手を当てて少年を見た。いっつもあたしを鬱陶しそうに見ていた母さんの気持ちがなんとなく分かった気がする。

「何だよ。入らないのか？」

「……………」

不機嫌そうな顔を俯けただけで、少年から返事は無い。何が言いたいのか、はつきり言って貰わないとわからないんだってば！ その頭ごなしに言いたくなるのをぐっと堪えて、できるだけ優しい表情を取り繕うあたし。

落ち着け、相手は子どもだ。しかもさっきまで泣いてたんだ、こは大人な対応をしてあたしの懐の深さをアピールしなくては。バイト中でも見せたことの無い極上の笑顔で少年に声を掛けようとしたその時、少年の唇が開いた。

「去れ…………穢れた魂の持ち主よ……………」

「ああ？」

駄目だ、つい地が出てしまった。思いつきり顎を上げて年下相手にガン飛ばしてしまうとは、あたしもまだまだだな…………。ムカつく少年の挑発で血圧の上がった胸に手を当て、深呼吸する。

あたしはこの生意気な糞ガキより何歳も年上なんだ。こんな子どもっぽい挑発に乗ったら同レベルまで堕ちてしまう。そう自分に言い聞かせて怒りを抑えるあたしに、少年はさらに失礼な言葉を並べ立てる。

「貴様の魂胆はわかっている…………。俺に消されたくなければ…………すぐこの場から去れ……………」

「てめえ、それが助けてもらった相手に言う言葉か？ 学校で何習ってるんだ？ 助けてもらったなら『ありがとございます』って言うって、家で教わらなかったのか？ あ？」

かく言うあたしも全然礼儀がなくてない。魅首も素直にありがとうって言えなかったじゃん、と腹部から聞こえるスイフィのイラつく声があたしを茶化す。何で今言わなくていいことは言うんだ、こいつは。これじゃ余計にあたしが大人気ない奴に見えるじゃないか……。実際そうなんだけど。

ム力つくやら恥ずかしいやらで格好が付かなくなってしまい、咳払いして誤魔化すとあたしは苦い顔で少年に話し掛けた。

「ほら、入りなよ。刈子も好男も、勿論あたしもあんたの味方だ。心配すんなって」

右手で扉を押さえたまま左手で手招きするあたしを、少年は茶色の瞳でじつと見詰めている。なんだか野良猫を餌付けしてる気分だ。あたしは猫が好きじゃないけど。

少年は無言のまま玄関前に彫刻のように仁王立ちしている。……押してだめなら引いてみるか。背を向けてドアを閉めようとした途端、あたしの耳に少年の呻き声が聞こえた。そういえばさつき炎を操る敵と戦ったときに怪我してたっけ。慌てて振り返ると、青ざめた顔の少年が腹を抑えてその場に蹲っていた。ああ言わんこっちゃない。

「大丈夫か？」

「……気高き指揮者コンダクターは……肉体などという枷に囚われない……」

唇真白なのに、何馬鹿な事言ってるんだこいつは。銀髪の少年は痛みに蹲ったまま動けそうにもない。このまま道端に放って置くわけにもいかないし……。しょうがない、あたしが背負って運んでやるか。脇の間に手を回して背中を貸すあたしに、生意気な少年はめげ

ずに減らず口を叩く。

「手助けなんて要らない……本当の力とは孤独な時に試されるもの……」

「ばーか。いちいちかつこつけてんじゃねーよ」

相手にしてたら疲れるから適当にあしらい、且つ言いたいことも言っておく。少年は暫らく背中ではそぼそ意味不明な言葉を呟いていたけど、腹の痛みがまた襲ってきたのか呻き声だけになった。

「武宮さん？ どうしたんですか」

リビングに行くと、好男のくどき文句に辟易していたっぽい刈子が入る。少年は異常に気付いて少年を運ぶのを手伝ってくれた。嫌がる好男を無視して食卓の椅子を並べて少年をそこに寝かす。やっぱりソファが無いと不便だな。貯金を崩して買いに行こうか。あ、でもあたし一般人に姿が見えないんだっけ。

少年に付いてる煤のせいで椅子が汚れるとかぼやいてる好男に、アズアの力でこいつを治療してくれないかと頼むと、嫌だ、と即答されてしまった。

「……なんでだよ。好男とアズアなら他人の怪我也治せるんだろ」

「だってこいつ男じゃないか！」

椅子の上で脂汗流して苦しんでる少年をびしっと指して好男が主張する。強調してまで言うことなのかと胸中で十数回ほど突っ込みを入れてみると、好男が急に態度を変えてやけに優しくなる。

「それより、魅首ちゃんこそ大丈夫？ 服に血が付いてるけど」

「ああ、これ 別に。泣いたら治ったみたい。着替えてくるから、その間にこいつを治してやってくれよな」

手伝うよ、とかふざけた事を言う好男を置いて、あたしと刈子は寝室に閉じこもった。これぐらいすれば好男も観念して少年を治療するだろう。それにしても、何であたしが色々取り計らわねばならんだ。ふかふかのベッドに倒れこむあたしの上に刈子の影が被さる。一日中戦いっぱなしで筋肉痛の身体を擦って振り向くと、眼鏡の奥の青い瞳をキラキラさせて刈子が微笑んでいた。

「魅首さん…… やっぱりあなたは優しい人ですね。武宮さんを助けようとする献身的な様子に、わたくし感動致しました」

大袈裟に述べる刈子に、思わずはあ？ と訊き返す。それを言葉が足りなかったと受け取ったのか、刈子がまた堰を切ったように語り出した。次々と出てくる感嘆の言葉に、よくこんな難しい言葉知ってるなあと関心しつつ、あたしはそれらを否定する。

「別にあいつのためにやったんじゃない。なんつーか…… ほら、うん……。まあいいじゃん」

「まあ、意識せずとも奉仕の心構えが出来ているのですね！ ますます素晴らしいですわ」

駄目だ聞いてない……。頭を抱えるあたしの顔を刈子が覗き込み、具合でも悪いのですか？ と、とぼけたことを言っている。その眼鏡に、ちらりと人影が映った。テンキイだ。やっと話の通じる奴が

出てきたと顔を上げると、刈子も大人しく口を噤んでいる。眼鏡の中
のテンキイは気恥ずかしそうに金髪を弄っている。

「どうした？ 何か言いたいことでもあるのか」

「うん。一寸考えてただけど スイフィの能力と僕の能力を
上手く使えば、魅首が力を制御できなくても映像を見せられる相手
を限定できるんじゃないかなって」

「ふー……ん？」

言ってることはまともなんだろうけど、何を言ってるのか今一理
解できない。テンキイとあたしはどうやら頭のレベルが違うみたい
だ。刈子に分かりやすく通訳してもらいたいけどトランス状態で心
ここに在らずって感じだし、スイフィはそもそも頼りにならない。
あたしが言われた言葉を何度も頭の中で反芻しているのも構わず、
テンキイは話を続ける。

「えっと、例えば、敵にだけ『一番大切なもの』を見せたい場合ね。
まず魅首が泣いて、そこでスイフィと協力して能力を発動しようと
決める。ここ重要。まだ能力を発動しちゃ駄目ね。

で、いつ発動すると決めたらその予定時間を僕と刈子に合図する。
僕と刈子が協力して、敵にだけ『スイフィの能力が発動した未来』
を見せる。

こうすると、数分間だけなんだけど、敵にしか『一番大切なもの』
が見えなくなつて、僕達は自由に行動する時間が出る。……って考
えただけけど……どうかな？」

あたしがよく分かってないことに気付いたのか、ゆっくりとした
口調でテンキイが説明を終えた。どうかな？ って顔を覗き込まれ

ても、さっぱり理解出来ないあたしは生返事をするしかない。兎に角、泣いてもすぐ能力を発動せずに、発動する時間を決めたら刈子に合図すればいいのかな。そっから先はテンキイが何とかしてくれるように。

よかった、と微笑んでテンキイは眼鏡の奥に消えた。もやもやした感情を抱いたまま置き去りにされたあたしの耳に、好男がドアをノックする音が聞こえる。

「もう着替え終わった？」

「……まだ。そっちは」

開口一番デリカシーの無い質問をする好男に、ドア越しに冷めた視線を送りつつあたしも尋ねる。

「あの子のことならちゃんと治療したよ。今は椅子の上で爆睡してる」

一度居間を振り返ったのか、好男の声が遠くなってまた元に戻った。家中煤だらけになってしまった、と少年より自分の家の内装を心配する声が聞こえる。二階のことといい、この男って自分自身と女を口説くこと以外には全く興味が無いんだな。呆れて声も出ないあたしに、好男は懲りずにまだ話し掛けてくる。

「さて今日の晩飯は何にしようか。昼はあんなことになっちゃったし……もう一回フレンチにする？」

「……もう好きにしろっ」

「えっ？ お、オレ何か悪いこと言った？」

理由も分かかってないのに平謝りする好男の声に背を向け、あたしは窓から空を見上げた。薔薇色から薄い藍色に変化していく空に、煌く星が浮かんでいる。夜になっただんだと思っただ瞬間、食い意地の張るあたしの胃が大きく鳴った。

第十三章 色気より食い気

一日と半分で大分汚れた肩掛け鞆から、あたしは着替えの服を取り出した。って言うっても、学校のダサイジャージなだけ。高校の体操着が袖先の窄まった海老色のジャージって、ダサすぎるにも程があるよなあ……。

体育で着替える度にそう思っていた指定ジャージを広げて、状態を確認する。綺麗に畳んでおいた着替えは一連の騒動で皺くちゃだけど、血まみれ汗まみれの制服を着たままでいるよりはマシかな。好男に治療してもらったお陰で胸と腕の滲みが治っているし、さつさと着替えて制服を洗おう。背後で好男がドアを無限ノックする音を聞きながら、あたしはそのそと制服を脱ぎ、はたと気付いた。

そういえばあたし、着替える以前にお風呂に入っていない。余りに非日常な事が起こりすぎてすっかり忘れていたけど、これって女として限りなくやばい状態だと思う。

スポーツブラ丸出しでフリーズするあたしの横では刈子が分厚い本を広げて読んでいる。刈子にスイフィを頼んで、先にお風呂に入つてこよう。そう思い直し、熱心に本を読みふける刈子に声を掛ける。

「なあ、ちよつといいか？」

「なんででしょうか」

本に向いていた刈子の顔がすぐあたしへ向けられ、口元に微笑が浮かんだ。いつでも貴方のお役に立ちます、そんな感じの表情をする刈子を見ると、街中で詐欺か何かに引つ掛かるんじゃないかと心配してしまう。……っていつても、今はあたしも刈子も一般人

には視認できないから杞憂なんだけど。

「風呂入ってくるからさ、スイフィを預かっててくれないか？」

なんだか気恥ずかしくって髪を弄りながら、あたしはスイフィの入った吊り広告を挟んだファイルを刈子に差し出した。刈子は嫌な顔一つせずにそれを受け取り、慈愛に満ちた眼差しで頷いて見せる。

「はい、喜んで。ゆっくり羽を伸ばしてきてくださいね」

どこぞの寿司チェーン店のような言い回しで刈子に送り出され、あたしは寢室の扉を開けた。あたしのすぐ目の前に情けない好男の顔が現れる。

「あつ、魅首ちゃん」

「風呂借りるぞ」

関わったらまた面倒臭いことになりそうだからスルーしようと思っ
り過ぎるあたしの肩を、好男が掴んで引き止める。この男、本当に
しつこい奴だな……。げんなりして振り向くと、先ほどとは一変し
てやけに嬉しそうな表情を浮かべている。

「魅首ちゃんが入るなら俺も入ろうかな　うげふっ！」

戯言を抜かす好男の腹に軽く拳を当てると、あたしは風呂場へ急
いだ。ったく、うら若き乙女になんてこと言っただあの変態は。自
分が乙女って柄じゃないことは棚に上げつつ、心の中で呪詛を吐く。
だってほら、人間って怒ってると思慮分別が無くなるでしょう？
いかり肩のまま脱衣所まで歩き、扉を勢い良く締めるとあたしは制

服の上着を脱いで、それを洗濯籠に投げ入れた。

「うう……今のはちょっと痛かった……」

魅首に殴られた鳩尾を摩りつつ、好男は涙眼の顔でそう呟いた。左手に着けられた黒い腕時計から、次からはもつと慎重に言葉を選ぶべきだな、とアズアの冷たい声が聞こえる。少し前の戦いで焦げた毛先を指で拭りつつ、好男は屈めていた上半身を起こした。その口元には不敵な笑みが浮かんでいる。

「ふつ、まあいいさ。魅首ちゃんが風呂から出たら、掃除を口実に風呂場に入り浸ってやるからね」

「好男さん……？」

変質者じみた発言をして悦に入っている好男の背中を、寢室の扉から顔半分だけ出した刈子が不審そうに見詰めている。鼻の下を伸ばしていた好男が慌てて振り向き、紳士然とした表情を取り繕う。

「やあ刈子ちゃん。今のは単なる冗談つてやつだよ、気にしないでね。……それより、今日の晩御飯は何にしようか？」

「えつと」

「今夜はピザパーティーがいいねい！ だってほらあ、新しいお友達もいっぱい増えたし！ 自己紹介も兼ねて楽しく食事会ってことであー」

色々な意味で言葉に詰まる刈子の代わりにスイフィが答え、それもいいね、と好男が携帯電話を取り出した。突込みが不在の居間が確実に混沌に包まれていくことなど露知らず、風呂場からは魅首の鼻歌が響いていた。

真白なタオルで髪の毛の水分を拭き取っていると、居間のほうから流れてくる美味しそうな匂いがあたしの鼻をくすぐった。濡れている時間に比例して髪は痛んでいくと知りながらも、誘惑に負けたあたしはタオルを被ったまま脱衣所から出る。今日一日、まともに物を食べてないあたしの胃袋はもう我慢の限界に達している。

「あ、魅首さん。丁度よかった、今届いたところなんですよ」

いち早く刈子があたしに気付いて振り返った。食卓の上には宅配の箱から出された円いものが、これまた真白な陶器の皿に盛り付けしなおされていた。

ピザか……あんまりお腹には溜まらなさそうだなあ。すかさず食卓上のピザの枚数と居間にいる人数を見比べるあたし。……一寸少なくないか？ 一人当たりの食べれる枚数を計算しながら椅子に座る。こういう時は暗算が速くて正確になるんだよな。テストの時も同じように出来ないものか……。

くだらない思案に暮れるあたしに、刈子がどの種類の飲み物にします？ とペットボトルを持って訊いてくる。

「それでいいや。……ありがとう」

オレンジ果汁百パーセントジュースをコップに注ぐ刈子に礼を言うあたし。視界の端に、煤で汚れた黒い服が映った。何時の間にか床に下ろされている少年を見るあたしに、好男が、椅子が足りなかったから……とか言い訳する。

ベッドが空いているから寝室に運んでやればよかったのに、と喉まで出かけたけど、好男に言っても無駄だと諦めた。泥のように爆睡している銀髪の少年の肩を掴んで前後に揺する。

「おい、起きろ飯だぞ」

震度六位の勢いで揺すつても、少年は目を覚まさない。

「きつとすぐく疲れてたんですよ。寝かせておいてあげましょう」

「そーそ。大体こいつの分は頼んでないし。冷めないうちに食べようよ」

今、好男がさらりと酷いことを言った気がしたが……ピザが少ないと思っただのはこのせいだったのか。死んでるんじゃないかと思うほど脱力している少年と好男達を交互に見遣り、あたしは少年を抱き上げた。

「え、ちよつと魅首ちゃん、どうするのさ」

「このままここに寝かせといたらピザ食べるのに気い使っただろ。寝室に運んどく」

重い少年を運ぶあたしの背中に、やっぱり魅首さんは優しいのですねー、と刈子の声が掛かる。だから、別にこいつのためじゃなくって。あたしが心置きなくピザを食べれるようになって言うてる

だろーが。微妙な気持ちでぶつぶつ呟きながら、あたしは少年を寝室に運んだ。

水晶のように透き通った廊下を、二人組みが歩いている。白いマントを着たウエジユが一步進むごとに壁の照明に光が点り、薄暗かった城内を照らし出していく。その後ろを歩く黒いマントを着た少女は無言だ。

複雑に組み入った透明な廊下を半刻ほど歩き続け、巨大な扉の前でウエジユの足が止まった。乳白色の一枚岩で作られた扉が壁を被い、そこに刻まれた太陽を表す紋様が二人を見下ろしている。

両脇で槍を構えていた護衛兵が槍を下ろし、ウエジユに敬礼した。それに応えて頷くと、兵士が重そうな岩の扉を開く。自分を取り巻く状況にただ怯えるばかりの少女にその場で待っているように言いつけると、ウエジユは乳白色の扉を潜った。

一面真白な広い部屋の中央に、白いレースの蚊帳で包まれた寝台が在る。足音に気付いたのか、寝台に横たわっていた誰かが身を起こした。真綿のような白い髪が揺れ、白魚のような手がレースの蚊帳を捲る。

「……………陛下！」

扉が閉まると同時にウエジユが寝台に駆け寄り、儂げな女王の傍に跪いた。光を浴びて輝く白髪を揺らして女王が微笑み、俯くウエジユの顔を上げさせる。頬に触れる女王の冷えた手をそつと両手で包むと、ウエジユはこの世界の支配者を見上げた。見詰めるその視線からは鷹のような鋭さが薄れ、敬愛の情が感じられる。女王も彼の気持ちを理解しているようで、優しく微笑み返した。

笑顔ながらもどこかやつれた雰囲気の女王に、ウエジユは胸を痛ませる。暗い表情を浮かべているウエジユを女王が優しく慰める。

「落ち込むことはない、そなたの働きのお陰で幾許か回復の兆しが見えてきているのだから」

「……はい、陛下」

励ましの言葉を受けながらも、ウエジユの顔は翳りを帯びている。周りを心配させないように健気に振舞う女王を護りきれないことが、彼は齒痒かった。異世界に追放された反逆者の魂を狩ることで辛うじて容態の悪化を食い止めてはいるが、女王が体力を消耗しているのは目に見えて明らかだ。一刻も早く全ての反逆者達を捕らえなくては。そうウエジユは心に刻んだ。

眩しい光に包まれた白い部屋の静寂が、女王の咳で破られる。思案を巡らせていたウエジユが顔を上げ、医者と呼ばうと寝台の横に下がる紐を握る。それを女王が止めさせ、咳き込みながら口を開いた。

「もう少しだけ、そなたと二人きりで話したい……」

雪解け水のように澄んだ水色の瞳で見詰められ、ウエジユは赤面して手を離れた。己を恥じて顔を伏せるウエジユに、女王が尋ねる。

「そなたに任せたスイフィは如何した？」

「はい、奴なら既に私が始末を……」

足元に跪くウエジユが懐を探り、透明な珠を取り出した。その中

を幾つかの色の付いた球がくるくると廻っている。その数を見て、ウエジユの瞳が円くなった。どうしたのかと尋ねる女王に、床に額を付けんばかりの勢いで頭を垂れた。

「アズアもろとも確実に始末したはずでしたが……何らかの理由で仕留め損なっていたようです」

一生の不覚と謝るウエジユに、女王は怒ることもなく只静かに咳く。

「そう気に病まずに。そなたが欺かれるほどの能力を持った者が何処かからスイフィに力添えしていたのであるう。たった一人で三人相手によく闘った、わらわはそなたを誇りに思う……」

頭を垂れて女王の言葉を聴くウエジユの両手が拳を作る。確かにあの時スイフィとアズアの『契約者』達を斬ったはずだ。もしあれが幻覚だったとすれば、そんな能力を持つのは宮廷占い師だったテンキイしかない。かつて共に女王に仕え、この世界の行く先を語り合った同志達が何故今反旗を翻し、女王自ら追放を決めたスイフィに協力するのか……。

騎士団の副長だったアズアにしてもそうだ。これまで女王の傍にいてその恩恵を浴びて生きてきたのに、その女王が弱って助けを必要とする時に裏切った彼らを、ウエジユは許すことができなかった。

眼を上げて、騎士団の長が寝台の上の女王を見詰める。真綿のよくな白く長い髪に縁取られたその高貴な顔は世界を統べるに相応しく、世界の始まりから何一つ変わらない美しさを誇っている。幼い頃から彼女に仕えてきた若き騎士団長は、何時の間にか世界を治める女王に主従を超えた感情を抱くようになっていた。

その想いが余計に彼を焦らせるのだらう。これ以上女王を苦しめ

まいと、憎き反逆者を討つためウエジユは立ち上がった。

「申し訳ありません。すぐにあの三人の魂を討ち取って参ります」

一礼して去ろうとするウエジユの手を女王が引き、寝台から立ち上がった。

「……！ 陛下、いけません。どうか御無理をなさらず」

よろめく女王を抱きとめて寝台に寝かせるウエジユの手を、白く華奢な手が握る。澄んだ水色の瞳に見詰められて頬を赤らめるウエジユの耳に、苦しい女王の声が聞こえた。

「サマンテ、わらわの傍に居ておくれ……。きっと明日にはもう日の光が消えるだろう……。そなたの光で、民を照らしてほしい。この世界には、希望が必要なのだ……」

息も絶え絶えにそう語り掛ける女王に、ウエジユは目を伏せ頷いた。女王の冷え切った手をしっかりと握り、その唇が開く。

「わかりました。スイフィとアズア、それにテンキイの元には代わりにレエンを遣わすことにします」

真剣な表情のウエジユがそう答え、女王は微笑んで枕に頭を預けた。安心して眠りに落ちた女王の白い頬に、そっとウエジユの指先が触れる。何があっても女王陛下を護り通す。穏やかに寝息を立てる女王の横顔を見詰め、騎士団長は決意を固める。そう、そのためにはどんな手段も選ばない。例え異世界を壊すことになろうと。

胸に燃える意志の炎に合わせるように、ウエジユの周りに光が集

まっっていく。生み出された光が水晶のように透き通った壁を抜け、
暗い外を照らし出した。若き騎士団長の光で輝く透明な城が地平線
まで煌々と灯を投げかける。太陽が光を失った世界で、輝く城はま
さに希望そのものだった。

第十四章 煌く星々

暗闇の中、あたしは眼を覚ました。

タオルケットに包まれた刈子の隣で起き上がると、猛烈な空腹感が襲ってくる。ああ、やっぱりピザじゃあたしの胃を満足させることは出来なかったか……。幅二メートルはある広い廊下で腹を摩る。

銀髪の少年を寝室から動かすのは可哀想だ、と刈子が主張したせいであたしと刈子、好男はそれぞれ適当に平らな場所にタオルを敷いて寝ることになったのだ。

刈子を起こさないようにタオルから這い出て、豆電球だけ点いたオレンジ色の居間に移動する。低い唸りを上げる冷蔵庫を開けて、何か食べられる物は無いかと探るあたしの耳に、玄関扉が閉まる音が聞こえた。

「……………」

トマトを片手に振り返るけれど、居間には涎を垂らして眠る好男以外に人影は無い。誰かが侵入してきた訳ではないようだ。刈子も廊下で眠りこけているし……。消去法からして、今のはあの少年がここを出て行った音に違いない。

天涯孤独の身のくせにまた無茶なことをするのは、と一抹の不安が胸を過ぎり、あたしは冷蔵庫の扉を閉めて玄関へ向かった。案の定、少年の履いていた靴だけが靴箱から消えている。

何時変な奴らが襲って来るかも分からないってのに、たった一人で何処に行こうとしているんだ、あいつは。

後を追いかけてようとして、あたしはスイフィの入った吊り広告が

挟んであるファイルを取りに戻った。流石に刺客も真夜中まであたし達を探すような激務はしてないと思うが、念のためだ。踵を踏み潰したローファーに足を入れ、扉を開ける。

玄関から出て数歩も行かないところに、銀髪を風になびかせて少年が夜空を見上げていた。すっかり脱走したものだと思い込んでいたため拍子抜けるあたしに気付く、少年が振り返る。

「……何だ、居たのかよ」

照れも混じって、つんけんした言い方になってしまった。勝手に一人で空回りして馬鹿みたいだ、あたし。未だ片手にトマトを握っていたことに気付く、慌てて両手を背後に回す。

どこから見ても阿呆丸出しのあたしに、少年は突込むことも無く全く表情を崩さない。昼間と比べて生気を失くした眼でまた夜空を見詰め、右足でゆっくりと拍をとっている。少年の身体から物悲しげなノクターンが流れていることに気付いたあたしは、黙って玄関扉に寄り掛かった。静かな曲に合わせるように、夜空に浮かぶ星々が煌いている。

「濃紺の間に縫い付けられし魂魄は果たして……己が道標を見出すことが出来たのだろうか……」

夜曲を奏で星を眺めていた少年が唇を開き、呟いた。相変わらず何を言っているのかさっぱり理解できないけど、全然元気が無いってことだけは分かる。

慰めてやるべきか否かと悩むあたしの耳に、今のは死んじゃった家族が無事成仏できたかどうかっていったんだねい、とスィフィが囁いた。

成程、空に輝く星達を亡くなった人に例えてるのか。そういうばギリシヤ神話か何かで死んだ英雄が星になるって話があったような無かったような。

珍しく空気を読んでいるスイフィに内心感謝しつつも、そんな重い話なら分からないほうがよかったかも……と再び頭を悩ませる。とりあえず、返事だけはしておくか。

「その……あんまりくよくよすんなよ。凹んでばかりじゃ疲れるだろ」

我ながら酷い台詞だ。もうちょっとマシな言い回しが出来なかったのかと頭を抱えるあたしの前で、少年は空を見上げたまま何も言わない。ああ黙ってしまっただ、どうしよう。

夏とは思えないほど夜の空気は冴え渡り、切ない鎮魂歌だけが微かに聞こえる。……こういう気まずい空気は苦手だ。何も見なかったことにして寝ようかと振り返るあたしの背中に、少年の呟く声が降る。

「悪しき力を宿す邪眼の疼きさえも抑える力があるとは……これが均衡を望む世界の意志というものか……不可思議なものだな」

ドアノブに掛けた手を離して頭を掻くあたしに、慰めてくれてちよつと気が晴れたよありがとっつて言ってるねい、とスイフィが少年の言葉を通訳する。

適当なこと言ってるんじゃないだろうなとスイフィに問い質たそうとすると、少年が軽く溜息を吐く音が聞こえた。あたしとスイフィの能天気な会話のせいで気分を害してしまったのかと顔色を窺うと、意外にも少年は微笑を浮かべていた。といつても、諦観の笑みって感じの表情だけだ。何とかして明るい空気に持ち込もうと、あたし

は少年に尋ねる。

「あたし魅首つていうんだ。あんたは？」

「……………武宮、十四季……………」

十四の季節と書いて十四季というんだ、と茶色の眼を伏せて少年が説明してくれる。何となく打ち解けた雰囲気になりそうなので、あたしは思い切って気になっていたので訊いてみることにした。

「あのさ、なんで十四季って左目にだけ赤いカラコンしてたんだ？あれが邪眼なのか？」

刈子の家の前に落としてきちゃったけど……………、と続けるあたしに、十四季は左目を左手で抑えて首を振る。

「あれは邪まなる力の均衡をとる為の制御装置に過ぎない……………。本当の邪眼は……………ここに在る」

左目から手を離して、十四季は右手に巻かれた黒い包帯を解いた。また勿体付けたことを……………と呆れて覗き込んだあたしの目が円くなる。

露わになった十四季の右手首少し下あたりに、本当に眼がついていた。やけに瑞々しい魚類みたいな瞳孔全開の橙色の眼がきよるきよると、あたしと十四季を見ている。これは十四季が『邪眼』とか呼んじゃって痛々しい行動に出してしまうのも仕方ない。

ゴルフボール大のぷよぷよした眼の余りの気持ち悪さに、うえっ、と声を漏らしてあたしは飛び退いた。腕に立つ鳥肌を摩るあたしとは正反対に、スイフィが嬉しそうな声を上げる。

「わあークウイ、久しぶりだねー！ スイフィだよっ、覚えてるう？」

そうか、こいつもスイフィ達と同じ世界から来た生き物なのか……。どう見ても有害な侵略生物にしか見えない四季の右手に巣食う眼球をやや遠巻きに見詰めるあたし。

クウイと呼ばれた眼球はぎよろぎよると瞳を動かしただけで声を出さない。まあ、スイフィがそう親しくない奴にでも馴れ馴れしいのはアズアとの一件で分かってるし、こいつも同じような感じなんだろう。

ファイルを四季の右手首に近付けて互いによく見えるようにしてやると、スイフィが勢いの削げた声で続けた。

「あれえ……。どうしたのクウイ？ 眼しか異世界しゅちに来て無いけどお……。もしかして、移動に失敗しちゃったの？」

スイフィの問い掛けに、橙色の眼が上下に瞳を動かした。えっとつまり、こいつは眼だけの生き物じゃなくて、元々はスイフィやアズアみたいに一心人型をしていたってことか。『あのお方』こと向こうの世界の女王サマに追放された拳句、転送に失敗してこんな不完全な姿になってしまふとは……。ぶるぶると震えるゼラチン質の眼に一寸だけ同情心が湧いたけど、やっぱり見た目の気持ち悪さが勝ってしまう。

露骨に嫌がるあたしに、四季は再び橙色の眼を黒い包帯で封印した。眼球を布で直に巻かれるクウイに、スイフィがお悔やみ申しあげますねー、とか茶化してるようにしか聞こえない言葉を掛けている。

「なんか……おまえも大変だな。いきなりこんな気持ち悪い眼が右手に出来るなんて」

「……ふっ、力に選ばれなかった者には解るまい……。真の力を解放する為にはこれしきの試練……っ！」

イタい台詞をのたまっていた十四季の瞳孔が開き、その肩が強張った。これもこいつの演出の一つなのかと暢気に眺めるあたしに、十四季の押し殺した声が聞こえる。

「……敵だ」

「えっ？」

慌てて辺りを見回そうとするあたしに、十四季が人差し指を口に当てて静かにしろと合図する。顔をあたしに向けたまま、アパートの二階の廊下を眼で示す。釣られてあたしも見上げると、もやっとした人影がこちらを見下ろしているのが見えた。ファイルを握り締めるあたしの前で、十四季が静かに身構える。

十四季の刻むリズムと共に、アパート正面の道を歩く足音が耳に聞こえる。はっとして振り向くと、巨大なリュックサックを背負って頭にバンダナを巻いた少年がこちらへ向かってきている。バンダナの少年から漂う磯の香りに、こいつは怪しいと、あたしの第六感が警告音を鳴らす。

「挟み撃ちか……」

十四季もバンダナの少年を敵と認識したらしい。奏でられる軽快

なポップミュージックのお陰で、身体が羽みたいに軽い。こそこそと広告の陰に隠れようとするスイフィを睨み付けて透明化を促し、あたしは十四季に声を掛けた。

「正面から来る奴はあたしが足止めするから、二階の奴を頼む。あと、出来ればその音で好男と刈子を叩き起こしてくれ」

かなり無茶な要求を言うあたしに、十四季は余裕の笑みを浮かべて包帯を巻いた右手を構える。

「今宵は月が眩しいな……宴には丁度良い」

歯が浮きそうなくっさい台詞を吐いて、十四季が夜空を仰いだ。輝く星達に向けて広げた両手が優雅に弧を描く。流れていた軽音楽が止まり、空間に一瞬の静寂が訪れる。

「……さあ……煌く星々に捧ぐ交響曲シンフォニーの開演だ」

しなやかに十四季の両手が振り上げられ、静かな宵闇に沈む街は数多の楽器が奏でる音色に包まれた。

第十五章 蟹パンを齧りながら

丑三つ時の街をコンサートホールに見立て、オーケストラの楽曲が響く。初っ端から激しい曲を奏でる十四季に、あたしも一暴れしてやろうとジャージの袖を捲り上げた。

ひんやりとした空気が腕に触れ、感覚が研ぎ澄まされる。正面から近付いてくるリュックサックを背負ったバンドナの少年が、急に足を止めてその場に仁王立ちした。

何をする気なんだ？

少年の動向を警戒しつつ、音を立てないようにこっそりと近付く。首筋に手刀でも当てて気絶させるかと構えるあたしの視界にバンドナ少年の全貌が映る。

細い身体に不釣合いな巨大なリュックサックを背負い、気弱そうな顔を真直ぐ十四季に向けている。握り締めた両拳は小刻みに震えていて、必死に勇気を振り絞ってるって感じた。

こんな子どもをいきなり殴るのは気が引けるな……。攻撃を躊躇するあたしの前で、バンドナの少年が胸いっぱい空気を吸い込んだ。

「ボクの名前は漆林紅太（しつりんこうた）です！ 蟹の殻を操る能力を持ってっす！ 一人前になるための最終試験として貴方達と勝負しに来たっす！

少年の宣言に、見えないオーケストラ相手に指揮をしていた十四季の手が止まった。音楽がぷつりと途絶え、バンドナ少年の甲高い声だけが静かな街にこだまする。空中に手を挙げたまま、眉を顰め

て十四季がゆっくりと振り返った。

「……蟹？」

「蟹つす！」

気だるい声色で尋ねる十四季に、紅太と名乗ったバンダナ少年はリュックサックから蟹の鋏はしを取り出して差し出した。まるで水戸黄門のドラマで印籠を翳すような感じで。自信満々に。

成程、磯の香りがしたのはこのせいだったのか。好きな食べ物ナンバーワンの蟹の匂いを嗅ぎながら、使えなさそうな能力だな……と少年を残念な気持ちで眺めるあたし。戦闘を前提にあたし達のところに来たこの少年は敵に間違いないけど、見た目的にも能力的にも大したことなさそうだ。

蟹がぎっしり詰まっているらしいリュックサックを置いていくなら見逃してやってもいいかな。とか勝手に決め付けて蟹をカツアゲしようと思つたあたしの耳に、少年の衝撃的な台詞が飛び込む。

「こっさり近付こうとしても無駄つす！ お姉さんの位置は、胃の中の蟹で感知できるからバレバレつす！」

「はっ？」

少年の自信満々な意味不明の言葉に、思わず声を出してしまった。音を立てたら透明化の意味が無い。慌てて、でも足音を忍ばせて移動したあたしを、バンダナ少年が指差す。ど、どうしてこいつはあたしが居る場所が分かるんだ？

もしかしてスィフィが怠けてるのかと、吊り広告を挟んだファイルを覗き込む。黄ばんだ広告紙の中で、あらぬ疑いを掛けられたス

イフィがぶんぶん首を振っている。

「ちゃんと協力してるもんねい！ 疑わないうで欲しいねい」

「そんな……じゃ、何であいつは……」

出来得る限りの小声で囁き合うあたしとスイフィ。十四季が気を取り直して再び演奏を開始したから、これくらいの声は聞こえないはずだ。そつと移動するあたしを、またまた少年が指差す。

おいおい……どーなってるんだよ、全く……！何が起こってるのか解らなくてストレスのあまり頭を掻き毟りそうだ。苛々して齒軋りするあたしに人差し指を向けた少年から、さっきの甲高い声とは違うやけに熱血な声が聞こえてくる。

「あーあー。聞こえているかつ！ スイフィ、それにアズアにテンキイにクウイ！ 我輩だつ！ 熱き血潮滾る教育員スオンだ！ 知つての通り、我輩達は女王陛下の為に諸君の魂　ぶっちゃけると命を狩りに来ている！」

少年の頭辺りから聞こえる暑苦しい声と言ひ回しに、鼓膜がびりびり震える。こつちに居る奴の名前を全部知ってるってことは、全員と知り合いつてことか？

疑問符を浮かべるあたしの横で、ファイルに挟んだ広告から、あの教師故郷あつちから異世界こちちまで追いかけてきてしつこいねい……とスイフィが愚痴っている。

こいつも不良学生と呼ばれたクチか……。ぶつぶつと文句を垂れるスイフィにあたしが同属嫌悪の感を抱いている一方で、少年の被るバンダナからは暑苦しい話が続けられている。

「しかあし！ 我輩はこのいたいけな未来ある少年をあまり危険に晒したくないのだ！ というわけで、勝負をする前に一寸ハンデキヤップをつけさせてもらった！」

熱い口調で演説するスオンとやらの話に耳を傾けていると、少年がいそいそリュックサクからチラシを取り出してあたしの方へ向けた。赤と青のカラフルなチラシにあたしの眼が釘付けになる。

「そ、そ、それは……っ」

情熱的な八短調の旋律を背景に、あたしはピザ屋のチラシに向かって間抜けな声を上げた。チラシのセンターを陣取る蟹チーズピザの写真。その隣にあるのはサイドメニューの蟹クリームコロッケと本物の蟹を練りこんだ惣菜蟹パン。あたしの脳裏に、数時間前に食べたそれらの味が蘇る。

そう、とっても美味しかった。沢山食べた。だって……蟹大好きだから。

「スオン先生に言われた通り、宅配ピザの料理に蟹の殻の粉末を入れておいたっす！ これでお姉さんの透明化も恐くないっす！」

もやしみたいに貧弱な少年が大声で虚勢を張り、リュックサクの重みでよろけた。大好きな蟹を食べたことが裏目に出たシヨックに悪酔いしつつも、こんな弱そうなガキに負けてたまるかと妙なプライドが頭を擡もたげてくる。

透明化が意味無いだって？ ……だったら、正々堂々腕っ節で勝負してやるっじゃないか。

腕捲りをして拳を握り、スイフィの入ったファイルをジャージの背中側に挟む。こうなったらもう子ども相手でも容赦しない。十四

季の奏でる音楽に呼吸を同調させ、あたしはバンドナの少年目掛けて一直線に走り出した。

「ぐっ……！」

少年に向けて拳を振りかぶった瞬間、腹部に激痛が走った。単なる胃痛じゃない……見えない力で胃と腸が背後から引き止められ、背骨を圧迫している。

「なんだこの力は……っ」

無理矢理動かこうとすると内臓が破れそうだ。この感じ、胃が引つ張られてるんじゃない。胃の中身が固定されてるんだ……！ 戦慄するあたしの眼に、バンドナの少年がこちらに手を翳す姿が見える。

「だから始めに言ったっす……ボクの能力は、蟹の殻を自由に操ることだっす」

右手をあたしに翳したまま、少年が左手でリュックサックのジッパーを開く。その中からは、大量の蟹の殻が。普段は蟹の身を取ったあとのごみ程度にしか思ってたなかった蟹の殻が、研ぎ澄まされたアーミーナイフのように見える。なんてこった、まさか蟹が原因で死ぬなんて……。

宙に浮く蟹の殻を見詰め絶望しかけるあたし。ふと、後ろから聞こえてくる音楽から、それを奏でる四季のことを思い出した。そうだ、四季はずっと寝てたから蟹チーズピザも蟹クリームコロツケも蟹パンも食べてない。この場でバンドナ蟹少年に対抗できるのは四季しかない。

「十四季！ 頼む、暗黒爆練武闘でなんとかしてくれっ！ 蟹を食べたから身動きできないんだ！」

身体を捻って助けを求め、あたしは全力で叫んだ。馬鹿々々しい台詞に我ながら笑っちゃいそう。僅かに動いただけなのに、猛烈な痛みが胃を襲う。あまりの痛みにも足の力が抜けそうだけど、今へたり込んだら間違いなく死ぬから気力で頑張るしかない。内側から胃が破れて死ぬなんて冗談は悪い夢の中だけにとどめておきたい。

「あんまり動いちゃだめっす！ お腹の中が破れちゃうっすよ！」

苦痛に顔を顰めるあたしに、バンドナの少年が慌てた様子で声を掛けた。いや、もうこの感じだと破けてるって……。脂汗を流しながら腹部を押さえ、浅い呼吸を繰り返す。昼間の一件からして出血はヤバイっていうのに……。

スイフィは大丈夫かとファイルを取り出すと、案の定苦しそうに広告の中を七転八倒していた。悲鳴を上げれるってことはまだ元気ってことだな。

時間の余裕があると少し安心するも、十四季からの返事が一切無い。流れ続ける壮大な交響曲に、あたしは嫌な予感がして、もう一度アパートを振り返った。二階の人影が何時の間にか消えて、ボロアパートの前には全身全霊を込めて指揮をする十四季しかいない。やっぱり、あいつ……。

「十四季い つ！ 何してるんだっ！」

あらん限りの声で叫んだあたしの言葉はコントラバスとオーボエのハーモニーで掻き消されてしまった。十四季は演奏に夢中で気付かない。というか、どういう理由で演奏を始めたのかすら忘れてい

るみたいだ。一心不乱に両手で見えない楽団の指揮を執る十四季に、その異常な集中力が姿の見えないもう一人の敵の能力でないことを祈るあたし。

心を鼓舞する旋律のお陰で痛みが少し和らいでいるけど、宙に浮かぶ蟹の鋏を従えた少年がこつちへ近付いてきている事実は変わらない。

蟹鋏に引き裂かれる覚悟を決めたあたしの手から、少年がスイフィの入ったファイルを取り上げた。広告の中を転げまわっていたスイフィから絹を裂くような悲鳴が上がる。超音波みたいな叫び声を出すスイフィをリュックサックの中に大切そうに仕舞い、バンダナの少年は十四季へ向きを変えた。

少年があたしに背を向けたと同時に胃の中に加わっていた力が弱くなった。そのまま腹を押さえて地面に膝をつくとき、少年に声を掛ける。

「なんで……直接あたしを殺さないんだ？ スイフィを取り上げるだけで……」

息も絶え絶えにそれだけ言うとあたしは咽た。巨大なリュックサックを背負ったバンダナの少年が振り返り、眉を八の字に寄せる。

「……ボク、スオン先生みたいに強くなりたいです。でも、やつぱり目の前で人が死ぬのは恐いです。まだまだ修行不足です」

怪我させてごめんなさいっす、とバンダナの少年は頭を下げ、十四季の方へ走っていく。遠ざかる少年の背中を見詰めるあたしの米神を冷や汗が伝う。悪気が無いほど性質たちが悪い。蟹の鋏を従える少年が駆けていくのを無様に寝転がって眺めるしかないあたしは、必死の思いで十四季に逃げると叫んだ。空間を揺らす重厚な旋律の

中、アパートの扉が開く音がした。

第十六章 震える心

アパートに向かい指揮をする十四季の背中に無数の蟹鋏が襲い掛かるうとしたまさにその時。

アパート一階の扉が勢いよく開いて、黒い影が十四季とバンダナの少年の間に躍り出た。背の高さからして好男だろうか。その手に握られた黒い剣が縦横無尽に空を斬り、眼にも留まらぬ速さで宙に浮かぶ蟹の鋏を次々と叩き落していく。

なかなかどうしてカッコいいじゃないか。普段はアレだけど窮地の時には頼れる奴だと、あたしの中で好男に対する好感度がぐっと上がった。正直なところ、音に気付かずに起きてこないだろうと思っていたから余計に感動が大きい。

腹部の痛みも忘れて感激していると、黒い人影に続いて刈子もアパートから飛び出してきた。演奏に我を忘れていた十四季も背後に少年が来ていることにやっと気付き、少年の方へ振り向いて右足で新たな律動を刻み始めている。三人に囲まれて、いきなり形勢が逆転して窮地に追い込まれたバンダナの少年が一步、後退りした。

「どうした紅太っ！ 強くなりたいんだろう、三対一でも恐れず闘うんだ！」

「……………」

どう見ても敗戦色の濃い状況に尻込みする少年を、バンダナに棲む熱血漢が叱咤激励している。

この状況で、はいそうですか、と喜んで戦いに行くような物好きはそうそう居ないだろう。

三人がじりじりと少年との距離を詰めていく中、あたしは少年の背負うリュックサックの中にスイフィが囚われていることを思い出した。アスファルトに爪を立てて皆の方へ這い寄るあたし。

ちよつとしたホラー映画のモンスター気分を味わってるあたしに刈子が気付कि、好男らしき人影にあたしが居る場所を教えている。人影が人に有るまじき跳躍力で五メートルほどの距離を飛び越え、あたしのすぐ横に降り立った。

え、五メートルくらい助走をつければ人間でも飛べるって？ いやいや、助走無しで跳んだんだってば。それも電信柱と同じくらいの高度まで。

アスファルトに腹ばいになっているあたしが首を擦ると、真黒な人影が手を差し伸べて抱き起こしてくれた。

……やっぱり好男だ。高級レストランの最上階で光る女の子と戦った時のように、アズアの黒髪が鎧となって好男の体を包み込んでいるから顔が見えないけど。有無を言わず内臓の負傷を治療する好男に、あたしは一寸照れながら礼を言った。黒髪の鎧に包まれた顔がこちらを向き、背筋も凍る冷たい声が聞こえる。

「無事で良かった、魅首殿。……ところで、スイフィは何処に？ 広告を挟んだファイルを所持しておられぬようだが」

「なんだアズアか」

童話の騎士のように振舞っていたのがアズアだったと知り、あたしは思わず不満の声を漏らしてしまった。道理で格好良すぎた訳だ。溜息を吐くあたしを見て不思議そうに首を傾げる黒い鎧の中からは、微かに好男の鬨こゝろが聞こえている。

十四季の出す音にも気付かず、更に、あれだけ身体が動いたというのにも構わず眠り続けるとは、この男……。

「まったく、あたしのときめきを返してくれよ。再び好男に対する好感度メーターが下がり始めたあたしに、アズアが再度スイフィのことを尋ねてくる。」

「魅首殿……」

「あ、ああ……ごめんごめん」

好男への不満をアズアにぶつけてもしょうがないよな。気を取り直して、スイフィはバンダナ少年の背負うリュックサックの中に入られていることを伝える。ついでにあの少年の能力と、それを使った作戦の内容も話すと、アズアの造り出した鎧が腕を組み考え込んだ。

「成程……。毒を盛られたようなものだな」

そう言って、鎧が動き、腹を摩る。気付かぬうちに好男の腹を破るようなことにならなければ良いが……とか、さり気無く怖いことを言うアズアに生返事をして、その場から立ち上がる。

怪我が治ったのはいいけど、さっきみたいに体内の蟹の殻を操られたら手も足も出ない。どうやらバンダナ少年は今のところ人並みの良心を持ち合わせてるみたいだから、上手いこと言い包めたら仲間になってくれるかもしれない。

如何にしてスイフィを無傷で取り戻すか錆付いた頭脳をフル回転させていると、四方を囲まれた少年が落ち着きを失くしている様子が見えた。

「す、スオン先生……困まれちゃったつすよお！……」

「大丈夫だ紅太！ これまでの特訓を思い出せ！ 寒い夜も！ 暑い昼も！ 頑張つて修行してきたじゃないか！ 自信を持って！ おまえには自分の努力を誇る資格があるぞっ！ さあ、今までの成果を我輩に示してくれ！ 困難を乗り越えてみせるんだ！」

気温が六度くらい上昇するんじゃないかと思える程熱い台詞がバングナからぶち撒けられ、ひ弱そうな少年が震える両手を握り締め拳を作った。

なんかヤバイ。これは少年漫画で気弱だったいじられキャラが急に強くなるパターンな気がする。まるで見えない気に圧迫されるように、あたしは後ろへ下がった。同時に、拳を握り小さな肩を震わしていたバングナの少年が胸いっぱい空気を吸う。

「……わかりました……スオン先生」

未だ幼さの抜けない口元が動き、少年が思う言葉を紡ぐ。地面に叩き落され無残に割れた蟹の殻達がかたかたと揺れる。

「見ててください……！ これが、修行の成果っす！」

閉じていた両手を開いて前に突き出し、少年が叫んだ。砕けた蟹殻が紅の渦となって舞い上がり、怒涛の勢いで刈子と四季に迫る。思わず二人の名前を叫ぶあたしを置いてアズアが赤い奔流に身を投げ、二人の前に黒髪で巨大な壁を造った。勢いに押し負けて撓る髪の毛の壁に、あたしも何とかしなくてはと少年目掛けて走り出す。真後ろから蹴りを見舞ってやろうとするあたしに少年が右手を翳し、薄紅色の粉があたしの身体を包んで宙に持ち上げる。

これは さつき砕けた蟹の殻の粉？ 蟹の殻でアズア達を攻撃する一方で、その粉であたしを放り投げるとは……。少年の完璧な能力制御に驚き眼が円くなる。それだけじゃない、相手が二手に分かれても対応できるように敢えて動かせる粉を残しておいた。

重力に引つ張られ逆さになって落ちながら、あたしはバンダナの少年を見詰めた。純真な眼は真直ぐにアズア達に注がれ、攻める勢いは衰えない。仲間になってくれれば……。なんて考えは甘かった。こいつは絶対に自分の意思を曲げない人間だ。その意思とはあたし達を倒すこと。こつちも全力で立ち向かわなきゃ、勝てない。

ボロアパートの壁に打ち付けられる寸前、アズアの黒髪が伸びてきてあたしの身体を包んだ。衝撃が緩和され、そのまま刈子達の許もとに降りる。

「ありがとう、アズア」

礼を言うあたしに黒い鎧が無言で頷く。何処からこんなに大量の髪が出てくるのか、二階建てのアパートを包む程まで広がる髪の毛を見上げると、あちこちの隙間を縫って蟹の殻が覗いてきている。

「申し訳無いが……この壁も長くは持たない。魅首殿、刈子殿、武宮殿、今のうちにアパートの中へ。こちらの攻撃が通るのが先が、あちらの能力が発動するのが先か……。一か八か一騎打ちに賭けさせてもらおう」

「そんなっ！ アズアさんと好男さんをだけを危険に晒すわけにいきませんわ！」

首を振る刈子を手で制し、十四季が前に進み出る。

「エンド・オブ・ザ・ワールド世界の破滅を防ぎ華やかに散るのは邪眼に選ばれし俺にこそ相応しい役目……。貴様はその能力に見合った役目を仲間と共にを果たすがいい……。退け……。」

「おい十四季、なに寝惚けたこと言ってるんだよ。おまえの能力じゃあのガキの攻撃を防げないだろ。ここは大人しく一番経験のありそうなアズアに任せて。」

死に急ぐような台詞を吐く十四季を宥めようとそこまで言つと、運命に選ばれなかった者にはわかるまい……。とか更に鼻に掛かった台詞を十四季が呟く。わざわざ心配して言ってるのに生意気な奴……！

刈子の制止も聞かず十四季の胸倉を掴むあたしの頬を、壁を突き抜けた蟹鋏が切り裂いた。思わず怯んだあたしの手を振り払い、涙眼になった十四季が壁の向こうの少年に黒い包帯を巻いた右手を翳す。

「消し飛べ！」

止める間も無く、十四季の右手から暗黒爆錬武闘の衝撃波が放たれた。ぶちぶちと黒髪の壁が引き千切られ、赤い奔流となって襲い来る蟹の殻を粉碎し、音の暴力がバンドナの少年に迫る。

突然の反撃に硬直する少年のバンドナから熱血な声が何か叫ぶのが聞こえ、砕けた蟹の殻が少年とリュックサックを真横に弾いた。衝撃波が少年の肩とリュックサックを掠め、赤い布がひらひらと宙に舞う。

スイフィが入った吊り広告が破れるんじゃないかと悲鳴を上げるあたしの横で、外したか……と十四季が舌打ちしている。こいつ、

後で絶対しばき倒す。

こっそり殺意を抱かれてるなどとは露知らず、負傷した少年にさらに追い討ちを掛けようとする十四季。第二撃が放たれようとしたまさにその瞬間、十四季の右手を黒い鎧が掴んで頭の後ろに捻り上げた。あたしと刈子が驚く前で、防御の壁を崩して黒い鎧の覆面部分が解けていく。

「おい……どうしてくれるんだ？ これ」

髪の毛の下から、不機嫌絶頂の好男の顔が出ている。指し示すその頭にはくつきりと五百円玉ハゲが出来ていた。……ああ、十四季がアズアの髪を吹き飛ばしたからこんなことになったのか。

素直に謝ればいいものを、十四季は反省する素振りなど微塵も見せずに、攻撃進路を塞いでいた貴様に非が在るだろう、と生意気な口を叩いている。二人が険悪な雰囲気で見合っている間に、少年のほうは体勢を立て直して飛び散った蟹の殻を自分の周りに引き寄せている。

そうだ、仲間内で争ってる場合じゃないんだ。少年が反撃してくる前にスイフィを取り戻さねば。互いにガンを飛ばしあってる好男と十四季の間に割り込むと、あたしは二人にスイフィが少年のリュックサックの中に入ってることを伝えた。

「ふん……相手を見くびるからそんなことになるんだ。自業自得だな。これだから選ばれない者は……」

「それは大変だっ！ でも大丈夫、オレとアズアでスイフィを取り戻すから。魅首ちゃんは安全な場所で待っていてくれ！」

両方とも予想していた通りの反応だ。互いの反応がどちらも気に入らなかつたらしく、あたしをはさんで火花を散るような視線の応酬が繰り広げられる。もう駄目だ、こいつらには協調って言葉が適用できないらしい。頭を抱えるあたしを置いて、好男と十四季が競うように駆け出していく。

「退け！ これは相応しい力エナジーを持つ者に架せられた試練であって、貴様如き下賤の者には任せられないことだ」

「はっ、冗談じゃない！ おまえみたいな青臭い輩に大事な魅首ちやんの命を任せられるわけないだろ！ 足手纏いだからあっちへ行つてろ」

聞いてるだけで頭が痛くなるような馬鹿々々しい台詞を二人がぶつけ合う。どちらも相手の話を全く聞いてないってところが余計に事態を悪化させてる気がする……。終いには言葉でなく本当に攻撃をぶつけ合い始めてるし。

黒髪の剣と衝撃波が入り乱れ、蟹の殻で作った紅の渦の中で、バンドナの少年がおろおろしている。これじゃどっちが悪役か分からないじゃないか。……まあ、だからといってこっちが元は正義だったかと訊かれると返答に困るけど。

それにしても、どうしてあの少年は最初に使った体内の蟹殻粉を固定する技を使わないんだろう？ 十四季の放った衝撃波の煽りを受けて吹っ飛んでいるバンドナ少年を不審に思っで見詰める。今度は好男の振り回した剣の切先が少年の鼻先を掠めている。

リュックサックを背負ってるせいで小回りが利かないようだ。下手すると少年もスイフィも真つ二つや粉々になってしまふ、とはらはらするあたしの眼に、少年が唇を噛んで今にも泣きそうな表情

をしている様子が映った。好男の操る黒髪の剣がリュックサックの肩ベルトを切り裂き、十四季の起こした突風で少年とリュックサックが離される。

重いリュックサックが離れた少年は枯葉みたいに吹き飛ばされ、コンクリートの塀に体を強かに打ちつけられた。思わず眼を逸らして歯を食い縛るあたしの耳に少年の嗚咽が聞こえる。しまった、そういうば泣いたら強くなるんだっけ。眼を覆っていた手を恐る恐る下ろして見ると、ぼろぼろになった少年がアスファルトに座り込んで流れる涙を手の甲で拭っていた。

「……………わかんないっす……………ボク……………ボクの求める強さは……………」

「どうした紅太！ 泣いてるだけじゃ何も進展しないぞ！ 行動を起こすんだ！」

バンダナから聞こえる熱血な声に、大粒の涙を零していた少年の動きが止まった。目の前で好き勝手に暴れている好男と十四季と正反対に、バンダナの少年は不気味なほどに静かだ。……………いや、少年が黙ってるから静かなんじゃない。好男が飛ばすアスファルトの欠片も、十四季が巻き上げる砂埃も少年の周りには届かないんだ。何かとてつもないことが起こりそうな気がする……………。

妙な胸騒ぎを覚え警戒していると、少年が顔を覆っていた手を下ろした。両手が握り締められ、拳が形作られる。前髪の下で光る瞳は純真さを失い、どす黒い感情を湛えていた。バンダナから聞こえていた声が勢いを弱め、少年の名を呼ぶ。

「……………紅太？」

「作戦だけじゃ駄目っす……………。やっぱり強くなるにはもっと大きな

力が必要っす……」

少年の拳がさらに固く握られ、その爪が肉に食い込む。濁った眼からとめどなく流れ続ける涙がアスファルトに黒い斑点を作り、少年が口を開いた。

「ボクは　ボクは強くなりたいんだ

ッ！」

涙を流して絶叫する少年の声に応えるように大気が震え、全身の毛が逆立つのをあたしは感じた。

第十七章 見えないもの

少年の咆哮が夜空を貫き、夜明け前の街に奇妙な静寂が訪れた。私情で破壊の限りを尽くしていた好男と四季の二人も異変に気付き、争いを止めて辺りを見回している。頭が重い……。これが少年の新しい力なのか？

全身に鳥肌が立ち、なんだか気持ち悪い。気分的な問題でなく、物理的に重くなってくる頭を支えようと額に当てたあたしの左手に、吸いつけられるように自分の髪が巻き付いた。

寝不足で幻覚を見ているのかと我が目を疑うあたしの耳に、刈子の悲鳴が聞こえる。すぐ横に眼を遣ると、刈子の長いお下げ髪がうねうねとくねって手足を拘束している。まさか、これは……！

最悪の事態が起こったことに気付いたあたしが注意を促そうと好男に顔を向けたが、もう遅かった。左手の腕時計から出るアズアの黒髪が主人の制御を離れ、漆黒の戒めとなって好男と四季を縛り上げている。

「アズア？ ……どうなってるんだ、これ……」

「わからない……。先刻から何度か解放を試しているが制御が利かない。悪いが自力で脱出してくれ、好男」

困惑している好男の体を黒髪が蛇のように這い上がり、口も鼻も覆われてしまった。好男だけじゃない、すぐ傍にいた四季もアズアの長い髪に巻かれ、空中でもがいている。

細い黒髪が黒い包帯を巻いた四季の右腕に食い込み、何かの液が滴り落ちた。身体を仰け反らせて絶叫する四季の左目から同じような何かが出てるから多分……まあ、深く考えるのは止そう。

そうこうしている間にも首に絡み付いてくる自分の髪に、あたしは喉を掻き毟る。爪が皮膚を傷つけるだけで髪は全然解けない。逆立っていた腕の産毛がぶちぶちと抜けて、じんわりと血が滲むのを感じた。

「力……力つす……。もっと強く……。もっともつと……」

静電気の実験みたいに逆立つ自分の髪を掴み、バンダナの少年が何かぶつぶつと呟いている。針金みたいに尖った髪の毛がバンダナを貫いて、呼応するように少年の身体に似たような穴が幾つか開いた。痛みに呻き声を上げる少年が震える右手を好男に翳し、腕時計の中のアズアから操るための髪を引きずり出そうとしている。

「やめる紅太！ 最初に教えただろう、この力はおまえには大きすぎるんだ！ 目先の勝利だけに気を取られていると後悔することになるぞ！」

バンダナの中から熱血漢の声が聞こえる。多分少年と同じように怪我をしているのだろう、その声は若干苦しそうだ。熱血漢の説得は少年の耳に一切届いていないらしく、震える右手が振り上げられる。少年の青白い頬を赤い血と透明な涙が伝い、焦点の合わない虚ろな目が、すっかり黒髪に包まれ繭のようになった好男と四季に向けられる。蒼白な唇が歪に開き、生気を失った声が漏れ出した。

「見えるから怖くなるっす……見えなければ……怖くないっす……」

アズアの黒髪で出来た二つの球体が空中へ持ち上がり、みしみしと何かが軋む音がした。中から四季の悲鳴が聞こえる。身動きが取れないから音を創り出せないんだ。

このままじゃ二人とも少年の操る黒髪に押しつぶされて圧死してしまう。気管を髪で締め付けられて呼吸困難に陥りながらも、あたしは足元の石を拾って少年に投げつけた。

思い切り投げたつもりだったのに、小石は少年まで届かず落ちる。情性で転がる小石に少年の視線が向かい、次いであたしを見た。石を少年に当てることは出来なかったけれど、注意をこっちに向けることには成功したみたいだ。黒髪の塊が外側から解れていくのが見える。好男と十四季、無事だといけれど……。首に絡む髪の毛が更にきつく絞まり、あたしの意識が遠のいていく。ここで気絶するわけにはいかない！

意識を保つためにアパートの壁に思い切り腕を打ち付けると、変な音と一緒に凄い激痛が走った。じんわり涙が眼に浮かぶ。酸欠と骨折で気が狂いそうになってるあたしの耳に刈子の声が聞こえてくる。

「魅首さん、第二の能力を発動する準備をして下さい！ 寝室で話した例の作戦を実行します！」

作戦？ 脂汗を流し地面に膝をつくあたし。ぐらぐらする頭で記憶を辿る。えーと、あたしが能力を発動する未来を刈子が敵に見せるんだっただっけ……？

意識の混濁が苦痛を上回って、視界に白い星が線を描いて飛んでいる。ホワイトアウト一步手前つとところだ。刈子が必死にあたしの名前を呼んで返事をせがんでいるけど、もう肺の中に空気が残ってないから声が出せない。

辛うじて開いている目に、バンダナの少年が今度は刈子に右手を翳す様子が映る。このままじゃ刈子まであたしみたいになっ

う。またあたしは何も出来ないのか？ 空気を求めて死に掛けの八工みたいに足掻くあたしの身体を、ふっと冷気が包み込んだ。

能力の発動する前触れとは違う、指先が悴むほどの冷たい空気が地面を伝ってあたしを包んでいる。どこからこんな冷気がくるのかと顔を上げるあたしの視界に、黒くぼやけた影が映りこんだ。二人目の敵が何故こんなところに？ これがこいつの能力なのか？ 意識がぼやけて白んでいく視界の中で、ぼやけた影があたしに近付く。ぼたぼたと水の垂れる音を聞こえ、ぼやける人影の全容が明らかになる。長くほつれた黒髪から伸ばされる痩せこけた手を見て、あたしの瞳孔が広がった。驚くあたしに痩せ細ったぼさぼさ髪の人っばい何かが手を伸ばし、頬を包んで額と額をつき合わせる。黒髪の間から覗く干からびた唇が動き、擦れた声が聞こえる。

「キミの心を……あの子に伝えればいいんだね……」

こいつ喋れるのか。さらに驚くあたしに、不審な長い黒髪の人っばい何かが頷いてみせた。小枝みたいな指であたしの喉に絡みついた髪を解き、もう大丈夫だよね……？ と言って、こいつは刈子のほうへ歩いていく。

水の雫を落として歩くそいつの後姿を呆然と眺めていたあたしの脳裏に、ボロアパートに来た初日のことが思い出される。こいつ……土砂降りの雨の中、二階の廊下に佇んでいたあいつじゃないか。今頃怪奇現象の謎が明らかになったことに呆れて開いた口が塞がらないけど、今一番優先すべきは刈子達と協力して暴走気味なバナダナ少年を倒すことだ。

新鮮な空気を吸って明瞭になった意識の下で、折れた手をもう片方の手で更に曲げる。脳内麻薬のせいで痛みが軽減されてしまってるけど、涙を流すには十分な痛みだ。謎の人物が出す冷気が遠のく

に連れて、涙が運ぶ不思議な力があたしの身体を温める。視界の端では刈子が自分の髪に締め付けられて苦しそうな顔をしている。頼む、間に合ってくれ……！

涙の流れる目をぎゅっと瞑ると、瞼の裏側の代わりに見たこともない世界が網膜に投射された。なんだかヘンゼルとグレーテルに出てきそうな感じの家がいつぱい建ってる変な世界だ。ちょっと油断するとそのまま力が暴走してしまいそうで気が抜けない。刈子の能力を使って敵にだけ『大切なもの』を見せないと、こっちも行動不能になってしまうっていうのに。

「紅太！ やめるんだ！ 我輩の声が聞こえないのかっ？」

熱血漢の悲痛な声が少年に呼びかけている。奇妙な世界を覗くあたしの耳には、少年が力を求めて呟く言葉しか聞こえてこない。まさか、もう刈子は……。胸に重苦しい不安が渦巻いたその時、どさつと何かが地面に落ちる音がした。

Another World the 3rd chapter

頼りない光を投げかける蛍光灯の下、刈子と呼ばれた少女は紅太の力から解放されてアスファルトの上に膝をついた。

故郷から強大な力が流れ込んでくることから、紅太がまだ涙を流していることが解る。けれどその力を使おうとする意思が感じられない……。押さえ込むなら今しかない。

血に染まったバンダナの中で、スオンは重ねた両手を前に突き出し幾つかの言葉を唱えた。紅太の身体から溢れていた力がスオンの周りに収束し、故郷へ続く道を創り出す。目の前ではお下げ髪の少女が身を起こし、息を整え始めている。彼らに反撃されないうちに、紅太を安全な場所へ連れていかなくては。

濃紺の空間に灰白色の歪みひずみが生まれ、紅太とスオンを包み込んだ。身体全体が歪みに沈み、空間が開いた傷口を元に戻そうと塞がり始める。完全に空間が閉じようとするその一瞬間に、膝をついていたお下げ髪の少女がよろめきながらも立ち上がり、こちらに手を伸ばす様子が見えた。

星明りすら無い真暗闇の中、獣の遠吠えが聞こえる町外れに灰白色の歪みが現れて二つの生き物を放り出した。頭を下に落ちていたスオンが空中で重心を取り直し、放心状態の紅太を抱えて着地する。目は開いているけれど何も見ていない紅太の頬をスオンが叩く。

「紅太、しっかりするんだ！」

遠くで逃げ出した家畜の鳴き声がするだけで、紅太は沈黙している。心を閉ざして涙を流すだけの紅太を見て、スオンは悔しそうに唇を噛んだ。暫らく休むしかないな……、と呟き、真暗闇の中を迷いもせず紅太を抱えて進んでいく。一度も躓くことなく歩みを進め、スオンは一軒の民家に入っていった。

重苦しい暗黒を、部屋の中央に灯る蠟燭の炎が押し退けている。ちらちらと揺れる蠟燭の灯りに照らされていた赤いドレスの女が、民家に戻ってきたスオンと紅太に冷たい視線を投げ掛けた。

「……なんだ、戻ってきたの」

ぐったりとした様子でスオンに抱えられている紅太を一瞥し、女は残念そうに顔を歪めた。隣に佇む黒い人影に指を鳴らして合図をして、受け取った薄桃色のグラス入りの玉虫色の酒を呷る。一息に酒を飲み干した女の口紅を塗った唇から色の付いた吐息が漏れ、空中に複雑な幾何学模様を創り出した。背後に立つ人影にもう一杯酒を要求し、女が机の上で足を組み直した。その刺々しい視線が、紅太を寝具に寝かしつけるスオンに向く。

「あんたもさあ、そんな使えないガキとの契約なんかさつさと破棄しちゃって、もつと意志の強い奴と組んだら？ 一人も反逆者を狩れてないのって、あんた達だけだよ？ 弱つちいガキを一人前に育てるなんて寝惚けた飯事まめごといつまで続けるつもり？ ウェジユの野郎の逆鱗に触れて殺されるかも知れないってのに」

背後の人影の差し出す酒を呷り、女がスオンに息を吹き掛ける。甘やかな匂いを発する鎌の形をした吐息がスオンの首に掛かり、掻き消えた。赤いドレスの裾を揺らして足を組みかえる女に、スオン

は質問で返す。

「そつえば、ウエジユ団長はまだ城に籠ったままなのか？」

「あれからずっと女王陛下の傍に居られるようだ。陛下自らのご要望らしい」

赤いドレスの女の後ろに立っていた人影が口を開いた。揺らめく炎に照らされたその姿は漆黒に染まり、身体の奥から薄らと見える赤い光が無ければ周囲の闇と見分けが付かない。赤い光を内包する人影の言葉に、茶髪の女が舌打ちをして窓の外を見た。三角の窓枠に切り取られた景色は黒一色のようにだが、よくよく見ると地平線辺りが白んでいる。

「ほんと、良いご身分よね……。どうしてあたし達は城に入れないのよ。ウエジユの野郎、あの中で贅沢三昧してるんでしょーね。こっちは灯りも満足に無いあばら家で安酒飲んで過ごしてるってのに……ムカつくつたらありゃしない」

「よせ、霞恋^{かれん}。団長も気苦労が多いんだ、これ以上負担を掛ける様なことは」

背後から窘めの言葉を掛ける人影に、霞恋と呼ばれた茶髪の女が素早く振り返って鋭い眼光を飛ばした。真赤な付け爪を付けた手が人影の襟首を掴む。

「何よ、カンツア。あんたもウエジユを庇うわけ？ ……ふん、やっぱりわたしなんて異世界^{あっち}で使う都合のいい器でしかないのね。よく分かったわ」

「そ、そんなつもりでは……」

カンツアと呼ばれた人影を突き飛ばし、霞恋は机から降りた。うるたえるカンツアに空になったグラスを投げつけ霞恋が声を荒げる。

「あーム力つく！ ム力つくわっ！ 何が『光の騎士』よ、何が『女王を護る騎士団』よ！ 皆自分の損得しか考えてないじゃない。それなのに偉そうにしやがって、ウエジュの奴……！ 『あの少年達はレエンに任せることにする』？ ふざけるんじゃないわよ！」

静まり返った暗闇に猛る声を上げ、霞恋の着る真紅のドレスが蠟燭の灯に揺れる。折れそうなピンヒールで床を刻むように進み、扉の前で振り返る。ガラスの破片で切った額を押さえるカンツアに鋭い視線が向けられ、甲高い声が黒い影の名前を呼んだ。

「カンツア！ 早く外套を持ってきて。異世界ユリセに出掛けるわよ」

傲慢に言い放って腕を組んだまま仁王立ちする霞恋に、額から蒼い血を流すカンツアが怯えた眼を向ける。反抗もせず、黙って赤い外套を腕に掛けると黒い影は赤い女の傍に寄り添った。胸の内側に燃える炎の勢いが強くなり、黒い身体から透けて見える。広げられた外套に乱暴に腕を通すと、霞恋は民家の扉を蹴り開けた。

「レエンなんて奴に手柄を横取りさせるもんですか……。あの武宮ってガキと魅首って雌豚は、わたしの獲物なんだから」

暴言と共に扉が閉まり、二人の足跡は遠のいていった。静かになった民家の中、紅太を介抱していたスオンが一人溜息を吐く。虚ろな眼で天井を見詰める紅太のバンダナを外して薬草を貼ると、その頭を撫でた。血で固まった猫毛の髪が、指の間できしきしと引っ掛

かる。

この世界はこれからどうなってしまうのだろうか。冷たいベ
ッドに横たわる傷だらけの紅太にそう呟いて、同じ傷を負っている
スオンが暗闇の空を仰いだ。

第十八章 霊の恩返し

何かが地面に落ちる音に、あたしの集中力が遂に途切れた。目の前に一瞬だけ家族の像が浮かび上がり、身体の熱が引くのに合わせて薄れていく。変な風に曲がっていた腕が元に戻っていく。

完全回復とまでは行かないが、骨折していたはずの腕は骨に僅かにヒビが入った程度まで治癒しているようだ。

果たして倒れたのは敵なのか、刈子なのか……。心配に眉根を寄せて音のした方に顔を向けると、バンダナ少年が両手を力無くぶら下げて立ち尽くしていた。倒れたのは、刈子だ。

「刈子っ！」

アスファルトの上に広がるお下げ髪に駆け寄るあたし。ちくしよー、あたしがもっとしっかりしていたらこんな事には……。！ 今更後悔しても遅いのに歯噛みしながら走るあたしの前で、刈子がよろよろと立ち上がる。

あんなボロボロの身体だっていうのに、まだ闘うつもりなのか？ 膝を震わせ必死に身を起こす刈子の手がバンダナ少年に向けて伸ばされるのが見える。釣られて少年に眼を向けると、なんか白っぽいもやもやしたものの中に入っていくところだった。こいつも、女の子を操ってた奴や四季達を襲った変な女みたいに、他の世界へ逃げるつもりなんだな。

バンダナ少年を飲み込んだ白いもやはあつという間に閉じてしまった。追いかけたかったけど、今は刈子の介抱をしなくっちゃ。両手を地面について肩で息をしている刈子に近付くと、何か喋っているのが聞こえる。

「……して……あの子……」

「おい、大丈夫　か？」

また電波を受信してトランス状態になつてるのかと、恐る恐る声を掛ける。苦しそうに口で息をしていた刈子の顔があたしに向けられた。眼鏡の奥の青い目が潤んでいるのは、どこか怪我でもしたからだろうか。心配だけど何をすればいいのか全然分からないで手持ち無沙汰になつているあたしの背後から、好男の声がする。

「魅首ちゃん、刈子ちゃん、二人とも無事か？」

これが無事そうに見えるのかと突込もうと振り返ると、好男も無事とは言い難い風体だった。ぱりっと糊の効いていたシャツは破れてところどころ血が滲んでいるし、何より頭部が……。眼のやり場に困るあたしに、好男も気まずそうに苦笑している。小指に掛けた小さな赤いキーホルダーらしき物を電灯に輝かせ、一寸おどけた様子で口を開いた。

「鍵束にコレ付けといて良かったよ。切れ味鋭いからアズアの髪も楽々切れてさ。お陰で刃こぼれして使い物にならなくなったけど

」

そう肩を竦めて笑うと、好男は溜息を吐いて虎刈りになった髪を触った。ああ、携帯用の小型ナイフか。そういえば伯父さんから貰ったことがあつたよう……。ヴィ、いや、ビ……。？何だっただけ。興味無いからすぐ無くしちゃったんだよな。

とりあえず好男は元気そうだ。よかつた良かった。それにしても、どうしてナイフとか持つてるんだよ、危ない奴だな。

悶々と思考するあたしの耳に、今度は十四季の呻き声が微かに聞こえる。そうだ、あいつ確か目を。刈子を好男に託して黒髪の小山に走り寄り、掻き分けるあたし。腕の痛みを我慢しながら掻き進めると、ぎっしり詰まった髪の中から十四季の服の端が見えた。あと少し、だ。励ましの言葉を掛けながら更に掘り進めると、やっと全身が見えてきた。左目を抑えてうんうん呻ってる以外は何処にも怪我は無さそうだ。ほっと安堵の溜息が出る。

……でも、この様子じゃ立ち上がることはおろか人の声に耳を傾けることも無理だろうな。ヒビの入った腕は震えて力が入らないし、悪いけど好男に動かしてもらおうか。助けを求めて振り返り、あたしは開いた口を閉じた。

あたしの円くなった瞳に、ちゃっかり刈子を抱きしめている好男が映っている。それはまあいい。いや、普段ならスルーしないでどつくけど。問題なのはその後ろだ。あたしを助けたあの変な暗い奴が、雫を滴らせて好男の背後にびったり張り付いている。

「……………ん？どした、魅首ちゃん」

目敏く視線に気がついた好男が小首を傾げた。傾く好男の頭が、背後から抱きついていている半透明の腕に触れて、そのまま通過した。あたしと違って、好男はあいつに触れないみたいだ。

「よ、好男、おまえの後ろに……………」

言われた好男が振り返り、その頭と肩が背後の人っぽい何かの身体の中を通過した。人っぽい何かの腹の中で二、三度辺りを見回した好男が怪訝そうな顔をあたしに向ける。

「何も無いけど？」

「あ……うん」

「ごめん、何でもないと呟くあたしに、好男の背後に立つ何かを手を振っている。やっぱり好男にはこいつが見えないみたいだ。一緒に居る刈子も好男の背後に居る存在に全然気付いてないみたいだし……。困惑するあたしの肩の上を暖かい風が吹く。」

「手伝おつかあ魅首うー」

「へ？ あ、ありがと……って」

聞き覚えのある声に驚いて首を回すと、あたしは絶句した。朝焼けの空を背景に、ファイルに挟まれた電車の吊り広告がぶかぶか浮いている。

これだけでも十分異常事態だったのに、広告の中で元気そうに跳ね回ってるスイフィの容姿が更に妙なことになっていた。眉間に皺を寄せて眼を細めるあたしの耳に、スイフィの神経を逆撫でする笑い声が聞こえる。

「あつははは！ 魅首の顔、変だねー」

腹を抱えて笑い転げるその姿は、どうみても『成長』していた。もともと長かったピンクと緑の髪は足首まで届くほど伸びて、小生意気だった幼い顔はさらに生意気な青年の顔になっている。

なんてこった、子ども状態でも苦労してたつてのに、これから更にウザさに磨きが掛かるっていつのか。

いやいや、ていうかそもそも何でこんな急激に成長するんだ。リ

ユックサックの中の蟹の殻を食べて栄養素を摂ったつてののか？

理不尽さで痛む頭を抱えるあたしに、その頭上を蝶のように飛び回る広告の中から笑い混じりの声が雨みたいに降り注ぐ。

「ふふふー、驚いてるねい。まあー……おいら故郷むらじゃモテモテだったしいー。見惚れちゃうのも無理ないかなあ」

見惚れる？ 何をほざいてるんだコイツ。変態ナルシストは好男だけで十分間に合ってるっつーの！ しかもさり気無く自慢とかしてるし、上から目線で偉そうだし……。こっちはおまえを助けるために色々闘ってへとへとだっていうのに。

心をささくれ立たせているあたしの気持ちも知らず、変な光に包まれた広告が白む空をひらひら舞っている。

「ん？ どうしたねい？ ほらほら、早くとつちゃんの手当てしようよお。おいらが有り余る素晴らしき力で運んであげるからあ」

ムカつく態度で見下し気味に言って、広告からカラフルなりボンが何本も躍り出た。十四季を包むりボンを見て、あたしの脳内に電車の嫌な思い出が蘇る。あのときこいつに同情さえしなければ、こんな面倒なことに巻き込まれずに済んだつてのに……。

苦い気分で俯くあたしを、はいはい急いでねいー、とスイファイが浮かれた軽い声で急かす。これで一つ貸しだからねい、とか戯言ぬかしてやがるし。くっそ、腕を怪我してさえいなけりゃ、こんなムカつく天邪鬼の力なんて借りずに済んだのに。

鬱々とした思いで十四季を運ぶファイル入り広告の後ろをついて歩くと、刈子を抱えた好男に声を掛けられた。

「皆怪我して……大変なことになったな。敵側あいつに此処こゝがバレてるのが心配だけど、今は手当てと休息が先、かな」

「うん」

俯き気味に生返事をするあたしの顔を好男が覗き込む。図々しくってイラつくけど、とてもどつくような元気は無い。

顔色悪いよ、腰でも打った？ とか失礼なこと言ってくる好男に気だるい一瞥を遣ると、あたしは玄関の敷居を跨いだ。カラフルなリボンの塊と黄ばんだ吊り広告が、白と黒で統一されたスタイリッシュな居間に浮かんでいるのが見える。何か、シユールすぎて笑えてくるな……。食卓の横でふっと笑い声を漏らすと、全身の力が抜けてそのままへたり込んでしまった。

「み、魅首ちゃん？」

くらくらする頭を抑えるあたしの肩に好男の手が触れる。おまえ刈子はどうしたんだよ、と思って首を捻ると、連ねた椅子の上に刈子がぐったりと横になっているのが見えた。疲れて眠ってしまったようだ。……そりゃそうだよな、まだ六時前だし、あんなことがあったし。ぼーっと刈子の寝顔を眺めるあたしの視界に、好男の顔が急に横から割って入った。

「魅首ちゃん、どっか怪我したんじゃないの？ 本当に顔色悪いけど」

「あたしは平気だつてば。……それより、十四季と刈子の手当てをやってくれ。十四季は左目を怪我してるし、刈子も……」

特に十四季の怪我は放っておいたらヤバそうだし、と続けようと

したあたしの口がぼかんと開いたまま止まる。真摯な態度で頷いて刈子達の治療に向かう好男の背後に、またあの暗い奴がぴったり張り付いていた。

思わず疲れてるのかと目を強く擦るあたしの手には、ひやりとした何かが触れた。あいつに間違いないだろうけど、何だか目を開くのが躊躇われる……。いつそのまま気絶した振りをしてやるうかと考えるあたしの耳元で、あの……、と咳くのが聞こえた。擦れた声が伝わりと共に、冷気も一緒に流れってくる。

一瞬で背中が全部逆立ったけど、好男が居るのにこいつの相手をするわけにはいかない。かといって、もう動く元気も無いし。

どうしようかと悩んでいると、好男が刈子を抱えて四季とスイフィの居る寝室へ移動していく音が聞こえた。今なら大丈夫だと目を開くと、ぼさぼさの黒髪で覆われた顔が超至近距離であたしを覗き込んでいた。思わず声を漏らして後退りするあたしの肩を、干からびた手ががっしりと掴む。

「あ……待つて……怖がらないで……」

この状況でどうやって怖がるなって言うんだよ！ と心の中で一人突込みの声を上げるあたし。

あたしの肩を掴むそいつの手は氷のように冷たくて、今度は能力の作用では無く、本当に鳥肌が立ってきた。

夏だから涼しいのは大歓迎だけど、流石に震えるほど寒いってのは勘弁願いたい。ドン引きしているあたしの前で、ぼさぼさ髪の毛のそいつはよく見えない顔を恥ずかしそうに伏せている。

「あの……その……まだ、自己紹介、してなかったから……」

低く擦れた声が干からびた唇から出た。まるで告白する乙女みたいに恥らう人間っぽいそいつを、少し冷静になって見詰めるあたし。身体は干からびてるのに全身びしょ濡れで雫を垂らしてるって、矛盾にも程があるだろ……。

警戒心丸出しのあたしの視線に気付いたのか、そいつのぼさぼさの頭が少し動いた。黒い前髪の下から死んだ魚みたいな濁った目がこつちを見詰め返しているのが見える。怪しさ全開の目の前の何かに、あたしは恐る恐る尋ねてみた。

「おまえって やっぱ幽霊なのか？」

悪い冗談みたいな質問に、そいつは素直に頷いて見せた。成程、やっぱりか……。はつきり幽霊だと分かったけれど、これは安堵するべきなのか怯えるべきなのか。助けてくれたから悪い奴じゃないとは思いたいけど、見た目がアレすぎるんだよね。

悩みつつ、あたしは目の前で正座する幽霊に視線を向ける。長くてぼさぼさの黒髪、骨と皮ばかりの干からびた身体、風化して色分からなくなった服。そして極めつけに際限なく滴り落ちる雫達。どこをどう見ても祟るぞ呪うぞって雰囲気だ。一昔前に流行った女幽霊の代わりにテレビから這い出てきたって、誰も不思議に思わないレベルだ。いったい何故こんな奴があたしを助けてくれたのか……。兎に角自己紹介とやらを聴いてみるか。

「おい、名前教えるよ」

未だ不信感を拭えず顔を顰めたまま、あたしは怪しい幽霊に先を促した。ぼさぼさの髪が少し揺れ、嬉しさのせいか若干高くなった

声がひび割れた唇から漏れる。

「……えっと、久遠くおん 悠ゆう……って、言うんだ……。悠って、呼んで……欲しいな……」

「ん、わかった。あたし丙盟 魅首だから。魅首って呼んでくれ」

やたら口籠る幽霊に乱暴に名前を教えると、悠と名乗ったお化けは嬉しそうに居住まいを正した。膝と膝が触れ合うくらいまで近付いてきて、冷気で背筋がぶるつと震える。鳥肌の立つ腕を、ヒビの入った骨を刺激しないように摩り、悠に続きを尋ねた。

「で、……悠。一寸、いやかなり訊きたい事があるんだけど」

「何でも……訊いて……。答えられることなら……全部答える、から……」

擦れた声で悠が言い、雫の落ちる髪を揺らして頭を傾げた。よく見ると、身体が透けて居間の向こう側が見える。非日常な事が起こりすぎて幽霊にもあまり動揺しなくなってきたあたしは、悠の言葉に甘えて胸の内に抱えていた質問を全てぶち撒けた。

何故あたし達を助けたのか、何故最初会った時は何も言わずにすぐ消えたのか、そもそも何で幽霊になってまでこの世に留まってるのか、さつきから好男の背後にぴったりくっ付いてるのはどんな理由があるのか……。矢継ぎ早に尋ねるあたしに、悠が言葉を詰まらせる。

「ん……と……。どこから、話せばいいのかな……」

「どこからでも。全部答えるって言ったよな？ だったらどの質問から答えてもいいし、質問に答えるって話し方が難しかったら普通に身の上話してくれればいい」

顎に手を当てて考え込んでいた悠が顔を上げ、やけに嬉しそうに頷いた。何だか長い話になりそうだと直感したあたしは、身体を冷やさないように傍に転がっていたタオルを羽織った。多分好男が寝てたやつだろう。これだけ大きければ毛布の代わりに悠から流れてくる冷気をシャットアウトできそうだ。

雪だるまみたいになったあたしを見て、悠は何時喋りだしたらいいのかと機会を窺っている。幽霊なのにやけに控えめな悠に、あたしは眼で話の続きを促した。

「えっと……。何でキミを……。魅首を……。助けたかっていうと、ね……。キミが、魅首が……。好男の仲間、だから……」

今にも息を引き取りそうな感じで悠がぼそぼそと呟いた。いや、既に死んでるから、もう息はしてない……。はずだよな。小鳥の巣にでもされてたのかと訊きたくなるぐらい絡まってる髪を弄りつつ、悠がぼつりぼつりと自分のことを話し出す。

「ぼく……。三高さんに……。このアパートの前の大家さんに……。すぐくお世話になって……。沢山、面倒見て貰って……。好男、三高さんの孫、だから……。恩返ししたくて……」

「ちょっと待て。おまえ男なのか？」

うつとりと幸せそうに語る悠を制止して、あたしが性別のことを確かめる。髪の長さや大人しい喋り方からつきり女だと思ってい

たのに。訊かれた本人はきよとんとして小首を傾げている。

「……うん、多分……。二十年位前のこと、だし……。自分のこと、あんまり覚えてないけど……」

「そ、そっか。途中で止めてごめんな。続けてくれ」

雲みたいに掴みどころの無い喋り方をする悠に、あたしは眼を泳がせた。そうか男か。何をそんなに気にしてるかって、さつきまで好男の背後にこいつがぴたりくっ付いてたことをだ。男か女かで大分意味が違ってくるじゃないか。

目の前で何度も顔に掛かる髪を掻き分ける悠を見て、あたしは一寸好男に同情した。こんな幽霊、しかも自分と同性の奴が背後霊だなんて……。教えてやりたいけど、知ったらどうするだろうな、好男。思い切り嫌がる様を想像しているあたしに、悠はマイペースに一人で話を続けている。

「……好男に、幸せになつて欲しい、から……。出来ること、色々、頑張つたんだ……。デートで、好男の彼女が……。好きなお店の予約取れるように……。とか……。喧嘩しちゃったら、……。仲直りできるように……。とか……。部屋、一寸温度下げ、二人がくっつくようにしたり……。彼女に、近づく男がいたら……。化けて出てみたりとか……」

何かいくつか怖いことも混じつたような気がするけど 幽霊相手に突込むだけ無駄だな。楽しそうに語っている悠に適当に相槌を打つあたし。話を聴いてみたら、本当に恩返しをしているだけで特に害があるわけでも無いようだ。ああ、勿論好男に対しての話だけだ。

陰鬱そうな外見と違い、性格はポジティブらしい。……ちよつと

方向性が間違ってる気もするが。

ぼさぼさ髪の幽霊は喋り出したら止まらない性質らしく、口籠る喋り方のせいもあって、あたしは何時の間にか睡魔に負けて瞼を閉じていた。悠の語り掛けはまるで子守唄のように心地良い。疲れていたせいもあってか、暖かいタオルに包まれてまるで雪だるまのような姿のまま、あたしはそのまま気持ちよく眠りに落ちていった。

第十九章 不協和音

気持ちよく眠っていたあたしは、誰かに肩を揺さぶられて目を覚ました。

せつかくイルカと一緒に海を泳ぐっていついかにも夏らしい良い夢を見ていたっていうのに……。叩き起こされて不機嫌絶頂なあたしは半開きの眼で辺りを見回した。くだらないことで起こしたんだつたら、責任取らせてやるからな。

視界の中の居間は窓から太陽の光が差しこんでいて明るい。ここから時計は見えないけど、とつくに夜は明けているみたいだ。何時の間にか蹴り飛ばしたタオルの上で、刈子が眉を八の字にして縋るような目であたしを見ていた。まさか、また敵が襲ってきたのか？ そう思った途端、朦朧としていた意識が急に覚醒する。寝そべっていた状態から跳ね起きたあたしの耳に、刈子の困り果てた声が聞こえた。

「寝ているところを起こしてごめんなさい。わたくしだけではどうしていいか分からなくて……」

「何だ？ 敵なのか？」

険しい顔して尋ねるあたしに、刈子は首を横に振る。その後、食卓の向こう側に半透明になっている悠と何時の間にか元気になった四季の姿が見えた。とても言えた状態じゃなかった四季の左目が、ちゃんと元に戻っている。

文句も言わずに治療しといてくれたんだ、好男。思わず感激しているあたしの前では、刈子がおろおろした様子で四季を盗み

見ている。敵襲じゃないなら何なんだよ、と言いかけるあたしを、十四季が左手の平で制止した。

「下がっている……。この邪悪なる穢れた魂は俺が浄化する……」

穢れた魂……？ もしかして悠のことか。そう言えば昨日の夜、十四季があたしに向かって同じ言葉をぶつけていたような……。あたしとそこのぼさぼさ髪の幽霊は同列ってことかよ。ったく、本当にどこまでも失礼な子どもだな。イラつくあたしに、刈子が心配そうな声を掛ける。

「武宮さんの様子がさっきからおかしいんです。穢れた魂とかよく分からないことを言ってますし、誰も居ない方向に一人で話し掛けたりしてますし……。もしかして目以外に見えない所も怪我をしたんじゃないでしょうか。例えば脳とか……」

そう心配する刈子に、危ないから下がっている、と十四季が命令している。うーん、この状況……十四季には悠が見えてるけど、刈子には見えてないってことでもいいのかな。

それにしても、普段は巫女の務めとか何とか言って博愛そうにしてる刈子の言葉、さり気無く酷かったな。あたしが物思いに耽っている間に、十四季が上着の内ポケットから黄ばんだ紙を取り出した。

朱色の文字が書いてあるってことは、御札か。それっぽいアイテムまで常備しているとは。さすが十四季、考えることが違うな。放っておいても大丈夫だろうと、あたしは再び特大タオルに包まれた。そのまま二度寝しようとするあたしの鼻先を黄色い何かが掠めた。硬い音がして床に亀裂が入る。

「
！」

跳ね起きて何が床に刺さったのかと見詰めると、さつき十四季が取り出した御札だった。ぺらぺらの紙が、鋭利な剃刀みたいになつてぴかぴかの床に刺さっている。この床って張り替えるのにいくら掛かったっけ……。あたしの脳裏にホームセンターのリフォーム値段表が浮かんで消えた。ま、いいか。ここは好男の家なんだし。

それよりも、紙切れが金属みたいになつてることの方が重大な事件だ。怯える刈子をあたしの背後に押しやり、おそらくこの事象を起こしている張本人であろう十四季を見る。当の本人は床を傷めたことなど気にもせず、片手に大量の御札を持って悠と対峙していた。

よく見ると、あたしのすぐ横の床だけじゃなく、壁にも家具にも御札が刺さっている。なんかとんでもないことになつてるな……。呆然としてみると、十四季が忌々しそうに舌打ちする音が聞こえた。悪態を吐いてるみたいだけど、小声過ぎてよく聞こえない。好男の財布のためにも、これ以上十四季に破壊行為をさせるわけにはいかないな。タオルを置いて立ち上がったあたしは、十四季の肩に手を置いた。

「おい、何してんだよ」

「……彷徨える穢れた魂を浄化してる」

また勿体つけた言い方を……。呆れ気味に片眉を上げながら、あたしは目の前に居る悠を指した。

「おまえの言ってる穢れた魂とやらって、もしかしてこいつのことか？」

十四季が頷き、そいつ以外に誰が居ると言うんだ、とか言ってい

る。ああ、やっぱり。軽く溜息を吐きながら、あたしは十四季に悠
のことを紹介した。

「こいつは幽霊だけど、好男に恩返しするためだけに存在してるか
ら悪い奴じゃないよ。ていうか、さっきはあたしのこと助けてくれ
たし、むしろ良い奴」

「危ない！」

折角説明してやってたあたしを、十四季が横に突き飛ばした。何
するんだこの糞ガキ！と思わず頭に血が上って叫びそうにな
ったけど、そんなこと言ったらこいつの意外に繊細な心がまた傷つ
いちゃうかもしれない。しょうがないから、今の無礼は菩薩のよう
に広い心で許してやるう。

壁に打ち付けた頭を摩りつつ十四季を睨むと、こっちの怪我など
気にも留めず悠に向けて謎の御札を次々に投げつけていた。硬質化
した御札がガラスケースを突き破り、好男ご自慢のコレクションが
ばらばらと床に落ちて壊れていく。やばい、はやく十四季を止めな
いと。でも言っても聴かないだろうし、これはもう実行使で行く
しかないな。

そう思ったあたしは、手裏剣みたいに御札を投げる十四季を後ろ
から羽交い絞めにした。

「離せ！ 悪しき霊を駆逐するのが武宮の務めなんだ！」

「だから、あいつは敵じゃないって言ってるだろ！ 少しは人の話
を聴け！」

「うるさいうるさいうるさいっ！ 何も知らない癖に偉そ

うに指図するな！」

お互い平行線状態の会話を、刈子と半透明になっている悠が戸惑った表情で聴いている。何も知らない？ それはおまえが何も言わないからだろ。本当に面倒臭い奴だな、と辟易するあたしの気も知らず十四季が手を振り切った。

「あ、おいっ」

「破ア！」

十四季の右手の平から暗黒爆錬武闘とは違う、何か青い光みたいなものが出て悠に当たった。うっ、と悠が苦しそうに顔を歪めて身悶えしている。何だ今の新しい能力か？ 唾然としているあたしの元を離れた十四季が一直線に半透明の幽霊に駆け寄り、青く輝く右手を翳した。既に半透明だった悠の身体が更に透けていく。

十四季の奴、本当に除霊できるのかよ。驚いている間にもどんどん悠の存在は薄くなっている。いくら幽霊だからって志半ばで強制的に抹消されるのは可哀想じゃないか。何時の間にか勝手に身体が動き、あたしは十四季から悠を庇っていた。青い光を遮るあたしに十四季が眉根を寄せて拳を握る。

「どうして……其れはこの世から除去すべき者なのに……」

半泣きの潤んだ目で睨まれ、あたしは十四季を睨み返した。背後では悠が弱々しい声で礼を言っている。十四季の拳がさらにきつく握り締められて、その口が悔しそうに真一文字を結んだ。どうして……、と十四季がもう一度同じ言葉を繰り返し呟く。

今にも涙が零れそうな十四季を警戒していると、急に踵を反して

廊下を走って行ってしまった。扉の閉まる音から察するに、どうやらトイレに閉じこもったみたいだ。何か後味悪いけど、これで一件落着かな。ふう、と安堵の溜息を吐いていると、刈子と眼が合った。眼鏡の位置を直して刈子が心配そうな声を出す。

「えっと……今のは何だったんでしょうか……？ 武宮さん、やっぱりどこか具合が悪いんじゃない……」

トイレから聞こえてくる泣きじゃくる声を気にしながら、おろおろと居間を見回す刈子。見えない何かに怯えているのか、視線が泳いでいる。まあ、肝心の悠には全然眼が行かないんだけど。あれだけ好き勝手に暴られるなら元気だろ、と刈子に返して、何も見えなかったのか？ と逆に訊き返す。

「見えるも何も、わたくしと魅首さん以外居間にいる人は居ないですよ」

少々むっとした様子で刈子が唇を尖らせた。ってことは、刈子にはあたしと十四季が急に仲間割れしたみたいに映ってたってことか。また面倒なことになったな……。どうやって刈子に悠の説明をしようかと悩んでいると、刈子がすつと立ち上がった。

「わたくし、武宮さんのところへ行って来ますね。原因は分かりませんが深い哀しみを抱えているようなので……業の枷を共に背負うのも巫女の務めですから」

「いや、今は構わないほうがいいと思うけど」

あたしの制止も聞かず、刈子は嗚咽の聞こえるトイレへ駆け足で向かって行ってしまった。初めて十四季と会ったときのことと言い、

刈子と十四季はあんまり相性が良くないんじゃないかと思うんだけど……。

まあ、そもそも十四季と相性良い奴なんてそう居ないだろう。……ていうか、今仲間になってる奴って、あたしも含めて付き合い難い奴ばかりなんじゃないか？

気付いちやいけないことに気付いて自己嫌悪に陥ってるあたしの背後から、神経逆撫でするような笑い声が聞こえてくる。

「うっひゃー、ちょっと見ない間にスタイリッシュなりビングが超前衛的になってるねー！ こりゃヨッシイが見たら驚くぞおー」

悪い意味でな……、と心の中で付け加え、あたしは振り向いた。

どうか寝る前に見た青年のスィフィは只の悪い夢でありますように

と薄目で空中に浮かぶ広告を見る。そこにはやつぱり、すっかり成長して更に生意気そうになったスィフィの姿があった。脱力して溜息を吐くあたしの顔の周りを蛾みたいに広告が飛び回る。

「ん？ どうしたの魅首うー。腕痛いの？ ヨッシイがもうすぐ仕事から帰ってくるから、治してもらおうといいねい」

さつきから好男は何処にいるんだと思ってたけど、仕事に行ってたのか。この非常事態にも関わらず律儀な奴だな。まあ昼間は一般人にも見える身体に戻るんなら、普段通りの生活をするのかな……って、そうじゃなくて。

「おいスィフィ、何でおまえ急に成長して大人になってんだよ。それに広告飛ばしたり、広告の中から変なりボン出したり……もしかして今まで能力使うの面倒臭がってたのか？」

問い質すあたしに、吊り広告が空中でびたりと止まった。中では

しゃいでいたスイフィがこっちを向いて首を横に振っている。

「違うねいー。ほら、最初に会った時と、アズアちゃんと話してる時に言っただじゃん？ 『あるお方』に呪われて、能力を使うのに必要なものを取り上げられちゃったって。あ、でもでもおー、魅首はそんな昔のこと覚えてられないかなあー」

「……そーいえばそんなこともあったっけな」

一々癪に障る言い方をするスイフィに、あたしは渋い顔で返事をした。悔しいけど、確かに忘れてた。でもそれとこれと何が関係してるってんだ？ 納得いかないあたしに、スイフィが輝くほど満面の笑みで続ける。

「なんと！ その取り上げられたものが、あのリュックサックの中に入ってたのねいー！ いやー本当に持ってたのがスオン先生でよかったねい、これがウエジュとかレエンだったら絶対取り返せなかつたしいー」

今頃スオン先生大慌てしてるだろうねい、いい気味だねいー、とスイフィは腹を抱えて笑っている。なんて都合の良い話だ……と呆れるあたしに、スイフィが急に真顔で人差し指を突きつけた。

「これでおいらの力は元に戻ったねい。まだ『あのお方』の呪いが掛かってるから完全復活とまではいかないけど。今までよりずっとずっと強くなったことだけは保障するねいー。だから魅首、ちゃんと契約書に書かれてる責任を果たしてもらおうよお」

契約書、責任。スイフィの発した言葉に、あたしの中で半ば封印していた記憶が蘇った。そうだ、電車の中で契約した内容をきちん

と果たさない限り、あたしはずっと日常に戻れないんだ。何としてもこいつから解放されたいけど、具体的に何をすればいいのかわからない。尋ねてみても、天邪鬼なスイフィのことだから絶対教えてくれないだろう。眉間に指を当てて考え込むあたしの周りを再び吊り広告が飛び回り始める。

「ほらほら返事はあー？ 黙ってたらだめだぞあー」

「……ったく……はいはい。わかりましたっつーの。それより強くなっただって、どーいうことだよ？ 好男とアズアみたいに連携して戦えるようになったってこと？ それとも四季みたいに身体強化できたり一発凄いのぶちかませるようになったってことか？ ……まさか、刈子とテンキイみたいに未来が見えるようになったってんじゃないよな」

これ以上幻術みたいな使いづらい能力を身に着けても、あたしじや使いこなせないし……。今までに使えようになっただけが透明化とかだっただけに、不安は一層大きい。新たな能力の詳細を危惧するあたしに、目の前を漂う吊り広告の中からスイフィの暢気な声が聞こえる。

「さあ？ 異世界こっちで使えるようになる能力はおいらと魅首、両方の影響を受けてるみたいだし。どんな能力が芽生えるかは魅首次第ってことだねい。ま、頑張ってえー」

「なっ なんだよその投げ遣りな態度はっ！ 一応契約してるんだから、もつと親身になれよっ」

至極当然な理由で憤慨するあたしに、広告の中の定規に寄り掛かっていたスイフィが頭を上げる。

「やだなあ、これ以上どう親身になれっていうのねー。おいらはとつてもフレンドリーにしてるのねー」

嘘つけ、好男やアズアと喋ってるときのほうがよっぽど打ち解けてたくせに。宙に漂う吊り広告の中で悠々自適に過ごしているスイフィに無言の抗議をしていると、玄関の鍵が開く音がした。好男が帰ってきたらしい。時計を見るとまだ一時四十分だけど、土曜でもないのにこんな昼間に帰ってこれるなんて、いったいどんな仕事をしているんだ。

好男の職種に疑問を抱きつつ、あたしは居間を見回した。さつき十四季が悠を除霊しようとしたせいで家の中はぼろぼろだ。これを好男が見たら……。まずい、実にまずい。

玄関の扉が開く音がして、ただいまー、と好男が何も知らずに言っている。この惨状をなんとかするべきだけど、どうすればいいかさっぱりわからない。考えすぎて思考が混乱してきたあたしの前を刈子が走って通り過ぎた。

「おかえりなさい、好男さん」

「お、刈子ちゃんがお出迎え？ 嬉しいなー」

「はい、疲れた人を癒すのが巫女の務めなのです。鞆、お持ちしますね」

なんかまた電波な事言ってるな、刈子……。そもそも巫女って神社で神事を行う人のことを指すんじゃないのか？ とかぐるぐる思考を巡らせているあたしに、刈子が素早く目配せしてウィンクした。

「ああいいいいよ、この鞆重いから。刈子ちゃんがそう言ってくれるだけで心がいつぱいだよ」

好男がやんわりと申し出を断るが、刈子は一步も引こうとしない。そこでようやく、あたしは刈子が考えていることを理解した。なるほど、この状況を誤魔化すには好男を家に入れなければいいんだ。良い考えだ、と刈子に共感するものの、自称巫女がこれでいいんだろっか……。

もやっとした気持ちで悩むあたし。玄関では、好男が鞆を足元に置いて刈子と楽しそうに世間話をしている。二人とも笑顔だけど何だか怖い。それに、何時までも立ち話作戦が通じるわけでもない。はやく好男を家から追い出す口実を見つけなくては。

普段使っていないところの脳までフル活用して、あたしはついに思いついた。そういえば昨日、刈子が図書館に行こうと言っていたじゃないか。これなら今好男を誘っても唐突さをカモフラージュできるだろう。即座に立ち上がると、あたしは玄関で談話している好男と刈子に提案した。

「なあ、もう仕事終わったんなら図書館行かないか？　いつ襲われてもおかしくない状況だし、『涙を流す』ってことについて詳しく調べておいたほうがいいと思う」

「魅首さんの言う通りですわ。お疲れのところ申し訳ないですけど、一緒に図書館に行ってもらえますか、好男さん？」

さつきと真逆のことを言う刈子に、好男は二つ返事で快く引き受けている。

「刈子ちゃんと魅首ちゃんが言うなら、そうしようか」

「おし。じゃー二人は先に行つてくれ。あたしは十四季を引つ張り出してくるから」

好男にばれないように刈子に合図を送ると、刈子も頷いて好男を外に押し出した。

「見てください好男さん、今日は空がとっても青いですよ。こんなに綺麗な空を見ていると創造主の偉大さがよくわかりますね」

「青……といえば、刈子ちゃんが着てるスカートも青だね。よく似合つてて可愛いよ、もうちょっと裾上げてみたらもっと可愛くなると思うんだけど」

「まあ好男さんつたら、鋭い洞察力ですね。まるで第二の使いみたいですわ」

聞いているだけで頭が痛くなる会話を繰り広げながら、好男と刈子が遠ざかつていく。ちゃっかり悠も付いて行つてるし。好男が振り返らないことを確認して、あたしは十四季が閉じ籠っているトイレに向かった。まだ扉越しから嗚咽が聞こえている。よく見ると、鍵が閉まつてない。感情が先走つて閉めるのを忘れたのか？ それとも、あの僅かな時間に刈子が十四季の心を開かせたのか。

折角閉じ籠つてるのに鍵が開いてるんじゃないか、と思いつつ一応ノックをする。

「今から図書館行くから。早く出て来いよな」

どうせ返事も無いだろうと諦め気味に声を掛けると、意外にもすぐ扉が開いた。泣き腫らした赤い目を擦りながら、十四季が中から

出てくる。確かに無言で返事が無かったけれど、これは予想外の反応だ。驚いているあたしの前で、十四季はすたすたと玄関へ歩み去っていった。何も言わないのがちょっとムカつくけど、何時までもトイレに立て籠もられるよりはマシか。

傍らに浮かんで軽口を叩いていたスイファイ入りの吊り広告を掴んでファイルに入れなおすと、あたしは好男達の後を追って図書館へ向かった。

第二十章 本に恋して…… 前編

真青な空に真白な雲がぷかぷか浮かぶ様子を見上げながら、あなたは真夏の日差しを満喫していた。

ここまで色々と騒動があつてスタボロになつてしまった肌をこれ以上傷めないように、と念入りに塗りこんだ日焼け止めが吹き出る汗で洗い流されていく。ああ、日傘を持つてくるんだつた……。

ギリギリ燃える太陽に照らされて出来た足元の影にむかつて、あなたは溜息を吐いた。これじゃ斑模様に日焼けしてしまう。速いトコ図書館に避難しなくては。

「……なあ、まだ図書館着かないのか？」

目の前をてくてく歩く刈子にそう尋ねると、長いお下げ髪が揺れて刈子が振り向いた。白くて若い肌が眩しい。思わず目に手を翳すあたしに、刈子が純真無垢な笑顔で返答した。

「もうすぐですよ。ほら、そこにオレンジ色の屋根の大きな建物が見えるでしょう？ あれが図書館です」

言われて景色を眺めると、確かに左手前方に蜜柑みtain色の屋根が見えた。距離は百メートル弱くらい。もう少しだ、頑張れあたしの肌。

脇に挟んだファイルの中から聞こえるスイフィの外に出せコールを完全黙殺してひたすらに足を進めていくと、刈子の言った通りすぐに図書館に着いた。早く日陰に入ろうとガラスの自動ドアの前に走るあたし。緑の足拭きマットの上に立って暫らく待ったけど、自動ドアは開く素振りも見せない。

「……？」

まさか休館日かと思って中を覗くけど、善良な市民の皆さんが読書を楽しんでいらっしやるし、それは無いだろう。この自動ドア、センサーが壊れてるのかな。小首を傾げるあたしの横を、好男が澄ました顔で通っていく。今度はドアが開いた。思わず眉間に皺を寄せてガン見するあたしの横を、刈子と四季が歩いていく。閉まりかけていた自動ドアはちゃんと開き、二人とも問題なく通り過ぎることができた。

皆に続こうと足を出した途端自動ドアが閉まり始めて、あたしも急いで中に入ろうとする。閉まるドアに肘が挟まれ、あたしは思わず痛みに声を上げた。

「な、何なんだよ今の……」

「変ですねえー。この自動ドア調子が悪いのでしょうか。公共の物なのに、小さい子が挟まれたりしたら危ないですわ」

「……ふん、この女が余りにも野蛮過ぎて機械が認識出来なかったんだろう。文明に受け入れられぬ者は元の場所へ帰るがいい」

刈子の後ろで仏頂面をしていた四季が振り返り、骨に輝が入ってる腕を押さえて呻いてるあたしを鼻で笑った。おまえ……、あんまり調子に乗ってるおとしばくぞ。歯を食い縛って痛みを堪え、立ち上がるあたし。刈子も心配してくれているようで実は別のことを心配しているし。

おまえらが次にピンチになっても助けてやらないからな。心の中で一通り毒づいて、そういえば助けてもらってたのはあたしの方だった……、と思い出し憂鬱な気分になる。

沈んだ気分のあたしを置いて、二人はさつさとそれぞれ別の書棚に向かつて行ってしまった。はあ……しょうがない、あたしも涙を流す秘訣が書かれた本を探すとするか。そんなピンポイントな本あるわけ無いだろ、と一人漫才をしつつ一番近くの書棚に歩いていくあたし。　かいじゅうカモリのぼうげん、うさぎのラス、ちびっこ魔女エルンシリーズ……？書棚の本達を眺めるあたしの頭が傾ぐ。しまった、ここは児童書コーナーだ。こんなところじゃ涙について調べることはできないな。

回れ右をして隣の書棚を見ると、今度は難解そうな題名の分厚い本がずらりと並んでいる。視神経と視覚野の関係性　脳が見せる幻覚　とか、認識は騙る　あなたの世界は脳の中に在る　とか……。医学書っぽいけど、脳のことについてばかりで涙とはあんまり関係なさそうだ。それにしても、なんかこういう本を見ていると……。

思わずあくびをするあたしの横を仲の良さそうな親子連れが歩いていく。幼稚園児だろうか、黄色い帽子を被った女の子が嬉しそうに絵本を抱いている。ちびっこ魔女　さつき見たアレの最新刊かな。おうちかえったら読んでね！　と子ども特有の甲高い声でせがむ女の子に、優しくそうなお母さんが頷いている。

纏められた綺麗な髪、きちんとお化粧している整った顔、それにセンスのいい洋服……あたしの母さんとは大違いだ。子育てしててもある程度美を保っていられるのはやっぱり都会に住んでるからかなあ？　田舎に居る母のちりちりしたパンチパーマを思い出しているうちに、親子連れはカウンターの方へ行ってしまった。そうそう、他人を観察してる場合じゃなかった。

本来の用事を思い出したあたしは、図書館の中を歩き巡った。学

校のグラウンド位ある広大なフロア中に満ちる本、本、本……。授業中にも見たことが無いほどの文字の量に眩暈がする。このままじや、あたしの頭が要領オーバーでパンクしてしまう。適当に『涙』の文字が題名に入っている本を数冊手に取ると、あたしは読書ブラスへ向かった。

足音を消すため絨毯が敷き詰められた図書館の一角、透明なプラスチックの壁で仕切られた場所が読書ブースだった。適度な間隔で置かれた白くて円い机を椅子が囲んでいる。その中の一つに刈子が腰掛けて本を読んでいるのが見えた。深く考えずに近づくあたしに、刈子が本から顔を上げる。

「あ、魅首さん。よかったら隣にどうぞ」

「うん」

言われた通りに隣に座るあたしを刈子がじっと見詰める。もしかして、もう日焼けしてるのか？ 冷や汗かいて自分の頬を触るあたしに、刈子がなんとも言えない愛想笑いで声を掛けた。

「魅首さん……変わった本がお好きなんですな……」

「へ？」

そこで初めて、あたしは自分が持ってきた本の題名をすっかりと見た。えーと、何々？ 女の涙で男を落とせ、泣き落として金を釣る 涙の錬金術師、涙目は貢がせる基本 っ？

思わず目が点になっているあたしを気遣うように、刈子はそそくさと読んでいた本に視線を戻す。

「ち、違っつ！ これは違っんだ刈子！ あたしはそこらへんの本を適当に掴んできただけで」

「言い訳しなくても大丈夫ですよ。わたくしはありのままの魅首さんを尊重しますから」

「だからっ！ 違っつてば！」

聞く耳持たずに目を逸らす刈子に必死に分かつてもらおうとする。あたしは色気とかで男に貢がせるような女では断じて無いんだ！ カツアゲすることはあるけど……。

誤解をされて顔が火照るあたしに、何時の間にかファイルから脱走したスイファイが、吊り広告の中でけらけらと笑い声を上げている。

「あはははー！ こんなことガッツな魅首には出来っこないねー！ 悪いこと言わないからさっさと本を戻してきなよおー」

「う、うるさいっ！ やってみなきゃわかんねーだろーが！」

スイファイに茶化されて、あたしの顔がさらに赤くなった。もうこっとなったらこの本達全部読んで嘘泣きでも何でも習得してやるーじゃないか。鼻息荒く意気込んで本を広げるあたしの横で、刈子が首を竦めて、魅首さんってやつぱり……、と呟いている。ふん、みてるよ。今に魔性の女になってやるんだからな。スイファイほどじゃないけど、あたしだって天邪鬼気質なんだ。意地でも成し遂げしてみせる。

固い意志を持ってあたしは本の頁を捲り 二分後に挫折した。

「あの、魅首さん……公共の本を枕にするのは如何なものかと……」
「これが丁度良い高さになるんだよな！。ほら、全部ソフトカバーだから寝跡付かないし」

なんて戯けたことをぬかしつつ、机に突っ伏すあたし。現代国語の教科書すらまともに一読出来ないあたしには、やっぱり荷が重すぎた。

どうせチャラけたことが口語体で書いてあるんだろうと高をくくっていたのに、見たことも無い漢字が振り仮名も無しに大量に出てくるんだもの。何より著者の思想があたしの持つそれと真逆なのが、理解を阻む一番の障壁となっている。

よく、世の中には 種類の人間が居る、なんて言う輩がいるけど、今日初めてあたしもそいつらの仲間入りを果たすことになりそうだ。世の中には少なくとも二種類の人間が居る 色香で金を巻き上げようとする人間と、暴力で金を巻き上げようとする人間だ。勿論あたしは後者に属する。どっちが人間としてマシかなんて議論は不毛だからやめておこう。

兎に角そんな言葉を言いたくなるぐらい、あたしとこの本の著者の間には深いふかい溝があるのだ。

全身の力を抜いて突っ伏しているあたしの下から、刈子が本を保護しようとして一冊ずつ引き抜いている。久しぶりに縦書きの文字を読んですっかり疲れきったあたしは動くのも面倒で、抵抗もせずにもどろんでいた。最後の本が引き抜かれると同時に、机に額をぶつけて流石に目が覚めたけど。腫れ上がったきた額を摩るあたしに、刈子が謝っている。

「ごめんなさい」

「いや、寝てたあたしが悪いんだし。ところで刈子はどんな本読
んでるんだ？」

電波全開の怪しい本でも読んでいるのだろうか、興味深々で刈
子の前に開かれている本を覗き込むあたし。カラフルな図解、わか
りやすく砕かれた専門用語……刈子が読んでいたのは小中学生向け
の人体図鑑だった。てっきり自分の趣味に走っているのかと思って
いたから、ちよつと意外だ。首から肩にかけての筋肉が描かれた図
を凝視するあたしに、刈子は頬を染めて本を脇へ押しやった。

「あ、あの、子どもっぽい、ですよ。しかも全然関係ない頁を開
いていて……すみません」

「は？ いやんじゃないの、あたしだって適当にやってるし」

何で隠そうとするのか首を捻るあたしの眼が、刈子の脇に積みま
れた本に向く。凝った装丁のハードカバーの本ばかりだ。これって海
外の児童文学かな。さつき読んでいた図鑑以外に、涙に関する本は
無いみたいだ。しげしげと本の山を見詰めるあたしの前で、刈子が
あたふたと手を振っている。

「あ、これは、その……」

「あれえー。かるつちつてば自分から『涙のこと調べよう』って言
ったのにい、違う本ばかり選んでるねい」

空中を蛾みたいに飛んでいる広告の中から、スイフィの間伸びた
声が聞こえる。嫌味って訳ではなく単に疑問を口にしただけみたい
だけど、言われた刈子は赤い顔を俯けてしまった。こいつ何も考え
てないから気にすんな、とあたしが刈子をフォローする。

それにしても、かるっちって何だよ。相変わらずイカれたセンスしてるな、スイフィの奴。変なあだ名にあたしが呆れていると、俯いていた刈子が顔を上げた。ずれた眼鏡を細い指で押さえ、恥ずかしそうにお下げ髪を弄っている。……なんか、ここに居たら刈子に迷惑を掛けそうだ。特にスイフィが。

これ以上刈子を困らせたら後で大変なことになりそうだったと思ったあたしは、持って来た本を抱えて立ち上がった。

「なんか邪魔しちゃったな。あたしどつか他の場所探してくるから、刈子はゆっくり好きな本読んでなよ」

「でも、わたくし……」

「いいからいいから。じゃ、またな」

空中を飛び回ってる吊り広告を掴み取ると、あたしは刈子に手を振って読書ブースを後にした。ついでに新しい本を探すが、今度はちゃんと題名と中身を見てから選ばう……。なんて考えていると、カウンターの方から好男の声が聞こえてきた。貸し出しお願いします、って、もう目当ての本が見つかったのか？

首を回して声のする方に眼を向けると、好男がカウンターに肘をついて寄り掛かっているのが見えた。その視線の先、カウンターの向こうには大人しそうなだけ可愛い大学院生くらいの女の子が。好男が何してるか大体分かったあたしは、何も見なかったことにして首を前に戻した。本棚に本を戻して次の本を漁るあたしの背後から、好男と女の子の会話が聞こえてくる。

「きみ可愛いね。こんな素敵な女ひとが居るなら毎日図書館に通いたく

なるよ。えつと……その苗字なんて読むの？」

「海原うみはらです。海原うみはらじゃなくて、海原うみはら。よく間違えられるんですよ
」

「そつか、海原うみはらさんね。俺、三高みたか 好男よしおっていうんだ。さっきの冗談は置いていて、本当に図書館にはよく来るから。何か困った時俺を見かけたら遠慮なく頼っちゃって」

好男の奴、また女を口説いてるし……。嫌でも耳に入ってくる会話に、あたしはげんなりして書棚の奥へ手を伸ばした。小さな本が隙間に挟まって折れてるのが見えたからだ。本の隙間に手を伸ばして悪戦苦闘しているあたしの背後では、女の子が急に打ち解けた様子になっていた。

「ああつ、好男さんですかー！ いつつも花柄先輩はなえからウワサ聞いてますよ！ まさかこんなにカッコい……えと、花柄先輩お呼びしましょうか？」

近くにいたお爺さんにわざとらしく咳払いされて、女の子が声のトーンを抑えた。好男ってそんなにカッコいいか？ 理解出来ない、と眉間に皺を寄せていると女の子がカウンターから出てきて好男を外に引つ張つていくのがちらりと見えた。

「あれ、仕事いいの？」

「丁度休憩時間なんですー。花柄先輩も外でコーヒー飲んでますよ、行きましょつ」

小声で、でもやけに黄色い声で、女の子は好男を外に連れ出して

いった。その後ろを悠がふらふらと付いていく。女の子の積極的な態度に啞然としてみると、本が倒れる音がした。奥に挟まっていた本は取れたけど、今度は書棚から落ちた本達を綺麗に並べ直さなくては。あちこち折れてぼろぼろになった小さい本を書棚の上に置き、せつせと本を元のように並べるあたし。ああ、紙媒体ってなんて不便なんだろう。これがパソコンだったらファイルを名前順に並べ、ってクリックするだけで全て元通りなのに。

そこまで考えて、あたしは気付いた。そうだ、パソコン。こんな都会の図書館なら、きつとパソコンの一台や二台置いてあるに違いない。そしてインターネットに繋がっていたら、世界中の情報が調べられるではないか！

普段ケータイでネット三昧してたっていうのに、こんな簡単なことに気付かないなんて……。

急いで本を書棚に詰めると、あたしは背伸びして書棚の上から図書館中を見回した。どうやら利用者が使えるパソコンは奥の方にあるみたいだ。ぼろぼろの小さな本を引っ掴むと、あたしはパソコンブースへ足を向けた。

第二章 本に恋して…… 後編

天井にぶら下がる案内板に導かれて着いたところは、最新式のパソコンがずらりと並ぶ近未来的な場所だった。

映画のDVDとか置いてあるし、流石都会は違うな……。DVD鑑賞の際はヘッドホンを着用してください、と書かれたプレートを見て、あたしは感嘆の溜息を吐く。

どの席に座ろうかと辺りを見回すと、四季の姿が見えた。一番奥の席に陣取って、古そうな本片手にパソコンに向かっていて。あいつ何してるんだ？　なんか忍び笑いが聞こえるし……。一寸様子を見に行ってみよう。

蠅男って映画が観たいよぉー、と駄々をこねるスイフィの声に耳を塞ぎつつ、四季に近づくあたし。スイフィの声に気付いて、四季が銀髪を揺らし振り向いた。あたしと眼があった途端にあからさまに嫌そうな顔をする。こいつまだ家を出る前の事怒ってるのよ。少々辟易しながらも、後々妙なしこりが残らないように、あたしは四季に頭を下げた。

「その……さつきはすまなかつたな。訳も聞かずに力づくで抑え込んでりして」

微妙な気持ちで頭を掻くあたしに、四季は顔を背けて真一文字に結んでいた唇を開いた。

「貴様如き野蠻で下賤な人間が……誇り高き武宮の血統とその務めを侮辱した罪は深い……。この償いには全身全霊を持ってしても未だ足りない」

「はあ？」

また意味不明な言い回しをする十四季に、あたしは容赦なく疑問符を飛ばす。なんかムカつくこと言われたような気がするけど……。釈然としない気持ちで悶々とするあたしを、十四季はフツ、と鼻で笑った。どうせ理解出来ないだろう、という感情がよく顔に表れている。その通りだから反論できないんだけど、何故か無性に腹が立つんだよな。

片肘ついて物憂げに溜息吐いている十四季の前で、あたしの両手の拳が怒りでふるふる震えている。

駄目だ、怒っちゃだめだ。ここでキレたらまた振り出しに戻ってしまう。何でもいいから話題を変えよう。

「……あのさ。さつきから武宮の血統がどうのとか言ってるけど、それって何なんだよ？ 悠を退治しようとして出した青い光とか、御札を金属みたいに固くするのとか、あれもおまえの能力なのか？」

「ゆづ……とは？」

乱暴な口調で尋ねると、十四季は怪訝そうに眉根を寄せた。さつきおまえが除霊しようとした幽霊だよ、と言い捨てるあたし。事のあらましをざっと伝えると、十四季は気に食わないといった感じで唇を尖らせた。

「……たとえどんな理由があろうとも、現世に留まるべきでない者が存在にしがみ付くのは見逃せない。世界の均衡を保つ為にも……それが武宮の務めだ」

「だから、その務めとやらは何なんだよ」

「一々装飾過剰な言葉遣いをする十四季に、あたしのストレス値が最大になりそうだ。血圧が高まってこめかみの血管を浮かせているあたしの手から、スイフィの入った吊り広告が逃げ出して宙を舞う。

「んもー、魅首は鈍いなあー。要するに、武宮さんちは退魔師か何かみたいな悪い霊を追い払うことが家業だったんでしょー。だよ、とつちゃん？」

「運命に選ばれるには其れなりの素養が必要……ということだ。此れだけ言えば十分だろう」

スイフィから変なあだ名で呼ばれても顔色一つ変えず、十四季が生意気な声色で答えた。そしてすぐにパソコンに眼を戻す。あたしも後ろから覗き込むと、モニターには最近のニュースが画像付きで映し出されていた。こいつがまともなサイトを見ていたなんて。

驚くと同時に、何でニュースなんか見てるんだという疑問も湧いてくる。画面に不思議そうにしている顔が映っていたのか、十四季が迷惑そうな表情で振り返った。

「此処を見ってみる。『相次ぐ不審火 犯人未だ見つからず』。六月中旬辺りから、関東地方のあちこちで大規模な火災が発生している。原因は全て放火……。記事に書いてある通り、犯人は捕まっていない」

十四季が指す箇所には確かに火災現場の写真と、それについての記事が載っている。でも、それが今のあたし達と何の関係があるって言うんだ？ 焼け焦げた民家の写真を見つめながら頭を悩ますあたしの前で、十四季が画面をスクロールする。そこに現れた写真に、

あたしは思わず声を漏らした。

「あ、これ」

見覚えのある焦げた町並みに、十四季も神妙な顔で頷いた。

「そう、昨日の場所だ」

そこは間違いなく、炎を操る変な女と戦った住宅街だった。写真の端に刈子の家も見える。散乱したバケツと水が流れっぱなしのホースが、困惑している消防員達の後ろに写っている。画像の下には、通報した市民の懸命な消火活動によって火は消し止められていた、と短い文が添えられていた。その文を指し、十四季が険しい目付きで説明する。

「この放火事件は、他の放火事件と比べて奇妙な点が二つ在る。先ず一つは、消防団員が現場に到着するまでに既に火が消えていること。現場が大量にガソリンの撒かれた廃タイヤの山であつてもだ。そして二つ目は、最後の事件を除いて、放火に気付くのは子どもばかりということ。大人は子どもの言うままに通報しているが、実際に燃え盛る炎を見ている大人は最後の事件の一人しかいない」

その最後の事件とは昨日のあれのことで、通報したのは好男だ。つてことは……？ 疑惑に顔を曇らせるあたしに、十四季が再び頷く。

「一般人には好男を除いて俺達『契約者』の姿が見えず、声も聞こえない。炎は消えていたのではなく、彼らの眼に映らなかつただけじゃないか？ だとすればこの一連の事件は、あの女によって起こされていると見て間違い無いだろう」

十四季の言葉に、あたしはもう一度モニターに映るニュースの内容に眼を通した。同じ条件で絞り込んだ放火の数は五十を超えている。そのどれもが白昼に起きた事件なのに、発見が遅れたせいで被害が拡大化した、と書かれている。幸いにもけが人は誰も居なかった、とも記事には書かれているけど、本当は……。

そこまで考えて、あたしの腕に鳥肌が立った。この写真には写っていないだけで、事件現場にはあの女に焼き殺された死体が転がっているかもしれない。姿も見えずに異臭を放つ……最初にスイフィに会ったとき想像した嫌なイメージが、今になって頭を擡げてきた。

腕を摩るあたしと反対に、十四季はモニターの前で拳を握り締めている。怒りと悔しさを滲ませる十四季の背中を見詰め、あたしは唇を噛んで目を伏せた。ここに居る誰よりも、十四季は真剣に調査を進めているんだ。家族の仇を討つために。血統がどうのこうのとか、ちよっとおかしなことを言ってるけど、泣いて怒るほど、こいつは家族を大切に想ってるんだな。

もう何度目だろうか、十四季の言動について茶化したり苛々するのは止めよう、と決意をしていたその時。十四季がいきなり立ち上がり、椅子の背凭れがあたしの鳩尾に直撃した。

「んげふっ！」

乙女として出しちゃいけない声を上げるあたしを押し退け、十四季がブラインドの掛かっている窓に駆け寄る。苛々する勿体つけた言い回しは許そう。でも、急に予測不可能な行動をして結果的に攻撃してくるのは許せん！

怒りの余り遂に血走り始めた目で十四季を睨み、あたしはゆっくりと窓に近寄った。殺意の塊が近付いてきていることなど露知ら

ず、十四季は窓にへばり付いている。どうやら外にいる誰かを見ているみたいだ。まさか、あの女が近くに来ているのか？

立ち止まっつて臨戦態勢に入るあたしに、十四季が人差し指で窓から外を覗くように指示してくる。警戒して窓の外を見ると、職員用の出入り口近くで好男とさっきの女の子がコーヒーを飲んでいる様子が見えた。

「……何だ、好男じゃん。たたくびつくりさせるなよ。おまえが急に窓に寄るから敵が来たかと思っただじゃんか」

「俺が警戒しているのは好男では無い……。貴様が『無害だ』などとほざいていた幽霊の方だ」

十四季の指が窓の外に居る悠を示した。日陰に隠れるように立っている悠が、好男のすぐ横に座る女の子の額に手を伸ばしている。ああ、外は暑いから……。悠から出る冷気で頭を冷やしてあげてるんだな。同じように好男の首筋にも手を当てている悠に、十四季は右手でガラスを搔いて顔を顰めている。

「ああやっつて人間から生気を吸い取っているんだな……。やはり人の容を失った者……。のさばらせておくわけにはいかない……。っ！

「ここからじゃ札が届かない、とか何とか言いながら、十四季が入り口に向かつて走り出す。慌てて追いかけようと振り向くと、五メートルも行かないところで十四季が右手を押さえて蹲っていた。

「お、おい。どうした？」

「くっ……こんな時に……。静まれ、俺の邪眼……！」

左目をぎゅっと閉じてそう言う十四季の額には脂汗が浮いている。一寸前なら、おおー迫真の演技だなー、とスルーしていたところだけど、昨日のことがあるからそうも行かない。もしかして好男が適当に治療したんじゃないかと疑念を抱きつつ、十四季の背中を摩る。

「大丈夫か？ 気分が悪いなら休んでた方がいいし。刈子の所まで運ぶから、肩に掴まっつて」

肩を貸そうと身体を傾げるあたしに、十四季は青い顔を横に振っている。ここまで来て、まだ強がってるのか、こいつ。いい加減格好付けるよりも保身に頭使った方がいいぞ、とあたしは自分のことを棚に上げて説教垂れようとした。口を開いたあたしの前に、十四季が悠に投げつけていた御札を差し出す。

「これを……持って行け……。俺の気が練りこんであるから……貴様のような何の取柄の無い人間でも、真の詞まことばさえ唱えれば……力を使えるはずだ……」

だらだらと汗を流しながら十四季が御札をあたしに無理矢理握らせた。いやいやいや……真の詞とか言われても知らないし……。こういうことは刈子に言ったほうが喜ぶんじゃないか？ と戸惑うあたしの顔を十四季が覗き込む。カラコンを外して元の茶色に戻っていたはずの左目が、また赤くなっていた。よく見るとただ赤いだけじゃなく、薄ら発光しているみたいだ。

目を睜みはるあたしに十四季が貧血で白くなった唇を開く。

「……真の詞とは力の詞……。そうそう口にしていいものじゃない……。一度しか言わないからよく覚えておけ……」

黒い包帯を巻いた右手があたしの胸倉を掴み、顔を引き寄せた。十四季の荒い呼吸が耳に当たって気持ち悪い。あたしが悪寒に身を震わせると同時に、十四季が何かぼそぼそと呟いた。

「え？ よく聞こえなかったもう一回言って」

「脳は覚えていなくとも……心が覚えているはずだ……。行け、早く……！」

そんなこと言われても、今にもぶっ倒れそうな十四季を置いて、暢気にお茶してる好男達の様子を見に行くわけにはいかないし……。黄ばんだ御札を握り締めて二の足を踏んでいるあたしを、十四季が三白眼で見詰めている。これはあたしがあつちに行くまで梃子でも動かないって顔だな。仕方ない、途中で刈子に声を掛けて十四季を見守ってくれるように言っとこう。

苦渋の決断をして、あたしは十四季に背を向けた。

「うづう……とっちゃん、おいらキミのこと絶対に忘れないよお……」

「縁起でもないこと言うなっつーの！」

嘘泣きしているスイフィを一喝して、あたしは走るの厳禁、と張り紙された図書館の中を駆け抜けていった。

陽炎が立ち上るほど暑い屋外で、好男はコンクリートの階段に腰

を下ろしていた。その手の中にはよく冷えたアイスコーヒーの缶が握られている。

今日は三十度を超すと天気予報で言っていたのに、軒下の影の中にあるせいだろうか、むしろひんやりとして過ごしやすい。そう好男は思っていた。先にコーヒーを飲み終わった海原が手の中で缶を転がして遊んでいる。花柄も外に居ると言っていたのに、その姿は全く見当たらない。

「いつもはココ、もっと暑いんですけど……今日はなんだか暑さが気にならないなあー。なんでだろ？」

海原が首を傾げ、さらさらのショートヘアが揺れた。缶コーヒーの外側に付いた水滴を拭きながら、好男がおどけた様子で軽口を叩く。

「俺も全然暑いって思わないな。海原さんみたいな可愛くて面白い子と一緒にいると、暑さも苦じゃなくなるのかもね」

「ええーそうですかあー。なんか照れるなあー」

暑さで上気した頬をさらに染めて、海原がはにかむ。飲み終わった缶コーヒーを脇に置くと、海原は青い空を見上げた。

「でも意外だなー。花柄先輩と好男さん、てつきり付き合っていると思ってたのに……。あ、ってことはつまり、わたしにもチャンス有りってことですね？」

満面の笑みでそう問いかける海原に、好男がにつこりと微笑み返す。ここは返答すべきだろう、と左手の腕時計から暑さも吹き飛ばす冷たいアズアの声があるが、一般人である海原には聞こえない。好

男も全く聞こえていなかった振りをして、海原に次の休みを聞いている。

「え、えと……来週の月曜日は一日中開いてるんです、わたし」

「なるほど、月曜日ね。俺午後から予定開いてるからさ、どっか遊びに行こうか」

「わーいいんですかー？ あ、実はわたしー、前々から行きたかったお店があるんですよー。市外だからちょっと遠いんですけど……」

肩を竦めて上目遣いに見上げてくる海原に、好男は爽やかに笑ってみせた。真白に磨き上げられた歯が真夏の太陽の光を反射して眩しく輝いている。

「ああ、じゃ、お店の名前教えてくれる？ 車持ってるから行き方調べておくよ」

「きゃー嬉しいー！ ありがとうございますっ」

諸手を挙げて喜ぶ海原のポケットから着信音が響く。慌てて携帯電話を開いて操作すると、海原は顔を上げた。嬉しそうに上気していた頬の色が少し引き、その表情からは少し焦りの色が見て取れる。

「あ、先輩そろそろ休憩から帰ってくるみたいですよ。わたし先に行ってますね」

「うん、色々話せて楽しかったよ。あとで連絡先訊きに行ってもいいかな？」

「はいっ！ 勿論です！ あ、コーヒーありがとうございます！」

小走りに自分の持ち場に戻っていく海原。その背中に好男が小さく手を振っていると、立ち上る陽炎の向こうから日傘を差した子連れの影が近付いてきた。それに気付いた好男が缶を置いて立ち上がる。日傘を差した影が止まり、首が傾いで綺麗に化粧をした顔が覗いた。

「あら……好男さん。こんにちは」

日傘の中で人影が優雅に一礼して、好男もぺこりと頭を下げた。その足元には黄色い帽子を被った幼い女の子が楽しそうに纏わり付いている。

「こんにちは、秋祢あきねさん。今日はカノンちゃんとお出かけですか」

明るい笑い声を上げるカノンと呼ばれた女の子を抱き上げる好男。秋祢と呼ばれた日傘を差した婦人が微笑み、今日から夏休みですから……、と答える。こっちは涼しいですよ、と、日向に佇む秋祢を好男が日陰に招いた。蝉時雨が真夏の昼の暑さを殊更に強調している。日傘を畳んで階段に腰掛ける秋祢の前では好男に抱き上げられたカノンが短い足をぶらぶらさせていた。

「ねーねー好男おじちゃん、だっこじゃなくて肩車してー」

幼い声で舌足らずにせがむカノンに、秋祢があたふたと両手を動かした。

「す、すみません。カノン、おじちゃんじゃなくてお兄さんって呼びなさいって言ったでしょう」

えーでもー、と唇を尖らせて不満そうな声を漏らすカノンを肩車して、好男が苦笑する。

「ははっ、子どもは素直だから構いませんよ。『おじちゃん』の方が打ち解けてくれるみたいだし」

好男の頭に小さい顎を乗せていたカノンが、こんどはブランコしてほしいー、と言っている。快諾して遊んでいる好男とカノンを眺め、秋祢が暗茶色の目を細めた。暫らくカノンのために一人遊園器具状態で筋肉をフル稼働させた後、すっかり満足したカノンから解放された好男は秋祢の隣に腰を下ろした。

肩を上下させてシャツに汗染みを作っている好男に、秋祢が持参の水筒からよく冷えた麦茶を渡す。よかったらどうぞ、と控えめに差し出されたコップを受け取り、一言礼を言ってから好男がそれを飲み干した。秋祢の膝に座ったカノンも、自分の水筒から麦茶を美味しそうに飲んでいる。

「いつもカノンと遊んで頂いて、ありがとうございます。わたし一人だと本を読んであげるくらいしか出来ないので、元気が有り余っているんです。この子……」

秋祢の白い手がカノンの薄茶色の髪を撫でて、さらさらと髪の流れる音がした。足をぶらぶらさせるカノンのポシエットからは児童書のタイトルがちらりと覗いている。遊び疲れて大人しくなっていたカノンの目が急に円くなり、青く澄んだ空を紅葉のような手が指差した。

「あ！ またキラキラだ！」

「……………」

大きな目を輝かせて空を見上げるカノンに、好男も空を見上げて目を凝らす。蝉の鳴き声が延々と響き渡る広大な空間は白い雲が浮かぶばかりで、光るようなものは何も見当たらない。膝の上ではしやぐカノンを宥めつつ、秋祢が困った様子で溜息を吐いた。

「この子ったら、大好きな本に影響を受けてしまって　『空から魔法の粉が降ってくる』なんて言うんですよ。それを集めたら自分も魔法が使える、って」

「ふーん、魔法ですか」

若い母親の腕に抱かれて見えない粉に必死に手を伸ばすカノン。そのポシエットから、児童書がばさりと音を立って落ちた。表紙にはちびっ子魔女エルルのらぶらぶマジカルパウダー、と書かれている。それを好男が拾ってカノンに差し出した。

「らぶらぶ……。カノンちゃんはおませさんだなあ。粉を集めてどうするのかな？　好きな男の子に振り掛けるの？」

「違うよっ。好男おじちゃんに魔法をかけるの！　おかーさんのこと好きになって、お城でけっこんしきをあげますようにっ。そして、カノンにおとーさんができるでしょっ？」

無邪気な顔で爆弾発言を飛ばすカノンに、好男と秋祢が固まる。いやーカノンちゃんは面白いこと考えるなー、と好男が苦笑し、そ

の横で秋祢の頬が見る間に赤く染まっていった。恥ずかしそうに両手で頬を隠す秋祢に、好男の顔から浮いた笑いが消えていく。

「あ、秋祢さん……」

「もう、カノンだったら。ごめんなさいね好男さん、またお会いしましょう」

そそくさと立ち上がり日傘を差す秋祢の肩に、好男が手を触れた。肩が小さく震える感触が手から伝わり、好男の顔に戸惑いの色が浮かぶ。雪のように白い手で頬の熱を冷ましていた秋祢がゆつくりと振り返り、長い睫に縁取られた伏し目がちな瞳が好男を見上げた。

「その……明日もまたカノンとここに来ますので、もし好男さんにお時間がありましたら、近くの公園で一緒にお弁当を食べませんか」

涙に潤んだ秋祢の瞳を暫らく見詰めた後、好男は頷いた。その顔にはまた爽やかな笑顔が戻ってきている。

「勿論。秋祢さんの手作り弁当期待してます」

しつかりと目を合わせて最高のキメ顔をする好男に、秋祢がまた頬を染めた。そのまま互いに会釈すると、秋祢はカノンを連れて歩いていく。遠のく日傘を好男が見送っていると、曲がり角のところで秋祢が振り返った。今度は気後れの一切無い笑顔で。

「新しい髪形、似合ってますよ。最初は好男さんだと気付きませんでしたけど」

虎刈りになった頭のことを言われて笑顔を引き攣らせる好男を置いて、秋祢とカノンは道を曲がって去っていった。

「は、はは……。そうですか……」

生温い風にすーすーする頭を押さえ、好男が涙目で呟く。やつぱり俺のイメージじゃないよなあ、と好男が頭を垂れていると、後ろから誰かに肩を叩かれた。微妙に力の籠った叩き方に嫌な予感を好男が覚えていると、背後から怒りに震える声が聞こえてくる。

「好男おー……あたしが暑い中ここまで走ってくる間に、随分とお楽しみだったみたいだなあ？」

「や、やあ魅首ちゃん」

何故だか分からないが怒り心頭の魅首に背後を取られ、好男の額から冷たい汗が噴き出し始めた。今は単なるボランティアだと言いつい訳しようと口を開き、その目が正面からやってくる人影に釘付けになる。

「おい聴いてんのか？ 十四季が調子悪くて倒れたんだよ。まさか、おまえ適当に治療したんじゃないだろうな？ 怒らないから正直に話せ」

「あ、え、えっと」

言いよどむ好男の首筋に手刀を当てて、魅首がドスの効いた声を出す。人影は更に近寄り、細かい人相まで視認できる距離になった。長い黒髪、細長いシルエツト、その姿は間違くなくま駆崎ま花柄はなだ。向こうも好男に気付いたらしく、笑顔で手を振って駆け寄

っ
て
き
て
い
る
。

「好男っ！」

「好男くん！」

二人の女に同時に名前を呼ばれ、三高 好男はまだ毛先のちくちくする虎刈り頭を抱え込んだ。

Another World the 4th chapter

真暗闇の中、小さなランプの赤い灯がちらちらと動いている。草の擦れる音や野獣の鳴き声から察するに、ここは山の中だろうか。背丈の高い草の中に身を屈め、スオンは何かを探していた。

星明りすら無いベルベットのよう密な闇にランプの灯を翳し、スオンが草を掻き分ける。葉で切って傷だらけになった手が止まり、紫色の植物に向けて伸ばされた。ようやく見つけた、とスオンが声を出さずに唇だけ動かす。安堵して出た溜息は白い塊となって空中に霧散していった。紫色の植物から若い葉を摘み取るスオン。それを懐から取り出した透明な容器に入れて密封すると、遙か後方を振り返る。

濃い闇に包まれた世界、スオンの登ってきた山の麓^{ふもと}。其処に針で突いた穴のように小さな灯りが見えることから、小屋の位置がわかる。山に登る前から変わっていない光景にスオンがほっとしていると、大地が揺れて地響きが聞こえた。驚いて取り落としたランプが足元を転がり落ちていく。闇に包まれた地面が照らされ、巨大な割れ目が出来ているのがスオンの眼に映った。

「なんとということだ……」

地響きと共に広がっていく峡谷に、スオンが生唾を飲み込んだ。暗黒の空に鳥達が羽ばたく音が木霊している。完全に光を失くした世界、残された道は崩壊の唯一つしか無い……。亀裂は小屋に伸びている、はやく紅太を安全な場所へ避難させなくては。崩れ行く地面に動悸する胸を押さえながら、スオンは手探りで下山の道を辿っていた。

駆け足で山を下ってきたスオンは、弾む息を抑えて扉に手を掛けた。

「……………」

扉の隙間から漏れる蠟燭の明かりとは違った白色光に、スオンが眩しそうに目を細める。小屋の前で扉を開くことを躊躇していると、内側から扉が開いた。溢れ出た白光が闇を切り裂き、気圧されたスオンが後退りした。この光は……。闇に慣れて開ききっていた瞳孔に容赦なく差し込む光に顔を顰めるスオン。凍えるような気温なのに、スオンは汗をかいていた。光の中から、白いマントを羽織った人影が現れる。

「今まで何処へ行っていた？ 異世界で任務をこなしているとき以外は、ここに集まっているように指示しておいたはずだが」

「ウエジユ団長……。申し訳ありません、『契約者』が傷を負ったので薬草を探していました」

未だ振動している冷えた大地に膝をつき、スオンは深々と頭を垂れた。その背後には強い光によって作られた影が長く伸びている。その様子を眺めるウエジユの眼元に不快そうな皺が寄った。光る粒子に包まれた手でウエジユが小屋の中のベッドを指す。

「『契約者』とは、あの毛布の塊のことか」

「 ? 」

俯けていた顔を上げ、スオンがベッドに眼を向けた。小屋を出る前まで紅太が寝ていたベッドには、人型に丸められた毛布が転がっているだけだった。啞然とするスオンの眼前に、ウエジユが紙切れを突き出す。そこに書かれた文面に眼を通したスオンの表情が曇っていく。近くでまた大きな地響きが起こった。

「ここにきての急激な崩壊の進行。陛下の体調が悪化したわけでもないのに如何してかと思っていたら、斯様なことがあった訳か」

摘んでいた紙をスオンに投げつけ、ウエジユが吐き捨てるように呟いた。地面に落ちた紅太の書置きを拾って懐に入れるスオンの前で、ウエジユが暗黒に染まった空を見上げる。

「この崩壊を食い止めるにはどうしたらいい？ 一時凌ぎでも構わない、意見を聞かせてくれ」

眩しい白光の中からウエジユが尋ねた。地面に走る亀裂と、漆黒の空を交互に見上げるスオンの表情に迷いが走る。

「……最初の崩壊と同様に、異世界イコセカイと此方コウの力の均衡が崩れているのでしょうか。異世界から押し寄せる力から此方を護る壁のようなものがあれば、少しは崩壊を止めることが出来るでしょうか……」

「壁、か」

スオンの言った事を繰り返して、ウエジユの周りに飛ぶ光の粒子が揺れた。固く組んでいた腕を解き、ウエジユが地平線の向こう、城が在る方向を見つめる。

「その役目、俺が引き受けよう。スオン、おまえは逃げた『契約者』を追え。まだ契約を解除したわけでは無いのだろう？ 存在の痕跡を追って見つけ出せ。そして今度こそ力で役に立つてもらおうぞ」

「しかし団長 彼はまだ子どもで、命の遣り取りをするようなこととは……」

口答えしようとするスオンの前に、ウエジユが光剣を振り下ろした。硬直するスオンの前髪が数本宙に舞う。

「いくら有識の学者と言えども、これ以上異世界まじゅうに入れ込むような態度は騎士団の長として許すわけにはいかない。他の者に示しがつかなくなるだろう」

鼻に皺を寄せてそう言い放ち、ウエジユが踵を反した。光に満ちた小屋の中から黒いマントを身に着けた少女を乱暴に引き摺り出すウエジユに、スオンが批難の色めいた声を上げる。

「納得出来ません！ 異世界まじゅうの者だから、此方の危機を越えたら関係が無いから、無碍に扱っても良いと決めることなどできませんよ。彼らにも我輩達と同じように人格があり、生活があるのです。だから」

鼻先に光の刃を突きつけられ、スオンが口を嚙んだ。切先を見詰める息を止めるスオンの前から剣を引き、ウエジユが冷たく言い放つ。

「だからどうだと言うのだ？ 『契約者』に気を遣って、そのせいでこの世界が滅びてもいいと？ おまえの眼にはこの大地に住む民の姿が映っていないのか？ 綺麗事を言うのは机に広げた紙の上だ

けに止めておけ」

反論を挟む隙無く自分の意見を語り、ウエジユは光の翼を広げ飛び立っていった。遠のく光の中、何も言い返せずただ唇を噛むことしかできないスオンを残して。

第二章 危険な香り

クマゼミの暑苦しい鳴き声を聞きながら、あたしは物陰から好男の様子を見ていた。

倒れた十四季のために一刻も早く好男を連れ帰らなきゃいけないのは分かってる。でも、目の前で繰り広げられているこれはどういう事なんだ？

滝のように流れ落ちる汗を拭いながら、あたしは好男が小さな女の子と楽しそうに遊んでいるのを凝視した。

さっきの海原とかいう女の子は何処に行ったんだ？ 図書館を出てから数分しか経っていないのに、もう他の子と それもよりによつて幼稚園児と楽しそうに遊んでるって……。刈子を口説こうとした事といい、好男はロリコンなのか？

ぜいぜいと口で息をしながら、あたしはくだらないことを考えていた。灼熱の散歩道を全力疾走してきて、あたしの頭が酸欠で悲鳴を上げている。兎に角、その時のあたしは、まともに思考を纏める能力が著しく低下していた。

「手作り弁当期待してます」

日傘を差した綺麗な女の人に、好男が鼻の下を伸ばしている。子どもだけでは飽き足らず母親にまで手を出そうって魂胆か。くそ、デレデレしやがって……。只でさえ不快指数の高さにイラついているのに、好男の行動一つひとつが更にあたしの神経を逆撫でする。どうしてこんなに腹が立つのかわからないってことが、余計にストレスを増大させている。

気がつくのと、あたしは好男の背後に忍び寄って肩を叩いていた。好男の肩がびくん、と震えて硬直する。やあ魅首ちゃん、と言うへらへら笑いの混じった声がやけ小さいのは、自分がどんな立場に置かれてるか自覚してるってことだよな。四季のことについて尋ねると、口籠るばかりでまともに返事もしない。

好男の卑屈な態度がブチ切れ寸前だったあたしの怒りに火を点けた。びしつと力を籠めた手刀を好男のこんがり日に焼けた首筋に当てて、ドスの効いた声を出すあたし。

「好男っ！」

「好男くん！」

同時に聞こえた好男を呼ぶ声に、あたしは驚いて辺りを見回した。真正面から清楚そうな格好をした女が、にこやかに手を振って好男に駆け寄ってきている。こいつも好男に誑たがかされた一人なのか……。

返事もせずに頭を抱えている好男を見下ろし、これ以上被害者を増やさないためにも一度絞めておこう、と決意するあたし。手刀を一度離して振り下ろそうとすると、空気の流れに気がついたのか、好男が前方に向けて猛ダツシュした。手刀が何も無い空を切り裂いて、よくも逃げたな、と心の中で舌打ちするあたし。そのまま逃げようとする好男の手を、正面から来ていた女が掴んで引き止めた。

「久しぶりだね、好男くん。ちょっとお話……いいかな？」

「え、えつと　今はちよつと……」

拳を鳴らして近づくあたしに、好男が引き攣った愛想笑いを浮かべて、女から手を離そうともがいている。断られたことがショック

だったのか、好男の手を握る女の顔が俯いた。

「そっか……忙しいよね……。ごめん、引き止めちゃって……。わたしったら……」

紫がかった長い黒髪が顔を覆い、女が暗い雰囲気を辺りに撒いている。うう、と好男が情けない声を出して、あたしと女を交互に眺めた。そうこうしている内にも女の顔はどんどん俯いていく。真夏の真昼だっていうのに女の周りだけ雲が掛かったみたいに日が翳っているようだ。気のせいかな蝉の声も小さくなったような……。何だか薄ら寒いものを感じたあたしは好男に近づく足を止め、少し離れたところから声を掛けた。

「五分待つから、その間にそいつを何とかしろよ」

「ええ？ そんな無茶な」

「……好男くん？ 何か言った……？」

ぶつぶつ何か呟いていた女が顔を上げ、好男の目を覗き込んだ。太陽がさんと降り注いでいるのにハイライトの無い目に見詰められて、好男の喉仏が音を立てる。嫌な汗をかいてシャツがぐっしより濡れてるのがここから見てもわかるくらいだ。確かにこの女の人少し怖いけど……こっちは怪我人が待ってるんだ。はやく話にケリをつける、と口元に手を当てて好男を急かすあたし。

困り果てた顔で眼を泳がせていた好男も腹を据えたのか、大きく深呼吸するとこれ以上無いくらいキザな態度で背筋を伸ばして女と向かい合った。

「いや、なんでもない。俺の方こそごめんね。座って話でもしよう

か、生憎コンクリートの階段しか席が空いてないけど」

生憎も何も、最初からここには座る場所なんて階段以外に無いじゃないか。何を寝惚けたこと言ってるんだと顔に皺寄せて呆れるあたしとは正反対に、黒髪の女はくすつと微笑んでいる。なんか好男はエスコートとかしてるし、面白くない。

段々眉間に皺が寄っていることに気付き、あたしは眉を手で押さえた。この歳で眉間に皺が刻まれるのは余りに嫌すぎる。両手を眉に当ててアホっぽい格好で立っているあたしの前では、好男が女に自販機で買った飲み物を渡している。

「はい、これ花柄はなえの分」

「……ありがとう」

受け取ったペットボトルを握り、花柄と呼ばれた女が蓋を開けようと悪戦苦闘している。見かねた好男が代わりに蓋を開けた。礼を言って紅茶を飲む花柄の口元にあたしの眼が釘付けになる。そういえば、この暑い中を走ってきて喉が渴いたな……。あたしも何か飲もつと。ポケットからキャラクターものがま口財布を取り出して自販機に近づくあたし。背後では好男と花柄がペットボトル片手に世間話をしている。

「あのね、新しく後輩が入ったんだけど……海原さんっていうの」

「ああ、さつき会ったよ。元気そうな子だよな」

二人の雑談をBGMに、ソーダかコーラどっちを飲もうかあたしが頭を悩ませる。カロリーゼロって書いてあるし、コーラの方にし

ようかな。小銭を入れてボタンを押すと、冷えたコーラが転がり出てきた。好男の冗談にくすくす笑っていた花柄が不思議そうな顔をしてこつちを見る。

「今、誰もいないのに自販機が動いた……」

「そ、そう？ 疲れてるんじゃない？ 花柄おまえって仕事に根詰めるタイプだしさ」

慌てて自販機と花柄の間に割って入る好男。花柄の視線があたしの手握られているコーラに注がれる。

「コーラが浮いてる……」

ハイライトの無い目に凝視されて、あたしは思わずコーラを背後に隠した。

あれ……でも、あたしの身体は一般人には見えないからコーラが宙に浮いてるのは変わらないのかな？ というかコーラが見えてるんだったら、あたしの服とか財布とかも見えてないとおかしくないか？ だけど服とかは見えてないみたいだし……見える見えないの基準はいつたい何なんだ？

初めて一般人に存在を認識されそうになってあたしが困惑していると、好男が花柄の肩を強引に自分の方へ引き寄せた。

「あっ……好男くん……」

「そのピアス綺麗だね。よく似合ってる。誰かにプレゼントして貰ったのかな？」

かなり無茶な話題の逸らし方にも関わらず、花柄は頬を薄ら桃色

に染めて恥ずかしそうに耳を隠した。

「…………自分で買ったの…………。プレゼントしてくれるような人、いないから…………」

好男くん以外の人からのプレゼントなんて受け取らないけどね……、と花柄が小声で付け加える。残念ながら、好男はあたしのことが花柄にバレないか心配するので精一杯で、花柄の呟きが聞こえなかったみたいだ。花柄が惚けてるうちにコーラを飲み干すと、あたりは空になったペットボトルをゴミ箱に捨てた。

そろそろ三分くらい経ったんじゃないか？ ちゃんと五分間で話を終わらせられるかと好男を見ると、丁度好男と花柄の間に悠が挟まっているのが視界に入った。思わず目を擦るあたしに、悠がぼさぼさの髪の下から瘦せこけた手を振っている。

「おまつ　そんなとこで何してんだよ」

「え、何？　魅首ちゃん？」

「…………好男くん…………何か言った…………？」

好男が首を傾げ、その言葉につられて花柄が疑問符を浮かべる。しまった、好男には悠が見えてないんだった。慌てて口元を押さえて何でもない、と首を横に振ってみせる。好男もあたしから眼を逸らして花柄に向けて笑顔を取り繕っている。

「え、えつと…………みしゆ　ミシユランの本もう読んだ？　近くに二ツ星とったレストランがあるんだけど、今度の休みに連れてってやるよ」

「嬉しい……。来週の月曜日、楽しみにしてるわ」

「げ、月曜？ うわ、そっか職場同じだもんな」

「……………どうしたの、好男くん？ もしかして……………都合悪かった？
……………ごめんね……………」

わたしってタイミングの悪い女だよね……………、と花柄が呟き、また暗い雰囲気になり始めた。どんどん頭が落ちていく花柄の前で好男はおろおろしている。なんか後味悪いけど、区切りがいいからこの辺で好男を拉致するか。

腕捲くりしていると、二人の間に座っていた悠が立ち上がった。雫の滴り落ちる髪を引き摺り、悠が花柄に干からびた両手を伸ばす。そっぴいえば四季から除霊用の御札を渡されていたっけ……………。いかにも怪しい動きをする悠に、どうしたものかとあたしは考え込む。

落ち込む花柄の額に悠が自分の額を近付けて、暫らくすると今度は好男の方に移動して額を付き合わせた。眉間に指を当てて苦悶していた好男の目に光が差し、普段の爽やか笑顔を花柄に向ける。

「じゃあさ、再来週の日曜ならどう？ 図書館の本の整理終わった
ら、ってことで。俺も手伝うからさ」

「……………それなら大丈夫かも」

花柄が手帳を取り出してスケジュールを確認し、好男が頷いた。どうやら二人の間で話が纏まったみたいだ。連れて行くなら今だろう。嬉しそうにうろつくと好男の周りを漂っている悠を押し退け、あたしは好男の手を掴んだ。

「行くぞっ」

「あ、うん　またな花柄」

「またね、好男くん」

好男が花柄に別れを告げ、花柄も手を振りかえした。この暑い中またあれだけの距離を移動するのかと考えるとうんざりする。大きな溜息を吐いていると、あたしの額にひんやりとした何かが触れた。驚いて足を止めると、何時の間にか悠が横に立ってこっちを見ている。ひんやりしたものの正体は悠の手だった。さつき海原っていう女の子と好男が一緒に居たときも、悠はこうやって頭を冷やしていたっけ。

幽霊と言っても、やっぱりこいつは良い霊なんだな。ありがと、と言って笑ってみせると、ぼさぼさの黒髪の奥で唇が微笑みの形になるのが見えた。

「魅首ちゃん、前っ！」

「へ？」

いきなり好男に名前を呼ばれて振り向くあたしの腹部に軽い衝撃が走った。尻餅をつくあたしの前で、同じように地面に倒れた少年が身を起こしている。……なんか、どっかで見したことあるような……。目を細めて凝視していると、少年がもの凄い勢いで謝罪してきた。

「い、ごめんなさいっす！　急いでたから、前見えてなかったっす

……」

「あー！ おまえはっ！」

忘れもしない、あたしの大好物の蟹を武器にして闘う少年じゃないか！ アスファルトに座り込んだまま蟹の少年を指差すあたし。バンダナをしてないから、一度見ただけじゃ分からなかったんだ。向こうもこっちの顔を見て、血相を変えている。

「うわわわわっ！ さ、さよならっす！」

「逃がすかつ」

少年が身を翻すより速く、好男が左手の腕時計から黒髪を出して少年を拘束した。情けない声を上げる少年に、好男が不機嫌そうな顔で詰め寄る。多分髪のことと怒ってるんだろうな……。あたしもこの少年には大好きな蟹を冒瀆されたっていう恨みがあるし。

黒髪から逃れようともがいている少年を見詰め立ち上がるあたしのポケットから、ぱさりと本が落ちた。図書館から持ってきたやつてたのか、後で返しに行かないと。本を拾おうと手を伸ばしたあたしは、痛いほどの視線を感じて目を上げた。

黒髪の猿轡さるべしわを噛まされている蟹の少年が、茶色の瞳でこっちを睽ぞく目している。好男の奴一寸やり過ぎなんじゃないか、と思いつつ、所々折れてボロボロになっている本を少年の前に差し出すあたし。

「これ、大事な本なのか？」

「っ。っ」

蟹の少年が必死に首を縦に振り、声にならない声で返事をした。

こんなボロつちい本がそんなに大切なのか。何か重大な秘密でも書かれているのかな？

少し興味が湧いて本を開こうとすると、今度は猛烈な勢いで首を横に振っている。見るなつてことか……。ますます内容を読みたくなる気持ちを抑えて、あたしはポケットに本を仕舞った。少年の目が潤んでいることに気付き、好男に声を掛ける。

「好男、少し縛る力緩めてやれよ。また泣き出されたら厄介だ」

「……わかった」

好男の言葉と共に、腕時計から出ていたアズアの黒髪が幾筋か解けた。猿轡から解放された少年が息を切らして新鮮な空気を吸い込んでいる。おいおい、窒息寸前だったってどういうことだよ。加減つてもものがあるだろう、と好男を睨むと苦笑して後頭部を搔いている。まったく好男め……。

蟹の少年は息を整えると、真直ぐにあたしを見詰めて口を開いた。

「あ、あ、あの……っ！ その本と、あと、よくわかんないけど透明な珠みたいなもの、返してくださいっす！」

「……珠？」

身に覚えの無い単語を聞いて、あたしの首が傾ぐ。吊り広告がぺらりと宙に浮かび、スイフィの間延びした声の中から聞こえてきた。

「やったよーん。ていうかあ、もう封印珠はおいらの体の中に取り込んだじゃったしいー。取り戻そうとするなんて無駄無駄あー。諦めたほうがいいねい」

一人を小ばかにするような言葉を吐くスイフィが、広告の中からリボンを出して少年の頬を摘んでいる。両頬を抓られて遊ばれている少年が今にも泣きそうな声で哀願した。

「でも……でも、それが無いとスオン先生が困るっす！ 研究がはかどらないし、何より先生自身が団長にどやされることになるっす」

「あーんな鬱陶しくて暑苦しい教師なんてどうなっても知らないもんねー！。そ、れ、に。あの珠の中に入ってた力は元々おいらのものだったんだねい。それを返せって言うのはあー、お門違いだと思っよお」

取り付く島もないスイフィの言い様に、蟹の少年が悲しそうに目を伏せた。八の字になった眉の間に薄ら皺が寄り、苦悩しているのがよくわかる。

「……やっぱり……口で頼むだけじゃ駄目っすよね……」

残念そうに呟く少年の縛り上げられた手がもぞもぞと動いた。よく見えないけど、ビニール袋みたいなものを握っている。そのとおりだねー、とスイフィが暢気にのたまって、生温い風が吹いた。

普段はこういうこと意識しないんだけど、この時ばかりは何故か風向きが気になった。……こっちは風下だ。そして散歩道に漂うこの芳醇な香りは……蟹。

「やばい！ 風上へ回れ好男っ！ 粉で攻撃されてるぞ！」

「え？ 粉？」

「了解した」

とぼけた顔してる好男の腕時計からアズアの声がして、黒髪が捕まえていた少年を空中に放り出した。うわぁー、とか悲鳴を上げて蟹の少年が落下している間に、好男の体をアズアの黒髪が覆っている。すっぽりと黒髪の鎧に包まれた好男が、というか多分アズアがあたしの腕を掴んで素早く抱き上げると人外の跳躍力で飛び上がった。

「どーなってるんだよアズア！ 真っ暗で何も見えないんだけど」

「あの少年が撒いた蟹の殻粉を吸い込まないようにしたただけだ。暫らく我慢している」

「魅首ちゃんは？」

密封された鎧の中から好男の声がするけど、激しい風圧でとても喋れたもんじゃない。とりあえず、ここに居る、って言ったけど唇が動かなくなってる全然言葉にならなかった。代わりにアズアが、ちゃんと抱えているから安心しろ、と言っている。三階建ての図書館の屋根が近付き、あたしを抱えた黒い鎧が着地した。

激しい音と共に屋根が凹む。今の、絶対中に居る人達に聞かれたよな。あたしは見えないからいいけど、好男が姿を見られたら……。想像して冷や汗をかくあたしの横を吊り広告が掠めていく。勢い余って数メートルほど行き過ぎ、中からスイフィの憤慨した声が聞こえてきた。

「皆ひどいよっ！ おいらのこと置いていくなんて！」

「……そなたは自力で逃げれるから、手助けなど不要だろう……」

呆れ気味のアズアにスイファイが抗議を捲くし立てている。あたし達の居る遙か下方では、蟹の粉が沢山入った袋片手に、少年が大声で叫んでいた。

「ボクは、　　ボクは絶対に諦めないっすからね！　もつと強くなっつて、また来るっすから！　本と珠、ゼツタイ返してもらっつすよ！　　」

負け犬の遠吠えとも言っ捨て台詞を残して、蟹の少年は長い並木道を一直線に逃げていった。

兎に角当面の危機は回避できたけど　　なんかまた厄介なことになるりそうだな。面倒なことに巻き込まれてうんざりな気分になっているあたしの横で、そういえばスオン先生何処言っただんどう？　とスイファイが呟く声が聞こえた。

第二三章 悪い予感

蟹少年が捨て台詞を残して疾風のように走り去っていったのを見送った後、あたしと好男は図書館の屋根から下りて刈子と四季の元へ向かった。屋根が凹む音に気付いて集まってきた近隣住民を見てびくびくする好男に、アズアが心配するなと言いつき聞かせている。

「今は一般人に姿を視認されない状態だから、そうきよろきよろするな。足元に躓くぞ」

「や、でも……知り合いに囲まれると生きた心地がしないんだよ」

青ざめた顔で人ごみに視線を送る好男。集まった野次馬の中には、海原と花柄も居る。それ以外にもどうやら知り合いが居るみたいで、さつきから好男はあたしの影に隠れながら走っていた。暑い中疲れた身体に鞭打って走るのって本当疲れる。悠が首筋にひんやりした手を当ててくれてるお陰で少しは助かってるけど……。

自動ドアの前に立ち、ガラスの扉が開くのを待つあたし。間髪入れずに好男が来たからすぐドアが開いたけど、またあたし一人ではセンサーが反応しなかった。この機械ちよつとおかしいんじゃないか。むっとして唇を尖らせていると、ブーツで駆けて来る足音が聞こえた。刈子だ。何故かお下げだった髪を解いて、長い髪が腰あたりで揺れている。

「魅首さん、好男さん！ さつきの音は？ お怪我はありませんか？」

刈子の顔が心配のしすぎで蒼白になっている。そんな顔をしてい

たら、まるで刈子のほうが何か大事に遭ったみたいじゃないか。妙に慌てている刈子を宥めて、あたしは先ほど起こったことを掻い摘んで話した。生真面目な表情で耳を傾けていた刈子が、ほっと胸を撫で下ろす。

「そうでしたか……。よかった、お二人ともご無事で……」

顔色の悪い刈子に、好男が刈子ちゃんこそ大丈夫？ と尋ねている。焦点の合っていない青い目が伏せられ、米神に手を添える刈子。何か重大な心配事でもあるようだ。どうした？ と尋ねると、刈子は細い首をふるふると振った。

「十四季さんと待っていたら、新しい天啓が見えたんです。ひどく不吉な未来……。『世界』が崩壊するという未来を……」

「ふーん、『世界』」

怯えた様子の刈子を前に、あたしは気のない声を出した。いきなり世界とか言われても、漠然とし過ぎててよく分からない。そもそも刈子の言う『世界』が、スイフィ達が居た世界なのか、あたし達の住んでいる世界なのか、それとも両方ひっくりくるめたものなのかも分からない。

あたしが反応に困っていると、刈子の眼鏡に影が現れた。ここはテキキイと直接話したほうが状況を把握できるだろう。元気の無い刈子の顔を覗き込み、あたしはテキキイに話しかける。

「で、『世界』って何なんだ？ 何時崩壊が始まるんだ？ それはあたし達で止められるもんなのか？」

……これじゃ一方的に質問をぶつけてるだけだな。相変わらず他

人と円滑に話を進めることができない自分自身に幻滅しつつ、テンキイの答えを待つ。小さな円いレンズの中でテンキイが申し訳無さそうな顔をしている。

「えっと　実は僕にもよく分からないんだ。ほら、最初に言ったよね？　僕的能力は飽くまで『他人に未来を見せるもの』であって、僕自身が未来の像を見れるわけじゃないんだ」

そう前置きをしてから、テンキイが金色の前髪を鬱陶しそうに掻き揚げて事の経緯を話し始めた。どうやらテンキイは定期的に刈子に未来を見せ、自分達が望む方向へ未来を調節することでここまで生き延びてきたらしい。あたしが四季を頼んで図書館を出て行った後も、これからの指標を兼ねて刈子に未来を見せていたようだ。

「そして、刈子ちゃんは何か恐ろしいものを見た、ってことが……」
腕を組む好男に、テンキイが眼鏡の中で頷く。

「未来の像を見ている最中、刈子が呟いていた言葉から察すると『世界』っていうのはこちら辺一带を指していると思う。……異世界^ちでは『市』っていうのかな。残念だけどそれ以上具体的なことは分からない。時間についても、一週間以内までは絞れるけど今から何日後かまでは……」

僕的能力だと精々一週間先くらいまでしか未来が見れないからねとテンキイが補足した。蟹の少年に絡まれただけでも厄介だと思ってるのに、未来予知だとか複雑なこと言われると頭がパンクしてしまいそうだ。絡み合った情報を整理するために紙に書いておこう。紙を探してポケットにつっこんだあたしの手が御札に触れ、四季のことを思い出した。

「……そういえば十四季はどこに居るんだ？ 何処かに寝かせてあるのか？」

読書ブースの中に首を伸ばして見回すあたし。その背後で、刈子が我に返って慌てて立ち上がりブースの奥へ駆けていく。ああ奥で横になってるのか。確か長いカウチソファがあつたし、寝転がるには打って付けの場所だよな。そう胸の中で一人納得していたあたしの目が円くなった。

「え、えっと。暴れて逃げ出したら危ないと思つたので……」

ぐったりと目を閉じている十四季の手に巻かれたりボンを解きながら、刈子が誤魔化し笑いをした。いやいや、怪我人を縛り上げるなんて自称でも巫女はやっちゃいけないでしょう。足に巻かれたりボンの結び目を解く様子を見ながら、声に出さず突込みを入れるあたし。なんかよく見るとかなり専門的な結び方だし……。モヤイ結びとか言つんだつたかな？ それは別の結び方か。

刈子の不思議な思考回路を理解するのに苦しんでいると、どこからともなく腹が鳴る音が聞こえてきた。

「……今の、魅首ちゃん？」

「ち、違つつつの！ あたしじゃないつてば」

憤慨して両手を挙げた途端、あたしの腹からも大きな音が鳴った。恥ずかしさの余り腹を隠して蹲るあたしの耳に、またあたし以外の腹の音が聞こえる。これ、もしかして 十四季から聞こえてきてる？

「ごそごそと音を立てて、リボンから解放された十四季がソファの上で芋虫みたいな動きをした。

「ん……腹減った……」

それだけ言つて、十四季がまた動かなくなる。こいつ、只単に腹が減つてただけだったのかよ！ あれだけ心配させておいて、とんだオチじゃないか。がっかりするやら腹立たしいやら、もうどうしていいか分かんないし！ ドリフみたいにずっこけたあたしの腹が一際大きな音を立てた。ああ、そういえばあたし朝御飯も昼御飯も食べてない……。ちよつと待て、十四季はそれに加えて昨日の夜も御飯抜きだったような……。ていうか、水分補給してるところも見えないし。

「あのさ刈子、十四季つて今日の昼何か食べた？」

「いいえ。武宮さん、あの一件まではずっと寝ていましたから……。わたくしも、好男さんと朝食を食べたきりですわ」

あの一件てのは多分、好男の家を御札で破壊した件のことだろう。育ち盛りの男の子が丸一日飲まず食わずってのはかなり辛いだろうな。成長期の終わつたあたしが二食抜いただけでこれなんだし。身体の中で栄養を求めて蠢く胃袋をpushさえつつ、あたしは考えた。あたしのためにも、何処かで食料を調達しなければ。好男の家に帰るのが一番手っ取り早い方法だけど、そしたらあの破壊の限りを尽くした居間が好男の眼に触れてしまう。

顔を曇らせるあたしを見て心中を察したのか、良い事を思いつきました、と刈子が両手を叩いた。

「確か、図書館から出るバスで武宮さんのお家に行けたはずですわ。

武宮さんも、自分のお家で休んだ方が疲れが取れるんじゃないでしょうか」

なるほど、バスだったらこれ以上歩かなくて済むし、いいかもって、何で刈子が十四季の家を知ってるんだ？ 実はこの二人、知り合いなのか？ 好男も同じ疑問を抱いたらしく、ストレートに尋ねている。面食らっているあたし達に、刈子が眩しいほど天真爛漫な笑顔で答えた。

「武宮さんのお母さまが、一度瞑想の集会にいらっしやったことがあるんです。お友達に誘われてですけど。そのときに住所を教えてくださいましたんで」

「へ、へえー」

訊かなきゃよかったと引いてるあたしに構わず、刈子が教義と瞑想の相関関係について語り出した。より高次元の存在とコンタクトして第三世界に指標を見出すとか何とか、あんまり理解を示したくない事柄を楽しそうに話す刈子に、流石の好男も困惑している。

「よしっ、そうと決まったらさっさと行こう。刈子ちゃんには道案内をお願いしてもいいかな」

「はい！ 勿論ですわ」

わざとらしく明るい声で好男が刈子の語りを遮り、刈子の手を引いて図書館を出て行ってしまった。十四季を運ぶのはあたしの役目ってことかよ……。そんなに男に関わりたくないんですか、そうですか。心の中で好男に対して呪詛を吐きながら、あたしも十四季を抱えてバス停に向かった。

バスに揺られること十数分。古い木造の家屋が立ち並ぶ閑静な住宅地にあたし達は下ろされた。空腹で動く気力も無い四季を背負ったまま、あたしが辺りを見回す。いかにも下町って感じの町並みだ。

「こつちですー」

好男と手を繋いだまま、刈子が軽い足取りで先を歩いていく。こつちは人間背負ってスキップとかできる状況じゃないんだよ。刈子は力が無いからいいとして、まだ体力に余裕がある好男が楽しってるなんて許せない。暑い日差しにちりちりと首筋を焼かれているあたしの横では、悠が冷たい手を伸ばして冷気を送っている。

「…………あの、ね…………好男、悪気があるわけじゃない、から…………。あんまり怒らないで、あげて…………」

「あれの何処が『悪気がない』んだよ。悪意ありありじゃねーか」

目の前で駄菓子屋からカキ氷を買って刈子に食べさせている好男を見て、あたしが毒づく。くっそ、何が、はい口開けてー、だよ。一般人に姿が見えるのは自分だけだからって、好き勝手やっていいにも程があるぞ。好男なんか女の子口説いてるところ見つかった職務質問されてしまえ。

存分に夏を満喫している好男達に、あたしは思わず齒軋りする。何時の間にかスイフィも向こうに行ってカキ氷を分けてもらってるし。折角都会に来たっていうのに、これじゃ全然いいところ無いじゃ

ないか。

ずっしり重い十四季を背負うあたしの肩が下がり、気の抜けた溜息が出た。なんか、あたしがイメージしてた理想の暮らしからどんどん遠ざかってる気がする。いや、最初にスイフィに声を掛けた時点でもう終わってたのかも知れない。わいわい騒いでいる好男達の後を、鬱々とした気分であたしは歩いた。小ぢんまりした交番の横を通るあたしの足が止まる。

「どっ、したの……？」

毛玉みたいなぼさぼさ髪を垂らし、首を直角に傾けて悠が尋ねるけれど、あたしの耳にその問いは入っていなかった。交番の前にある掲示板に釘付けになってるあたしの目はきつと真ん円に見開かれていただろう。悠が首を手で元の位置に戻し、掲示板を振り返る。

「……この女の子、知り合い……？」

「ああ　顔だけな」

搜索願と書かれた文字の下、大人しそうな女の子のカラー写真が貼り付けてあった。間違いない、高層ビルのレストランであたし達を襲ってきた奴が操っていたあの子だ。

白井 袖風しゆふうっていうのか。何処か翳のある瞳で控えめに微笑んでいる少女の横には、居なくなった日の服装等彼女の特徴が書かれている。ずり落ちてくる十四季を背負いなおしつつ、あたしは女の子の写真を見つめ続けた。

今まで皆と一緒に居たからあまり意識せずに済んでいたけど、あたしも刈子も、そして十四季も、世間一般的には『行方不明』扱いなんだよな。事の深刻さに今更気付いて目を伏せるあたしを、好男

が呼んでいる。

「おい、魅首ちゃん。カキ氷溶けちゃうよー」

「イチゴ練乳美味しいですよー！ 熱気払いに魅首さんもいかがですか？」

「まったく、暢気な奴らだな……。白い歯を見せて楽しそうに笑っているおちゃらけた二人にじとつとした視線を送ると、あたしは早足で歩き出した。顎から滴り落ちた汗が、アスファルトに黒い染みを作った。まるで、紙が焼け焦げていくように。」

第二十四章 決意と覚悟

蒸すような熱気の外とはうってかわって、ひんやりと涼しい四季の家の中であたし達は寛いでいた。

声を掛けても返事をしない四季のポケットから刈子が鍵を取り出して、勝手に家が上がってしまったのだ。これって不法侵入って言っんじゃないだろうか、と微妙な気持ちを抱きつつ、かといってこの炎天下の中ずつと四季を背負ってるのも辛いから、あたしも靴を脱いで家上がった。

誰も居ない部屋は当たり前だけど灯りが点いてなくて、夏用のカーテンから差し込む光が物悲しい。

大型テレビの前に置かれた大きなソファの上に四季を寝かせ、あたしは居間を見回した。取り込んで畳みかけの洋服、広げられた新聞、散らかったヒーローもののソフビ人形……。まるでほんの数分前まで家族の団欒があったような光景に、少し複雑な気分になる。微妙に浮かない気持ちで立っていると、刈子が冷蔵庫を開けて中を覗いているのが見えた。冷気が漂う冷蔵庫から顔を出して、刈子は残念そうにしている。

「賞味期限が切れているものばかりですわね……。買出しに行きましようか」

その言葉を聞いて、あたしの心にぴりつと痛みが走った。やっぱり四季の家族はもう、この世に居ないんだ。

じゃあオレと刈子ちゃんで行こうか、と好男が刈子を誘う声が聞

こえる。魅首さんはどうしますか、と刈子が小首を傾げてあたしに尋ねている。連日の騒動と今日の労働で疲労困憊のあたしは、疲れたからここで待ってる、と答えた。刈子が頷き、好男と買出しに出かけていく。数分後に両手いっぱい袋を抱え、好男達が帰ってきた。麻のカーペットにスーパーのビニール袋が次々に置かれ、刈子が台所で腕捲りしている。

「よし、頑張っちゃいますよっ」

「あの子……あんまり散らかすようなことは止めとけよ」

片手鍋を探してシンク下の扉を開けている刈子に近付き、あたしは頭を掻いた。まるでこの家全体が、居なくなつた家族の墓標のような気がしてならなかつたからだ。静まり返つた四季の家に、賑やかなあたし達の存在はどこまでも場違いに思えた。なんとなく感傷的な気分になっているあたしの背中を、好男が軽く叩く。

「ねえねえ魅首ちゃんも料理しないの？ オレ、魅首ちゃんの手料理食べてみたいんだよね」

「は？ ……今、そーいう気分じゃないんだよ」

「そんなこと言わずにさあー。頼むよ、一生のお願い！」

静かな雰囲気をまるつきり無視して、軽い口調で好男が手を合わせている。そうかそうか、そんなに死にたいか。家庭科の時間に味見した奴ら全員を病院送りにした地獄の料理、とくと味わうがいい。もうどうでも良くなってきたあたしが腹黒い笑みを浮かべて包丁を握ると、刈子がエプロンを差し出してきた。

「お手伝いしてくださるならエプロンしてください」

「これ、ここにあったやつだろ？ 嫌だよ何か気味悪いし」

着用を断るあたしに、刈子は頑として譲らない。三角巾も着けるだの、意外とうるさい奴だな。渋々言われた通りにエプロンを着け、調理に取り掛かろうとするあたしの手を刈子が掴む。

「魅首さん、それ重曹です。塩はこっち」

「あ、うん」

「じゅーそーって何ねい？ 食べ物なの？」

おまえは燃えるかもしれないから向こうへ行ってる、とコンロの周りを飛び回るスイフィを居間にぶん投げるあたし。しかしその後には、あたし自身が刈子によって台所から追い出されていた。

「大変言い難いんですけど、魅首さんが居るとまともに料理が出来ないんです。もう手伝わなくていいから居間で寛いでいてください」

有無を言わずあたしを押し出した刈子が、お米を洗剤で洗うなんて……、とぶつぶつ言っている。だってその方が綺麗になると思っただよ。水で洗うだけじゃ何時まで経ってもとき汁が少し濁るからさ。往生際悪く言い訳しても、刈子は聞く耳持たずに料理を続けている。何を言っても聴いてもらえないか。そう悟ったあたしは大人しく居間に行くことにした。

好男と一緒に大画面のテレビを見ていると、いい匂いが台所から漂ってきた。あとどれくらいかな、と腹を摩って舌なめずりするあ

たし。出来ましたよー、と刈子の食卓へ誘う声が響いた。死んでるように寝ていた四季の頭が持ち上がり、目元を擦りながら漂う匂いに鼻をひくつかせている。

「……ここは……？」

「刈子がおまえん家^ち知ってるって言うから、連れてきてもらった。腹減ってるんだろ？ 刈子が飯作ってくれてるぞ」

さつさと一人で移動しようとする好男の向こうを指し、説明するあたし。呆けた顔で聴いていた四季がふらふらと立ち上がり、おぼつかない足取りで食卓へ歩いていく。倒れやしないか心配しながら後を付いていき、全員が椅子に座った。

「いただきますっ！」

整然と並べられた御飯の前で刈子が勢い良く手を合わせる。美味しそうな匂いにつられて箸を動かすあたしの横では、四季が茶碗に山盛りの御飯をじっと凝視していた。

「……嫌いなものでもありましたか？」

気を遣って刈子が尋ねるけれど、返事は無い。なんだよ、腹減った……とか言ってたくせに。食べないならあたしが貰うぞ、と口を開きかけた途端、四季の頬を涙が伝った。

驚く一同を前に、四季の眼からぼろぼろ涙が零れる。流れる涙を、箸を握る手の甲で拭いながら、四季は目の前の飯を掻っ込み始めた。その様子を呆れ顔で見っていた好男が我に返り、軽い冗談を言って刈子を笑わせる。

時々咽る四季の声を背景に、夕食と言うにはまだ早い食事の時

間がゆっくりと流れていった。

橙色の陽光が差し込む居間で、あたしと十四季は何をするでもなく黙って座っていた。

台所の方からは、好男と刈子が談笑しながら皿を洗っている音が聞こえてくる。向こうが楽しそうだからこそ、余計にこの沈黙が居心地悪い。かといって、十四季と話するような話題も無いし……。

廃人みたいな顔してソファに座っている十四季を横目で一瞥し、この持て余した時間をどうしようかと悩む。真黒なテレビ画面を眺めていると、十四季があたしに向けて覇気の無い声を出した。

「あの札……使わなかったんだな……」

「へっ？ あ、ああ。だってやっぱり悠は良い奴だったし。これ、返すよ」

ジャージのポケットからはみ出していた御札を掴み、それを差し出すあたし。十四季は小さく首を横に振ると、面白くなさそうに鼻に皺を寄せた。

「まだその時で無かったただけだ。……必ずその札が助けになる。取っておけ」

「そこまで言うなら持っておくけど」

こんな御札がいったい何の役に立っつていうんだ？ 精々剃刀の

代用品としてムダ毛処理に使う位じゃないだろうか。黄ばんだ御札を見詰めて眉根を寄せていると、十四季がソファから立ち上がった。何処へ行くのか尋ねると、暫らく一人にしてくれ、と答えて階段を上がって行ってしまった。

家に連れ帰ったのは逆効果だったんじゃないかとあたしが思い悩んでいると、皿を洗い終わった好男がテレビの電源を入れた。沈んだ気持ちを吹き飛ばすほど軽快な音楽と共に、眉唾ものの怪しい映像が流れている。久留米里町でも観てたバラエティ番組だ。

何処で手に入れたか分からないネットシーの映像とか口裂け女のインタビュー映像を流しては、生放送で出演者がコメントをつけるんだよな。番組時間の殆どがVTRなのになぜ生放送にしているのだろうと長年疑問に思っていたんだった。

今回も遂に発見！ 吸血鬼と人間のハーフとか、高層ビルに現れた怪力男とか、実に馬鹿々々しい内容だ。でも気晴らしには丁度いいな。硬い床の上で体育座りをしてテレビを眺めるあたし。メイン司会者が嘘っぽい笑顔で今回のゲストを紹介している。刈子がハンドタオルで手を拭きつつやって来て、不思議そうにテレビを見た。

「最近はこのいうものが流行っているのですか？」

「いや、この番組はどっちかって言うと流行の間逆をいつてる気が

」

きよとんとしている刈子に番組の趣旨を説明していると、ソファに腰掛けていた好男が短く声を上げた。何が起こったかと振り向くあたしに、好男は引き攣った笑顔で何でもない、と両手を振っている。そのどこが何でもないって顔なんだよ……。心の中で突込みを入れ、でもまあ好男のことだし別にいいや、とテレビに視線を戻

す。大画面に映し出された映像に、思わずあたしも声を上げた。

『先日店舗が崩壊した、あの人気ナンバーワンのレストラン。警察の発表では厨房の施設に問題があったとのことでしたが、我々は独自のルートにより真相を確かめることに成功しました』

胡散臭いナレーションと共に、監視カメラの映像らしきものが映されている。真白なテーブルに二人分の食事を並べて、一人で食事している男の姿が映っていた。そう、好男だ。開いた口が塞がらずに阿呆面晒しているあたしの前で、テレビの中の好男が人間とは思えない動きで縦横無尽にビルのフロアを駆け巡っている。

『ご覧いただけただけでしょうか。先ほどまで普通に食事をしていた男性が、まるで怪奇映画のモンスターののようにビルを破壊しています。我々は彼を『突然変異者』ミュータントと呼ぶことにして、今後も彼について調査を進めていきます。請うご期待』

安っぽい効果音が鳴り、VTRが終わった。今のって好男さんですよね？ と刈子が無邪気な瞳で好男に尋ねている。ソファに座っている好男の顔は血の気が引いて真青だ。細かく震えている左手に着けられた腕時計から、アズアの申し訳無さそうな声がしている。

「あまりに突然のことだったから、姿を隠すのを忘れていた。すまない、好男」

「すまないって、謝って済むレベルじゃないだろコレ……。思いきり顔映ってたし、ああもっ……」

好男が頭を抱え一人で悶絶している。テレビでは司会者がマイクを持って、ゲストの芸能人達一人ひとりからコメントを貰っていた。

『いやー凄いですねー。みゅー……なんでしたっけ、ああミュージックン卜さんね。これきつとあれでしょ、新しいアメコミのヒーローか何かですよ。うん』

『これは歴史を塗り替える映像ですね！CG技術もここまであ、今のNGですか。すみません』

ふざけてるのが本気なのかよく分からないコメントがだらだらと続く中で、最後の一人にマイクが向けられた。明るい髪色のちよつと子どもっぽい顔立ちの女性芸能人だ。ドラマの通行人役でこいつの顔見たことあるな。そう思っていると、その女がとんでもないことを口走った。

『わたし、この人知ってます』

『え、そうなんですか。もしよかったですら詳しく』

いきなり、女が司会者からマイクをもぎ取った。驚いている他の芸能人を置いて、女がカメラにつかつかと歩み寄っていく。その顔には、狂気染みだた不敵な笑みが。

『観てる？好男！あんたのことよ！ゴールデンタイムの全国放送であんたの素顔晒してやったからね！このあたし相手に二股かけた罰よ！観てるんだったら今すぐ電話しなさい！さもないと、あんたの家まで押しかけて追加取材してやるんだから！』

髪を振り乱してカメラにしがみ付き、女があることないこと暴露している。顎が外れるほど口を開けたまま振り返って好男を見ると、好男も同じような表情でフリーズしていた。おろおろと胸の前で手

を組んで心配している刈子に声を掛けられ、好男が弾かれたように立ち上がる。

「ごめん、ちょっと電話してくる」

頼むから日没までに話が纏まってくれ、と呟きながら好男は玄関を出て行った。スタッフにカメラから引き剥がされながらも未だ叫び続けている女の姿が消えて、コマーシャルが映し出される。変な空気の中で呆然としてしていると、刈子が話しかけてきた。

「好男さん、大変そうですね」

「そ、そうだな……」

そしてまた沈黙。妙な雰囲気渦巻く居間で、心ばかりが焦ってしまう。どうしたものかと目を泳がせるあたしに、刈子がいつもと違うトーンの声で尋ねてくる。

「あの、魅首さんに訊きたいことがあるんです」

改まった調子でいったい何を訊くつもりなんだろう？ 答えられることならなんでもどうぞ、と促すと、刈子が思いつめた表情で口を開いた。

「魅首さんは、知らない人に襲われて、闘う事 怖くないんですか？ もし怖くないのなら、どうして恐怖を克服できたのか、教えてほしいんです」

いきなりこんなシリアスなことを尋ねられるとは思っていなかった。深刻そうな顔でじつと答えを待つ刈子を見て、あたしは言葉を

詰まらせる。

「え、っと。あ、あたしだって怖いよ。うん。滅茶苦茶怖い。最初に襲われたとき。ほら、さっきテレビに映ってたアレ。あの時なんか怖くて腰が抜けちゃったんだよ。……情けないよな、あはは」

気の抜けた笑い声を上げ、あたしは一度言葉を切った。あんまり力になれなくてごめんな、と呟くあたしに、刈子は真剣な眼差しを向けている。

「では、どうして怖いのに闘えるのですか？」

「それは」

更に踏み込んだ質問に、あたしは自分自身について考えを巡らせた。正直、あんまり自分のことについて考えるのは得意じゃ無い。周りで起こる事にああだこうだ、と文句を言うのは得意だけれど、そう言う自分はどうかのなんて耳が痛い言葉は聞かない振りしてきたし。

刈子に尋ねられて初めて、あたしは何故自分が命を危険に晒してまで、よくわからん連中と闘っているのか考えた。

「……なんつーかさ。成り行きなんだよ。家出しようとしたら電車の中でスイフィと出会って、勝手に契約した事になって。契約を果たさなきゃずっとこのままだって言われて。家出先のアパートの管理人が好男で。それで、美味しい御飯食べてたら急に命を狙われてさ。その時」

あたしの視界に、操られていた女の子の姿が浮かんだ。そう、あ

の子を助けたいと思ったんだ。あの子を操っていた嫌な奴を伸してやる、とも思ったっけ。そう伝えると、刈子が長い髪を揺らし微笑んだ。

「魅首さんは、お優しいのですね」

「はあ？ ち、違うし。全部自分のためなんだってば。あたしが納得するためなの」

優しいだなんて言われてむずがるあたしの前で、そんな謙遜なさらしくても、と刈子がくすくす笑っている。……どーも、馬鹿にされているようにしか感じないんだけど。こんなこと思うあたしは擦れてるのかな、と思いつつ、刈子に同じ質問を試してみる。

「じゃあ、刈子は？ おまえは闘うの怖くないわけ？」

笑っていた刈子が黙り、暫らく置いて独白を始めた。

「わたくし……怖いんです。天啓に従っていけば、幸福な未来を手に入れられると信じていました。……いえ、今も信じてはいるんです。でも、絶対的な信仰じゃない。図書館で見た未来の像の余りの禍々しさに、どうしても怖気づいてしまっんです。こんな状態では巫女なんて務まらないのに」

「……そっか」

胸の前で手を合わせて俯く刈子。その華奢で儂い姿は、今にもプレッシャーで押しつぶされそうに見えた。元気そうに振舞っていたけれど、こいつもこいつで色々悩んでたんだな。微妙に電波な部分は聞かなかつたことにして相槌を打つあたしに、刈子は話を続けて

いる。

「それでも、闘うのを止めるわけにはいかないんです。だってわたし、わたくしは……。この『世界』を守りたいんです。皆さんのことも」

祈りの形に組んだ刈子の手を眺め、あたしは複雑な心境だった。刈子が闘いから逃げられない理由、それは刈子が自分を巫女だと思いついてからじゃないか？ もし刈子が自分は普通の女の子だと理解したら、今の決意は脆くも崩れ去ってしまうんじゃないか。そう思ったとき、無防備になったこいつを誰が守ってやるっていうんだ？ 心の中を様々な疑問が渦巻き、あたしは刈子を見詰めた。

誰も守ってやれないなら、あたしが守ってやるんじゃないか。幻術しか使えないくせに、何時の間にかあたしはそう決意していた。刈子だけじゃない、十四季も、好男も、そしてあの袖風って女の子も、あたしが出来る全てを以ってこのイカれた状況から守るんだ。どうせスイフィと結んだ契約の内容が分からなくて一生一般人に姿が見えない身体なんだし。

ふっきれた思いで、あたしは刈子に微笑み掛けた。
太陽が沈み、空が暗くなっていく。

第二十五章 夜に泣く

白色蛍光灯に照らされた居間で、あたしは刈子の長い身の上話に付き合わされていた。

時間軸が行ったり来たりで脈絡も無く延々と続く、オチの無い話にうんざりして窓の外に眼を遣るあたし。テレビで好男の姿が放映されて、好男が謝罪の電話を掛けにいつてから、もう数時間が経っている。時計はとづくに十一時を回り、空にはキラキラと瞬またたく星が現れ始めた。

あたしが全然話を聴いていないことに気付いたのか、刈子も自分語りを止めて外の景色を眺める。

「好男さん、遅いですね……」

「ソーだな」

気の無い返事をするあたしの前で、刈子がとろんとした目をこすっている。うとうととまどろむ刈子に、眠い？ とスイフィが尋ねている。こくと刈子がうなづいた。もしかして、このままこの家に泊まることになるんだろうか……。また新たな幽霊が現れそうなシチュエーションだし、とっとと出て行きたいんだけど。

はやく帰って来い好男、と念じるあたし。あたしの願いもむなし、好男が帰って来る気配は微塵みじんもない。刈子は眠そうにソファに寝転がっている。カゼひかれたら困るから布団か何か掛けておいてやるか。っていつても、布団がどこにあるか分からないんだけど……。

居間をうろついてそれらしき物が無いか探してみたけど、見つからなかった。しょうがない、十四季に訊いてみるか。不気味なくらい静まり返っている二階へ行き、十四季の部屋を見つけたあたしはドアをノックした。物音一つ聞こえない廊下で、返事を待つのがめんどくさくなつたあたしが、入るぞ、とドアを開ける。

白いドアの向こうに広がる奇妙な部屋にあたしは目を円くした。バイオリンやアコースティックギター等の弦楽器が部屋いっぱい詰り込まれている。その真ん中で、十四季が分厚い本片手にメトロノームをじつと見つめていた。とても声を掛けづらい雰囲気だ。

思わず何も見なかったことにしようとドアを閉めかけるあたしに、十四季が気がついた。

「……………どうした」

「いや、その　刈子が寝ちゃったからさ。布団どこにあるかなーって」

ひきつった顔でそう言うと、十四季が無言でベッドを指した。ここにある掛け布団を持っていけってことかな。散らかった楽器を踏まないように注意しながら、あたしは布団を運び出すために、部屋の中に入った。気をつけているのに、右足が楽器の山に当たってしまった。がらがらと色んな音を出しながら、楽器の山が崩れる。

「う、ごめん」

「……………別に」

壊れた楽器に眼もくれず、十四季が冷めた声で答えた。つんと横

を向いているその頬には、さつき泣いたときできた涙の跡がある。
気まずくなつて眼を泳がせるあたしに、十四季が本を閉じて呟いた。

「……さつきの飯、美味しかった」

メトロノームを見つめたままそう言う十四季に、あたしは驚いた。
いつも変に格好付けたことばかり喋る十四季が、こんな俗っぽいこ
とを言うなんて。布団を抱えてその場に立ちつくすあたし。十四季
がまた口を開いて付け加える。

「人と一緒に飯食うの、久しぶりだったからかな……」

「うんうん、その気持ちわかるねい。一人ぼつちは寂しいよねい、
やっぱり仲間とわいわいするのが楽しいよお」

どこから入ってきたのか、スイフィが空気を読まない音量の声で
うなづいている。おまえには訊いてないっつもの！ と、宙を舞って
いるスイフィをあたしが追い払う。どたばたと騒ぐあたしとスイフ
イの軽口の叩きあいを聞いて、十四季がくすつ、と笑いを漏らした。

「あ、何か勉強してたみたいだよな。邪魔みたいだから、下行くよ」

年下の奴に笑われたことが恥ずかしくて去ろうとするあたしの背
中に、十四季が小さな声で呟いた。

「一人ぼつちは寂しい、か……」

「え？」

振り返るあたしに、十四季は笑って首を横に振った。

ソファですやすやと寝息を立てる刈子に布団を掛け、あたしは麻のカーペットの上に座り込んだ。もう十二時半だ。あたしもなんだか眠くなってきたな……。刈子の背中からクッションを一つ取ってそれを枕にする。うん、なかなかの寝心地だ。床が固すぎて肩が凝りそうだけど。

そのまま気持ちよく夢の世界へ行きかけていると、玄関扉の開く音が聞こえた。好男がげっそりした顔で居間に戻ってきた。

「おかえり」

「終わった……オレの人生……」

魂を吐くように声を絞り出し、好男がソファの縁に座った。右手に握っているケータイからは、着信音が途切れることなく響いている。いや、よく聴くと音は一つだけじゃない。胸ポケットとジーンズのポケットからも、着信音が鳴り響いている。こいつ、実は三股してたのか。まあ自業自得だよな。

ひたすら途方に暮れている好男を面白がって眺めていると、好男の背後に立っていた悠が好男の頭に自分の額を当てた。俯いていた好男が顔を上げ、うつろな目でケータイを全て取り出し始めた。

「そっか、全部電源切つとけばいいんだ……」

完全に壊れた笑みを浮かべながら、好男がケータイの電源を一つひとつ落としていく。全てのケータイが静かになると、好男は大きな溜息を吐いて床に倒れこんだ。うつ伏せで腕の中に埋めた頭から、何で夜は声も聞こえないんだよ、メールだけじゃあいつら許してくれないんだよ、と愚痴る声がする。

「くそっ……全て完璧だったはずなのに……！　どこから狂った……？　日没から日の入までの時間が使えなくなってからだよ……！」

ちくしょー、と好男が拳で床を殴っている。微妙に泣いてるような声の好男に、アズアが同情のかけらも無い口調で語り掛ける。

「元はと言えば、そなたが複数の異性と関係を持ったことに問題があるのだろう。これを機会に大人しく心を入れ替えて交際相手を一人に絞るべきではないか」

冷めた声でアズアがもつともな意見を述べた。でも、好男は全然聴いてないみたいだ。相変わらずうつ伏せになったまま、ぶつぶつと愚痴をこぼしている。

「……絶対に契約を果たして、元の身体に戻るんだから……。そしたら」

どうやら反省する気は無いようだ。女好きもここまで来ると怒りの感情を越えて尊敬の域にまで達するな……。女の名前を呟く好男に背を向けると、あたしは目を閉じて夢の世界に落ちていった。

第二十六章 軋む世界

「魅首ちゃん、魅首ちゃん」

名前を呼ばれ、あたしは目を覚ました。起きたばかりでぼやけた視界に、好男の姿が映る。昨日のよれよれだった姿が嘘のように好男は元氣そうだ。無精髭がちゃんと剃られてるし、ぱりっと糊の効いた新しいシャツを着ている。

ここは十四季の家なのに、どこから着替えを持って来たんだろう？寝起きでぼーっとしている頭で、あたしはふとそう思った。窓から差し込む朝日に目を細めるあたしに、好男が紙袋を差し出す。

「さっき一度オレん家に帰ったんだ。ついでに着替えも持って来た。これ、制服」

「あー……ありがとう。横置いといてくれ、後で着替えるから」

好男に礼を言い、あたしは寝返りを打った。……あたし、脱いだ制服いつ洗ったつけ？ 確か好男の家で風呂に入るために制服を脱いで、そのままだったはずだ。なんとなくもやもやした気持ちになるあたし。まあ、多分刈子が洗濯してくれたんだよな。うん、そう思っておくことにしよう。間違っても好男が洗ったんじゃないよ。んよう。

こっさりそんなことを考えていると、好男が肩を掴んで揺すってきた。ああもう、しつこいな。顔をしかめて狸寝入りを決め込んでいると、耳元でスイフィの声がした。

「魅首うー、寝てると置いていかれるよお。かるっちもとつちゃんも、ヨッシの車に乗って待ってるんだよ。はやく図書館いこうよおー」

皆車に乗ってる？ スイフィの言葉を聞いて、あたしは飛び起きた。電気の点いてない居間は、好男以外誰もいない。微かに残る味噌汁の匂いを嗅いで、あたしは好男に尋ねた。

「もう飯食ったのか？」

「そうだよ」

軽い調子でうなづく好男を前に、あたしはがっくりと項垂れた。うなだ

揺れる車内で、あたしは両手におにぎりを二つずつ持ち、存分に白米の旨みを味わっていた。うまいうまいと連呼するあたしに、助手席に乗る刈子が照れて笑っている。

「そんなに喜んでもらえるなんて、嬉しいですわ」

「いいなー魅首ばかりー。おいらにもちよつと分けてよお」

吊り広告の中からリボンを伸ばして、スイフィがおにぎりを奪おうとする。それを華麗にかわしながら、おまえはさつき食ったんだろ、とあたしが反論する。車が揺れるほど大騒ぎしているあたしとスイフィの横で、十四季が苦笑を漏らした。……なんかこいつ、昨

日の一件でふつきれたみたいだな。

少しきこちなく笑っている十四季からは、以前のような刺々しさが無くなっている。十四季の変化に気がついたあたしの動きが鈍り、スイフィのリボンがおにぎりを一つ取っていった。

その後も好男達とくだらない話で盛り上がっていると、車が図書館の前で止まった。エンジンを止めて鍵を抜きながら、好男が口を開く。

「オレ、昼に約束があるから今日は別行動でよろしく。まあ、すぐその公園にいるから。何かあったら呼びに来てくれ」

じゃあな、と好男が格好良く車を降りた。その背後には悠がくっついていて。去っていく好男に手を振り、刈子が助手席から振り返る。

「あの わたくしも少し個人的に調べたいことがあるんです。お先に失礼しますね」

「ん。わかった」

刈子が車から降りて、遠慮がちに扉を閉めた。車内に取り残されたあたしと十四季は互いに沈黙している。しばらく様子を見てから、あたしは十四季に声を掛けた。

「……おまえは何か用事ないの」

「ああ。無い」

正面を見たまま、十四季が素っ気無く答える。ここまで言い切られると、もう返す言葉が無い。再び沈黙して妙な雰囲気が車内に満ちる。この重々しい空気、苦手だ。図書館のトイレで着替えてこよう。逃げるように立ち上がるあたしのポケットから、ぱさりと本が落ちた。十四季がそれを拾い、ぱらぱらと中を見た。

「……これ、魅首が作ったのか？」

「えっ？ いや、違うし。図書館の本棚の奥に挟まってたんだ。ほら、蟹の殻で攻撃してくる奴いたじゃん、多分あいつのだよ。すごく欲しがってたし」

中に何が書いてあるんだ？ 疑問に思っただけ開いた本を覗こうとすると、十四季が顔をしかめて本を閉じた。そのままあたしに本を差し出し、十四季が忠告する。

「中身は見ないほうがいい。……紅太、だったか？ あいつと闘えなくなるぞ」

「ふーん　？　わかったよ。我慢する」

闘えなくなるって、どういうことだろう。戦意を吹き飛ばすほど、とんでもなく衝撃的なことでも書いてあるのかな。見たい気持ちを抑えながら、あたしは本をポケットに仕舞い車を降りた。

よく冷房が効いて居心地の良い図書館の中、パソコンブースで、着替え終わったあたしは、去年公開されたアクション映画のDVD

を見ていた。ヘッドホンを被って夢中で画面を見ているあたしに、
スィファイがあくびを交えた声で話しかけてくる。

「こおんな退屈なもの観てて、何が面白いのねい？」

「はあー？ ……殺陣だよ、殺陣。そりゃ、話はぶっ飛んでめち
やくちゃだけどさあ。このワイヤーアクションとか、さっきの
三十人連続切りとか、まじすごいだろ。おまえ寝てて観てなかつた
のか？」

いかにこの映画が面白いか力説するあたしを、スィファイが鼻で笑
う。

「そんなことぐらい、おいらにも出来るもんねい。できて当たり前
のこと見てて面白いわけないじゃん」

そう言っつて、しかもこの人達は映像のトリックで出来るように見
せかけてるだけだし、とスィファイが文句を垂れ始めた。人がせつ
かく楽しんで観てるつてのに、その腹が立つ態度は何なんだ。ムカ
ついたあたしは、思わずスィファイに喧嘩を売っていた。

「おまえ、自分はすごいすごいって散々言ってるけど、全然そんな
こと無いじゃねーか。あたしが使える能力は四人の中で一番しょぼ
いし、おまえ自身もアズアみみたいに援護できるわけじゃないし。口
先ばっかりなんだな」

ちよつと言いすぎた気もするが、今まで溜まっていたことが言えて
すっきりした気分だ。言い返せないだろうと思って画面に眼を戻す
あたしに、スィファイが質問を投げ掛ける。

「……前に話したこと、覚えてる？」

前？ いつものことか分からないし、こいつと話したことなんて普段は忘れたことにしてるから、答えようが無い。あたしが黙って画面を見つめていると、スイフィは静かに話を続けた。

「異世界いしちで使えるようになる能力は、おいらと魅首、両方の影響を受けるって、話したよない」

「それがどうしたって言うんだよ」

やけに大人しい声のスイフィに、あたしはぶっきらぼうに返事をした。きつとまた元気が無い振りをして、あたしを同情で釣ろうとしてるんだな。もうその手には乗るもんか。

絶対に甘い態度をとらないと心に決め、あたしは画面をじっと見つめた。背後から、何時に無く落ち着いたスイフィの声がする。

「ねえ魅首、『世界』って何だと思う？ 魅首の思う『世界』って何かな。それはヨッシヤかるっち、とっちゃんの思う『世界』と同じものなのかな。どうして、おいらのいた『世界』と、この『世界』は違うのかな」

何だなんだ、こいつも刈子の電波に毒されてしまったのか？ やたらと『世界』と繰り返すスイフィに、思わず振り向きそうになる。ぐつと堪えて、あたしは冷静さを保つため、スイフィの言ったことを脳内で繰り返した。

あたしの思う『世界』か。多分スイフィが言っている『世界』

とは、世界そのものを指すのではなく、自我みたいなものを指すんじゃないか？ それならさっきの問い掛けも意味がわかる気がする。現代国語か倫理の時間に、『自分』というものは周囲の情報によって構成されるって確か習った。例えるなら球体パズルだ。真ん丸な球体の内側が『自分』で、外側はそれを取り巻く世界。いや、数学で習ったベン図のほうに分かりやすいかも。自分がAという集合なら、Bという集合の他人が居る。AとBは互いに共有する部分もあれば、そうでない部分もある。そういった集合が沢山あつまつたものが世界。

……考えすぎて、頭が痛くなってきた。こんな意味の無いことを考えさせて、スイフィはあたしに何をさせようとしているんだ？ ガンガンと痛む頭を抑えながら、あたしは恨みがましい目でスイフィを睨んだ。宙に浮かぶ吊り広告の中から、スイフィが澄ました笑顔でこつちを見ている。

「昨日見た本の背表紙、面白そうだったねい。認識は騙る あなたの世界は脳の中に在る …… だっけ。ここまで言ったら流石の魅首でも、もう分かったよねい」

勝手に話を纏められて、あたしは首を傾げた。あたしが『世界』と認識しているものはあたしの脳が見せる幻で、それは周囲の情報から組み立てられたもの…… ってことか？ なんか間違えてる気がしてならないし、さっぱり意味がわからないんだけど。

納得してないのが顔に出ていたのか、スイフィが肩を竦めて首を横に振った。

「やれやれ、困ったもんだねい。自分が使った能力がどんなものだ

ったのか、もう一度じっくり考えて欲しいんだねい。とっちゃんは自分一人であそこまで能力を使いこなせるようになったってのに、魅首はダメダメだなあー」

はあー、とスイフィが大きく溜息を吐いて、こつちをちらりと見た。なんだよ、あれだけ意味深なこと言っておいて、結局あたしを馬鹿にしてるだけじゃないか。むっとしているあたしに、スイフィはぺろっ舌を出して謝った。

「……今のは冗談だねい。魅首が強くなれるようにアドバイスしたかったんだねい。じゃ、おいら寝るよん」

そのまま広告の奥に引込もうとするスイフィを、あたしは手を伸ばして呼び止めた。

「おい待って！ ……今のが理解できたら強くなれるのか？ その、もっとヒントとかくれよ。 ていうか、こんな小難しい問答より、手っ取り早く強くなる方法があるんじゃないのか？」

そんな方法があるわけ無いと思いつつ、あたしはスイフィに尋ねた。背中を向けていたスイフィが振り返る。なんだかその顔は、今までよりずっと大人びて見えた。

「おいらと一心同体になるんなら、今よりずっと強くなれると思うよ。魅首が苦痛に耐えられるなら、の話だけどねい」

スイフィが静かにそう呟き、広告の奥へ消えていった。一心同体？ 強くはなりたくないけど、あのスイフィと一心同体になるっていうのは、生理的な拒否反応が。 思い悩むあたしの耳に、変な歌が聞こえてきた。

映画の音声かと思っただけ、この映画にそんなシーンは無かったはずだ。歌はだんだん大きくなってきている。どうやら誰かが歌いながらこつちに歩いてきているらしい。こんな下手糞で変な歌を公共の場で垂れ流すとは、他人の迷惑顧みない奴だな。

仕切られたブースから顔を出して見回すと、歌声の源らしき男の姿が見えた。大きな青色のヘッドホンから変な歌が大音量で漏れている。歌ってたんじゃないかと聴いてたのか。どっちにしる迷惑な話だ。

それにしてもどうしてあんな変な歌を大音量で聴いているんだろう。不思議に思って男を観察していると、男がこつちを見た。あたしと男の視線がばつちりぶつかっている。

男の虚ろな眼に背中髪の毛が立っただけ、一般人にはあたしが見えてないし大丈夫だよな。そう言い聞かせているうちに、男がどんどんこつちに近付いてくる。なんでこつちに来るんだ？ いや、きつと偶然だ。どきどきする胸を押さえると同時に、男があたしの目の前で止まった。

「あんだ、俺のこと見えてるな」

仕切りに腕を凭せ掛け、男がそう言った。驚きで頭が真白になるあたしの耳に、ヘッドホンから流れる変な歌が入っていく。気持ち悪いメロディに紛れて、誰かが男に命令する声が聞こえた。

「殺せ。そいつは『契約者』だ」

「りよーかい」

たるそうな声で男が答え、ごてごてした指輪だらけの右手を上げた。男の手の動きに合わせ、図書館の床が音を立てて割れていく。塊となったコンクリートが次々と宙に浮いていく様を、あたしは口を開けて見つめていた。いきなり緊急事態だ。喉がからからに渴いて、息をするのも苦しい。でも、皆に敵が来たことを知らせない。

浅い呼吸を繰り返すあたしに向けて、男が右手を振り下ろした。あたし目掛けて、数十？を軽く超えるだろうコンクリートの塊が降り注ぐ。

思わず頭を抱えてその場にしゃがみこんだあたしの視界に、色とりどりのリボンが、あたしの身体を包み込もうとする様子が一瞬だけ見えた。

第二十七章 砂嵐 前編

灼熱の日差しの中、好男は図書館のすぐ近くにある公園のベンチに座っていた。

その手には、昨日借りた文庫本が乗っている。退屈そうに文字を眼で追う好男。腕時計を見て時間を確かめると、薄らとクマの出来た目元を擦り、頬杖をついてぼんやりと遠くを見つめた。

猫背気味に身体を丸める好男の背後から、小さな女の子の声が聞こえる。

「あつ、おじちゃんだー！ 先に来てたんだね！」

元気いっぱい嬉しそうな女の子の声に、好男が笑顔を作って振り返った。

「やあカノンちゃん。それに秋祢あきねさん、こんにちは」

「こんにちはは、好男さん」

自分目掛けて一直線に走ってきたカノンを抱き上げ、好男が秋祢あきねに会釈した。日傘の影から、秋祢の微笑む顔がのぞく。せがまれるままにカノンを肩車する好男に、日傘を置んだ秋祢が寄り添った。

「すみません。こちらからお誘いしたのに、お待たせしてしまって」

品良く化粧した頬に手を当てて、秋祢が眼を伏せた。熱気のせいか顔を赤らめる秋祢に、好男が気さくな笑顔を向ける。

「楽しみにしてたんで、ちょっと早目に来てただけですから。気にしなくても大丈夫ですよ」

「そう、ですか……」

桃色に染まった頬を押さえ、秋祢が嬉しそうに微笑んだ。いい雰囲気が漂う中、カノンが好男の口を引つ張って遊んでいる。

「ねえねえおじちゃん、昨日テレビに出てたよね。すごいね！空飛んでるところかつこよかったよ」

「うっ……」

無邪気なカノンの言葉に、好男の顔が引き攣る。まあ、と秋祢が目を丸くして好男を見た。

「そうだったんですか。……空を飛ぶ……？ 仕事に行っていて見逃してしまったので、よろしければ内容を教えてくださるかしら」

瞳を輝かせて見つめてくる秋祢に、好男の背中を汗が伝う。目を泳がせて言い逃れしようとする好男の顔を両手で包み、カノンが母親に答えた。

「あのねー、好男おじちゃんは、みゆーたんとなんだって。ごはん食べると、強くなるんだって！ それで、ふたまたしてるんだって……ふたまたって、なに？」

純粹な眼差しで尋ねるカノンから目を逸らし、好男が空を見上げて誤魔化し笑いをする。

「え、えつと　やだなあカノンちゃん、聞き間違いをしているよ」
「……………」

それよりどこか遊びに行きたいところがあったら連れてってあげるよ、と好男が強引に話を切り替えている。顔を輝かせるカノンと反対に、秋祢は眉根を寄せて黙り込んでしまった。苦しそうに胸元で拳を握る秋祢に、好男がうろたえる。

「あ、いや、その　秋祢さん、これは……………」

どうにかして上手く誤魔化そうと好男が言葉を探していると、急にカノンが空を指した。

「わあっ！　見て見て！　キラキラがいっぱい降ってきてるよ！」

カノンの指差す先に眼を向け、その先にあるものを見て好男が息を呑んだ。

「あ、あれはいつたい　？」

どこまでも青く突き抜けた空に、小さな穴が開いている。丁度図書館の上あたりにある穴から、キラキラと光る無数の破片が地上に降り注いでいた。目を見開いて凝視する好男に、秋祢が不思議そうに細い首を傾げている。

「何か見えるんですか？」

「すごいなー、きれいだなー。どこから降ってくるのかなあ」

夢中になつて空を見つめるカノンの横で、秋祢が必死に目を凝らしている。腕時計の文字盤に影が現れ、冷やかな声が聞こえた。

「……あの亀裂……故郷むらにできたものと同じだ。だが、何故異世界いせかいにまで？」

困惑の色が窺える声でアズアが呟き、好男が心中複雑そうな顔をする。しばらく沈黙していると、図書館の方から地響きのような低音が聞こえてきた。

「！」

驚く好男に、秋祢が短く悲鳴を上げて腕にしがみ付いた。さつきまではしゃいでいたカノンも、笑つのをやめて身体を縮めている。

「何だったんでしょう、今の……」

音の聞こえた方向を眺め、秋祢が震える声で好男に訊いた。肩を強張らせて警戒する好男の前で、図書館の壁が崩れていく。がらがらと音を立てて崩壊していく壁に、図書館の中から次々と避難する人々が駆け出してきた。

「なあ、これって」

「ウエジユの差し金が来ているのだらう。好男、行くぞ。皆みなの命が危ない」

「でも、秋祢さんとカノンちゃんが」

怯える二人を心配して二の足を踏む好男に、今行かなければ間に

合わないぞ、とアズアが厳しい声を出した。唇を噛み締めて悩む好男の背中に、すぐ近くから甲高い声が浴びせられる。

「やっと見つけた！ ちょっと、どうして昨日勝手に電話切ったのよ！」

ぎくりとして振り返ると、昨日テレビに出ていた女性芸能人が肩を怒らせて仁王立ちしていた。その後ろには、機材を担いだテレビクルー達が居る。まさか、本当に来たのかよ……、と好男が蒼い顔で呟いた。

「その隣の女は誰？ ……もしかして、あんた子持ちだったわけ？ じゃー、あたしとのことも、あの女とのことも、全部お遊びだったってこと？ もう、信じらんない！ サイテー！」

次々と批難の言葉を浴びせる女に、好男が冷や汗をかいて、たじろいだ。腕にしがみ付いていた秋祢がシヨックを受けた表情で手を離し、数歩後退りして涙ぐんだ目で好男を見つめている。

二人の女の間で板ばさみ状態になって戸惑う好男に、アズアが腕時計の中から先を急かした。

「好男、刈子殿が向こうで呼んでいる。早く行こう」

焦りが見えるアズアの様子に、好男はカノンを肩から下ろして図書館へ走り出した。後に残された秋祢とカノンの不安に満ちた眼差しを、その背中で受け止めて。

第二十八章 砂嵐 後編

何もかもがスローに見えた。

軽く百キロ超えてるんじゃないかと思うほど巨大なコンクリート片が、あたし目掛けて降り注いでいる。こんなのに潰され死ぬなんて嫌だ　！　圧死した自分の悲惨な様子を想像して、あたしはぎゅっと目を閉じた。視界の端に、スイフィの操るリボンが見えた。

身体が幅の広い布に包まれ、ふわりと宙に浮くのを感じる。怯えていた衝撃はあたしを掠め、地面にめりこんだみたいだ。おそろおそろ目を開くあたしの視界に、悔しそうに見上げる男が映る。

「魅首、だいじょぶ？」

「あ、ありがとう」

あたしの身体に巻きついていたりボンが離れ、背後に浮いていた電車の吊り広告からスイフィの声が聞こえた。礼を言いながらまだ倒れていない書棚の後ろに回りこみ、あたしはヘッドホンの男から身を隠す。まさか、こいつが自分からあたしを助けてくれるなんて。

未だに何が起こったのかよくわからないけれど、少し嬉しかった。

辺りを見回してうるつく男に見つからないよう、あたしもスイフィも息を潜める。

男のヘッドホンから漏れる変な歌声に呼応するように、図書館の床が、壁が、もの凄い音を立てて崩れていった。鉄筋が丸出しになった床を、男が身軽な様子で渡り歩いている。

「……スイフィ、あいつも知り合いか？　どんな能力を持ってるん

だ？」

なるべく押し殺した声で尋ねるあたしに、顔のすぐ横で浮いている広告からスイフィが囁き答える。

「あの慈悲の欠片も無い声は、間違いなくレエンだねい。ホント、仕事一途で困った奴ねい……。えと、能力だっけ？ ……多分、土に関係する能力だねい」

仕事一途とか、そーいう余計な情報はいらないつての。この期に及んで、まだ余裕をかましているスイフィに呆れていると、ヘッドホンから声が聞こえた。

「松郎^{まつろう}、二時の方向から声がした。すぐに向かえ」

「……はいはい」

男が面倒臭そうに返事をして、鼻に皺を寄せた。二時の方向ってどっちだ？ 初めて聴く表現に頭を悩ますあたしに、男はどんどん近付いてくる。まずい、このままじゃ見つかる。でも後ろは壁で、さらに両横は書棚が倒れてて逃げ出そうにも丸見えだ。

どうしようかと焦るあたしに、スイフィが正面突破を勧めてきた。

「透明化してあるから、レエン達には見えないねい。一旦退いてアズアちゃん達と合流しよう」

なるほど、それなら大丈夫そうだ。こんな滅茶苦茶な奴にたった一人で挑んでも勝ち目はないし、さっさと退却させてもらおう。宙に浮かぶスイフィに頷き、あたしはそろそろと書棚の影から出た。

ヘッドホンの男に背を向けたあたしの耳に、女の悲鳴が聞こえた。どこかで聴いたことのある声だ。振り向くあたしの瞳が大きく広がった。

昨日、好男と楽しそうにコーヒを飲んでいた子だ。確か、海原っていったっけ。

「魅首、はやくはやく！」

「待って。まだ逃げ遅れた奴が」

足を止めるあたしの前で、ヘッドホンの男が鬱陶しそうな顔で海原を見た。崩れていく床から滑り落ちないように、海原は泣きそうな顔でカウンターにしがみ付いている。

「きいきいうるせーな……」

ぞっとするほど憎悪を滲ませた声色で、男が指輪だらけの手を上げた。コンクリートの塊が音を立てて持ち上がり、ゆっくりと海原の方へ移動していく。こいつ……無防備な一般人を攻撃しようとしてるのか？

男のしようとしていることを理解した瞬間、あたしの身体は反射的に動いていた。

「やめろっ！」

声を出したら隠れている意味がなくなるのに、あたしの口から言葉が飛び出る。いや、言葉だけじゃない。無意識の内に、あたしは男の腕を後ろから押さえ込んでいた。もう完全に透明化した意味が無い。出入り口近くから、スイフィがあたしを呼ぶ声がする。

ヘッドホンの男も、あたしの行動に驚いたみたいだ。意識の集中が途切れたのか、コンクリートの塊は海原の数メートル前に落ちた。不意を突いた今なら、こいつを倒せるかも知れない。あたしがそう思っていると、男の口元がにやりと上がった。

「なーんだ、自分から近付いてきてくれたのか」

戸惑う暇も無く、ヘッドホンの男はあたしの手を捻り挙げた。あたしの腕に鋭い痛みが走る。……そういえば、骨に入ったヒビを好男に直してもらったこと、すっかり忘れていた。

痛みのせいで大した抵抗も出来ないあたしの身体を、男の手が一通り撫でていく。気持ち悪くて身震いするあたしの耳に、ヘッドホンからイラついた声が聞こえた。

「……何をしている、松郎。遊びじゃないんだ、早く殺せ」

命令口調の声に、あたしを捕まえたまま、男が鬱陶しそうに目を上げた。

「べつに遊んでるわけじゃないって。姿が見えない能力持ってるってことは、こいつだろ？ スイフィとやらと契約してる魅首って女は。で、俺達の任務はこいつから珠を取り戻すこと」

気だるそうな男の声に、ヘッドホンからそれを肯定する声が聞こえた。男の虚ろな目があたしがいるらしきところを眺め、その顔にいやらしい笑みが浮かぶ。

「だったらさー、確かめるべきだろ。こいつがそれを持つてるかどうか」

思い切り床に押し倒され、あたしは腕の痛みに声を上げた。暴れるあたしに馬乗りになり、男が死んだ魚みたいな目を細めている。骨ばった手が手探りにあたしの太ももに触り、頭に血が上って顔が熱くなるのを感じた。こんな奴に組み敷かれていいようにされるなんて、絶対嫌だ！あたしの抵抗する様を嘲笑う男の首に、色とりどりのリボンが巻きつく。

「 スイファイ……！ 」

「だから早く逃げようって言ったのにー。これ以上面倒見切れないよ うわっ！ 」

転がっていた鋭いコンクリート片がリボンを裂き、宙に浮かぶ吊り広告目掛けて襲い掛かった。急いで羽ばたく広告の角を欠片が掠め、紙が破れる音が聞こえる。

流石のスイファイも驚いたのか、宙を舞う吊り広告の動きが一瞬止まった。そのほんの一瞬の間を突いて、男が動かすコンクリートの塊が広告を床に叩き落とす。

驚いて息を呑むあたしの前で、コンクリートの重しをされた吊り広告は動かなくなってしまった。あたし自身の身体も、何か重いものを乗せられているように自由が利かない。スイファイは大丈夫なんだろうか心配するあたしの上に、男の身体が覆いかぶさった。

「おおー、見えるようになった。ってことは、あいつは気絶したのか。もう誰も助けてくれないな、ご愁傷サマ」

「 つるさい！ 放せ！ 」

顔面目掛けて振り上げたあたしの拳をいとも簡単に受け止め、暴

れるあたしを男がせせら笑った。

「はは、粹がっちゃって。女が男に勝てるわけないだろ？ ……それに、どーせすぐ死ぬんだ。大人しくしてたら少しは寿命を伸ばしてやるよ。気持ち良くしてやるついでにな」

そうム力つく言葉を吐いて、男の手があたしの制服の横にあるジッパーを下げていく。なにふざけたことぬかしてんだよ。このまま殺されてたまるか！ 目の前にある男の額に頭突きをかましたあたしは、思い切り拳で頬を殴られた。

「つっ……」

口の中に広がる血の味に顔を歪め、くらくらする頭を振るあたし。絶対こんな奴の前で泣き言なんか漏らすもんか。血の垂れる唇を真一文字に結んで男を睨むと、向こうも虚ろな目に怒りの炎を燃やしてこっちを睨んでいた。

「んだよ、大人しくしてろつつつただろ……。あーうぜー、これだから嫌なんだよ女って奴は」

「遊んでいる暇など無いと言っただろう。先に命を絶っておけばこんなことにはならなかったものを」

ヘッドホンから聞こえる言葉に、腫れてきた額を摩る男が冷酷な笑みを浮かべた。床に散らばるコンクリート片がカタカタと動き、次第に浮き上がっていく。その中から一番尖った破片を握り、男がそれをあたしの喉元に突きつけた。

こいつ、本気であたしを殺すつもりだ。それも、楽しんで。

喉に当てられたコンクリート片の先が、あたしが呼吸するたびに少しずつ皮膚を削っていく。恐怖で奥歯が鳴ってるのが自分でもわかるくらいだ。いいね、もっと怖がってる顔しなよ、と男が欠片を握る手に力を入れた。

喉に走る痛みにあたしが死を覚悟した瞬間、男の背中に何かが当たった。軽い音を立てて床に落ちたのはボールペンだった。息を止めているあたしの喉からコンクリート片の刃先が引き、男が鬱陶しそうに振り返る。

「や、やめなさい」

震える声でたったそれだけ言った女を見て、あたしは目を円くした。昨日好男と話していた人物の一人、花柄だ。そうか、こいつもこの図書館に勤めていたんだ。

驚いているあたしから立ち上がり、男がヘッドホンに手を当てて首を傾げている。

「おい……レエン、あいつも『契約者』なのか？」

「いや……。特別な力は何も感じない。只の人間のはずだが……」

どうして我々が見えるのだろうか、とヘッドホンから声が聞こえる。男の視線は花柄に向いたままだ。このままだと、今度は花柄が狙われてしまう。

重い身体を動かし、あたしは男の足に思い切り噛み付いた。男が呻き声を上げ、あたしの顔面に靴跡がつくくらい強い蹴りが入る。仰け反って転がるあたしに、男が醜く歪んだ顔を向けた。

「このアマっ……！」

少し足を引き摺りながら、男が悪態吐きつつこっちに近寄ってきた。その後ろでは男に向かって本を投げようとする花柄を海原が押さえていた。

「先輩、しっかりしてください！ それ以上進んだら落ちちゃいますよ！」

「だって、そこに、人が」

鼻から出る血を手で拭って立ち上がると、あたしは花柄に大丈夫だ、とサインを送った。身体中がひどく重い。立っているだけで精一杯って感じた。それでも目の前から近付いてくる男にガンを飛ばしている、足先から奇妙な感覚が徐々に膝まで上がってきた。違和感を覚えて身体を見下ろすあたしの眼に、衝撃的な光景が映る。

変形したコンクリートが、あたしの足を膝まですっぽりと包み込んでいた。固体のはずなのに、まるで液体みたいに柔らかく変形して、コンクリートは更に上へ上へとあたしの足を包んでいく。引き抜こうとしても、コンクリートに覆われた足はびくともしなかった。絶句して固まるあたしの前で、男がにやにやと笑っている。その目は暗い悪意に満ちていた。

「怖いかな？ 怖いよな。そのままコンクリート詰めにしてやるうか？ ……なんてな」

あたしの目の前で立ち止まり、男がククツと忍び笑いだした。ヘツドホンからは相変わらず変な歌声が漏れていて、早く殺せ、という声も混じっている。何時の間にか背後のコンクリートも同じように

変形していたみたいで、あたしの身体は完全に固定されてしまった。後ろ半分がコンクリートに覆われて身動きできないあたしに、ヘッドホンの男が足元のガラス片を拾ってそれを見せた。

「うぜーんだよ……俺に盾突くもの……全部……」

男の持つガラス片が、あたしの頬に触れた。氷が触れたような感覚が頬に走り、次いで燃えるような痛み。ぎゅっと目を瞑るあたしの耳元で、男が嫌味たらしく囁く。

「すぐに殺すなんてことしない……身体中痛めつけて鬨り殺してやるよ」

全身に悪寒が走り、あたしの腕に鳥肌が立った。こいつ、今まで出合った人間の中で一番気持ち悪い。ていうか、同じ人間とは思えない思考回路してる。恐怖を超えて嫌悪感が出てきたあたしを見て、男は顔を顰めて右手で拳を握った。それに呼応するように、コンクリートがあたしの右足を締め付ける。足首が変な方向に曲がって、ぼきぼきと音がした。

「うぐっ
」

痛みに呻くあたしを眺め、ヘッドホンの男が気味の悪い笑みを浮かべた。これ以上この気持ち悪い奴を喜ばしてたまるか。必死に奥歯を食い縛って睨みつけるあたしに、男がゆっくり手を伸ばす。スカートの下から男の手の感触がして、あたしの身体がびくと震えた。駄目だ、泣くな泣くな！ 泣き顔見せたら負けだ！

吐きそうな気分をぐっと我慢するあたしの耳に、かさかさとした紙の擦れる微かな音が聞こえた。

紙？ あたしの脳内に、十四季から渡された御札の記憶が蘇る。そうだ、着替えてスカートのポケットに入れておいたんだ。

固定された首を僅かながらに動かして、あたしはヘッドホンの男の様子を探った。どうやらあたしを苛めるのに夢中で、御札が擦れる音には気付いていないみたいだ。骨ばった手は太ももの真ん中辺りを触っている。背中がぞくぞくするのをじっと耐えて、あたしは男の手がスカートのポケットの真下に来るのを待った。もう少し上、もう少し……今だ。

「、」

あたしの口から、何語ともつかない妙な言葉が紡ぎだされた。ポケットに入っていた皺くちやの御札が一気に広がり、蒼い光を帯びて刃物のように鋭利になる。

数枚あたしの太ももに刺さったけど、残りは全部男の手に突き刺さったみたいだ。ヘッドホンの男が驚いて飛び退く。あたしを拘束していたコンクリートが形を崩して、あたしは床にへたり込んだ。

「……く、そ……ふざけやがって……！」

御札の刺さった手を押さえ、男が歯軋りしている。勝手に人の身体に触るからだよ、ざまーみる。痣の出来た足首を押さえながら、あたしは男に思い切り舌を出してみせた。一杯喰わせてやったとほくそ笑むあたしの眼が、男の顔に注がれる。

「……だから嫌いなんだよ……思い通りにいかない……全部、ぜんぶ……」

歯軋りしていた男の顔が俯き、息も絶え絶えにそう呟いた。御札

が刺さって血まみれになった手が、ヘッドホンを押さえる。青いヘッドホンから流れていた変な歌が止み、空間に妙な静寂が訪れる。……いや、完全な静寂じゃない。この音は……。

どこからとも無く聞こえてくる微かな雑音に、あたしは耳を澄ませた。これって、テレビの画像が砂嵐になった時の音じゃないか？ 気味の悪い現象に警戒心を強めるあたし。

出入り口の自動ドアのガラスが割れる音が聞こえ、黒い影があたしのすぐ横に降り立った。

「遅れて済まない、魅首殿」

「魅首さんっ！」

黒髪の鎧に包まれた好男の腕から刈子が飛び降りて、あたしの元へ駆け寄ってきた。好男が前に進み出て、髪で出来た黒い剣を構えている。

「こいつが、図書館をこんなにした元凶ってわけか……」

「……っとうしい、鬱陶しいんだよ」

ヘッドホンを押さえ、男が肩を震わせながら憎しみの籠った声で呟く。俯いていた顔がゆっくりと起き上がり、憎悪に歪んだ口が開いた。

「……俺に逆らうものは全部、力でねじ伏せてやる！」

大声で叫ぶ男の禍々しい目から、じわりと涙が湧いた。

第二十九章 揺れる心

崩壊した図書館の中で、あたしと好男、それに刈子は怒り狂うヘッドホンの男と対峙していた。

「魅首ちゃん、その怪我　それに顔……」

黒い兜の隙間から好男の眼元が覗き、心配そうな声が聞こえた。いつもより声が上がって聞こえるのは気のせいだろうか？ 乱れた服を手早く着なおすと、頬の血を拭って強がってみせた。

「顔は大した怪我じゃないって。それより足治してくれるか？　このままじゃ歩けないからさ」

足首が変な方向に曲がり、付け根には御札が刺さってどくどくと血が流れる足を好男に見せるあたし。無言で頷いて、好男が足を治療してくれた。これでまた闘える。

「俺に逆らう奴は皆、この力でねじ伏せてやる……！」

血まみれの手で拳を握り、青いヘッドホンを着けた男が叫んだ。崩壊を続ける図書館に、咆哮が響き渡る。まるで男の叫びに同調するように、あちこちに転がるコンクリートの塊が動いた。一際大きな塊が浮かび上がり、あたし達目掛けて降ってくる。

「　！　好男、右からくるぞ」

アズアの声に、好男が右足を引いて身体の向きを変えた。黒髪の剣が解け、網状になって塊を包み込む。衝撃を抑えることはできた

みただけで、あまりの重さに髪が千切れたみたいだ。鎧の上から好男が頭を押さえて泣き言を漏らしている。

「いててて……。つたく、この歳でこれ以上毛根を酷使するのはご免被^じりたいよ」

将来が心配だからもっと気遣ってくれ、と好男が顔を顰めてアズアに文句を言っている。確かにここ数日間、好男の頭は大分涼しくなったような。最初会った時はワックスで固めて毛先を遊ばせるほどあつた髪が、今では殆どスポーツ刈りと言つていい状態だ。そのうち坊主頭になるかもしれない。

好男に懇願されて、アズアも少しうるたえた声を出した。

「それは、その 解っている。しかし、これ以外に闘う方法が無いんだ。我慢してくれ」

小さい子を宥^{なだ}めるようなアズアの言い方に、好男が渋々頷く。その間にも降り注ぐコンクリート片を弾き返す好男達に、あたしはスイフィから聞いた情報をそのまま伝える。

「あの男と契約してるのはレエンって奴みたいだ。土に関する能力を持つてるって、スイフィが言ってた」

「……レエンか。厄介だな」

アズアが呟いて、黒い鎧が二、三步飛び退った。むき出しのコンクリートから絨毯の上へと移動して、鎧が剣を構えなおす。

それに応えるように、対峙している男のヘッドホンから高圧的な声が聞こえてきた。

「ほら見たことか……。副隊長とそれに宮廷占い師まで来てしまっただではないか。我の言うことだけに従っていればよかったものを、どうして御前はすぐ反抗する。結果的に自分で自分の首を絞めていることに、まだ気付かないのか。そもそも最初に契約したときから。御前は人の話をよく聴きもしないで勝手に突っ走って」

堰を切ったように、ヘッドホンから説教が垂れ流される。くどくどねちねちと続く説教にぼかんと口を開けるあたし達の前で、男がヘッドホンを抑え鼻に皺を寄せた。うるせえな、と小声で毒づくのが聞こえる。

怒りに歪んだ男の目元からは、涙がとめどなく流れている。

「何で俺が誰かの言うこと聴かなきゃならねーんだよ。俺は……力を手に入れたんだ。誰にも負けない力を……。世の中、力の強い奴の言い分が通るんだろ？ 弱い奴を力でねじ伏せてさ。……例えば、こんなふうに」

ヘッドホンの男が立つ足元に無数のヒビが入り、崩れた図書館全体が音を立てて宙に持ち上がった。揺れる足場にしがみ付いていると、今度は建物全体が床に叩きつけられる。支えを無くした身体が一瞬浮いて、あたしと刈子は膝を擦りむいた。

男の足場だけが宙に浮き、刈子が痛そうに膝を摩る様子を見て嗤っている。

「はははっ。ほんと馬鹿だよなあー。自ら敵の陣地に踏み込んできちゃってさあ。あんたらさあ、自分の立場分かってる？ くもの巣に引っ掛かった小バエみたいなもんだよ？ ……せいぜい足掻いて俺を楽しませてくれよな」

破れた天井から差し込む光の下で、男が笑いながら流れる涙を拭

った。

流れる涙のお陰で能力が強化されるみたいだけど、それって笑い泣きにも適用されるんだろうか？ 狂ったように笑いながら涙を流している男を眺め、あたしの頭上に疑問符が飛んだ。

一人で楽しそうに喋ってる男を無視して、アズアと好男がどうやって相手を倒すか相談している。

「ええー……切り殺すって……。あのさアズア、オレそんなハードなこと出来ないって。もつとなんかこう、平和的に解決する方法無いの？」

「平和的、か。難しい質問だな。契約を破棄させることが出来れば不可能ではないが……。基本的に、最初に契約した内容を果たすまでは、どちらかが死ぬまで契約を破棄できないからな」

「異世界の者より、故郷むいこの者の方が強い身体を持っているから、『契約者』を狙ったほうが倒しやすいのだ、とアズアが付け加える。自分の周りにコンクリート片で防御壁を作り出した男を見上げ、好男が苦々しい表情で呟いた。

「……くそ、こんなの放っておけるわけがないよな」

吐き捨てるようにそう言って、柄を握る好男の手に力が入る。太陽が真上に来て、ここから男を見上げるとまるで後光を背負っているようだ。剣を握って構えを取る好男を見下げ、青いヘッドホンの男が傲慢な笑みを浮かべている。涙の筋が、光に照らされて輝いている。

「ククツ……おもしれえな。正義面しちゃってさ」

正午の光の中で、男がゆっくりと両腕を広げた。その手に刺さっていた御札が抜け落ち、傷が治っていく様子が見える。床が崩れる音に混じって、またあの音が聞こえた。

片目を顰め、嫌悪の情を剥き出しにして、男が口を開く。

「『オレが守らなきゃ、誰が守るんだ』ってか？　ははは！　笑いすぎて涙が出るぜ……。よく考えろよ。俺のやつてることあんたらがしようとしてること、大して違いは無いだろ？　どっちの側と契約したか　それだけだ。それ以上でも以下でもない。いや、大義って面では、俺のほうがあんたらよりよっぽど『正義』だと思っよ」

コンクリート片に包まれながら、男が悦に入っただ様子であたし達を見下して嗤っている。

「『正義』だと？　ふざけるな！　これだけの破壊行為をして、何も知らない人を傷つけて、そのどろろ正義だと言っんだ」

男の挑発は好男にどストライクだったみたいだ。黒髪の鎧の中から、好男の怒鳴る声が聞こえる。何してもへらへら笑って流す好男が本気で怒るなんて……嫌なことでもあったのかな。

思惑通りとでも言いたげに、ヘッドホンの男がにやにや笑って足場の高度を下げた。

「ああ、そうさ。向こうの世界が今どうなってるか、どうせあんたらは教えてもらってないんだろ。俺は、見てきた。この目で、自分の目でな。　そりゃあもう酷い有様だったぜ。なあ、レエン？」

男が片手でヘッドホンを押さえ、頭を傾けた。青いヘッドホンから、冷たい声が淡々と語りだす。

「故郷は太陽を含む全ての星が消え、完全な暗闇の世界になってしまった。野獣の群れが家畜を追い散らし、畑の作物はこれ以上育つ見込みが無い。人々はいっ起こるかわからない地震に怯えながら、蝋燭の微かな光をたよりに生活している。そんな彼らを放っておくと？ 僅かな希望も拭い去って、絶望に追い込むことができるか？」

惨状を聴かされて、好男は黙ってしまった。向こうの世界が大変なことになると刈子から聴かされていたけど、ここまで大事になつてるとは。いや待て、こいつ嘘ついてるかもしれない。

好男も同じことを思ったのか、勢いの削げた声でアズアに尋ねている。

「……今の、本当なのか」

嘘だと言ってくれ、という気持ちが見え見えだ。ここは例え本当でも、好男のやる気のために否定が来るはず。そう期待するあたしの耳に入ってきたのは、苦しそうに肯定するアズアの声だった。

「ああ。崩壊の様子はわたしも見てきた……。最も、ほんの始まりしか見ていないけれど。……やはり、あのまま崩壊は進行していたのか」

そのまま正直に言ってしまうなんて、いったいどういふつもりなんだ？ この中でもアズアは結構頭がいい方だと思っていたのに……。アズアの一言で、好男は完全に戦意喪失してしまったみたいだ。剣を握ったまま戸惑って後退りする好男に、ヘッドホンの男が一步步近づいていく。

「だからさあ、無駄な抵抗はやめろつて。あんたらが命差し出せば、向こうの世界で何千何万つて人が命を救われるんだぜ？ ……それとも、開き直つて保身のために闘うのか？」

「それは」

俯いて視線を逸らす好男が右手で額を押さえた。その手首に、きらりと腕時計の文字盤が光る。なんで好男の奴、右手に腕時計をしてるんだ？ いつもは左手首に着けてるのに。不思議に思つて眼を凝らすあたしは、次第にあの音が大きくなっていることに気付けなかった。

第三十章 惹かれあう絆 前編

暑い日差しが破れた天井から降り注ぐ図書館の中。青いヘッドホンの男が、不敵な笑みを浮かべながら、じりじりと近付いてきている。男が一步踏み出す毎に、好男が後退りする。

遠くで鳴いていたセミの音が、少し小さくなったみたいだ。代わりに、耳鳴りのような音と砂嵐の音が頭を揺さぶる。

ヘッドホンの男から向こうの世界の惨状を教えられた好男は、すっかり戦意を失くしてしまったみたいだ。剣を持つ手はだらりと下がり、膝も曲がっている。

これじゃ、あいつの思うつぼだ。

好男が闘わないのなら、あたしが闘う。重しをつけたような身体を引き摺り立とうとするあたし。それを見たヘッドホンの男が指を鳴らす。周りを漂うコンクリート片が、あたしと刈子に向かって飛んできた。

咄嗟に刈子を突き飛ばしたあたしの腕に、コンクリート片が突き刺さる。

それが合図だったかのように、床のコンクリートがもの凄い勢いで隆起しはじめた。

「 危ない！ 」

刃物のように鋭く尖る床から飛び上がり、黒い鎧があたしと刈子を抱き上げた。倒れた書棚の上へあたし達を下ろし、男が飛ばしてくるコンクリート片を好男が弾く。

「 ふうん、やっぱり闘うんだ？ まあ、その気持ちわからなくも無

いぜ。誰だつて自分が傷つくのは嫌だもんなあ」

意地の悪い顔で嗤いながら、男がヘッドホンを押さえてズレを直した。挑発にめげず破片を叩き落していく好男に、ヘッドホンの男が更に小憎たらしい声を出す。

「それに女二人守らなきゃならないってか……。さしずめ気分は騎士ってところか？ はは、頑張ってくれよ、似非英雄さん」

「茶化すんじゃないっ！」

黒髪の兜の下から、好男の怒鳴る声が聞こえる。その声はさつき啖呵を切ったときより、苦惱してる感じだった。話を聴いて躊躇ってるせいか、好男の剣裁きにはキレが無い。どうしよう、好男の奴、これ以上何か言われたら闘うのも止めてしまつかも……。

串刺しにするように隆起する床から逃げながら、あたしは好男とヘッドホンの男の様子を見守った。

吹っ切れない自分に齒噛みしてる好男を見て、男は可笑しくてたまらないって顔をしている。ヘッドホンを押さえていた男の手が横に伸ばされ、傍を飛んでいたコンクリート片が変形して剣の形になった。

「あんだ、好男って言ったっけ……。いいぜ、俺もその騎士ゴッコに乗ってやるよ。どっちが『正義』か、この場で勝負しようじゃねーか」

男の手に握られた剣にコンクリート片が集まり、細身の剣が太刃の両手剣へと変化していく。男の周囲を漂っていた破片も、只の欠片から刃へ変形していった。足場になっていたコンクリートが男の足

を包み、灰色の鎧になる。

「さあかかって来いよ。それともこっちから行くこうか？」

「くっ……」

幾千の剣を従えて挑発をかます男に、好男は怯んで腰がひけている。これだけ思い切り力の差を見せ付けられたら、誰だって尻込みしてしまうだろう。しかも頼りにしてる相棒が弱気アスアになってるし。せめてここに四季がいれば。

既に機能を果たしてない出入り口に目を走らせ、あたしは四季の姿を探した。あいつ、こんなときにどこに居るんだ？ 半分イラつき、半分焦りながら、そう思うあたし。けれど、四季がこのピッチに現れる気配は一向に無い。

居ない奴を頼りにするより、ここに居る自分達だけでなんとかするしかないか。

遣り切れない気持ちで出入り口から目を逸らすと、あたしはヘッドホンの男の隙を窺った。

悦に入った様子で大剣を構える男の頭上からは、まるで紙ふぶきみたいにキラキラしたものが降り注いでいる。あれは何だ？

不審に思つて眼を細めるあたしの視界に、空に開いた穴の存在が映る。あんなもの、いつの間に来たんだろう。これもこの男の能力の一つなんだろうか？

空に開いた不思議な穴は、男がコンクリートの剣を動かす度に少しずつ広がっている。いや、男の行動だけじゃない。相手の刃で切れた剣を好男が直すときにも、穴は広がってキラキラした欠片が降り注いだ。

もしかして、能力を使う度に穴が広がっているのか？

遙か上空を見上げて目を凝らすあたしの前で、ヘッドホンの男が大きく一歩踏み出した。

「なんかもー面倒臭くなってきたな……一気にケリつけるぜ」

「！」

「好男さん、左後ろ足元から攻撃が来ます！ 気をつけて！」

前からの斬撃を避けようと左足を下げた好男に、刈子が叫んだ。弾かれたように鎧が右前方に飛び、一瞬遅れて床が針のように変形する。髪の毛のかかところが裂けて、赤い血が飛び散った。

「いつ……てえー……」

書棚の上に着地した好男が膝をつき、かかとを押さえて呻いている。すぐに治療したのか、少し血が出ただけだった。よろよろと立ち上がる好男に、男がヘッドホンを押さえて舌打ちしている。

「床全部、あいつの攻撃手段になるってことかよ……。焼き鳥は好きだけど、自分が串刺しになるのは勘弁して欲しいな」

波打つコンクリートの床を見つめ、好男が愚痴をこぼしている。気を取り直したのか、アズアが好男を励ました。その声にはいつもの冷静さが戻っている。

「ならば、床に触れなければいい。綱渡りをしようではないか」

アズアがそう言った途端、黒髪の鎧から幾筋もの髪が空間に伸びた。しなやかな黒髪が壁、床、天井に突き刺さり、くもの巣状に広がっていく。なるほど、良い考えだ、と好男が明るい声を出した。確かにこれなら、不意に突き上げる床に怯えず済むな。それに縦にも移動できるし、ちよつとは有利になるかも。

期待に胸を膨らませるあたしの前で、ヘッドホンの男が、足を支えるコンクリートの鎧ごと宙に浮かび上がる。

……相手は更に上を行ってるみたいだ。

あたしが肩を落としている間にも、上空では好男とヘッドホンの男が激しい鏝^{つば}迫り合いを繰り返している。

剣術は好男、というかアズアの方が上みたいだけど、髪の細剣とコンクリートの大剣じゃ、強度の差は圧倒的だ。ヘッドホンの男は構えている大剣以外に、自分の周囲を飛び回る剣も使えるし。

じわじわと壁際に追い詰められていく好男を見て、あたしの頬を汗が伝った。このままじゃ好男がやられてしまう。今、あたしに出来ることは。

拳を握って悩むあたしに、刈子がおろおろした様子で声を掛けてきた。

「どうしましよ魅首さん、好男さんが。さっきのように未来予知で援護できればいいのに、ここからじゃ声が届きませんし……あれ？ 魅首さん？ どこに行っただんですか？」

あたしはすぐ横にいるのに、刈子が両手を前で組んで辺りを見回している。……もしかして、また身体が透明化しているのか？ はつと振り返ると、瓦礫の下から何本もリボンが這い出て塊を退けているのが見えた。スイフィが気を取り戻したんだ。

リボンがコンクリートの塊を完全に持ち上げ、その下から吊り広告が現れた。枷を着けられたように重かった身体が、軽くなっていく。これなら好男を助けに行けそうだ。

両手を見つめて決意を固めるあたしの横に、スイフィが飛んでくる。

「…………ごめん、おいら…………」

「なあスイフィ、広告が濡れたら、あたしの身体もスイフィの身体も滲んだよな？ ってことは、あいつのヘッドホンを壊したら、レエンって奴も相応のダメージを負うってことだよな」

何故かしょげているスイフィに、謝る暇も与えず尋ねるあたし。肩の辺りで漂う広告がひらりと羽ばたき、スイフィがうなづいた。

「最初に言った通りだねい。おいら達は棲んでるものが壊されたらおしまい。そしておいら達と契約した人も、おいら達が怪我すれば同じように怪我するねい。反対も同様ねい」

スイフィの言葉を聴いて、あたしもうなづいた。やっぱり、そうか。これで確認は取れた。

頭上で闘う好男とヘッドホンの男を見つめ、あたしは両手を拳に握る。レエンとか言う奴の声は、あの青いヘッドホンから聞こえていた。あれを壊せば、男を無力化できるはずだ。

「行くぞ、スイフィ。あいつのヘッドホンを奪って叩き壊そう」

返事も聞かず、あたしは目の前の髪束を掴んでよじ登り始めた。ヒビの入った腕が痛む。それに、さっき刈子を庇ったとき怪我した

傷も。

顔を顰めて歯を食い縛りながら、あたしはがむしゃらに髪の毛をプを手繰った。好男だって必死に闘ってるんだ。ここでめげてなんかいられない！

髪束を掴もうと伸ばした手に、色とりどりのリボンが絡んだ。腕に掛かっていた体重がふつと軽くなる。

「スイフィ、おまえ……」

「起きたばかりでへろへろだから、全身は支えられないねい。魅首、頑張れる？」

あたしの顔を覗き込み、スイフィが気遣わしい声でそう訊いた。もちろん、と答えるあたし。支えられている体重は、多分十キログラムにも満たないだろう。でも、スイフィがあたしに協力しようとしてくれる。その気持ちだけで、何倍もの力が湧いてくる気がした。

好男が移動する度に揺れる髪束をよじ登り、あたしはついにヘッドホンの男の後ろに辿り着いた。

男は好男と剣を交えていて、こっちには気付いていない。周囲を漂う刃に気をつけながら、あたしは男の頭からヘッドホンを外した。

「なっ？」

驚いた男の動きが止まり、黒い剣がその喉元に突きつけられる。

「好男、コードを切ってくれ！ こっからコレを投げ捨てる！」

「わ、わかった」

黒い剣が閃き、男の首から下がっていたヘッドホンを繋ぐコードが切れた。これで終わりだ　！　遙か下方の床目掛け、あたしがヘッドホンを投げ落とす。

あたしの手を離れた青いヘッドホンは、真直ぐに落ちてばらばらに砕け散った。

第三章 惹かれあう絆 後編

硬いコンクリートの床にぶち当たり、男の着けていた青いヘッドホンが砕けた。

これでこいつも大人しくなるはず。

弾む息を整えながら、あたしは黒い剣を突きつけられた男を見た。目だけ下を向いている男の前では、好男が肩で息をしている。さっきの激しい鏝迫り合いで疲れたんだろっな。

とにかくこれで一件落着……。そう思うあたしの耳に、男の忍び笑いが聞こえてきた。

「……？」

あれだけ好き勝手ほざいてた手前、負けたのが悔しくて発狂したんだろっか？

訝いぶかしむあたしの前で、男は剣を突きつけられていることも構わずに爆笑している。

「はは、ははははっ！ 引っ掛かった！ 本当に引っ掛かりやがった！」

天を仰いで笑い転げ、男の頬を涙が伝う。

引っ掛かった？ どういう意味だ？

警戒しているあたしが拳を握ると、男が笑い泣きしながら剣を手放した。重いコンクリートの剣は宙に浮かんだまま、ゆっくりと槍に形を変えていく。ヘッドホンを壊したのに、まだ能力が使える？

目を見開くあたしの耳に、男の愉快そうな声が聞こえる。

「どーせ、ヘッドホンから声が聞こえるから、そこにレエンが居るとでも思ったんだろ？ ホント、単純思考だよなあー。何のためにヘッドホンしてるかぐらい、考えることもできないのかよ？ ククッ」

侮蔑の籠った声でそう言って、男は切れたコードを掴んで引つ張った。男の上着のポケットから、青色のMP3プレイヤーが覗く。陽光を反射してキラリと輝くそれを見つめ、あたしと好男の瞳孔が広がった。

精神的衝撃で固まるあたし達の前で、MP3プレイヤーから高圧的な声が発せられる。

「……種明かしとしては、隠していた意味が無いだろう。どうして御前はいつも、一つ二つ余計なことをするのだ。早く仕舞え」

「んだよ、うるせーな。ほら、こいつショックで動けなくなってるじゃねーか。結果が良ければ過程はどーでもいいんだよ」

MP3プレイヤーから聞こえる命令を突っぱねて、男の手が宙に浮かぶ槍を握った。困惑していた好男が我に返り、男の首筋に切先を当てた剣を握りなおす。

「まだ能力が使えても、おまえの負けに変わりはない！ 降参するんだ」

黒髪の剣を構え、好男が男に向けて叫んだ。槍を構える男が一際大きな声で笑い、その目尻から涙が零れる。

「負け？ 俺が？ 冗談きついぜ！ 負けてるのは あんたの方だ」

流れる涙が顎を伝って落ちると同時に、男が槍を突き出した。一直線に尖った穂先が鎌状に変形して、髪を切り裂く。

そのまま突進してくる男の攻撃を避けようと、好男が後方へ退いた。壁際に近付いた好男の腕を、コンクリートが変形して拘束する。逃げ出そうともがく黒い鎧に向けて、男の操るコンクリートの刃達が襲い掛かった。

「好男っ！」

思わず心配して声を上げるあたしの前で、コンクリート片がばらばらと床に落ちていった。まるでサーカスのナイフ投げのように、コンクリートの刃達は好男の輪郭ぎりぎりの場所に刺さっている。とりあえず無事だったことでほっと溜息が出たけど、少しでも好男が動いたら傷だらけになるだろう。いや、好男が動かなくても、この男がちよっと刃を操れば……。

頬骨に触れている刃を見て、好男は冷や汗をかいている。好男を助けなくちゃ、そう思って踏み出そうとする足が、何かに引きとめられた。疑問符を浮かべて振り返ると、足にコンクリートが纏わりついている。

「いつのまに？」

足に絡む流動体状のコンクリートは、アズアの張った髪の毛の網を伝ってここまで上ってきたみたいだ。ひび割れだらけだった図書館の床が、まるで底なし沼のようにどろどろに溶けている。

見た目は柔らかさそうだけど、感触は固体のコンクリートそのまま

だ。あたしのすぐ傍を飛んでいたスイファイも、背後から忍び寄ってきたコンクリートに捕らえられてしまった。

ここまで能力を制御できるなんて。男の所業に、あたしのこめかみをじとりと汗が伝った。……そういえば、さつきから妙に暑い気がする。図書館の冷房が壊れたからってのは分かるけど、肌に触れる空気は明らかに体温より熱い。これも、上空に現れた穴が引き起こす現象なんだろうか。

だらだらと汗を流すあたしの前で、槍を持つ男が宙を歩いて好男に近付いていく。恐怖のせいか浅い呼吸を繰り返す好男の首筋に、ぴたりと槍の穂先が当てられた。慄きながらも相手を睨みつける好男を、男が口元を歪めて嗤っている。

「気分はどうだ？ 似非英雄さんよ。どっちが『正義』か、これで決着ついたな」

気味の悪い忍び笑いを漏らす男の前で、黒髪の鎧が顔を俯けた。兜の隙間から、好男が悔しそうに両目を閉じている様子が見える。その首筋を槍の穂先でつつき、男が嗤いながら好男に話しかけた。

「冥土の土産に教えてやるーか？ 俺の能力は、珪素化合物を自由に操る力だ。シリコン、珪酸カルシウム、その他諸々（もろもろ）。地上にある岩石の大半が俺の支配下にあるんだよ。勿論、人工物のコンクリートもな。どうだ、絶望したか？ 冥土の土産にはちょうどいいだろ？ はははっ」

「松郎、余計なことを言うな。早くとどめを刺せ」

クリップで襟元に留められたMP3プレイヤーからイラついた声

がして、男を急かした。刃に囲まれた鎧は身じろぎ一つせず、只沈黙を守っている。

意地悪く笑っていた男が顔を歪め、つまらなさそうに唇を突き出した。

「……相変わらずお堅いなあ、嫌になるぜ……」

とめどなく小言の流れるMP3プレーヤーに、男が口角を下げて大袈裟に溜息をついた。昆虫標本みたいに壁に張り付けられた好男から眼を逸らし、男が図書館の中を見回す。

崩壊した図書館の中には、男とあたし達、そして海原と花柄しかない。その二人もあたしと同じように溶けたコンクリートに足をとられ、床の上でもがいていた。そのすぐ傍で刈子もコンクリートから足を引き抜こうと無駄な努力をしている。

眼下で必死に抵抗している刈子達を眺め、男がにやりと口端を上げた。

男が眼を放している隙に壁から逃げ出そうとする好男に、コンクリートの槍が投げつけられる。

「おっと動くなよ。せつかく今面白いことを思いついたんだからさあ、あんたもちよつと付き合えよ」

下卑た笑みを浮かべ、男が指を鳴らした。合図と共に、床が変形して刈子達が上へ運ばれる。男が海原の襟を掴み、無理矢理自分の傍へ引き寄せた。

あたし達の姿が見えていない海原は、何が起こってるのかさっぱりわからないみたいだ。急に身体が引つ張られて、涙に潤んだ眼が忙しなく辺りを見ている。

「やつ……先輩、怖い……！」

「何する気だ、てめえっ！」

怯える海原を舐めるように見ていた男が振り向き、あたしがいると見当つけたところへ眼を向けた。

「何って、決まってるだろ。こっちもボランティアでやってるんじゃないんだ、ちよつとは息抜きつてのが必要だろ？ こんな風にな」

男の骨ばった手が海原の顎を掴み、乱暴に口元を奪った。震えていた海原の眼が見開かれ、涙が頬を伝う。こいつ！あたしの胸の内に怒りが燃えたけれど、足が固められているから身動きが出来ない。

このコンクリートから抜け出せたら、こいつの顔を思い切り殴ってやれるのに……！

悔しくて爪が食い込むぐらい拳を握るあたしの横を、数本のリボンが掠めた。緑色のリボンが男の手に巻きつき、海原から引き剥がす。

「やめるねい！ その子とっても嫌がつてるじゃん！」

半分コンクリートに埋まった吊り広告から、スイフィの叫ぶ声が聞こえた。広告の中からリボンを出して抵抗するスイフィに、男が鬱陶しそうな眼を向ける。

「あ？ ……うぜーな。静かにしてろ」

絡まったりポンを振りほども、男が右手をスイフィに翳した。あつという間に、スイフィの入った広告はコンクリートに包まれてしまった。同時に、あたしの身体にも、もの凄い圧力がかかる。これじゃ息をするのも苦しい。

身動きできないあたしと好男の前で、男は刈子達三人の前に立つてそれぞれを見比べている。

「んー、ガキに興味は無いし……。俺のこと見えてない奴はつまんねーし」

左右に振っていた男の眼が止まり、海原をなぐさめている花柄に視線が注がれた。その顔に、好色な笑みが浮かぶ。

指を鳴らして花柄を近くに移動させる男に、好男が声を上げた。

「やめろっ！ これ以上彼女達に手を出すな！」

鎧の一部を变形させて、好男が男の背中を攻撃しようとする。素早く男が振り向き、花柄の顔にコンクリートの刃を当てた。

「……動くなつて言っただろ？ 黙って見てろよ……。今度攻撃しようとしたら、こいつの綺麗な顔に消えない傷をつけてやるぜ？」

「っ」

苦しそうな顔をして、好男が男から顔を逸らした。白くなるほど唇を噛み締める好男に、花柄が震える声で空元気を演じている。

「好男くん、わたし、大丈夫だから……。んっ……」

気持ち悪い手つきで男にわき腹を撫でられ、花柄の身体がびくと震えた。

「花柄……！」

必死に耐える花柄の名を呼ぶ好男の声は、絶望の色が滲んでいる。人質を取られて見守ることしか出来ない好男に、男がわざとらしい声を上げた。

「へえ、あんたら知り合いなんだ？ そりゃいいや。おいおまえ、こいつが傷つくのが嫌なら抵抗するんじゃないぞ」

薄桃色のシャツを掴んで顔を引き寄せ、男が花柄を脅す。男の要求に、花柄は無言でうなづいた。沈黙が支配する空間に、好男が息を呑む微かな音が聞こえた。

男の歪んだ口が花柄の首筋に近付き、唇から覗く男の舌が花柄の柔らかい肌を舐め上げる。ねっとり舌が通った後には、細く糸を引いた唾液が道筋を残していく。

この男、マジで許さない！　まるで自分がされてるみたいで、恥ずかしくて腹立たしくて仕方が無い。この場で自由に動けたら、あの男を思う存分殴れるのに。怒りに燃えるあたしの視界が、だんだん狭くなっていく。このままじゃ、酸欠で意識が飛びそうだ。

激しい怒りであたしがなんとか意識を保っている間にも、男は花柄の身体を気持ち悪い手つきで触っている。小さな耳たぶを唇で食^はんで、男が花柄の胸元に手を伸ばす。

薄桃色のシャツの隙間から胸の谷間に手を入れられ、花柄の身体がびくと震えた。思わず花柄の名前を呼ぶ好男の頬を、コンクリートの刃が抉る。

「つつ……」

「わ、わたし……平気だよ。……っ、好男くんが助かるなら、わたし、わたし……んんっ」

がたがた震えて涙を流しながらも、花柄は無理に笑って好男を気遣っている。開いた口には舌を入れられ、それ以上先を聞くことはできなかつた。悶える花柄の身体を押さえ込み、男が薄桃色のシャツのボタンを外していく。ただ見てるしかできないなんて、こんなやつて！

現実を直視できずに目を閉じるあたしの耳に、幽かな咳きか聞こえてくる。

「……めろ……やめろよ……」

そよ風にも掻き消されそうな震える声で、好男が苦しそうな表情でそう繰り返していた。鎧が解けて顔が見えるようになった好男を、男が花柄から唇を離して馬鹿にした様子で見下している。

「はは、惨めだなあー。でもさ、一応了承はとってるんだぜ？ 同意の上でやってることをやめろって、見苦しいと思わねーの」

なあ？ と男が花柄の顔を覗き込み、長いスカートの上から足を撫で上げた。びくつと足を震わせて顔を顰める花柄に、男はにやにやししながら膝下文のスカートの裾をゆっくりと持ち上げていく。

「あっ、や、やめ……」

「あいつがどうなってもいいのか？ ん？」

耳元でいやらしく囁いて、男が再び花柄を脅迫した。人の気持ちを手玉にとって、こいつ。

泣きながら首を振る花柄の足を、内股に向けて男がゆっくり撫でていく。海原のすすり泣く声の中で、カリ、と何かが硬いものを掻く音がした。

「？」

朦朧としてきた意識の中で、音の聞こえた方に眼を向けるあたし。視線の先では、好男がコンクリートの壁に爪を立てていた。よほど力を籠めているのか、爪が割れて赤い血が出ている。刃に囲まれた肩はぶるぶると震え、俯いた顔は歯を食い縛っていた。

「やめろって、言ってるだろ」

今まで聞いたことの無い低く押し殺した声が、好男の真一文字に結ばれた唇から出る。その声が微妙に震えているように聞こえたのは、あたしの気のせいだろうか。

只ならぬ雰囲気を感じ取ったのか、男が手を止めて振り返った。垂れていた好男の頭が持ち上がり、鋭く光る眼が男を射抜く。真上から降り注ぐ陽光に作られた好男の影が、ざわざわと蠢く。

「オレの彼女達に 手を出すな！」

真正面から男を見据えて、好男がありったけの声で叫んだ。

その真直ぐな眼から一筋の涙が溢れ、図書館全体が黒い影に覆われた。

Another World the 5th chapter

青い空の下、緑色だった図書館前の並木道は、真赤に燃え上がっていた。

完全に崩壊した図書館と燃える並木道、その光景はまるで映画の中のように非現実的だ。

その非現実的な風景の中で、霞恋かれんが真赤なドレスを灼熱しゅつがえの風に翻ひるがえしていた。背後には、前方を気遣う紅太の姿も見える。

「テレビ中継を見て飛んできたら、探してた奴と会えるなんてね。ツイてるわ」

真赤なピンヒールを履いた足を上げ、霞恋が足元に倒れている四季の腹を小突いた。血混じりの息で咳き込む四季を見て、紅太が霞恋の腕を引っ張る。

「や、やめるっす！ これ以上何かしたら、あの人死んじゃうっす！」

「うるさいわね！ あんただって、わたしと一緒にこいつを攻撃したじゃない。今更何良い子ぶろうとしてんのよ」

腕を振りほどいて、霞恋が紅太を突き飛ばした。吹き飛んで地面に尻もちをついた紅太は、言い返すことが出来ず泣きそうな顔をしている。これだからガキは嫌いなものよ、と霞恋が吐き捨てるように呟いた。

血反吐を吐きながら立ち上がるうとする四季に、コツコツとヒールを鳴らして霞恋が近付く。

「あなたがここに居るってことは、図書館の中で闘ってるのはあなたのお仲間ってことよねえ？」

四季の顎を掴み、霞恋が猫なで声で尋ねる。近くの木に生える大枝が、火の粉を上げて燃え落ちた。火の粉の降り注ぐ中、四季は質問に沈黙で答える。

虫の息の四季に睨み返され、霞恋が眉間に皺を寄せた。

「……ふん、いいわよ。あなたを殺したら、すぐ確認に行くんだから」

掴んでいた顎を離し、霞恋が右手を上げた。手の平から紅蓮の炎が生まれ、それが巨大な火塊へ成長していく。ちりちりと銀髪を焦がす炎に、四季が苦痛の表情を浮かべた。

四季の左目が、炎に呼応するようにぼんやりと赤く発光している。霞恋がそれに気付き、炎の勢いが少し弱まった。

「なにこれ？ 気持ち悪い。……カンツァ、説明しなさいよ」

「この少年は、確かクウイと契約していた。物に転移した俺達と違って、団長の要望のため、クウイは人体転移の実験に使われていた。クウイの転送は失敗はしたが、それでも俺達より『契約者』との結びつきが強いのだろう。転移できた左目に対応して、この少年の左目からも強い力を感じる」

霞恋の命令に、頭に着けた櫛の中から声が答えた。長い説明を聞いて、霞恋が腕を組み、改めて四季を観察する。

「へえ……。道理でガキのくせに妙に強かったのね。甘く見てたら

散々な目にあつたわ」

棘のある声で霞恋がそう言い、腕にできた擦り傷を摩つた。腕以外にも、いくつか擦り傷が出来ている。ほんのかすり傷程度のそれを眺め、霞恋の目下に皺が寄つた。

このわたしを傷つけて、只で済むと思つてるの、と霞恋が低い声で呟いている。

再び手から炎を創り出す霞恋の後ろで、紅太は眉を八の字にして様子を見守っていた。どうしてこんなことになつてしまったのか、紅太がTシャツの胸元を握り締めて自問する。

スオンの眼を盗んでこの世界に戻つてきてから、紅太は姉との約束の本を探していた。市立図書館の本棚に隠してあつたそれは、何故か魅首の手に握られていた。奪われた珠も、どうやら彼女が持っているらしかった。取り戻したかつたけれど、二対一の戦闘が怖くて、紅太は逃げ出した。

十分に準備を整えて彼女達の家に行つたときには、中はもぬけの殻になつていた。

そうしてあてどなく街を彷徨さまよつていたら、テレビで図書館崩壊の中継が行われていたのだ。

向こうの世界の小屋でレエンのことを聴いていたから、紅太は迷わず図書館へ足を向けた。

魅首から本と珠を返してもらつたためだ。

ところが紅太を待ち受けていたのは、崩壊する図書館の前で死闘を繰り広げる霞恋と十四季だった。

中に居るであろう魅首を気にする紅太に、押され気味の霞恋は自分を助けると命令した。紅太は暴力的な霞恋のことを良く思っていないかったけれど、『味方』だから仕方なく援護した。力の差はあつという間に覆くつがえされ、銀髪の少年は死ぬ寸前まで追い詰められた。

そして今、辛うじて息をする四季を、霞恋が炎で焼こうとしている。

「ぼ、ボク……こんなつもりじゃなかったっす……」

痛めつけられる四季の姿を涙目で見つめ、紅太が言い訳を呟いた。まるで最初に能力を発動させたときのようだ、そう紅太は思った。胸の奥が締め付けられるようで、苦い感情が湧き上がってくる。

自責の念に囚われる紅太の目が、四季の赤く光る左目と重なった。苦しそうに窄められた目は、まるで紅太を責めているようだ。あんたも攻撃したじゃない、と、こだまする霞恋の声が心に細かい傷をつける。

これ以上見ていられないと顔を逸らす紅太の耳に、擦れた声で呟く四季の言葉が聞こえてくる。

「どうした……。何を迷っている……」

「え　？」

今にも息絶えそうにも関わらず、四季が喋っている。どうやら今の問い掛けは霞恋ではなく自分に向けられたものらしい。何を思っ

て銀髪の少年が自分に話し掛けるのだろうか。紅太が驚いていると、十四季の火傷した唇が再び開いた。

「貴様には……守るべき人がいるんだらう……。迷うことは……無い。自分が信じた道を行け……」

「何言ってるの？ 朦朧として夢でも見てるのかしら」

切れ切れに話し掛ける十四季の肩を、霞恋が揺する。体力を使い果たしたのか、十四季は目を閉じて地面に倒れた。力なく開いた口元から、血が混じった唾液が流れて地面を赤く染めている。

「守る……人……」

まだ微かに呼吸している十四季を見つめ、紅太は言葉を繰り返した。その心の中に、優しく微笑む姉の姿が思い出される。そうだ、自分は姉を守ると決めたんだ。そのために、強くなると誓ったんだ。熱い想いが込み上げると同時に、何故この少年が自分の姉のことを知っているのかと疑問が湧く。

「どうして、姉ちゃんのこと」

知っているの、と尋ねようとして、紅太は口を嚙んだ。目の前では、霞恋が十四季にとどめを刺そうとしている。瞼を閉じて横たわる少年には、抵抗する力など残っていない。

一人の人間の命が消えようとしている。そう感じて、紅太の心がざわめいた。

「……ボク……」

銀髪の少年は、自分の信じる道を行けと言った。信じる道とは？
自分の姉を守ること？ Tシャツを握る紅太の手が汗ばみ、心臓
の鼓動が速くなる。姉を救う代わりに、スオンは向こうの世界を救
うことに手を貸してくれと言った。

それはつまり、この少年のような人々を手に掛けるということだ。

姉を救うためには自分が強くならなければいけない。でも、その
ために力を得ようとすれば、他の人の命が犠牲になる。

「ボクの……信じる道……」

もう一度呟いて、紅太は眼を上げた。霞恋の掌の中で、灼熱の炎
が揺れている。十四季はもう息すらしていないように見える。紅太
の中で、姉を守らねばという気持ちと、このまま少年を見殺しにし
たくないという気持ちがせめぎあう。

霞恋が、紅蓮に燃える拳を振り下ろした。

「 やっぱり、ボクは……！ 」

一瞬遅れて紅太が立ち上がり、霞恋と十四季に向かって駆けてい
く。驚いて振り向いた霞恋の背後、図書館の中から、真黒な闇が溢
れて辺りを包んだ。

第三章 盡く闇

いきなり目の前が真っ暗になって、あたしは混乱していた。

松郎とかいう奴の下衆っぷりに、キレた好男が泣きながら能力を使った。そこまではよく覚えている。その後、何が起こったんだ？ 闇に包まれて、あたしはほんの数秒前の記憶を辿った。

確か、好男の影が動いて、急に広がったんだっけ。ということは、ここは好男の影の中ってことか？

一寸先どころか完全に何も見えない闇の中、あたしは辺りに手を伸ばしてみた。影の中に居るってのも奇妙だけど、それに感触があるってのはもつと奇妙だ。身体を包む闇は暖かくて、まるで人肌の温水プールに潜っているような感じがする。視界が奪われているのに、なんとなく安心してしまつのは何故なんだろう？

不思議な空間の中で色々考えているうちに、あたしは身体の傷が治っていることに気付いた。男に切られた頬の痛みが引いて、傷口が塞がっていく。長らく放置していた腕の骨のヒビも、刈子を庇ったときにできた切り傷も、全ての傷が暖かい闇の中で癒えていった。もしかして、これが好男の強化された能力なのか。

暗闇の中で癒えた頬を摩っていると、今度は足から冷たいコンクリートが退いていく感触がした。固められていた両足が解放されて、暖かい血液が足先まで回っていくのがわかる。

そうか、好男は生物だけじゃなくて物体もおせたんだ。そう理解すると同時に、あたしの身体はゆっくりと下降を始めた。足元を支えていたアズアの髪束が解け、ざわざわと音を立ててどこかへ収束していく。多分、好男の腕時計の中へ戻っていくんだろう。

長い距離を下降して、あたしの足が床に触れた。そのまましゃがんで床を触ると、柔らかい絨毯の感触がした。この床は、さつきまで崩れてコンクリート剥き出しだったのに……。元に戻っている床から手を離し、あたしは立ち上がった。濃厚な闇のせいで平衡感覚がおかしくなって、ちよつとふらつく。

水中にいるように緩慢な動作でよるめいて、あたしは好男がいた方向に顔を向けた。真暗闇で何も見えないけど、気分の問題だ。

図書館全体を直して、更にあたしの傷も全て治すなんて、こんな荒技を好男がやってのけるとは。これが火事場のなんとやらって奴なのかな。

暖かい闇に包まれて、安心しきつた気持ちで見上げていると、上空から光が差しているのが見えた。太陽の光とは違う、やけに白くて冷たい感じの光だ。なんか蛍光灯みたいだな。この光、どこかで見たことあるような……。

頭の隅に何か引っ掛かって、もやもやしているあたしの頭にキラキラした破片が降り注ぐ。

好男が能力を使ったから、また空の穴が広がったのかな。

破片を手で受け止めてぼんやりと眺めていると、あたしの耳に誰かの声が聞こえてきた。感触すらある濃い闇の中で、声は水中のように籠って聞こえる。

『自分が苦しいのは嫌だ……誰かが苦しんでるのを見るのも、嫌だ……』

情けない声、これ……好男か？ 妙に反響エコーがかかって聞き取り難い声は、絞り出すように独白を続けている。

『……なのに、オレ……。自分の楽しさだけ優先させちゃって。バレなきゃいいんだって、あの子達も、オレと一緒にいると楽しそうだからいいじゃんか、って……。そうやって、自分も周りも騙して。それが、それが一番苦しめてるってことなのになさ』

好男らしき声は、泣いてるみたいに震える声で弱音を吐露している。なんだよ、これ。全然らしくないじゃないか。張り手喰らっても振られても、へらへら笑って女の子口説いてるのが好男だろ？ いつもと違った様子にあたしが戸惑っている、弱々しかった声が次第に自棄やけっぽくなってきた。

『……優柔不断なんだよ。深く考えずに、楽しいことだけ追いかけて、何時の間にか雁字搦がんじがらめになってた。受け入れることも切り捨てることも出来ずに、上辺うわべだけなぞって、全部理解した気でいたんだ。そうやって……。優越感に浸って……。ああ、ちゃんと分かってるよ。自分が、『正義』を名乗れるような人間じゃないってこと。……分かってるつもりだったんだ』

なんか、聴いてるこっちが疲れてくるな……。どこからともなく聞こえてくる好男の暗い独白に、あたしは堪らず耳を塞いだ。しっかり指を穴に入れたのに、好男の声はまだ聞こえている。というか、耳を塞いでも変わらない？ ということはコレ、あたしの脳内に直接響いてるってことか？

戸惑うあたしの頭の中で、好男の声は少し吹っ切れたように明るさを取り戻し始めている。

『ここまで気付けたなら、認められたなら、しっかり謝らなきゃいけないよな。……。そうさ、見てない振りは終わりにして、ちゃんと向き合うんだ。見たいものも、見たくないものも、全部』

声が途切れ、霧が晴れるように闇が消えていく。眩しい光に照らされた図書館は、まるで何事も無かったかのように、すっかり元通りになっていた。いや、ちよつと絨毯が汚れてるかも。磨き上げられたガラス窓から差し込む光が書棚を照らし、くつきりとした影をつくっている。

夏の日差しが創り出す光景に思わず見惚れていたあたしは、近くの物音を聞いて我に返った。

コンクリートを操っていた男が、何度も指を鳴らしたり、手を上下させている。

「くそっ！　なんで動かねーんだよ！」

絨毯の上に座って悪態をつく男の耳には、再生したヘッドホンが戻っていた。よく見ると、床はヒビが入ったり直ったりを繰り返している。絨毯の色がくすんで見えたのは、薄い影が床全体を覆っていたからだった。

操ろうとする端から床を直されて焦る男に、好男が近付いていく。なんか、肌が前より黒くなってる気がする……。

剣も出さずに無言で近寄ってくる好男を見て、ヘッドホンの男は急にしどろもどろになって弁解をはじめた。

「な、なんだよ……。そりゃ、ちよつとハメ外したかもしねーけどさあ。俺だって色々鬱憤溜まってんだよ。いきなり変な奴に契約させられて、それまでの生活とか全部失ったんだぜ？　誰も相手にしてくれなくて、四六時中変な奴に監視されてさ……。そんな中で巨大な力を手に入れたら、誰だって似たようなことするだろ？」

「な、なあ、俺の気持ちわかってくれよ」

あれだけ酷いことしておいて、今更何言ってるんだこいつ。涙を拭く花柄と海原を背後に、よくそんな口が利けるもんだな。苛々して拳を握るあたしの前で、好男が男の首に手を伸ばした。ひっ、と声を出す男の頭からヘッドホンが外され、コードに引っ張られてMP3プレーヤーがポケットから現れる。

「アズア、これを壊したら中にいる奴はどうなるんだ？」

「相応の傷を負って、最悪の場合死ぬだろう。レエンと契約しているこの男も、同じようになるだろうな。……それでも壊すのか、好男」

いつもより大人しい声でアズアが尋ね、好男が沈黙した。命とも言えるMP3プレーヤーを目の前にぶら下げられて、男が縋るような眼で好男を見ている。

視線に気付いた好男が、MP3プレーヤーを握って口を開いた。

「……おまえの言ってること、ある程度は理解もできるよ。オレがおまえの立場だったら、きっと似たようなことしたと思う。契約したのがアズアだったから、気の置けない仲間ができたから、オレはここまでこれたんだ。本当に運だよな。そっち側か、こっち側か。誰と契約するか、誰と親しくなるか。だからおまえに同情もしてる。でも、それを理由に何してもいいって言うのは、境遇に甘えすぎなんじゃないのか？」

淡々と諭すように言われて、男は顔を顰めて眼を逸らした。一応耳が痛いと思っただけ、全然反省している感じじゃない。ここまで我慢していたあたしは、思わず立ち上がって男の頬を平手打ちしていた。静かな図書館に、頬を叩く音が響く。

叩かれて呆然としている男の襟首を掴み、あたしは怒りのままに言葉を叫んでいた。

「何が『気持ちをわかってくれ』だよ！ 何が『俺だつて鬱憤溜まってる』だよ！ 自分の主張ばつか叫んでんじやねーよ！ てめえ、一度でも他人の気持ちを考えてみたことあるのか？ 無いなら今、胸に手当てて考えろ！ そんで、あの人達に謝れ！ 許してもらえないまで謝れっ！」

多分その時のあたしは、鬼も驚く位怒り狂った恐い顔をしてたと思う。そんな顔を顔面三センチまで近づけて怒鳴っても、男は鬱陶しそうに鼻に皺を寄せるだけだった。くつきりと手の形に赤くなつたそいつの顔を見て、あたしはなんだか空しい気分になつて手を離した。

通夜みたいな雰囲気漂う中、好男の手に握られたMP3プレイヤーから低く刺々しい声が発せられる。

「これでよく分かった……。我が間違っていたのだ。最初から異世界の人間などに任せず、我自身で動き、闘えばよかつたのだ」

「あ？」

MP3プレイヤーから聞こえる高慢な声に、男が顔を上げて訝しげに眼を細めた。次の瞬間、MP3プレイヤーの中から透明な針が幾本も飛び出て、好男の手を突き刺した。

思わず怯んで好男が手を離すと、MP3プレイヤーが男の元に戻っていく。

「団長のように人体に転移しなければ、直接闘えないと思っていた

が。副団長、貴女を見て不可能ではないと気付けた。人を操れないのなら、操れるもので覆ってしまえばいい、と」

M P 3 プレーヤーが眩しく光り、薄い影に覆われた床が音を立てて割れた。好男が床を直そうとするよりも早く、細かなコンクリート片が男の身体を覆っていく。

「なっ、お、おいやめろ！ やめろって言うてるだろ！」

止める間も無く、男の身体はコンクリートに包まれてしまった。ばらばらの欠片だったコンクリートが、男の皮膚に食い込みながら、一枚の皮のように変化していく。そのあまりのおぞましさに、あたしは足がすくんで動けなくなっていた。

「う、う……」

「我は任務を遂行する。その為ならば、多少の痛みなど甘んじて受けよう」

冷酷な声がそう言い放ち、コンクリートに包まれた男の右腕が刃に変形していく。それがあたしに向けて振りかぶられ、刃が空を斬る音がした。

眼を瞑るあたしの前で、刃は停止してそれ以上動かない。

「魅首、しっかり！」

スイファイの出すりボンがあたしを包み、刃の軌道からあたしを退けた。振り下ろした途中で止まってしまった刃に、M P 3 プレーヤーから低い声が聞こえる。

「……そう簡単に操れるわけではないのか。暫らく時間がかかりそうだ……。確実な勝利のために、ここは退くでしょう」

奇妙な呪文を唱え、コンクリートに包まれた男の身体が宙に浮き上がった。図書館の天井に、上空の穴と似たようなものが現れ、男の身体が吸い込まれていった。

また逃げられたのか……。

怒りの収まらないあたしが天井を睨みつけていると、自動ドアが開く音がした。重い足音と、何かを引き摺るような音も聞こえる。

「あなたは」

刈子の声に、あたしは振り向いた。出入口を見る刈子と好男が、驚いて口を開けている。いったい誰が来たのかと出入口に眼を遣り、あたしもぽかんと口を開けた。

「この人のこと、頼んだっす！」

どこから現れたのか、例の蟹を操る少年が出入口に立っていた。しかも、なんかぐったりしてる四季を引き摺って。何が起きたのか理解が追いつかず、啞然としてると、蟹の少年は四季を置いて走り去ってしまった。

第三章 束の間の休息

何事も無かったように建つ図書館の中で、あたしと刈子は倒れている十四季に駆け寄った。

「おい十四季、しっかりしろっ」

「十四季さん！」

名前を呼んで肩を揺ると、十四季が薄ら目を開けた。その左の瞳は、完全に赤く変色している。昨日のあれは、見間違いじゃなかったのか。眉間に皺を寄せて赤い目を見つめるあたしと、十四季の眼が合う。

十四季の血色悪い唇が開いて、擦れた声が聞こえた。

「……皆、無事なのか……？」

問い掛ける十四季に、あたしと刈子が大きくうなづいてみせた。力なく放り出されている手を握り、刈子が十四季に安心するよう言い聞かせている。

十四季が身を起こし、あたしと刈子、それに好男の姿を見て、ほつと安堵の溜息を吐いた。それから急に慌てた様子で、十四季が刈子の手を振り払う。

「か、勝手に触るな」

「すみません　心配で、つい……」

素直に謝る刈子に背を向けて、十四季が顔を赤くしている。なん

だ、結構元気じゃないか。蟹の少年が必死に運んできたから、この気の抜け様は肩透かしを食らった気分だ。

刈子に触られて顔が赤くなるなんて、十四季も大分俗っぽくなっただな。意味不明な言い回しして格好つけてるよりは、こっちの方が幾分マシだけど。

背を向けたまま沈黙する十四季に、刈子も無言だ。妙にぎこちない雰囲気のある二人に挟まれてると、何故かこっちまで緊張してくる。

背中がむず痒いような感情に戸惑っていると、好男がこっちに近づいてきた。ぽん、と肩に置かれた手は、あの闇と同じ暖かさだった。

「海原さんと花柄を家に送ってくつもりなんだけど、どうする？
皆一緒に車乗ってく？」

「スオンと契約したあの少年が、まだ近くにいるはずだ。この状況では、固まって動いたほうが安全だろう」

好男の質問に被せて、アズアが冷静にそう言った。これじゃ訊くまでも無いだろ……。なんて思いつつ、じゃあそうする、と答えるあたり。十四季が立ち上がるのに手を貸して、あたり達は好男の車へ向かった。

図書館を出るあたしの後ろでは、好男が海原と花柄に優しい声でなくさめの言葉を掛けている。

「……あれ、好男さん　？　ぐすつ。いつからそこに」

「もう大丈夫だから。……でも、暫らくは図書館に近付かないほうがいい。安全な家まで送ってくよ」

好男の言葉に、鼻をすする海原が涙目でうなづいた。その背中を摩っていた花柄にも声を掛けて、好男は二人を車へ移動させた。後部座席にみっちり詰まったあたし達を見て、花柄が海原に助手席を譲っている。

「えっ、でも……先輩……いいんですか？」

「いいのいいの。ちょっと奥へ詰めてくれるかしら。うん、ありがとう」

あたしが左側に詰めて、花柄が後部座席に座った。三人掛けのシートに大人二人子ども二人つてのは、かなりキツイものがある。左窓側に座る十四季が、刈子と密着しないよう姿勢を変えて悪戦苦闘してるのが見えた。ごめんなさいと謝る刈子に、謝る必要は無いとか言っている。じゃあ動かなくてもいいじゃんかよ。

後ろで狭そうに座る花柄に、海原が不思議そうな顔をしている。ぎゅっぎゅっ詰め車は、すぐに海原の家に着いた。案外近くに住んでるんだな。振り返ると、まだ図書館上空にできた穴が見えるくらいの距離だ。これじゃ絶対安全とは言いきれないんじゃないか……。好男も同じことを思ったのか、市外に知り合いが居るなら泊めてもらえ、と海原に忠告している。

「は、はい。わかりました……」

懇々と語る好男に、海原は怪訝そうな表情だ。そりゃそうだよな。海原からしたら、何が起こってるのかすら分からない状況だし。花柄が助手席に移って、すし詰め状態から脱した車内から、あたしは海原の様子を窺った。釈然としない様子だけど、好男の言葉を信じて親戚に連絡するみたいだ。

それを聞いて好男も安心したのか、最後にもう一度励ましの声を掛けて、運転席に戻ってきた。

整備された広い道路を、好男が無言で車を走らせている。助手席に座る花柄も、後部座席に座るあたし達も無言だ。なんだか気まずい雰囲気漂ってるな……。

重い空気に身を擦らせるあたしに、刈子が小声で耳打ちしてくる。

「えっと　あの方は、わたくし達のことが見えてるんですよね？」

「

「ああ、そうみたいだな……」

刈子の質問に答えるあたしと花柄の眼が、ミラー越しにぶつかった。あたふたするあたしに、花柄が首を小さく縦に振った。

「ええ、見えているわ。声も聞こえてるわよ」

今のが聞こえていたのかと、あたしと刈子が冷や汗を垂らす。この女の人、言動の一つひとつが何か恐いんだよな。花柄の声に、ハンドルを握る好男の手がびくつくのが見えた。愛想笑いを浮かべながら、好男が灰皿を弄いじっている。

「あ、次の信号左折だっけ。そろそろ着くんじゃないかな」

「……………」

軽そうな声で誤魔化そうとする好男に、花柄はシートベルトをぎゅっと握った。薄い色のルージュをひいた唇が開く。

「わたし……帰りたくない。好男くんと一緒に居たい。……駄目？」

「

左折車線に入ろうとウィンカーを出していた好男が、驚いて花柄を見た。余所見した車が、白線を跨いだまま走る。クラクションを鳴らされて、ようやく好男が前を見た。まったく、事故るところだったじゃないか。危ないな。

命の危険が過ぎて、あたしは花柄の言葉をもう一度よく噛み砕いた。

「……つまり、花柄もあたし達と一緒に、好男の家へ行くってことか？」

昨日の騒動を思い出し、あたしの背中を汗が伝う。十四季が御札で破壊しまくったあの家に、この女の人 came たら。何が起るかわからないな。かと言って、ここであたしが好男に何か言ったら、またややこしいことになりそうだし……。好男がどうするか様子を見るか。

見守ることに決めたあたしの前で、好男は意外にも花柄の望みを快諾した。

「わかった。後ろの子達も一緒なんだけど、それでもいい？」

尋ねられて、花柄がうなづく。それを確認した好男が車線変更をして、車は好男の家へ向かった。窓から見える景色が見覚えのあるものに変化していき、あたしの心に焦燥感がつる。どうやって言い訳をしようかと考えているうちに、車がボロアパートの前で停ま

った。

相変わらず倒壊しそうなアパートを前に、いつもと変わらないね、と花柄がちよつと笑いながら言っている。あと十年は持つって業者が言ってたから大丈夫、とか好男が返してるし。この二人、結構神経図太いな……。

はらはらしてるあたしの前で、好男が家の扉を開けた。中も変わらないね、と花柄が呟いて入っていった。驚いて家になると、あのポロポロだった居間がすっかり元通りになっている。

「あ、あれ？」

拍子抜けして目を瞬みばしいているあたしに、好男が思い出した、と声を掛けてきた。

「もしかして居間のこと心配してた？ ほら、今朝着替え取ってきただろ、その時に直しておいたんだ」

もう眠いし背中痛いし大変だった、と好男が軽い調子で愚痴っている。……とづくに知られてたのか。もう隠し通せなくなつたと悟つたあたしは、床にぶつけるくらい勢いよく頭を下げた。

「ごめん！」

「え？ なんて魅首ちゃんが謝るの？ 居間で暴れたのは四季なんだろ？」

疑問符を飛ばして首を傾げる好男の前で、あたしは頭を上げた。

……四季のせいだってことも、もう知ってるのか？

思ったことが顔に出てたみたいで、好男が苦笑しながら説明した。

どうやら今朝、十四季が自分から、好男の家を破壊したことを白状したらしい。怒ってないのか……？ と尋ねると、好男が笑って首を横に振った。

「そりゃ最初は頭に來たけど。食事時にあんな泣き顔見せられて、その後素直に謝ってきたから、怒れなくってさ」

刈子ちゃんと一緒に居間直すの手伝ってくれたし、と好男が付け足した。玄関で靴を脱いでいる十四季を、信じられないといった気持ちであたしが見つめる。あんなに仲悪そうだったのに、自分から謝りに行くなんて。本当に人が変わったみたいだな。

視線に気付いた十四季が振り向いて、不思議そうにこっちを見ている。

「……何か用か」

「いやー、おまえ急に性格丸くなったなあと思って」

あたしがそう言うと、十四季は顔を顰めて目を逸らした。別にそんなんじゃない、とか言ってるし、素直じゃないなあ。バレバレの照れ隠しに呆れるあたしの後ろで、刈子がくすくす笑っている。

奥へ向かった花柄が気になるのか、好男は何度も部屋のほうに視線を向けている。その左手首から、アズアの冷たい声が聞こえた。

「少し確認したいことがある。済まないが、故郷むいこの者だけにしてくれないか」

唐突なアズアの提案に、好男が戸惑いながらも腕時計を外した。いったい、アズアは何を考えているんだろう？ 好奇心が湧くけれど、聞くなと言われたから首を突っ込むわけにもいかない。刈子も

残念そうな顔で眼鏡を外し、腕時計の隣に置いた。その横にスイフイの入った広告が舞い降りる。

「……俺はどうすればいい」

食卓の上に並んだ物達を眺めて、十四季が腕組みしながら尋ねた。少しの沈黙の後、アズアが口を開く。

「武宮殿は　ここに残ってもらおう。クウイの代理人として」

十四季がうなづき、細身の椅子を引いてそれに座った。お話が終わるまで本を読んでいますね、と刈子が寝室へ去っていく。好男も、花柄が待つ奥の部屋へ行ってしまった。一人どうしようかと佇むあたしの眼に、据置型ゲーム機が映る。たしか寝室にもテレビがあったし、これで時間を潰すか。

のほほんと抜けたこと考えながら寝室に向かうあたしは、居間に漂う緊迫した空気に全然気付いていなかった。

第三章 君と共に

居間から持ってきた新世代据え置きゲーム機で、あたしは最新ソフトを十二分に味わっていた。旧世代機の頃からずっとファンだった、任侠アクションRPGだ。豪快に敵を蹴散らす主人公を操作して、あたしはすっかりご満悦だった。好男の奴、結構いい趣味してるじゃないか。やっぱりゲームは爽快アクションだよな。

そんなこと考えながらひたすらコンボを稼いでいると、刈子が本から顔を上げた。

「あの……魅首さん。もう少し音量を下げただけませんか？」

「ん。ごめん」

どうやら夢中になりすぎて、かなり五月蠅かったらしい。リモコンを手にとって音量を下げると、刈子はまた本に没頭し始めた。眼鏡を外したから、本に顔をかなり近づけないと文字が読めないようだ。刈子のお下げ頭は、大きな児童書にすっぽり隠れてしまっている。

音を半分以下に抑えたゲームは、なんだか物足りない感じだ。もっと爆音で、でも刈子や他の人に迷惑掛けないように楽しむには、どうしたらいいのか……。答えは簡単だ。ヘッドホンをすればいい。

そこまで考えて、脳裏に青いヘッドホンの男の姿が過ぎ^よった。ああもう、あんな奴のことなんか忘れていたいのに。急に鳥肌の立ってきた足を摩り、あたしは顔を顰めた。これからヘッドホンのこと考える度に、あいつのことが思い出されそうだ。

うんざりするあたしの眼に、ラックに置かれたヘッドホンが映る。その色は奇しくも青だった。微妙な気分になりながら、それを手に

取ろうと立ち上がるあたし。

手がヘッドホンに触れる距離に入ったとき、壁の向こうから籠った声が聞こえてきた。好男と花柄の声だ。

別の部屋にいるのに、声は結構はつきり聞き取れる。こんな壁でいいのかと思いつつ、もとがボロアパートだから仕方ないか、と諦めるあたし。立ち聞きするのも悪いから、さっさとゲームに戻ろう。そう思ってヘッドホンを持ち上げると、コードが滅茶苦茶絡まっていた。ケータイの充電器とか卓上ライトとか、いろんなコードがヘッドホンのそれと絡まっている。このまま力任せに引っ張ったら、確実にラックが倒れるな……。

仕方無く床に膝をついて、コードをほぐし始めるあたし。薄い壁の向こうからは、好男と花柄の会話が聞こえてくる。……なんていうか、聞こえてくると聴きたくなってしまふものなんだ。コードを丁寧にほぐしながら、あたしはこっそり聞き耳を立てていた。ああ、こんなはしたない人間に育ってしまったってごめんなさい。

誰にともしに懺悔するあたしの耳に、好男の声が入ってくる。

「……ごめん。オレ、おまえのこと守ってやれなかった。」

悔しそうな色を滲ませて、好男の声がそう言った。衣擦れの音がして、今度は花柄の声が聞こえる。

「謝らなくて、いいの。好男くんが元気にしてくれてたら、それでもう大丈夫だから」

包み込むように優しい声で、花柄がそう呟いた。あたしの手許で、コードがようやく一本ほどける。よし、あと四本だな。会話が気になりながらも、早くゲームの続きがしたいと心が焦る。黙っている

好男に、花柄が更に語り掛け始めた。

「今までずっと、好男くんはわたしの話を聞いてくれたよね。暗くて重い悩みの相談も、お天気の話みたいなの、どうでもいい話題も、好男くんは全部聴いてくれた」

そうかそうか、好男ってやっぱりママなんだな。これで女たらしじゃなければ言うこと無いんだけどな。滔々(とうとう)と語る花柄に、心の中で相槌を打つあたし。壁の向こうに耳を澄ませながらも、手は忙しくコードをほぐしている。あと三本だ、もうちょっと。

「わたし、好男くんに話聞いてもらえて、すごく嬉しかった。うん、うん、って相槌うつてくれる好男くんの声がとっても優しく、話していると疲れが消えていくの。好男くんが居てくれなかったら、きっとここまで仕事続けられなかったと思う」

コードがまた解け、ついに残すところ二本になった。ここまでくれば後は簡単だ。やっとゲームに戻れると胸を弾ませるあたしの耳に、花柄の声が聞こえてくる。

「わたし、好男くんにいっぱい支えてもらった。だから、今度はわたしが好男くんを支えたい。助けたいの」

おっと、これは聞き捨てならないセリフだな。突然の告白に、好男がどう出るか気になるところだけど、コードが完全にほぐれたしゲームしよう。ヘッドホンを持ってテレビの前に戻ると、あたしは端子を挿入しようと手を伸ばした。

全く同時に、寝室の扉が開いて、扉の前を通っていたコードをがくと引っ張った。

「あつ」

短く声を上げるあたしの前で、テレビ台ぎりぎりに置いたゲーム機がコードに引つ張られて落ちる。派手な音を立てて床にぶつかり、プラスチックの黒い外装が粉々になって飛び散った。ディスクが飛び出し、表面に大きな傷がつく。扉を開けた十四季が、足元で碎けたゲーム機をみつめている。

「……ごめん」

「まだセーブしてなかったのに」

いやいや、そんなことより、また好男のもの壊したことの方が重大だろう。開口一番出た言葉に自分で突込みを入れ、あたしは床に散らばった破片を集めた。扉が閉まらないように背中で押さえながら、十四季もしゃがんで破片を拾っている。

騒動に気付いた刈子が、どこから取り出したのかガムテープで細かな破片を綺麗に取ってくれた。

「破片を全部集めておけば、好男さんの能力でまた元に戻せるんでしょう？ 正直に言えば許してくれると分かったし、そんなに落ち込まなくてもいいじゃないですか」

にこやかに微笑みながら、刈子がガムテープを丸めてゴミ箱に捨てた。

「なっ、ちょ……っおい！ 言ってることとやってることが矛盾してるじゃねーか！」

「あ、あら？ すみません、習慣で身体が勝手に」

慌ててゴミ箱からガムテープを取り出すあたしの背後で、刈子が両手を頬に当ててテンパっている。まったく、しっかりしてるようで結構抜けてるんだよな。勘弁してくれよ。 。
他にも破片が飛び散ってないか、と床に這いつくばるあたしを置いて、刈子は眼鏡を取りに行ってしまった。まあ、刈子にとってテンキイ入りの眼鏡は心の拠り所だし、しょうがないか。

十四季と二人で黙々と破片を拾っていると、急に十四季が口を開いた。

「……あの札、使ったようだな」

札、という言葉を聴いて、あたしの手が止まる。そういえば、御札があつたお陰でヘッドホンの男に一杯喰わせてやれたんだよな。いつか使うときが来るみたいなこと十四季が言ってたけど、本当にその通りになるとは。十四季にそのことを感謝と一緒に伝えるとあたり。赤い左目を円くして、十四季が困惑した顔になる。

「札を生きている人間に使ったのか？」

「うん、そーだけど」

何をそんなにうるたえてるのか、十四季が珍しく眉を八の字にしている。どうしたんだ、と尋ねると、躊躇いがちに十四季が話し始めた。

「死んだ人間も、今生きている人間も、霊体は基本的にそう大差無い。札を使われた霊が弱るように、人間も精神が弱ることがある。……よほど煩惱に溺れた人間でない限り、そうそう無いこととは思

うが
」

「ふうん？ ……特に変わったことは無かったけど。あたしも足に刺さったけど、何ともないし」

そう言っつて足を指すあたしに、精神が単純すぎて札が効かなかつたんだろう、とか十四季がぬかしている。生意気を言うのは相変わらずみたいだな。思わず米神の血管を浮かせるあたしに、十四季は集めた破片を差し出した。

「けれど、相手が敵ならば心配より喜ぶべきか。魅首も気付いているだろう、『契約者』が使える能力は、その者の精神力に依存していることを」

なんかまた訳わかんないこと言い出したな……。能力が精神力に依存する？ それって、スイフィが言っつたことと何か関係がありそうだな。最も、精神力つてのが何なのかがさっぱりわからないんだけど。十四季があたしの顔をしげしげと眺め、諦めたと言わんばかりに溜息を吐いた。

んだよ、失礼な奴だな。むっとするあたしを置いて、十四季が立ち上がり居間に去っていく。

十四季と入れ替わるように、空中に漂う吊り広告が寝室に入ってきた。

「よおスイフィ。さっきの話、何だったんだ？」

尋ねるあたしに、スイフィは小さく首を振った。まだ話すときじやないとか何とか言っている。その声は、なんだかいつもより元気が無い。こいつが大人しいと、何かあるんじゃないかと勘繰っちゃうんだよな。警戒しながら、あたしはスイフィに声を掛けた。

「どうしたんだよ、元気無いな。腹減ってるのか」

「違うねい。まだおにぎりは胃の中に入ってるねい」

力なく首を振って、スイフィがあたしの顔の前まで降りてきた。なんか本当に元気が無いな……。しょんぼりとして頂垂うなだれるスイフィを見て、あたしの脳裏に炎を操る女と闘ったときのことか思い出される。まさか、またどこか怪我したんだろうか。

心配して顔色を窺おうとするあたしに、スイフィがぼそぼそと小声で呟き始めた。

「……魅首の、言ったとおりだったねい。おいら、さっき何も出来なかった……。ただレエンにやつつけられて、岩の下でもがいてただけ。口先だけで、全然力が無い……。とんだ道化師だねい」

「お、おい。何だよ急に。そんなに気にしてたのか？ あんなの口から出任せだから、さらっと流してくれればいいのに」

湿った空気を吹き飛ばそうと、そう言ってみたけれど、スイフィは俯いたままだ。いったいどうしちゃったんだ、こいつ。戸惑うあたしの前で、スイフィが両拳を握っている。

「あのね、魅首。おいらの能力……。『世界』を変える力なんだ」

「？」

俯いたスイフィの口から、今、とんでもない言葉が出た気がするんだが。『世界』を変える？ 大袈裟にも程があるんじゃないのか。でも、この態度は嘔吐してるって感じじゃないし。あたしが言

葉に詰まっていると、スイフィが顔を上げた。広告の中からあたしを見つめる小さな目は、必死に何かを訴えかけている。

「本当は、魅首に自分で気付いて欲しかったんだねい。これから芽生える能力に、制限付けたくなかったから。おいらみたいに、限界作らないでほしかったから」

スイフィの声からは、いつもみたいなおちやらけた感じが全く消えてしまっている。どうやら、本気で言ってるみたいだ。まるで出合ったばかりで同情を引いてた時のように、スイフィは悲しそうな顔で背中を丸めている。

「おいら、この能力のせいで皆から嫌われてたねい。故郷むらが壊れ始めたのも、おいらのせいだって言われたねい。……おいらも、その言葉に言い返すことが出来なかったんだ。『あのお方』がおいらのこと呪ってからは、誰もおいらと口を利いてくれなくなったねい。おいら、すごく寂しくて……。異世界こちに来て、仲間ができて、嬉しくてついついはしゃぎすぎちゃったねい」

なんかスイフィが言ってるから聞き流しそうだけど、かなり悲惨な過去じゃないか。あたしや四季に向かって『一人ぼっちは寂しい』って言ったのは、こういうことがあったからなのか。いやいや、そう簡単に信じるな。こいつには過去に何度も釣られて痛い思いをしてるじゃないか。

心の中で同情するか突っぱねるか、悶々とするあたし。やっぱりまだ信じられない、と結論付けようとするあたしの耳に、スイフィの声が聞こえる。

「おいら、魅首と会えてよかった。最初は、こんな乱雑そうな子、

嫌だっと思ってたけど……。ウエジユと闘ったときも、カンツアと闘ったときも、スオン先生、レエンと闘ったときも、魅首はおいらが諦めても諦めなかった。そして悩んでる皆のこと、ちゃんと考えたねい。魅首を見てて思ったんだ。おいらも諦めずに、故郷むこうの皆と向き合わなきゃって」

「……」

スイフィの言葉を聞きながら、あたしは自分の耳を疑っていた。これが、あの天邪鬼なスイフィ？

信じられないと広告の中を覗くあたしの眼と、スイフィの眼が合う。その真直ぐな目を見て、あたしの心の天秤がゆっくりと傾き始めた。

ああそうか、こいつも色々抱えてたんだな。それでちょっと歪んじゃって、アレな性格になってしまったんだ。だからって、最初にした非道の数々を許すことは出来ないけど。

スイフィの澄んだ瞳を見つめ、あたしは最初に交わした会話を思い出していた。つまりあの言葉はあたしの同情を買ったためなんかじゃなく、本当に本心から言ってたってことだったのか。

そう思うと、なんだかスイフィのことが単なるム力つくイカレ野郎には思えなくなってきた。これまで散々あたしの神経を逆撫でしてきた言葉達は、全部寂しさの裏返しだったってことか。まったくとんだ甘えん坊だ。これでは別の意味で呆れてしまう。

沈黙するあたしの前で、スイフィは縋るような目をしている。もう子どもじゃなくて青年の姿に戻ってるんだから、泣き落としを使おうとするのは止めてほしいんだけど……。頭を掻くあたしに、スイフィがおずおずと尋ねた。

「魅首、おいらと一緒に闘ってくれる？ おいら、もう一度だけ『あのお方』に会いたいんだねい。そして、今度こそしっかり向かい合って話したいんだ」

そう言つて、スイフィはあたしの返事を身動き一つせず待っている。

そんな風に言われたんじゃ、断ることなんてできないじゃないか。……ていうか、断る気なんて最初からさらさら無いけど。

澄んだ瞳を潤ませるスイフィの前で、あたしは肩に掛かる髪を後ろへ払いのけた。

「まったく、今更何言ってるんだよ。あたしはとっくに覚悟決めてるつつの。しっかりしろ、スイフィ！ おまえが支援してくれなきゃ、安心して闘えないんだから」

うん、我ながら素直じゃない。まあでも、今までに比べたら上出来かな？ また凹ませてやしないだろうかと、恐る恐るスイフィを盗み見るあたし。電車の吊り広告の中で、ピンクと緑の髪を揺らすスイフィの顔に、安堵の笑みが広がっていく。

「ありがとう魅首うー！ やっぱりおいらが見込んだだけあるねい！」

「はっ？ ばっ おまえ、何言ってるんだよ！ さっきの雰囲気はどーした！」

「いつまでも暗い雰囲気だと疲れるねい。やっぱり明るくしてるのが一番でしょー」

満面の笑みを浮かべながら、スイフィがけらけらと笑い声を上げ

ている。広告から飛び出る色とりどりのリボンが空間を彩り、暖かい色を撒き散らしていく。

ほんと、こいつはお調子者なんだから。半分呆れつつ、あたしもリボンを手にとって馬鹿騒ぎに参加することにした。たまには、こういうのも悪くないかもな。

にやりと笑うあたしの眼と、微笑むスイフィの眼が合った。ありがとう、と小さく呟くスイフィの声は、何だか震えているようだった。

第三章 忍び寄る崩壊

雰囲気に流されて一通り馬鹿騒ぎしたあたしは、疲れてベッドに倒れこんでいた。仰向けに寝るあたしの横では、スイフィの入った広告が宙に浮いている。こんなに笑ったのって何時以来だろう。頬とお腹が、笑いすぎで筋肉痛を起こしている。他にもあちこち痙攣している身体で寝返りをうって、あたしは溜息交じりの声を出した。

「……ふー、疲れたあ」

「お疲れさんだねい、魅首っ」

わざとらしくスイフィが言い、どこかで聞いたような会話になった。あの時の再現だと気付いたあたしの口端が、にやりと持ち上がる。にやつくあたしを見て、スイフィも悪戯っぽく微笑んだ。こいつと二人つきりなのに、こんなゆっくりと時間が過ぎるなんて。

ぼーっと天井を見上げるあたしの肘が、リモコンに当たった。

ベッドの端からリモコンが滑り落ち、テレビのチャンネルが切り替わる。ニュースでもやってるかな、と身を起こすあたし。その目に、市立図書館の様子が入り込んできた。

なんで図書館がテレビに映ってるんだ？ 疑問符を浮かべるあたしの前で、テレビの中から必死の実況が聞こえてくる。マイクを握っているのは、昨日好男を名指ししていた女芸能人じゃないか。

『の崩壊の様子をお伝えしてきましたが、いったいどういこうでしょうか。一瞬の内に図書館は元通り、何も無かったように建っています。CG加工など一切しておりません、真正銘ヤラセ無し生放送です！ こんな不思議なことが、現実に起こるなんて

言葉がありません』

一生懸命実況する女を見て、あたしは啞然として固まっていた。今、『お伝えしてきましたが』って言った？ ていうことは、図書館がヘッドホンの男によつて壊されるところとか、好男の能力で再生するところとか、全部放送されてたのか？

疑問に思うまでもなく、まさにその通りなのだが、突然のことすぎて頭の理解が追いつかない。間抜けな顔してテレビを見つめて、そつえば昨日『電話しなきゃ押しかける』とか言つてたなあと思ひ出す。また好男の姿が全国に晒されてしまったんだろうか。ていうか、花柄と海原の姿も放映されたんだろうな。

三人にちよつと同情するあたしの眼が、テレビの一点に吸いつけられる。夏の日差しを浴びて建つ図書館の上に、もやもやした黒い穴が開いていた。あたしが見たときは、穴から白い光が出てたはずだけだ。

濃い霧みたいな謎の穴を見つめるあたしの前で、テレビの中の女が実況を続けている。

『ご覧下さい、図書館の上に現れた謎のホール！ あれはいつたい、何なんでしょうか？ 異空間へと繋がる超次元ワームホールなのか、はたまた素粒子実験の不慮の事故で生まれたブラックホールなのか！ 詳しいことは今、専門家に問い合わせている最中です。それでは一旦CM！ チャンネルは、そのままです！』

「あらー……これは困ったことになつちやつたのねー」

食い入るようにテレビを見つめていたあたしの横に、スイフィが移動してきた。橙色のリボンをくねらせて、リモコンのスイッチを押す。テレビ画面から光が消え、あたしは我に返った。

「今の 何だったんだ？ あの、図書館の上に出てたもやつとした穴」

眉根を寄せて尋ねるあたしに、スイフィも困つたと肩を竦めている。広告があたしの顔の高さまで上がり、丁度眼と眼が対等の高さになった。おちゃらけた仕草で髪を弄り、スイフィが片眉を上げる。

「故郷の世界が壊れ始めたときも、あんな感じのものが空にいつぱいできたのねい。専門家が詳しく調べてるうちに、あれはどんどん大きくなって、故郷の世界が段々おかしくなつていったんだ」

「そうなのか」

スイフィの言葉を聞いて、あたしは顎に手を遣つた。あの穴ができたせいで向こうの世界が崩壊し始めたのなら、あれを放つとくところちの世界もヤバイんじゃないのか。我ながら珍しく冴えた頭でそう思っていると、考えていることが分かつてるようにスイフィが話し始めた。

「あの穴が何で故郷に現れたのかは分からないねい。でも、こつちに現れた原因は多分 おいら達がこつちで大暴れしたせいだと思ふねい。ほら、能力を使う時に感じたよねい？ 故郷から異世界へ、凄い勢いで力が流れ込んでくるのを」

そう言つて顔を覗き込んでくるスイフィに、あたしはうなづいた。確かに能力を使うときはいつも、どこかからあたしの中へ力が流れ込んでくる感覚があった。スイフィの言つてることが合っているとすれば、図書館で目にした事象も納得できる。好男とヘッドホンの男が能力を使う度に、あの穴が広がっていったんだから。

頭の中でこんがらがった状況を整理するあたしに、スイフィは休むことなく話し続けている。こいつ、何時に無く饒舌だな。さつき過去をカミングアウトしたことで吹っ切れたのかな。大袈裟に身振り手振り交えて話すスイフィを、あたしはじっと見つめる。

「だからね、もともとはそんなに近くなかった二つの世界が、おいら達が能力を使うことによつて、次第にくつつき始めたんじゃないかと思うんだねい。それでももつて世界を隔てる壁が薄くなつてくつついちゃつて、故郷の壁の破れに合わせて異世界の壁も破れちゃったんじゃないかなあ」

「……思う、とか、じゃないか、とか　そんな推論ばつかの話されても困るし。もっと簡潔にまとめてくれないか？」

抽象的なことばばかり言われて、あたしの脳は容量オーバー寸前だ。まとめろ、と言われたスイフィが一瞬喋るのを止めた。うーんと腕を組んで呻った後、深刻そうな顔で囁くスイフィ。

「つまり、これ以上異世界で能力を使うのは危ないってことねい」

「んなこと言われても　。どうすればいいんだよ。まさか、向こうの世界に行けとか言い出すんじゃないだろうな」

釘を刺すつもりで言ったあたしの言葉に、スイフィが顔を輝かせて激しくうなづいている。……言わなきゃよかった。額に手を当てて後悔するあたしに、スイフィは頬を上気させるくらい興奮した様子で熱弁ふるっている。

「おおー、それだよ魅首う！　それだったらおいらもバリバリ闘えるし、異世界に負担もかからないし、まさに一石二鳥だねい！　…

…ただ、おいら達は自力で故郷むこに帰れないって問題があるけど」

急にテンションを落として、スイフィが頂垂れる。ほんと落差の激しい奴だな。見てるこっちが疲れてくるっつもの。しかも何か期待を込めた目でこっちを見るし。

「……あたしに期待したって、良い知恵出ないぞ。他を当たれよな」

全くもってその通りのことを言うあたしに、スイフィは悲しそうに指をこねくり回している。つたく、わざわざ一番頭悪いあたしに訊かなくても、もつと頭良い仲間が居るじゃないか。テンキイとかアズアとか、四季……は微妙かな。好男はもつと微妙……刈子は何か違うし……。

花柄は部外者だから論外、とまで考えて、あたしは何をやってるんだと自分に突っ込んだ。

アズアとテンキイ、どちらが頼りになりそうか悶々と考え込むあたり。その周りを、まるで回遊するようにスイフィがぐるぐる回っている。なんか、動くものがあるとそっちに意識がいつちゃって、集中できない……。

「あーもう、スイフィ！ 気が散るからじっとしててくれよ！」

「そんなこと言われてもあー。おいら考え事してるときは、身体動かさないと集中できないんだもん」

またこいつ、ああ言えばこう言う……。拗ねた様子で生意気言うスイフィに、あたしが若干イラついていると、刈子が寢室に飛び込んできた。

「み、魅首さん！ 大変です、図書館が、テレビが」

「ああ、実況中継？ さっきまで見てたよ。好男達が映ってたかも知れないけど、あの非常事態だから誰も気に留めてないだろ。ていうか、そうだといいいよな」

息を切らしてテレビを指差す刈子に、あたしはのほほんと先ほど見たテレビの話をした。そうじゃないです、と刈子が首を横に振っている。ひったくるようにしてリモコンを手に取り、刈子がテレビの電源を入れた。

さっきまで女芸人が映っていた画面には、ただ図書館だけが映っている。

特に変わったことは無さそうだけど、と言いかけるあたしの眼が映像の変化に気付いた。

「これは！」

図書館の前を通る並木道が、奇妙なことになっている。まるで火に焼けるように黒く変色して落ちる枝、灰になって散る葉。あたしの脳裏に、昨日図書館のパソコンで十四季と見た画像が過ぎる。

炎も見えずに、燃えていく。

あの女の仕業だ。

横に浮いていた広告を掴み、空いた手で刈子の手を掴むと、あたしは寝室から駆け出た。弾む息で見回した居間では、十四季が大型テレビの前で腕を組んで立っている。

「十四季、これ あいつの能力だよな」

自分でも驚くくらい険しい声で尋ねるあたしに、十四季が静かに頷いた。その眉間には、深い皺が刻まれている。睨むように見つめていたテレビから眼を逸らし、十四季があたしに顔を向けた。その赤い左目が、白い光を反射してぎらついている。

「操る物質以外は、俺達の能力は機械や一般人に認識されない。間違いないな」

呟くようにそう言う十四季の指は、半袖から出る腕に食い込むほど爪を立てていた。血が滲むほど腕に爪を立てる十四季に、刈子が心配そうに声を掛けている。

……あの女、前に闘ったとき、あたし達以外の人間をも平気で殺そうとした。このまま黙って見ていたら、また犠牲者が出てしまう。一刻もはやく図書館へ向かわないと。

ただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、好男も奥の部屋から居間に出てきた。十四季と刈子から近況を聞いて、好男は顔を曇らせる。その背後からは、花柄が小首を傾げる姿が見える。

好男が左手首を顔の前まで持ち上げ、腕時計の中のアズアを見つめる。……あれ、好男っては何で両手に腕時計してるんだ？ それも良く似た型の。

戸惑うあたしの前で、好男が苦悶に満ちた声でアズアに話し掛けた。

「アズア、どうしても訊きたいことがあるんだ。どうして闘うのか、その理由を教えてほしい。保身のためでも、何か為すべき事があるからでも、何でもいいんだ」

好男の問いかけに、時計の文字盤に影が現れる。暫らく沈黙していたアズアが好男を見上げ、全てを凍りつかせるような冷たい声で訊き返した。

「……何故、そのようなことを」

「恐いんだ。オレ達が闘うことで、抵抗することで、向こうの世界の人達が苦しむことが。……いや、向こうの世界だけじゃない。オレ達が居るせいで、オレ達の世界の人達も巻き込まれて苦しんでる。耐えられないんだよ、オレ。……そーいうの。だから 免罪符が欲しいのかもしれない。もやもやしたままじゃ、闘えないんだ」

顔を苦痛に歪めて、好男が吐き出すようにそう言った。何も今そんなこと言い出さなくても、と思いつつ、はらはらした気持ちでテレビを一瞥するあたし。でも、好男が挫けたままじゃ、あの女ともまともに闘えないか。ここは一つやる気が出るようなことを言ってくれ、アズア。

祈るような気持ちで腕時計を見つめていると、アズアの声が聞こえてきた。少し躊躇うような沈黙のあと、冷たいけれど凜と徹る声で、アズアが好男に語り掛ける。

「どうして闘うのか、今は明かすことはできない。けれど、これだけは信じてくれ。わたしは決して悪戯に、故郷の民を苦しめるようなことはしない。異世界の皆が、これ以上傷つくのを見て見ているつもりも無い。好男。あともう少しの間だけ、わたしを信じてほしい」

ここからは見えないけれど、きっとアズアは真直ぐに好男を見つめているんだろう。好男も真剣な表情をして、長い間の後にうなづいた。好男の左手首から、アズアの腕時計が見えなくなっていく。

見えない時計のズレを直して、好男があたし達に百点満点の笑顔
を向けた。その右手に、偽物の腕時計イミテーションが光る。

「ごめん、待たせちゃったな。行こう、皆。もう迷わないから」

大きく一歩踏み出す好男の手を、花柄が後ろから握って引き止めた。はつとして振り向く好男に、花柄が思い切り抱きつく。いきなりの抱擁にうろたえる好男。その胸に顔を埋めて、花柄がくぐもつた涙声を出した。

「絶対、ゼツタイ無事に帰ってきてね。約束だよ」

それだけ言つて嗚咽を漏らす花柄の震える肩を、好男が力強く抱きしめる。大丈夫、心配しないで、と呟く声を聞いて、それつて何か生きて帰つてこれなさそうなんだけど、と思うあたし。四季と刈子が、眼のやり場に困っている。

花柄の首筋に口付けすると、好男は後ろ髪引かれるように花柄から手を離れた。涙に潤んだ眼の花柄が、あたし達に向かつて手を振っている。

「車出してくる」

ちよつとつわずつた声でそう言うと、好男は素早く踵を返して玄関から出て行った。慌てて刈子が後を追ひ、四季も険しい顔で二人の後を付いて行く。花柄に挨拶して、あたしもアパートの外に駆け出した。真夏の陽が傾き、空が橙色に染まっている。

図書館の方角へ眼を向けるあたしの顔に、突然何かが覆い被さつた。

「……っ？」

直ぐにそれを剥ぎ取って眺めるあたし。薄汚れた布切れだ。どこかで見したことだあるような気もするけど。ところどころに付いた血の染みが不気味だ。捨てようとしたあたしの手の中で、布から聞き覚えのある声が聞こえた。

「君は　スイフィの『契約者』か！　丁度よかった、数日前ここで諸君と闘った、紅太という少年を探しているのだが……」

喋る布を片手に、あたしは啞然としていた。どこかで見したことあると思つた布は、あの蟹の少年のバンダナだった。なんでこれが、いや、こいつがこんなところに居るんだ。また理解の範疇を超えた事態に固まるあたし。

まだ熱気が消えきらない夏の空に、あたしに話しかける暑苦しい熱血漢の声がよく響いた。

第三十六章 壁を越えて

「我輩の名はスオン。紅太と契約している、故郷むこうの者だ」

血染めのバンダナの中から、暑苦しい声があたしに向けて自己紹介している。こっちに痛いくらい真直ぐな視線を向けてくる変な奴に、あたしは困惑していた。この真夏にタートルネックの長袖着て、さらにその上マントまで羽織ってる。なんて暑苦しい奴なんだ……。冷や汗にも似た汗が流れる額を拭って、あたしは目を瞬しほいた。持ってるだけで体温が上がりそうだ。今は一刻の猶予も無い状態だし、誠に申し訳無いけど相手をしないでおこう。

「ああつ、待ちたまえ！ 少しは話を聴いてくれ！」

そつとドアノブにバンダナを結ぼうとすると、バンダナから必死な声があたしを呼び止めた。関わったらまた面倒なことになりそうだ。身を切るような声で話しかけてくるけど、ここは無視させてもらおう。

無情に背を向けるあたしの横で、宙に浮かぶ広告の中からスイフィの声が聞こえる。

「うわっ……また来た。ホントしつこいねー！。相手すると長くなるから、さっさと行こうよ、魅首っ」

「こらスイフィ！ それが恩師に対する態度か！ 心を砕いて教育したのに 我輩は悲しいぞ！」

叱責と泣き落としを同時にする熱血漢に、スイフィが広告の中で肩を竦めている。車が家の前で停まり、運転席の窓が開いた。好男

が顔を出して、あたしを呼んでいる。

「魅首ちゃん、乗って」

「はっ、その君！ 君はアズアの『契約者』だね！ 紅太を見なかったか？」

突然聞こえた大声に、好男が顔を強張らせて辺りに眼を走らせた。警戒してハンドルを握る好男の左手首、見えない腕時計の中からアズアの声がする。

「……スオン？ 何故ここに。近くに『契約者』がいるかも知れない。皆、注意を怠るな」

車の中で、十四季と刈子が身構えた。警戒心を強めるあたし達に、バンダナから聞こえる声がそれを必死に否定する。

「違う違う！ 我輩は諸君と闘いに来たのではないっ！ ……紅太とはぐれてしまったのだ。どこかで見かけなかっただろうか？ 茶髪に幼い顔立ちの、華奢な少年のことなんだが」

スオンとか呼ばれた変な奴の声に、十四季の身体がぴくりと動いた。窓側に寄り、開いたガラス窓から顔を出して、バンダナを眺める十四季。赤く変色した左目の周りには、黒い血管が浮いている。ちよっと見ない間に、十四季の身体がまた変なことになってるな……。

びくびく動く血管に気を取られていると、十四季の血色悪い唇が開いた。

「紅太なら、市立図書館で闘った」

淡泊な十四季の言葉に、スオンが息を呑む音がした。急に声量を落として、スオンがバンダナの中でぶつぶつ言っている。まさか怪我でもしたのか、とか いやでも我輩は何ともないから大丈夫のはず、とか。

じれったいから車に乗ろうと、あたしは扉に手を掛けた。窓から外を覗く十四季が、考え込んでいるスオンに声を掛けた。

「俺達は今からその図書館へ行く。貴様も来るか」

何言ってるんだ、と言おうと開いたあたしの口を、スイフィのリップンが塞いだ。急にどうしたんだ？ こいつは敵なんだし、敵同士を引き合わせてもいいこと無いのに。

むっとして広告を睨むと、スイフィが広告の中で両手を叩いているのが見えた。

「そーだ！ スオン先生に故郷へ連れてってもらえばいいんだねい！ おいら達が先生を、探してる子に会わせる。先生はおいら達を故郷へ連れていく。まさにギブ・アンド・テイク！ これで万事解決だねいー」

……なんでスイフィがそんな英語知ってるんだ。えーと、相互補助って意味だったっけ……？ 頭の中で突込みを入れながら、和訳しようとするあたし。ドアノブに結んだバンダナは、突然の提案に沈黙している。十四季が窓から乗り出し、極めつけの一言を投げ掛けた。

「早く乗れ。交渉は車の中でしろ」

「了解した……」

戸惑い気味の声を聞くと、スイフィガリボンでバンダナを解いて車内に乗り込んだ。あたしも助手席に乗り込むと、好男がアクセルを踏む。停まっていた車が、ゆっくりと動き出した。

「……それで、何が不満なんだ」

速度を上げる車の中で、後部座席に身体を預けている十四季が偉そうにそう言った。ふんぞり返って腕と足を組んでいるその姿は、どう見ても友好的な交渉をする気が無さそうだ。刈子の膝に掛けられたバンダナからは、何か言い渋っているような息遣いが微かに聞こえる。

なかなか話を始めないスオンに、十四季がこれ見よがしに大きな溜息を吐いた。なんだか怒っているみたいだけど、このスオンって奴に何か恨みでもあったっけ？ ミラー越しに十四季の様子を窺うけれど、そんな記憶は心当たりが無かった。

また腕に爪を食い込ませている十四季に、スオンがおどおどした様子で声を出す。

「その 勝手な話とは分かっているが、紅太とは闘わないでほしいのだ」

「はあ？」

思わず漏れた声に、全員の視線があたしに注がれた。慌てて口を塞ぎ、気にしないでくれ、と首を振るあたし。

……このスオンとか言う奴、何勝手なことほざいてるんだ。そもそも最初に闘いを挑んできたのは、こいつらの方だっというのに。

そう心の中で考えていると、ハンドルを握る好男の左手首辺りからアズアの声が聞こえてきた。

「では、我々はその少年を攻撃しないと約束しよう。代わりに、あなたは我々を故郷へ送る。……この条件でいいのだな？」

アズアの問い掛けに、スオンが了承した、と返す。でもこいつ、敵なのに。 。 釈然としないあたしの後ろで、スオンが暗い声で何か話し出した。

「かたじけない。我輩はこれ以上、あの子を闘わせたくないのだ。私情を挟みすぎだとは分かっているのだが、どうしても紅太を放って置けなくてな。ついつい契約を結んでしまったのだ。お陰であの子を一時助けることはできたけれど、今度は別の問題が出てきてしまったのだ」

「……そちら側の『契約者』となったら、謀反者を狩らなくてはならない、ということか」

十四季の言葉に、スオンがその通り、と頷いている。

「我俣だと承知しているけれど、紅太にそんな事はさせたくない。諸君と違って、我輩と紅太は互いに契約を中途破棄できるようにしてある。だから何度も契約を解除しようと思った。……けれど、監視が厳しくてな。 。 任務半ばで契約破棄しようものなら、今度は騎士団員に命を狙われる羽目になる」

そう呟いて、スオンが短く溜息を吐いた。あたしの大好きな蟹を弄ぶあの少年にも、何か色々事情がありそうだ。これ以上聴くと、本気で闘えなくなりそうだな。

複雑な気持ちになるあたしの脳裏に、十四季が白い本を読んで放った言葉が思い出される。闘えなくなるってのは、こういうことだったのか。

物思いに耽るあたしの後ろで、スオンが暑苦しさを取り戻し始めた。

「……この恩、我輩は忘れぬぞ！ その証に、我輩も諸君を攻撃しない！ 約束だ！」

「敵味方を超えた美しき友愛の絆……素晴らしいですわ。わたくし、感動してきました」

膝上のバンダナから聞こえる暑苦しい誓いに、刈子が目を潤ませている。ああ、また変な奴同士波長が合ってしまった。頭痛いよ、本当に。ここ数日間で一気に痛んだ髪を押さえ、あたしはドアミラーに映る情けない自分の顔を眺めた。その視界に、真赤に燃え上がる並木道が入る。

「酷い有様だな」

アズアの声が聞こえ、好男が車を急停車させた。がくと揺られた頭を持ち上げると、フロントガラス越しに人だかりが見えた。野次馬を押さえ込もうとする警官達の姿も見える。

「姿を消さないと進めないかな。アズア、頼むぜ」

「分かっている」

左手首にウインクする好男に、氷のように冷たい声でアズアが答える。あたし達から見ると何の変化も無いように見えるけど、これで一般人から姿が見えなくなるんだらう。

車から降りる好男に、残りの皆もついて行く。人垣の僅かな隙間から図書館へ行こうとする好男を、警察官が引きとめた。

「下がりなさい。これ以上進むのは危険だ」

「？ あ、すみません」

一瞬首を傾げて、好男が素直に引き下がった。おっかしいなあー、と呟く好男を押し退けて、十四季が人垣を抜けようとする。また警察官が前に立ちはだかり、すり抜けようとする十四季の肩を掴んだ。

「駄目だよ、君。危ないからね」

優しくそう言う警察官に、十四季が鋭い懐疑の眼を向ける。その右足が、小さくリズムを刻み始めた。どこからともなく聞こえてくる緊迫した旋律に、警察官が反応している。

音源を捜して辺りを見回す警察官に、十四季が素早く右手を翳した。

「貴様 『契約者』か」

「まって十四季！ 周りの反応も見るんだ」

刈子の眼鏡から、テンキイの叫ぶ声が聞こえる。十四季につられてあたしも周りを見ると、近くに居る人全員が音に反応しているよ

うだった。

「……何が起こっている……？」

眉間に薄ら皺を寄せて、十四季が声を抑えて呟く。刈子の握るバンドナから、スオンの解説が聞こえてきた。

「恐らく、上空にできた亀裂から出る故郷の力のせいで、彼らの身体が『契約者』のそのように変化しているのだろう。放射線による被曝のようなものだ。最初はごく少量で気付かないけれど、確実に身体を蝕んでいく。故郷の民が、異世界から来た力によって変化していった時と同じだ。症状は違うけれどな」

えーと、つまり、ここに居る人達全員が、あたし達みたいに、普通の人に視認されない身体になってしまったってことか？ あたしの米神を、冷たい汗が伝った。なんてこった、透明人間が街に溢れかえったら、それこそ大パニックが起こってしまう。

「……侵蝕を止める術は無いのか」

十四季の問いに、スオンがバンドナの中で力なく首を振る。

「それが分かっていたら、故郷はあんな事にならなかつた。変化してしまつた人々を元に戻す方法は、我輩にも分からないのだ。ただ原因であるあの亀裂は、故郷と異世界を繋ぐ道を塞げば、消滅させられるだろう」

「ってことはやっぱり、故郷に行くってことになるねい」

暢気な声を出しながら、スイフィが色とりどりのリボンを広告か

ら出した。周りを囲む人達が、スイフィを指して目を円くしている。一瞬の隙を突いて、スイフィがあたし達を抱えて人垣を越えた。

「きゃあっ」

「しっかり掴まってないー」

スカートを押さえる刈子に、スイフィがおちやらかした様子で声を掛ける。眼下に広がる炎の中心に、二つの人影が見えた。あの女と、蟹の少年に間違いない。よく見ると、蟹の少年は茶髪の女に小突かれてるみたいだ。

先の尖ったピンヒールで脛すねを蹴られて、少年が身を擦っている。

「紅太！」

「あの女も一緒に故郷むいじゆうへ転送してくれるか？ このままでは被害者が増えてしまう」

冷静なアズアの要求に、スオンがバンダナの中でうなづいた。分厚いマントを翻ひるがえし、スオンが両手を前に突き出して不思議な呪文を唱え出す。

詠唱が終わると同時に、あたし達の身体の周りに、図書館上空のものと同じような穴が広がった。地面に居る茶髪の女と蟹の少年も、もやもやした穴に引き込まれている。

身体全体がもやの中に包まれ、あたしの身体を言いよつた無言の冷たさが覆う。思わず目を瞑ると、身体を引っ張っていた重力が消えていくのがわかった。無意識にリボンを強く握り締めるあたしの耳に、大丈夫だよ、とスイフィが囁く声が聞こえた。

第三十七章 狭間

全身を冷気に包まれて、あたしは思わず固く目を瞑っていた。まるで渦巻く波の中にいるように、身体が色んな方向へ振り回される。平衡感覚が狂わされて、上下左右の感覚さえも曖昧になったきた。気持ち悪すぎて、悪酔いしそうだ。

胃の奥から酸っぱいものが込み上げてきて、あたしは口元を両手で押さえた。腕に絡まっていたリボンが解けていく感触がしたけど。吐き気を堪えるのにいっぱいいで、そんなことに構っている余裕は無かった。

兎に角気分を落ち着けようと、浅い呼吸を繰り返した。肋骨がめいっばい広がるまで息を吸い込んで、肺に全然空気が入ってこない。それにすごく寒い。鳥肌の立つ腕を摩りながら、あたしは何時の間にか身体の揺れが無くなったことに気付いた。

と言っても、相変わらず重力の存在を感じることができないのだけだ。

恐る恐る目を開くと、そこには不思議な光景が広がっていた。

真黒な空間を、冷たい白光が貫いている。深海の中をライトで照らしてみたいな感じだ。この光、図書館上空の穴から漏れ出ていた光と同じだ。

光源を探ろうと首を回し、身体を捻るあたし。何も無い空間で身体の向きを変えるのは、思ったより難しかった。必死に両手両足をばたつかせて、やっと少し方向が変わるくらいだ。それだけ苦労して向きを変えても、見える景色にあまり変化は無い。悪戯に疲れが溜まるだけだと気付いたあたしは、仕方なくじっとしていることにした。

真っ暗な空間に浮かびながら、あたしは震える身体を摩った。ここがスイフィ達の言った向こうの世界なのか？　なんだか酷く殺風景で、とても人が住めた場所じゃない。そもそも、上下の区別も付かないのは、住居を構える上で結構な問題なんじゃないか？

暗く寒い空間にケチをつけながら、あたしは目だけ動かして辺りを見た。漆黒の空間に白い光があるだけで、本当に何も無い。何もていうか、皆どこ行っちゃったんだ？

異様な空間の中でやっとそのことに気付き、あたしは慌てて皆の名前を呼んだ。喉から出た声は広がることも無く、ただ暗い空間に吸い込まれていく。駄目だ、声が遠くまで届かない。

叫んでも無駄だと気付き、あたしは肩を落として身を丸めた。それにしても、ここはホント寒いな……。とくに左肩の辺りがすごく寒い……。……。いや、冷たい……。？

制服の上から、何か冷たい固体が触れている。限界まで首を回して振り返ると、長い黒髪の下から白濁した瞳がこつちを見つめていた。死んだ魚みたいな目で見つめてくる悠に、あたしは小さく悲鳴を上げてしまった。

「ひっ　　な、なんだ悠か。驚かすなよ！　ていうか寒いから離れろっ」

「…………ごめ、ん、なさい…………」

言葉をつつかえながら悠が謝り、そのままゆっくりとあたしの正面まで滑るよう移動してきた。あたしは身体の向きを変えるだけで、あんなに苦労したっていうのに。なんで悠は難なく移動できるんだよ。いくら幽霊だからって、そんなの理不尽だ。

なんて腹の中で呟くあたしの顔を、悠が覗き込む。雫の滴る頭を

傾げ、悠が干からびた唇を開いた。

「怒って、いるの……？」

「怒ってないけど。ていうかさ、あたし達が図書館で闘ってたとき、おまえどこいたんだよ？ まさか恐くて隠れてたのか？ 幽霊なのに」

眉を顰めて言及するあたしに、悠は口の前に手を持っていき顔を俯けている。

「……ごめんなさい……。その、札、が……怖かったから……。札から出る気、が痛くて……。なんだか、自分が消えちゃいそう、だったから……」

そう小声で言う悠の身体からは、空間を貫く白い光が透けて見える。どもりながらも何度も謝る悠を見て、あたしは少し反省した。そんなに謝らなくてもいいって、と悠に言って、話題を切り替える。

「ところで、好男達はどこに居るんだ？ おまえはこの空間を自由に動けるみたいだし、ちょっと探してきてくれると嬉しいんだけど」

出来る限り粗暴にならないよう、あたしは悠に皆の搜索を頼んだ。余計なこと言って凹ませないよう気を遣ってるあたしに、悠は骨と皮だけの首を傾げている。

「皆、すぐ傍にいる、よ？ ……魅首には、見えないのか、な」

枯れ枝みたいな悠の指が、あたしの近くを指し示した。身体を捻って指された方向を見るけど、真っ暗な空間が広がっているだけだ。

悠には見えて、あたしには見えないってことなのか……。考え込むあたしの耳に、スイフィの声が微かに聞こえてくる。声が小さすぎて、何を言ってるのか聞こえないくらいだ。

もつとよく声を聴こうと耳を澄ますと、いきなり真正面から朱色のリボンがこつちに迫ってきた。目に刺さりそうな勢いに、思わず手で顔を庇うあたし。一瞬の後に訪れたのは、背中を何かがつつく感触だった。

「……？」

「あー、ここに居た！ やっと見つけたねい。やれやれ、もうちょっとで永久的にどっちの世界からもサヨナラするところだったねい」

疑問符を浮かべて目を開くと、朱色のリボンは目の前で急に捻じ曲がって背中のように伸びていた。

なんでわざわざ、こんな手の掛かることするんだ。随分酔狂な真似してくれるじゃないか。機嫌を損ねて鼻に皺を寄せるあたしに、スイフィの音が段々近付いてくる。リボンをあたしの腹に巻きつけて、それを手繰ってきているようだ。

「おいスイフィ、ここはどこなんだ？ ここがスイフィの住んでた世界なのか？」

「まさかあー。こんな殺風景なところに住んでるわけないねい。ここは　うーんと、二つの世界の隙間かな？　ほら、あっちの亀裂から図書館が見えるしい」

背後から聞こえる声がそう言って、リボンがあたしの身体の向きを変えた。なるほど確かに、もやもやした穴の向こうに図書館が見える。真つ暗な空間に浮かぶ図書館の屋根は、なんだかすこくミス

マッチだ。蟻のように小さな人々を見て、あたしの腕にまた鳥肌が立つ。

「なあ、皆は？ 一緒なのか？」

尋ねるあたしの頬に、生暖かい感触がした。後ろから顔を包むごつごつした感じ。これ、手か。骨ばってるから好男かな。でも、それにしてもちょっと小さい気がする。いったい誰のものなのかと考えるあたしの頬を、後ろから伸びる手が引つ張って遊んでいる。こんなことする奴、スイフィ以外にいないけど。なんとなく嫌な予感がして振り向くのを躊躇うあたしの耳に、スイフィの間延びした声が聞こえてくる。

「んつとねー、近くに居ることは居るんだけど……。この空間、変に捻じ曲がっちゃってるんだよねい。『世界』を認識する基準を変えないと、まともにもノを見ることもできないのねい」

大変なこと言ってる割には緊張感の無い声で、スイフィがぼやいた。おいらの言いたいことわかる？ と、スイフィが耳元で尋ねている。耳に掛かる微かな息にますます嫌な予感を覚えながら、あたしはうなづいてみせた。

「能力を使えばいいってことだな。でもあたし……。どうすればいいか全然分からないんだけど」

認識の基準とか意味不明なこと言われて、一瞬で全て理解するなんて無茶すぎる。だいたい、そんな能力持ってないし。困惑するあたしの頭を、体温の低い手がすっぽりと包み込んだ。

「大丈夫だいじょうぶ。おいらが力を貸すから。魅首は何を基準に

するのただけ決めれば万事解決う」

「んなこと言われても」

渋るあたしの頭を、骨ばった生温い手が撫でている。まるで幼児扱ひされてるみたいで、ちよつとム力つくんだけど。唇を尖らせながら、あたしは辺りを見回した。

基準、か。何に対する基準なのか、まずそこが分からない。まあでもスイフィが何とかしてくれるみたいだし、適当に決めちゃつていいか。酸欠でぼーつとしてきた眼が、図書館の屋根に注がれる。そこに向かって伸びる光を眼で追うあたし。

よし決めた。あの光の線と同じ高さが地面つてことにしよう。心の中でそう呟いた途端、あたしの頭の中に新しい『概念』^{コンセプト}が流れ込んできた。雲を掴むようだった今までのものと違って、今度のは随分はつきりしている。『概念』が流れ込んでくると同時に、宙に浮かんでいたあたしの身体が一定方向に引っ張られ始めた。丁度、あたしが地面と決めた方向に。

転がって着地すると、あたしはすぐさま立ち上がった。さっきよりかなり視界がよくなったみたいだ。それに身体も動かしやすい。

白い光が走る暗い空間を見回していると、近くでどさどさと何か落ちる音がした。振り向くあたしの眼に、好男と刈子、それに四季の姿が映る。いや、それだけじゃない。バンダナの中に居たスオンとか言う奴も、何故か人間大のサイズに戻って目をこすっていた。

「なっ、どうなってんだよ？」

絶句するあたしの前に、吊り広告が移動してくる。それを見て、あたしはやっぱり、と肩を落とした。今まで二次元でしか見たことがなかったスイフィが、広告から上半身だけ立体的に飛び出している。

うねるリボンを片手で弄びながら、あっけらかんとした様子でスイフィが喋りだした。

「何驚いてるのお？ あ、もしかして、おいら達は故郷でも物の中に棲んでると思ってた？ そんなわけないねー。物に棲んでるのは、異世界の毒気に侵食されないようにするためのもん。正直、めっちゃ窮屈だったんだよおー」

そう言いながら、スイフィが大袈裟に肩を回して凝りをほぐしている。いやまあ、なんとなく分かるけどさ。何の前触れも無く物から出てきたら驚くだろ、普通。

物の中に人が入ってること自体がまずおかしいんだけど、と二重に突込みを入れるあたし。それにアズアやテンキイは、腕時計や眼鏡から出てきてないじゃないか。好男と刈子を眺めていると、アズアがスオンを厳しい声で問い詰めた。

「こんな場所に連れてきてほしいと頼んだ覚えは無い。約束を反故にするのなら、こちらこそなた達を攻撃しないという誓いを撤回させてもらう」

「ま、待ちたまえ。我輩はきちんと故郷へ帰る詞を唱えたのだ。しかし途中で何かに阻まれて……」

「そう、団長に阻まれたのだ。異世界から故郷へ、これ以上異分子が流れ込まないように張られた光の壁に、な」

うつろたえるスオンを遮って、遠くから威圧的な声が聞こえた。眩しい光の筋の中から、浅黒い肌の男が現れた。誰だ、あれ？ よく見ようと目を細めるあたし。男の後ろから現れたコンクリートの塊を見て、あたしはやっと男が誰なのか分かった。MP3プレーヤーの中に居た奴だ。

レエン　、と呟くスオンに、男は冷たい一瞥を投げた。

「故郷に帰れないと気付いた時はどうなるかと思ったが　狭間に誘い込んで闘うという思惑があったのだな。こやつ等は、自力では故郷にも異世界にも逃げられない……それを利用しての作戦か。口先ばかりの腑抜けかと思っていたが、見直したぞスオン」

背筋の凍るような冷笑を貼り付けて、男がこちらに向かってくる。物音のする背後を見ると、真赤なドレスを着た女が両手に炎を燃やしている。その横には、蟹の殻粉がたくさん詰まった袋を握る少年の姿が。しまった、囲まれてる　。

じりじりと追い詰められ、あたしの顎を冷や汗が伝い落ちた。今まで一人ずつでも苦勞してきたのに、いきなり三人相手とかヤバイ。もうヤバすぎる。絶体絶命だ。

真白になった頭で必死に打開策を考えるあたしの眼に、コンクリートの刃が空を斬る姿が見えた。

第三章 勇む心

まるでストップモーションアニメのように、コンクリートの刃が振り下ろされる様子がコマ送りに見えた。超スローモーションの刃に、ああ一年前車に撥ねられた時もこんな感じだったな、と思うあたり。あの時は運良く軽い打撲だけで済んだけど、今回ばかりはそんな幸運望めそうにない。

そんなこと考えてる暇があったら逃げればいいんだけど、頭の回転に身体が追いつかないから逃げられない。あれだけ偉そうに皆を守るとか誓っておいて、何もできないまま胴体とお別れするのが。

刃を見上げながら絶望に打ちひしがれるあたしの視界に、黒い一閃が走った。ぶちぶちと髪が干切れる音が聞こえ、刃の動きが止まる。それと同時に、あたしの頭の回転も普段通りの速さに戻った。

黒髪の鎧に包まれた好男が、コンクリートの刃を黒い剣で受け止めている。ほんの一瞬の間に行われた早業に、敵も驚いて足を止めていた。

コンクリートの塊を従える浅黒い肌の男が、忌々しそうに眉間に皺を寄せて、目を窄めている。

「立ち塞がるのは、やはり貴女か」

男が低い声でそう呟いた。多分、アズアに向けて言ったんだろう。浅黒い肌の男は、背後のコンクリート塊に手を伸ばした。その中から、獣のような唸り声が聞こえている。聞き覚えのある声に、あたりは図書館で最後に見た光景を思い出した。ヘッドホンの男に纏わり付く無数のコンクリート片、そして人間から別のものへ変化して

いったその姿。

まさかあの塊が　ヘッドホンの男なのか？

あまりのおぞましさに息を止めるあたしの前で、塊の表面の細かなヒビが蠢く。その背中から生える剣を、浅黒い肌の男が引き抜いた。灰色のコンクリートの刃先からは、真紅の血が滴っている。それに合わせて、男の服にも血が滲んだ。そうか、この二人はまだ『契約』しているから、片方が傷を負ったらもう片方も同じようになるんだ。

二人で二心一体、というスイフィの言葉をあたしは思い出す。勿論そのことを、この男が知らないはずが無い。自分も怪我すると分かってはいるのに、闘うために武器を創り出す。何なんだ、この男は。

二本の剣を構える男は、まるで鬼か何かのように周囲を威圧する気を纏っている。いや別に目に見えるんじゃないやなくて、そういう雰囲気醸してることだけ。鬼気迫る顔で一歩々々近付いてくる男に、あたしも好男も後退りした。

気圧けおされてかよく分からないけれど、耳がキーンと痛む。耳鳴りのする耳を押さえて、あたしはもう一つ別の雑音が聞こえることに気付いた。図書館で聞こえた、あのテレビの砂嵐のような音だ。

「……………」

警戒して音源を探すあたしの背後で、刈子も音に気が付いたらしく、きよるきよると辺りを見回している。

「」の音……まるで、二つの世界がせめぎ合っているみたいだ……」

円い眼鏡の奥から、テンキイが言葉を漏らした。その横では、十

四季が冷静な表情で律動を刻み始めていた。乾いたドラムの音と、泣くようなエレキギターの高音が空間に流れ始めた。リズムに合わせ呼吸を整えた四季が、あたし達を一瞥する。

「……俺はあの女の相手をする。そっちは頼んだ」

赤い左目に静かな炎を燃やして、赤いドレスを着た女に刺すような視線を向ける四季。その言葉に、あたしも好男も、そして刈子もうなづいた。大切な家族を殺されて復讐したい四季の気持ち、痛いほど伝わってくる。

うなづくあたし達を見て、四季はドレス姿の女に向かって駆けていった。あつちには蟹の少年もいるんだけど……。一抹の不安を覚えるあたしの頬を、コンクリートの破片が掠めていく。重い物体が空を斬る音と、髪の毛千切れる音が聞こえる。こっちもこっちで気が抜けないな。

浅黒い肌の男の猛攻に、好男とアズアは押され気味だ。姿を消して後ろからしがみ付けば、ちよつとは形勢逆転できるだろうか。横に浮かんでいるスィフィに目配せするあたし。それに気付いたのか、コンクリートの塊が一際大きな叫び声を上げた。血飛沫を上げて無数の破片が塊から飛び出し、透明な地面にみっしり敷き詰められる。これじゃ一歩進む毎に足に穴が開いてしまう。

地面に蠢く無数の鋭い破片に、あたしは思わず尻込みした。怖気づいているあたしの前では、好男と浅黒い肌の男が絶闘を繰り広げている。男が無駄な動き一つせず二刀で斬り込めば、鎧を着た好男が華麗な足取りでそれを受け流す。

二人の剣舞のような闘いを見て、眼鏡の中のテンキイが口を開いた。

「一方的に押されてるように見えるけど、前回よりも相手の一撃が重くない……。操るものの量が少なくなっているから、かな。もつとコンクリートを分散させたら、押し返せるかもしれない」

そのためには……、と、テンキイがぶつぶつ呟きながら腕を組んでいる。そんなお喋りな眼鏡を押さえ、刈子が急に大声で叫んだ。

「好男さん、右に飛んでください！ 左からくる相手の剣が變形します！」

「！」

甲高い声に、黒髪の鎧が空高く右側へ飛び上がった。刈子の言った通り、浅黒い肌の男が振りかぶった剣がブーメランのように變形して、さっきまで好男の胴体があった空間を切り裂いた。

上空から斬りつける好男の剣を鏢つばで受け止め、男が顔を顰める。

「予知能力持ちの占い師がいたか……。……まあいい。可変未来しか見ることができないのなら、こちらにも打つ手があるのだからな」

返って来た剣を掴み取り、男がそれをまた投げた。剣が空中で碎けて、破片が好男の周りに漂う。好男もアズアも焦ってないから、避けられない数じゃないみたいだけど。着地する黒い鎧に、男が突きを繰り出した。

「今度は左に避けてください！」

「わか っつ……」

刈子の言葉通り左に下がる好男のわき腹を、破片が突き刺した。

一瞬よろめいて、鎧はすぐ体勢を立て直す。信じられないと目を見開く刈子に、男が冷たい視線を向けた。

「御前が予知して告げる未来は、それに対抗する手段を行ったときには既に、絶対に辿り着かない虚像の未来になっている。予知した未来を変えることができるからこそ、我が御前の言葉を聞いて更に裏を掻くこともできるのだ。そして判断、行動共に我のほうがり速い。御前の予知はするだけ無駄だということだ」

「そんな わたくし」

口の前で固く拳を握り、刈子が小さな肩を震わせている。血を流すわき腹を押さえる好男に、刈子がごめんなさい、と呟いた。

好男が自分の怪我を治療している間にも、浅黒い肌の男は長い剣を構えてにじり寄ってくる。この空気の薄い空間で、激しく動いた好男はすっかり息が上がってしまった。対する男は汗一つ浮かべていない。

好男の動きが鈍ってきてるのは、目に見えて明らかだ。次に一撃喰らったら……。

もう足に穴開いてもいいから奇襲するか。そう思って目の前の針山に踏み込もうとするあたしの眼に、心配そうに宙をうろつく悠の姿が見えた。ぜいぜいと肩で息をする好男の背中を、悠がさすっている。そんなことしたって、何の役にも立たないと思うけど……。呆れながらも気遣いに感心していると、あたしの頭にある考えが閃いた。

そういえば悠って、他人の考えをそのまた他人に直接伝えることができるじゃないか。あたしの合図を刈子に伝えたときや、花柄の

予定を好男に知らせたときのように。確か頭と頭を突き合わせる必要があるんだっけ。

あたしの眼が、悠から刈子へ向けられる。あの男、刈子の言葉を聞いたからわざと違う行動を取ったんだよな。ってことは、あいつに悟られずに予知を伝えれば万事解決なんじゃないか？

動悸が速まるばかりでまともに思考を纏められないけど、なんとなく上手くいきそうだ。浅黒い肌の男に気付かれないように、あたしは悠に向かって手を振った。悠がこっちに気付いて、ふらふらと近寄ってくる。その腕を掴んで引き寄せるあたしに、刈子が不審そうな目を向けている。

よし、これであいつを倒せるはず。どこから湧いてくるのか、あたしの心は根拠の無い自信に満ち溢れていた。

第三章 疑惑

「……どう、したの……？」

「魅首、何を企んでるのねー」

好男と浅黒い肌の男が闘っている中、あたしはスイフィに向かつて唇に人差し指を当ててみせた。吊り広告から上半身だけだしてるスイフィが、きよとんとして首を傾げる。悠の冷たい手首から手を離すと、あたしは悠に正面から向き合った。

「確かおまえって、人の考えてることを他の人に伝えられるよな？」

「

時間が無いから早口に尋ねるあたしに、悠がぼさぼさの黒髪を揺らしてうなづく。だったら、これから刈子の考えてることを逐一好男に伝えてくれないか。そう頼み込むあたしの前で、長い前髪に覆われた悠の顔が曇る。黒い空間に差す白光が透けてみえる悠の身体は、なんだか前よりもっと薄くなってる気がした。雫の滴る長い黒髪を耳に掛け、悠が言葉に悶つかえている。

「頼むよ！ これができるのはおまえしか居ないんだ。好男に恩返ししたいんだろ？ 今が絶好の機会だと思っただけど」

宥なだめすか賺すかして悠にうん、と言わせようとするあたし。両肩を掴まれた悠が、苦悩の表情を浮かべて目を逸らした。

「……わからないんだ……。ぼくのしてる事……。もしかしたら、好男にとってはいいい迷惑だったのかも、って……。好男、女の人と一

緒にいと楽しそうだったから……。色んな女の人が好男のことに好きになるように、……こつそり小細工してたけど。そのせいで……逆に追い詰めてたんだよね……」

図書館で聞いたあれが好男の本心だったんだ……。とか俯く悠が呟いている。今更何をぐちゃぐちゃ言ってるんだ、こいつ。でも下手に刺激して協力されなくなったら困るし。脳内の知識を総動員して、あたしは悠に言葉を浴びせ続けた。

「そんな気に病むなって！ 大丈夫、好男はおまえのこと気付いてないし。むしろここで諦めたら、それこそ中途半端じゃないか？ 今までは気持ちの問題だったけど、今度は命かかっているんだぞ？」

ああ駄目だ、励ますつもりが不安にさせるようなこと言ってどうする……。こんな脅迫じみた言葉じゃ、ますます悠は協力してくれないだろう。案の定、悠は無言で佇んでるし。

頭を抱えるあたしの耳に、剣が空を斬る音が聞こえる。

まきびしだらけの地面まで追い込まれた黒髪の鎧が、コンクリートの剣を押し返した。重心がブレてよろめく浅黒い肌の男を、好男が黒髪の剣でけん制する。切先を避けて数歩下がった男が、口元を歪めて剣を構えなおした。

「相手も疲れてきているようだ。レエンは疲労が溜まると、左足の動きが鈍くなる癖がある。左右に避けさせて、体勢が崩れたときを狙うぞ」

「……わかった。頼むぜアズア」

荒い息をしながら、好男が鎧の上から顎を拭いた。黒髪の鎧の間から、汗が染み出ている。

対する浅黒い肌の男も、先ほどまで汗玉一つ浮かべて額から、滝のような汗が流れていた。

細剣を構える黒い鎧に、男が恨みがましい眼を向ける。

「いつも、貴女は我々の邪魔ばかり」

男の歪んだ唇から、忌々しそうな低い声が吐き出される。男の持つ双剣の滑らかな刃面に、細かな棘が生えてきた。釣り針の先みたいに、一度刺さったら抜けなさそうだ。思わず刺さったところを想像して、背中がむず痒くなる。悠はまだ悶々と考え込んでいるようだ。背後からは、十四季の奏でるギターの音と、蟹の少年の怒鳴り声が聞こえる。振り向いて見ると、どうやら十四季が優勢らしい。ほっと安堵の溜息を吐くあたしの耳に、歯軋りの音が聞こえてきた。

背筋を伸ばして剣を構える黒い鎧に、コンクリートの剣を構える男が、暗い敵意の視線を向けている。

「……また長話をするようだな。好男、今の内に息を整えておくんだ」

「え？ あ、うん。わかった」

氷のようなアズアの声に、好男がうなづいて深呼吸している。隙だらけの好男を前にして、男は斬り込む様子すら無い。好男の右手首に光る腕時計に陰気そうな眼を向けて、男が一人で恨み節を零し始めた。

「我はいつも、任された務めを十二分に果たしてきた。団長も、常に尽力して任務を遂行していた。なのに貴女は……持てる力を出

し切ることを惜しみ、いつも作戦に余計な口を挟み、拳句の果てにはこの様だ。自分の命を守るため、故郷の民を見殺しにしようとしている」

「わたしは」

何か喋ろうとしたアズアの声を、男の苛立った声が掻き消す。

「もう、その言い出しは聞き飽きた。そうやって、自分だけが全て分かっているような態度を取るのには止めたまえ。意味深な言葉を吐いて、敵も味方も混乱させて、それで何か得たことがあったか？ …… 無かった。何も得る事など無かったのだ。誰も傷つけたくないなどと言って、結局苦しまなくていい人々まで苦しめる。以前から薄々感じていたのだが、貴女は、周りの者を振り回して楽しんでいっているのではないか？」

ほとんど息継ぎもせずになんか言っていると、右手の腕時計から好男へと男の視線が動いた。大分呼吸が落ち着いてきた好男に、棘の生えた剣が向けられる。

「御前も、副団長の言動に対して疑問の一つや二つ持っているだろう。例えば図書館で話したことのよう^うに。何故、故郷の世界で苦しむ民のことを伏せていたのか。等々、思い当たることは無いか？ 重要な質問を、口当たりの良い言葉ではぐらかされたことは無い^か？ もし該当する事柄があるのなら、それが副団長の本性だ。あれこれ綺麗事を並べながら、自分が一番得るように仕向ける。そんな者と命運と共にすることを、不安に思わないか？」

男の容赦ない追求の言葉に、黒い鎧が軋んだ。中に居る好男は、どうやら考え込んでいるみたいだ。まあ確かに、思い当たることが

チラホラあるけど。だからと言って、この男が言ってることを鵜呑みにはしたくないし。もやもやするあたしの目に、男が左足首を曲げ伸ばしする動きが映った。

……まずい、今のは足の疲れを取るための時間稼ぎだったのかも。しかも好男が考え込んでいる隙に、斬りかかるつもりみたいだ。好男から気取られぬように、男が少しずつ間合いを詰めている。

いつもならアズアが気付いて注意したりするのに、さっきの言葉にアズアも悩んでるみたいだ。剣が届く距離になろうとしてるのに、全然動く気配が無い。どうしようかと辺りを見回すけれど、悠は落ち込んでるし刈子も何かぶつぶつ呟いてるし……。十四季は向こうで二人相手に闘ってるし。

助けに行ける奴が居ないじゃないか。　あたし以外は。

足元に広がる無数の針を見つめ、あたしは大きく息を吸い込んだ。踏み潰していたローファアの踵を直し、しっかりと靴の奥まで足を入れる。

「　スィファイ、能力を使いたいんだけど」

「わかったねい。……おいらも一緒に行こうか？」

うなるリボンを従えて首を傾げるスィファイに、あたしは首を横に振った。横で何か呟いている刈子を指し、何かあったら刈子を守ってくれ、と頼み込む。

素直にうなづくスィファイに背を向け、あたしは好男達の方を見た。コンクリートの剣を構える男の意識は、黒い鎧の腕時計一点に集中されている。今なら多少足音がしても気付かれないかも。

針のように尖る破片を踏み、あたしは好男達の方へ駆け出した。

吐き潰したローファアの磨り減った靴底からコンクリートの破片が突き出し、あたしの足の裏を削る。足だけ痛いとしても走れそうにない。ならばいっそ傷を増やしてしまえと、あたしは思い切り自分の腕を噛んだ。うん、いい感じに意識が分散されてる。下手したら気絶しそうだけど。

よろけながら走るあたしの前で、ついに男が大きく一歩踏み込んだ。一瞬遅れて反応した好男の喉下に、コンクリートの刃が迫る。血の流れる足で勢いつけて、あたしは刃に向かって飛び込んだ。

真赤な鮮血が、まるで弧でも描くように飛び散る様子が見えた。

黒い空に白い光が差す空間の中で、紅太は透明な地面に立っていた。ほんの数分前まで、そこは重力のない、まともにモノも見えない場所だった。それが何故か急に、元居た世界と同じような物理法則を持つ空間へと変化したのだ。

急な出来事に、紅太は何が起こったのか今一つ理解が追いつかなかった。

目の前でスオンが敵に囲まれているのを見て、紅太はやっと我に返った。霞恋に蹴られて痛むわき腹を押さえて、スオンに近付こうとする。

スオンのすぐ横には、図書館で助けた銀髪の少年がこちらを睨んでいた。十四季の赤い瞳を囲む黒い血管に、覚えぬ気後れする紅太。

「……俺はあの女の相手をする。そっちは頼んだ」

背後の仲間達に呼びかけ、十四季がこちらへ向かって走ってくる。思わず身体を退く紅太に見向きもせず、十四季は霞恋に固く握った拳を繰り出した。弾丸のようなそれを、霞恋は薄ら笑いを浮かべて避けている。

「え、えと……どうしよう……」

とりあえず取り出した蟹の殻粉入り袋をぶら下げ、その場に立ち尽くす紅太。背後から、スオンの声が聞こえる。

「そう言えば団長に『壁を張ったらいい』と教えたような記憶が。ち、違っんだ！ ちよっと忘れてただけで、我輩は決して諸君

を嵌めようとした訳では　　って、誰も聞いていないのか……」

肩を落として溜息を吐くスオンの肩に、紅太の手が触れる。振り返ったスオンの顔に、みるみる笑顔が広がっていった。

「おお、紅太！　心配したんだぞ。もう勝手に行方を晦くましたりしないでくれよ」

諸手を挙げて喜ぶスオンを、紅太は静かに見下ろしている。

「……先生、さっきのどういう意味っすか」

冷たい目をして尋ねる紅太に、スオンは目を泳がせて言葉を濁した。嬉々とした表情から一転してうるたえるスオンに、紅太が険しい顔で近付いていく。後退りするスオンの足元からバンダナを拾い、紅太はそれを握り締めた。

「いや、その　。仕方なかったのだ。君を探すために、我輩と彼らの間で不可侵条約を結んで……」

しどろもどろに弁解するスオンの前で、紅太のバンダナを握る拳が固くなる。

「あの人達を倒せって言ったのは、先生じゃないっすか　」

絞り出すようにそう言った紅太の肩は、小刻みに震えている。顔を俯けて唇を噛み締める紅太に、スオンはますます動揺した。掛ける言葉が見つからず、スオンはただうるたえるばかりだった。

「それは　　騎士団の監視の目を誤魔化すための方便と言うか　。

我輩は常に、君を守ることを第一に考えていたのであって」

「じゃあ、姉ちゃんを助けるのに協力するって言ったのも、嘘だったんすか」

鋭い追及の言葉に、スオンは口を噤んだ。言葉を失くして目を泳がせるスオンの前で、紅太の眉間に深々と皺が寄った。無言で踵を返して去ろうとする紅太に、スオンが躊躇いながら口を開く。

「ずっと言おうと思ってたのだが、君のお姉さんは、もう」

「黙っててください！」

何か言いかけたスオンの横を、蟹の鉗が掠める。マントの切れ端が、黒い空間にひらりと舞った。

「先生、どうしてボクに力を貸そうと思ったっすか。ボクが弱いから？ 可哀想だから？ 姉ちゃんのこととか、自分が大変な状況だつてことは分かっています。でもボクは、自分が可哀想だなんて思ったこと、一度も無いっす」

紅色の粉が詰まった袋を握り、紅太が淡々と語る。スオンに背を向けたまま、血に染まったバンダナを頭に巻く紅太。

「……ボク、一人で色々考えたっす。ボクの進むべき道は 　ボクが決める。先生、いままでご指導ありがとうございました」

険しい顔でそう言うと、紅太は炎舞う方へ歩き始めた。

次第に遠ざかっていく背中を、スオンはただ呆然と見つめるだけだった。

第四十章 変わらぬ想い

弧を描いて飛び散る自分の血に、あたしは不覚にも結構鮮やかだなあ、などと感動していた。

好男の喉下目掛けて突き出された剣を、あたしは自分が何してるかよくわからないまま、素手で払いのけていた。雪に触れたみたい手に冷感が走り、鮮やかな血が空間に飛び散った。あんまり痛くないんだけど、この血の飛び散り様　確実に指が数本無くなったな。

なんて物騒なことを考えていると、飛び散った血が、正面から来ていた男の顔に掛かった。

「　！　」

脊髄反射並みの速さで男が背後に飛び退り、浅黒い手で目を擦る。思い切り血を浴びた目を瞬かせ、男が怪訝そうに顔を顰めた。

「何だ　湯？　いや、汗か……」

そうか、透明になってるから血も透明なんだ。一人納得しているあたしの肩を、冷たい手が叩いた。

「ごめん……魅首……迷ってる場合じゃ、無かったね……。ぼくも、頑張る……。何をすれば、いいんだっけ……」

だから好男に刈子の予知したことを伝えろって、さっき言ったじゃないか！　血でぬめる足で必死に身体を支えながら、あたしは心

の中で思わず絶叫した。脳内じゃこんなに威勢がいいのに、口から出るのは、浅くて速い呼吸だけだ。

悠を刈子のところへ帰そうとするあたしの目に、男の立ち上がる姿が見えた。今からじゃ、とても間に合わない。

どんどん熱の逃げる身体を抱いて、少ない血液を使って脳を動かすあたし。

「そうだ」

酸欠で思考回路が色々飛んだせいか、ある考えが閃いた。傍らに佇む悠を手招きして、その両肩をぐつと掴む。

「……どう、したの？ 魅首 っ」

ぼさぼさの黒髪に包まれた頭蓋骨に向けて、あたしは思い切り頭突きをかました。目の前に細かな星が飛び、意識が一瞬吹っ飛んだ。くらくらする頭を押さえるあたしの前で、悠も涙目になって頭を押さえている。

「い、痛い、よ……」

「ごめん。力加減が分かんなくなった。今の、刈子に伝えてくれ。頼んだぞ」

近付いてくる浅黒い肌の男に聞こえないよう、あたしは小声で悠にそう頼んだ。情けなく鼻を噉っていた悠がうなづき、刈子の許へ滑るよう移動していく。よし、ちゃんと刈子と額を接触させてるな。

悠の様子を見届けると、あたしは男に眼を向けた。コンクリートの双剣を構え、男は円を描くように間合いを詰めてきている。あたしの背後では、好男が先ほどのことに驚いて剣を下ろしていた。これじゃ、急な攻撃にまた押されてしまう。

悩むあたしの眼が、男の顔に掛かったあたしの血に向かう。

好男が闘えないのなら、あたしがやるしか無い。血の滴る拳を握り締め、あたしはスイフィに向けて腹の底から声を出した。

「能力を解いてくれ！ 今すぐ！」

「り、りよーかいねいっ」

スイフィの声が聞こえ、身体に巡っていた不思議な力が消えていった。がくと体温が下がってよるめくあたし。駄目だ、ここで倒れるわけにはいかない。がちがちと歯を鳴らしながら、あたしは男に目を向けた。思惑通り、相手は視界を奪われて怯んでいる。叩きにいくのなら、今しか無い！

両目を押さえて首を振る男目掛け、動かす度痛む足で駆けていく。

「目、目がっ……！ 急に視界が？」

「うおおおおおりゃあああ！」

録音されてたら絶対お嫁に行けなくなるような雄叫び上げて、あたしは男の腹に拳を打ち込んだ。真赤な血を迸らせながら、右手が男にクリーンヒットする。ああ、やっぱり指無くなってる。三本しか無い指が折れていく様を眺め、あたしは小声で呟いた。左手じゃなくてよかった。柄にも無くそう思ってるうちに、男の体が後方へ仰け反った。

「ぐっ……」

血の混じった息を吐きながら、男が背筋を使つて体勢を立て直そうとしている。好男が動く気配はまだ感じられない。それまで動きを封じるしかない！

多分あたしの頭は、酸欠や貧血でかなりおかしくなっていた。大和撫子の血が流れてるとは思えない乱暴さで、あたしは男に馬乗りになった。ああご先祖様父上母上、緊急事態の不可抗力つてことで、この蛮行を見逃してください。

心の中で免罪の言葉を吐きながら、あたしは男の太い首を両手で締め付けた。つて言つても、指が二本無くなつてるから、大した力はないんだけど。押し返そうとする男の両手の内肘をを両膝で押さえつけるあたし。組み伏せられた男の鋭い目が、あたしを睨み付けた。

「何故彼らに加担する？ 自分の命が惜しいのか？ 何千何万の命よりも」

「モノには言い方と遣り方つてもんがあるんだよ！ 命を救うためつて言いながら、おまえらは何十人も殺しをしてるじゃねーかつ！ ある命を救うためなら、その他の命はどうなつてもいいのか？ もつと……もつと他に、方法は無かつたのかよ！」

酸欠と貧血のためラリつた頭で、あたしは男に感情のまま言葉をぶつけていた。無我夢中で男の身体を押さえ込むあたしの手足を、コンクリートの破片が覆っていく。それが皮膚の下に潜り込んできても、もう完全に頭がおかしくなりそうだった。

「誰だって自分の命は大事だろ！ 自分の命の大切さ知らないで、どうやって他人の命の重さ知ってるんだよ！ おまえらが殺してきた人達だってなあ、生きてたんだよ！ 人生背負ってたんだよ！ その事ちゃんと分かってんのか？ なあ！」

どこまでも冷徹な目で睨んでくる男に、あたしは声の限り怒鳴り続けていた。感極まって目元が熱くなってくる。まだ泣いちゃ駄目だ。ここで泣いたら、第二の能力が発動したら全て台無しだ。

「何を言い出すかと思えば、そんなことが……。くだらんな。一時の感情に支配されて、最も優先すべき事柄を見失っているのだ。群れが無ければ個が生きていけないことすら、忘れてしまっている……。やはりこちら側の人間とは、相容れることなどできぬな」

逆に説教を垂れて、男はあたしを鼻で笑った。侮蔑に満ちた男の表情を見て、かっとなったあたしは思わず右手を振り上げていた。

「てめえ　　っ」

冷血で高圧的な男の顔面に拳が振り下ろされる。鼻柱に当たるすれすれのところで、何かがあたしの手を引きとめた。

「魅首殿……もう十分だ。これ以上は魅首殿の生命に係かわる」

氷のように冷え切った声。応える暇も与えず、アズアの黒髪が男を捕縛した。別の髪束が、あたしを男から引き剥がす。宙に浮かんだあたしの身体を、黒い鎧に包まれた好男が抱きとめた。

「魅首ちゃん、大丈夫？」

「おまえこそ大丈夫なのかよ」

手際よく足と手の治療をしてくれる好男に、あたしがぶつきらばうに訊き返す。尋ねられた好男は一瞬眼を伏せたけど、すぐに無理に笑うとうなづいて見せた。

傷が塞がったあたしを膝から降ろし、地面に縛り付けられる男に近付いていく。

「確かに、アズアの言動は謎が多い。それに思わせぶりなところもある。けどさ、人間付き合いつたら、どんなに親しくても言いたくないこと、一つや二つあるだろ？ 口数は少ないけど、沢山秘密を抱えてるけど、アズアはずっとオレ達を守ってくれた。アズアが『信じてくれ』って言うて、おまえが『信じるな』って言うたら オレはアズアを信じる。だって、アズアはオレの大切な相棒だから」

朗々と、そしてきつぱりと、好男は言い切った。なんか吹っ切れたみたいに清々しい顔の好男に、男は眉間に薄ら皺を寄せている。

「そんな感情論で物事を決めるとは」

口を開きかける男を手で制して、コンクリートに包まれたヘッドホンの男を指す好男。

「それに、自分の相棒をあんな目に合わせる奴のこと、信じられないだろ」

好男の言葉に、男の目の下がぴくりと痙攣する。精神的に痛いだろうな、だって凶星だもんな。

不機嫌そうに鼻に皺を寄せる男を眺めていると、背後から甲高い声が聞こえてきた。

「なによ、あんだだけ鳴り物入りで派遣されてきて、こんな小娘相手にやられちゃうわけえ？ はっ、ホント駄目ね。見てらんないわ」

十四季と闘ってるはずのドレスの女が、何時の間にかすぐ後ろで炎を揺らしていた。どうして、と目を円くするあたし達の前で、女が高笑いしている。

「あのガキは、うちのガキと遊ばせてあげることにしたわ。さあその小娘、それと黒い毛玉。二人で掛かってきなさい。さもないと

」

女の真赤な爪が、つい、と空間に伸ばされる。その先にあるものを見て、あたしと好男は息を呑んだ。

「あの子の命をいただくわよ」

紅色の炎の向こう、影のように黒い男が、刈子の首筋に刃物を当てている。その下で、頭を踏まれてぐったりと目を閉じたスイフィの姿が見えた。

Another World the 7th chapter

透明な暗黒の世界を、衝撃波が貫いていく。

殆ど視認できないそれが、素早く逃げた霞恋の脇を掠めていった。

「くっ……、ガキのくせになかなかやるじゃない」

軋むわき腹を押さえ、霞恋が減らず口を叩く。まあそれもあந்தの力じゃ無いんだけどね、と嫌味を付け加えた。

安い挑発をする霞恋に、十四季が鋭い視線を向けている。休み無く律動^{リズム}を刻む右足から、緊迫したスネアドラムとハットシンバルの音が響いている。

次の一撃は大きいな……。

背後から霞恋と十四季の闘いを見ていたカンツアが、声に出さず呟いた。

周りにそよぐ物が何も無いから、衝撃波の軌道が読みにくい。この空間は霞恋にとって不利だ。既に二発の攻撃が霞恋を掠めている。やはり一人で闘うのは危険だ。

少しずつ律動を早める十四季を警戒しつつ、カンツアは霞恋に近付いた。

「霞恋、スオンかレエンが来るまで逃げに徹した方がいい。この少年には一度負けてい」

「うるさいわね！ アンタは怪我しないように下がってなさいよ」

忠告しようとするカンツアを、霞恋が烈火の如き態度で一喝した。あまりの剣幕に気圧けあされて、カンツアはたじたと後退りする。

「……す、すまない」

「最初から言わなきゃいいのよ！ 気が散るから話しかけないで。アンタは黙ってわたしに力を供給してればいいのよ」

毒の籠った言葉をぶつけられ、カンツアが唇を噛んだ。……一般人に怯えてどうする。これでも一応は騎士団の一員だというのに。自分を叱咤激励しながら、カンツアは霞恋に言い返せない己を恥じた。どこで間違っただらう。こんなはずでは無かったのに……。

ひとり落ち込むカンツアの前では、両者の攻撃準備が整って一触即発状態になっている。

巨大な炎を揺らす霞恋と、右手を押さえる十四季が互いに睨み合う。

霞恋の足が僅かに動き、十四季が黒く染まった右手を目にも留まらぬ速さで翳した。負けを覚悟して目を瞑るカンツアの鼻を、甲殻類の臭いが攪くすくる。

「？」

鼻を押さえて目を開けると、辺りは紅色の煙に包まれていた。

あの少年がこれを撒いたのか……。

ざらざらする蟹の殻粉を指で触るカンツア。蟹殻の粉でできた霧が少し晴れ、カンツアはその目を睜みはった。

今にも互いに攻撃をぶつけようとしている二人、霞恋と四季が、まるで写真のように先程の姿のまま固まっている。いや、先刻そのままというわけでは無さそうだ。二人の服や肌に付着した紅色の粉に、カンツァが眼を窄めた。

この能力は紅太という少年のものに違いない。だが何故、味方である霞恋まで拘束する必要があるのか。

まさか寝返ったか。そう危ぶむカンツァの前、薄紅色の煙の中から、紅太が姿を現した。その頭には、昨日は着けていなかった血染めのバンダナが。

「ちよつと何してんのよ！ わたしは味方でしょう？ 早く解放しなさいよ！」

四季と霞恋の間に立つ紅太に、甲高い声が命令した。霞恋の身体は、無理な体勢のまま蟹の殻粉に固められている。

綺麗に化粧した顔を醜く歪めて怒鳴っても、紅太は全く動じていないようだ。澄ました顔で霞恋を一瞥すると、何も返さずそのまま四季へ眼を向ける。

「君に言われたこと、よく考えたっす。どうしてあの時、君を助けたのか。きつと知りたかったんだ。ボクと君、どっちが『強い』のか。……ボクは、もっと強くなりたい。今度は一人で君を倒してみせる。これがボクの決めた道っす」

真直ぐに四季の眼を見て、紅太が言い放つ。紅太の言葉に、四季が一瞬顔を顰めた。その顔は、既に半分以上が黒い血管に覆われている。左目だけでなく、右目までも赤い光が宿り始めていた。

微かに舌打ちする音が聞こえ、四季が押し殺した声で呟く。

「……運命の足音が近付いている。残された時間は、もうほんの僅かしか無いのか」

赤い眼光が紅太を見据え、十四季が口を開いた。

「確かに、おまえの信じる道を進めと言った。しかし俺はおまえの親でもなければ教師でもない。修行まが紛いの茶番に付き合ってもりなど、無い」

「そうよ！ この武宮つてガキはわたしの獲物なの。腰抜けのあんたは、おしゃぶりでも啜くわえて黙って見てなさい」

二人掛かりで否定された紅太は、顔色一つ変えずに辺りを漂う蟹殻を動かしている。どうも奇妙だ。あの少年は、こんなに打たれ強かっただろうか。

落ち着き払っている紅太に、カンツアが懐疑の眼を向ける。

「……ボクは茶番をする気なんて無いっす。正真正銘、正々堂々、一騎打ちがしたいだけっす」

迷惑な奴だ……、と呟く十四季を無視して、紅太が今度は霞恋に眼を向ける。齒をむき出して怒り心頭の霞恋に、紅太は妙に冷めた眼で遠くを指した。

「あっちで鬨ってる人、負けそうっすよ。お姉さんは、ボクなんかよりずっと強いんでしたよね？ だったらここで子ども一人を相手するより、あっちの大人を倒した方が、お手柄なんじゃないですか」

進言する紅太に、霞恋は鬼のような形相を和らげた。何を思っているのか、裏のありそうな腹黒い笑みを浮かべている。

「ふん……わかったわよ。わたしがあいつらを倒すまで、アンタはそのガキと遊んでていいわ。今度は逃がすんじゃないわよ！」

釘を刺す霞恋の腕から、蟹の殻粉が離れていった。

とりあえずこの場は収まったようだ。ほっと胸を撫で下ろしつつも、カンツアは浮かない気持ちだった。

任務中に仲間割れだなんて、騎士団の面々に合わせる顔が無い。今回の損害のことを、団長にどう申し開きすればいいのか……。

頭を抱えるカンツアを引っ張り、霞恋がレエン達の方へ走っていく。

「何ぼーつとしてるのよ！ ちゃんと眼上げなさい！」

霞恋に怒鳴られ、カンツアは眼を上げた。紅太の言ったとおり、レエンは地面に倒れていた。しかもその上には、異世界むせうの少女が馬乗りになっている。何故副団長でもなくその『契約者』の男でもなく、ただの少女がレエンを組み伏せているのか。

思わず我が眼を疑うカンツアを置いて、霞恋が刈子とスイフィを痛めつけている。

「ほら。こつちの変な奴は気絶させたから。この子を見張ってなさいよ。丁度いいハンデになるわ」

倒れるスイフィをヒールの先で小突き、霞恋が刈子をカンツアの腕の中に放り込んだ。霞恋如きに殴られて気絶するはずが無いのだが。血塗れちまみでぐつたりと横たわるスイフィを不思議そうに見つめ、カンツアは携帯している刃物を取り出した。

少女の白い首筋に冷たく光る刃先を当てる。小型の刃物から、少

女の細かな震えが伝わってきた。

人質を取るようなこと、したくはないのだが……。顔を曇らせるカンツアに、スイフィの頭を踏んで押さえておくように霞恋が命令する。

「彼は既に気絶している。仮に気絶から回復したとしても、起き上がるより早く拘束するぐらいの技術は俺も持っている。そこまでする必要は無いだろう」

「馬鹿、そんなんじゃ甘いのよ！」

真つ当な事を言っただつてもりだったが、何故か霞恋は声を荒げた。無理矢理スイフィを引き摺り、カンツアの足元に投げる。さあ踏みつけなさい、と命令され、カンツアがうるたえる。

「人質を乱暴に扱ったら、反感を買うだけだ」

「それでいいのよ。悔しそうな顔してるあいつらを蹂躪する、サイコーじゃない。さあ、言った通りにしとくのよ！」

言うこと聞かなかつたらどうなるか分かるわね……。と、霞恋の細い指がカンツアの顎を掴んだ。狂気すら感じる霞恋の瞳に、カンツアが生唾を飲み込む。仕方なくスイフィの頭に足を乗せると、霞恋が満足そうに笑った。

また、言われるがままになってしまった……。

暗い眼を伏せるカンツアに背を向け、霞恋は手に炎を創り出している。

身体から力が吸い取られていくのを感じながら、カンツアは覇気

を失くした眼で霞恋の背中を見つめた。その心の中に、鬱々とした
思いを抱え込んで。

第四章 狂う炎 前編

「刈子っ！ スイファイ！」

赤いドレスを着た女の背後に向けて、あたしは大きな声で叫んだ。影のような男の腕の中で、刈子は喉許に刃物を当てられて震えている。スイファイも起きる気配が無いし。

焦っているあたし達を見て、ドレスの女は嬉しそうに高笑いした。

「ねえどうなの？ もちろん、闘うでしょ？ でも全力では来れないわよねえ。こっちには二人も人質が居るんだから」

意地の悪い顔で、女があたし達に脅しを掛けてくる。

くっそ、ム力つくあの女。でも刈子とスイファイが居るから、うかつに手出しできないし……。

歯痒い思いで拳を握り締めるあたしの横では、好男が思い切り動揺している。こっちもこっちで、まともに闘えそうにないな。

「ならば人質を交換しよう。レエンを解放する代わりに、刈子殿達を放してくれ」

アズアの提案に、女が厚く化粧した顔を顰める。唇を歪めて、女が地面に唾を吐く真似をした。

「冗談じゃないわよ。なんでそんな割りに合わない条件、飲まなきゃならないの。お断りよ」

真赤な爪をキラキラさせて、女がこっちを睨み付けている。その背後で、影のような男が小さな悲鳴を上げた。びくんと肩を震わせ

ている男の後ろには、悠が恨めしそうに立っている。

普段どこかネジが飛んでそうな悠の目が、静かな怒りで冷たく光っていた。

男の悲鳴を聞いて、女が鬱陶しそうに振り返った。

見るだけで凍えそうな悠の眼と、あたしの眼が合う。女に気付かれないように、あたしは悠に二人を助けて、と身振り手振りで頼んだ。うなづく悠にちよつと安心したけれど、見える人間以外に触れない悠ができることは限られてる。やっぱり自分達で何とかするしかなさそうだ。

「何よ、気が散るから静かにしてろって言ったでしょ」

「い、今……何か冷たいものが……」

かちかち歯を鳴らしながら、男が弁解する。半分も聞かないで、女は不機嫌そうに鼻を鳴らしてこつちを見た。

「つきあってられないわ。始めるわよ！」

真紅の炎が女の両手を包み、火炎の弾があたしたちに襲い掛かる。咄嗟に頭を手でかばうあたし。黒い剣が火の玉を弾き、髪の毛の焼ける臭いが鼻をつく。

「熱っ！」

ちりちり焦げる髪を押さえて、好男が涙目で声を漏らした。相手が炎だから、髪じゃ対抗できない。それに好男の未来の頭髪のためにも、好男に頼ってばかりじゃいけない。でも、スイフィが気絶してるから透明にはなれないし……。

どうしようかと悩むあたしの視界の端で、コンクリート片が僅かに動いた。

「アズア、こいつまだ闘うつもりらしいぞっ」

「！」

動くコンクリート片を指して叫ぶと同時に、コンクリートの小刀が黒い鎧を切り裂いた。

「うわっ」

おどろいた好男が、足を縛れさせてよろめく。慌てて好男を支えるあたし。大丈夫かと訊こうとして、あたしはぼかんと口を開けた。

好男の肌が、更に黒く染まっている。もう、図書館で見たときの比じゃない。真黒すぎて多分夜になったら宵闇と区別がつかなくなるぐらいだ。しかも肌だけじゃなくて白目、歯まで黒くなっている。これじゃまるでアズアみたいじゃないか。

戸惑うあたしに、黒髪に捕縛された男が偉そうな口を開く。

「二つの世界は互いに傷付け合い、侵蝕し合う。故郷（こきょう）の者と契約したときから、御前達の身体は異世界（いせかい）の者のそれとは一線を画したのだ。涙を流せば傷が治るなど、思い当たることも多いだろう？」

能力を使えば使うほど、侵蝕は進んでいく。そう男がありがたい説明をのたまっている。

そんなことを聞いている間にも、女が降らせる炎の弾が次々こち

らに落ちてくる。

スイフィが気絶してて発動するかわからないけど、一か八か第二の能力を使うため泣いてみようか。悩むあたしの目に、刈子を押しさえる男に悠が触れない手を伸ばしているのが見えた。あれが何の効果があるかわからないけど、一応頑張ってるみたいだな。

悠達の様子を眺めるあたしの足に、火の粉が降り注ぐ。この炎の雨のせいで、余計に酸素が不足してきてる気がするんだけど。発動するか分からない能力を使うのは、スイフィを叩き起こしてからにしよう。今は一刻も早くこの女を静かにさせないと。

腹を決めると、あたしは地面に散らばるコンクリート片を幾つか拾った。両手いっぱい破片を握り、女に向かって駆け出す。

「あら？ 恐怖で頭がおかしくなっちゃったのかしら？」

あたしに向けて、女が小ばかにした笑みを浮かべてからかいの言葉を投げてくる。

「ふふ……いいわよ、いらっしやい。丸焼きにしてあげるわ！」

女の両腕が頭上に掲げられ、そこから無数の小さな炎があたしに向けて襲い掛かる。一直線に降る炎を大きく左右に動いて避けるあたし。炎を避けながら、手に握ったコンクリート片を女に投げつける。

小石程度の破片から身を守ろうとして、女の集中力があたしから剃れた。

炎の弱まる一瞬を狙い、女の懐に全体重掛けた左肩をぶつける。

「ぐはっ

」

おお、この人も結構女捨てた声出すんだな。なんて間抜けなこと考えながら、女が逃げないようになりっきり両手で抱きつく。ドレス越しに抱きついた女の身体は、思っていたよりかなり痩せていた。腹周りなんか、殆ど肋骨と皮だけじゃないか。

骨と皮しかない痩せたからだに驚いていると、女の拳があたしの顔面にクリーンヒットした。なんか今、ごきつって音がした気がする。目から星を散らすあたしを凄いい力で跳ね除け、女が振り返った。

「カンツァ！ 見せしめにその子の首を掻き切ってやりなさい！」

しまった刈子が！ 人質に取られた二人を見るあたしの顔を、炎を纏った拳が横殴りする。熱いし痛いし、もう散々だ。鼻から生温い液体が顔を伝ってるけど、これ多分鼻血だな。

女から拳で滅多打ちにされて、顔中が痛い。でも、この女にだけは負けられない！

あたしの頭の中に、十四季の顔と火事現場の写真が浮かんだ。人殺しを喜んでやってるようなイカレた奴を、野放しにしてたまるか

……！

がむしゃらに女にしがみつくあたしの耳に、女の後ろに居る男の短い悲鳴が聞こえた。

どうやら、刈子が男の手を噛んだみたいだ。刃物を取り落とす音が聞こえて、ブーツで走る足音が聞こえた。

「何やってるの！ はやく捕まえるのよ！」

男に怒鳴りながら、女の細い指があたしの首を容赦無く締め上げる。霞む意識の中で、手の中に納まっていたコンクリート片が動く

感触がした。変形しながら皮膚に食い込もうとする破片を、女の顔に投げつけるあたし。

「うつつ」

コンクリート片が女の顔に張り付いた。顔を掻き毟る女から距離を取り、あたしはスイフィの許へ走った。

刈子に腕を噛まれた男は、寒そうに影のような手に息を吹き掛けている。がたがたと震える男の背後で、悠が凄まじい形相をして猛烈な冷気を放っている。あいつ、怒らせるとヤバかったんだな。今度から悠と話すときは言葉に気をつけよう。

幽霊という存在に恥じない力を発揮している悠を見て、あたしは生唾を飲み込んだ。

震えている男を突き飛ばして、スイフィの傍に膝をつくあたし。踏まれて乱れたピンクと緑の髪が、血の気の無い白い顔に掛かっている。

「おいつ！ 起きろ！ サポートしてくれるって、約束したじゃないかよっ」

白い頬をぺちぺち叩きながら、あたしはうわずった声を出していた。手に触れるスイフィの頬は、妙に体温が低い。なんだよこれ、まるで死んじゃうみたいじゃなか。でも、あたしは元気だし、そんなはず無いのに。

泣きそうになりながら、あたしはひたすらスイフィの頬を叩いて肩を揺すった。薄い脛が薄ら開いて、スイフィの唇から息が漏れた。

「あ、あれ？ かるっちは……？」

額に汗を浮かべて、スイフィが擦れた声を出した。

「ばかやろー、心配させるなっつの……！」

気の抜けた声を聞いて、あたしの目から涙が溢れた。身体に『概念』と力が流れ込んでくる。ああもう、今は使う時じゃないってば。拳で涙を拭い、あたしは自分の両頬を叩いた。

「行くぞっ。力を貸してくれよな、スイフィ」

まだ目を覚ましきれしていないスイフィの手を掴み、空元気を装うあたし。首筋に、ひやりと刃物の感触がした。

「一人減って、一人増えた。まあ、これでいいか」

寒さに歯を鳴らしながら、背後の男が独り言を呟いた。

第四章 狂う炎 後編

首筋に触れる鋭い刃物の感触に、あたしの背中に鳥肌が立った。素早く腕を捻り上げられ、なす術も無く男に拘束されるあたし。しまった、スイフィの容態を気にしすぎて、こいつのことをすっかり忘れていた。

冷や汗を流すあたしを、影のような男が無気力な目で見ている。

「全く……。この急な冷えのせいで手が悴んで敵わないな」

大きく息を吐きながら、男がまた独り言を呟いた。男があたしを捕まえてから、息が白くなるほどの冷気は緩和されたようだ。どうやら男とあたしの距離が近すぎるせいで、悠があたしに気を遣っているらしい。

「魅首さん……！」

少し離れたところから、刈子の心配そうな声がする。

「あたしは大丈夫だから。捕まらないようにもつと離れて！」

あたしの声に、刈子が頷いて人氣ひとけの無いほうへ走っていく。大丈夫だなんて、気休めのセリフを吐いてしまった。さて、どうやってこいつの腕の中から逃げ出そうか……。

悩むあたしに、ピンヒールの足音が近付く。

「よくもわたしの顔に、こんな醜い傷を付けてくれたわね　！」

真赤なドレスの女が、怒りに震える声でそう言った。思わず目を上げると、女の顔半分が大変なことになっていた。いくらなんでも、ちよっとやりすぎた……。

「ごめんなさい、と小声で謝るあたし。まだ謝ってる途中のあたしの頬を、女が平手打ちした。狭間の空間に、痛そうな音が響く。いや、実際痛いんだけど。」

「魅首ちゃん！」

好男が叫んで、その足が一步踏み出した。それに反応して、地面に転がるコンクリートの破片が針のように尖る。幾百もの切先にけん制されて、好男が怯んだ。

二の足を踏んでいる好男の意識は、完全に前方にしか向いていない。一瞬の隙を突いて、ヘッドホンの男だったコンクリートの塊が変形し、男を拘束する黒髪を斬った。

「まさか、まだ意識があるのか？」

腕時計から、アズアのうるたえた声が聞こえる。あんな姿になって、意識があるほうが不自然だろう。驚くのも当然だな。刃物であたしを脅してる男も、味方の事なのにぼかんと口を開けてるし。力を失った髪束が地面にはらはらと落ちて、その上に浅黒い肌の男が着地した。

「よそ見してる場合かしら？」

男の動向を窺っていた好男に、背後から女が詰め寄る。その手には、マニキュアに負けないくらい真赤な炎が揺れている。

「くっ。このままじゃ好男が」

身じろぎするあたしの首に、男が強く刃物を押し当てる。駄目だ、こいつ全然隙が無い。力もこいつのほうが強いし、どうしよう……。顔を曇らせるあたしに、スイフィがちらりと目配せした。広告から地味目な色のリボンが数本、男の目に付かないように地面を這っている。リボンで刃物を巻き取るつもりらしい。

じりじりとリボン達が地面を進み、男の背後に回る。微妙な空気の揺れに、男が疑問符を浮かべて背後を見た。一斉に飛び掛るリボンを、男があつと言う間に切り裂いていく。

「ああっ惜しいー。あとちょっとだったのにねー」

「あまり俺を舐めるなよ。大人しくしていれば、痛めつけずに楽しんでやるから」

悔しそつに地団駄踏むスイフィに、男が顔を顰めて不機嫌そうに言った。何なんだよ、この上から目線のセリフは。なんか、敵対する奴らつて皆こんな事ばかり言うんだな。

聞き飽きた言い回しにうんざりしていると、あたしの肩にひんやりとした手が触れた。悠だ。鬼のようだった顔は、すっかり普段のネジ飛んでそうな緩い表情に戻っている。

「さっき魅首が、考えてたこと……もう一回、あの子に伝えてくるね……。忘れちゃってるみたい、だから……」

覇気の無い声で囁き、悠が刈子のもとへ向かう。滑るように進みながら、悠がドレスの女の首に触れていった。女が驚いて、好男に向けて放った炎弾の軌道が僅かに変わる。ぎりぎりで避けた好男の

背後から、浅黒い肌の男がコンクリートの塊を立ち上がらせて人型に戻っていた。

「今度こそ確実に仕留める。いくら副団長でも、三人を相手に剣術だけで闘うのは苦しいだろう」

男が言うと同時に、人型に変化したコンクリート塊の中から、耳を塞ぎたくなるような悲鳴が聞こえた。身悶えするコンクリート塊の両手が、男の持つ剣と同じ形に変形していく。中に居るヘッドホンの男のことを考え、あたしは思わず同情した。いくら嫌な奴だからって、こんな生殺しの目にあうのは見てられない。

耐え切れず目を背けるあたしの前で、好男が黒髪の剣を両手で構えている。

「前も後ろも敵、か。これって大ピンチだよな」

荒い息をしながら、好男が苦笑いを浮かべている。諦めの色が感じられる好男の言葉に、アズアが冷静に返す。

「後ろは二人だが、前は一人だ。魅首殿が自分で身を守れると信じて、カンツアの『契約者』を行動不能にしよう」

「了解っ」

前後に素早く眼を走らせ、好男が地面を蹴った。赤いドレスの女に一瞬で近寄り、好男が剣を振り上げる。

「いめん！」

眼を瞑って、好男が剣を振り下ろした。剣を握る右手首に、偽物
の黒い腕時計が光る。か細い悲鳴を上げて、女が顔を覆った。

「……なんてね」

剣が女の肩に触れる寸前、腕の間から女がにやりと笑ってみせた。驚きの柔らかさで、女がその場で横に開脚する。目標が急に位置を下げたせいで、好男の身体が大きくぐらついた。体勢を立て直そうとする好男の足を、女の足が掬う。

「うわっ」

「隙在り」

完全にバランスを崩してはたついている好男の右手を、コンクリートの刃が切り落とした。ゲームでも見たこと無い大量の鮮血が、切断された好男の手首から噴出す。

「好男っ！」

叫ぶあたしの目の前で、キラキラした何かが透明な地面に落ちた。右手首に着けていた腕時計だ。真っ二つになった文字盤に、噴出した血が斑点を創る。あれ、手首はどこに……？

辺りに眼を走らせるあたしの視界に、好男が空高く飛び上がる姿が映った。

「な、何故棲家を斬ったのに死なない？」

「バカ！ あれはダミーよ！ 腕時計つてのは、普通利き手と反対

の手に着けるもんなのよ！」

うろたえる浅黒い肌の男に、ドレスの女が思い切り罵倒を浴びせている。二人の攻撃が届かない場所に着地して、好男が切れた手首を治している。

「好男、傷は大丈夫か」

「ああもう治った。でも死ぬかと思っただぜ」

緊張のせいか疲労のせいか、好男の呼吸は浅く短くなっている。黒く変わってしまった好男の肌を、油のような汗が伝い落ちた。

「あうーどうしよお……。ヨッシとアズアちゃんが」

目に見えて消耗している好男達を見て、スイフィが情けない声を出した。吊り広告の端を男に踏まれているから、動くに動けない状態だ。おろおろと眼を動かすスイフィに、あたしは小さく指を鳴らした。

こつちを見たスイフィに、唇だけ大袈裟に動かすあたし。

「考えがあるんだ。刈子から合図があるまで、こいつの気を逸らしてくれ」

ちゃんと伝わったか、一抹の不安が胸を過ぎったけれど、スイフィはすぐうなづいた。

あたしより頭二つ分背の高い男に、スイフィが声を掛ける。

「ねえねえキミ何て名前なの？」

「カンツアだ。そう言うおまえは……スイフィだな」

急に名前を訊かれて、怪訝そうな顔をしながら男が応えた。カラフルなスイフィの姿を見て尋ね返す男に、スイフィが急に涙ぐんだ声で哀願し始める。

「ねえカンツア、一つだけ聴いて欲しいお願いがあるのねい。おいらのことは煮るなり焼くなり刻むなり、何しても構わないねい。でも、でも 魅首やヨツシイのこと傷付けないでほしいのねい。皆はおいらの大事な仲間で、そして友だちなねい」

吊り広告から上半身だけ出てるスイフィが、胸の前で手を組んで目を潤ませている。

「異世界いしよに来てから、おいら、気の置けない仲間の大切さを知ったんだねい。一緒に笑い合える友だちの素晴らしさを知ったねい。だからお願い、おいらから仲間を、友だちを奪わないで！」

聴いてるだけで赤面しそうな恥ずかしいセリフを、スイフィが感情籠めて言っている。潤んだ目で上目遣いに、スイフィが男を見つめている。見た目が大人に戻ってるから、泣き落としとか効かないと思うんだけど。

そんなことを考えて背後の男を見るあたし。

「うっ……」

予想外に泣き落としが効いていた。刃物を持つ手が少し緩み、空中に視線を泳がせて、男はたじろいでいる。それを見たスイフィが、ますます悲しそうに同情を引く言葉を並べ立てた。

「お、落ち着け。騎士団に入団したとき、最初に習ったじゃないか。これは任務。私情を挟むことは厳禁。」

スイフィの声に耳を塞ぎながら、男が自分自身に言い聞かせている。遠くで刈子が大きく手を振って、合図している。よし、今だ。

男の注意がスイフィに向いていることを確認して、あたしは自分の左手を思い切り噛んだ。

「何をする気だ？」

口の中に血の味が広がり、痛みので目で涙が浮かぶ。意図に気付いた男が焦っているけれど、もう涙は止まらない。はしゃぐスイフィに、あたしも笑って返した。身体の中を熱い力が通り、暖色の光が指先から溢れてくる。その光が線となり、空中に像を作り出す。

あたしの一番大切な人達の姿を。

目の前に作り出された家族の姿を見て、あたしは不覚にも本気で泣きそうになった。全く、自分が行動不能になったら、元も子も無いじゃないか。でも。

暗い空間にぽっかりと開いた穴から見える、図書館の屋根に眼が向く。故郷を捨ててこっちに来てから、碌な目に合わなかった。そりゃ好男達と楽しく過ごしたときもあったけど……。

あたしの心は、いつの間にか、思い出の中の家族の姿でいっぱいになっていた。兄弟同士で憎まれ口叩き合ったり、親と髪掴みあうような喧嘩したり。そんなことさえも、今はものすごく懐かしく感じる。

家に、帰りたいな……。

あれだけ啖呵切って家出したのに、ホームシックに罹^{かか}るなんて。あたしって、こんなに家族に依存してたのか。離れるまで、こんな気持ち、気付かなかった。

感傷に浸るあたしの前で、暖かい色の線で出来た父と母が微笑んでいる。祖父ちゃんも祖母ちゃんも、五歳年上の全然田舎に帰ってこない兄貴も、最近生意気になってきた妹も、皆優しく笑っていた。……こんな笑顔、家族の集合写真でも絶対しないよな。

苦笑するあたしの前で、色線が新たな像を創りだす。好男に刈子、それに四季。スイフィにアズアにテンキイまで。……って、これどういうことだ？ 今見えてるのは、あたしが一番大切に思うものなんだろう？ ってことは、こいつらも大切な人って思ってるのか、あたしは。

像を作っていた線がキラキラと輝き、段々と消えていった。元に戻った視界の中でぼーっとしてるあたしの耳に、ドレスの女の金^{かな}きり声が聞こえる。

「ふざけるんじゃないわよ！ 二度もこんな手に引つ掛かるとも思ってるの？ わたしは、わたしはもう、あんな奴のことなんて引き摺ってないんだから！」

真赤な爪で髪を掻き毟り、女が顔を歪めて叫んでいる。前々から気になってたけど、あいつは何を見てるんだらうか。

「これが報告にあつた能力か……。確かに動揺はするが、戦闘に支障をきたすほどでは無いな」

女のすぐ傍に立つ浅黒い肌の男が、目の端から伝い落ちた涙を指

で拭った。涙は出てるけど、その表情はさつきと全然変わってない。よっぽど鈍感なのか、はたまた理性で感情を押さえつけてるのか。

男の後ろで剣を構えるコンクリートの塊から、ヘッドホンの男の苦しそうな泣き声がしている。冷たい目で男がそれを一瞥して、双剣を握りなおした。

「この任務の遂行予定時間はとうに過ぎている。さっさと蹴りをつけるぞ」

「ざけんじゃないわよ！ アンタなんか手柄を取られて堪るもんですか」

ドレスの女が炎の弾を飛ばし、浅黒い肌の男がコンクリートの刃を操る。二人の攻撃が、膝について息を整えている好男に向かい

その遥か後方へ落ちた。

「誰も居ないとこを攻撃してるねい……？」

何も無い空間を執拗に攻撃する二人に、スイフィが怪訝そうに眉を上げた。あたしを捕まえている男も、急に手を離して見当違いな方向へ走り出した。

「待てっ！ こら、戻ってくるんだ！ くそっ、また霞恋に怒鳴られる……」

「あれれえ、カンツアも変なとこに向かって走ってるよお。魅首、何したの？」

ぼかんとしているスイフィの耳元に口を寄せて、あたしは種明かしをした。真相を聴いたスイフィの眼が、刈子に向けられる。誰

の攻撃も来ない離れた場所で、刈子が祈るような仕草をしていた。

「なるほどおー、魅首のアレで全員の視界を奪って、そこから更にかかるっちの能力で敵にだけ未来の像を見せてるんだねい」

聞いたことをぺらぺら喋るスイフィに、あたしは苦い顔しながらうなづいた。いわゆる二段落ちって奴だ。本当はさつき、あのコンクリートを操る奴に使用おうと思ってた作戦だったんだけど……。まあ上手くいってるみたいだし、この際細かいことは気にしなくてもいいか。

あとはどうやって、暴れてる敵を捕まえるか、だな。腫れてきた頬を手で冷やすあたし。その鼻が、ある匂いを敏感に捉えた。この食欲をくすぐる素敵な匂いは。

「皆、今見てるものは幻覚っす！ 気をつけるっす！」

あたしの背中を冷や汗が伝うと同時に、凜とした声が空間に響き渡った。薄紅色の霞もやの中、蟹の少年の影が幽かに見えた。

第四三章 未来への行進 前編

蟹の匂いが満ちる空間の中、血染めのバンダナを頭に巻いた少年の叫び声がこだました。

「これは幻術つす！ 標的はもっと手前にいるつす！」

蟹の少年が再度叫び、浅黒い肌の男と赤いドレスの女が攻撃の手を止めた。コンクリートの刃を従えながら、浅黒い肌の男は空間に警戒の視線を送っている。

「……幻術？ そうか 宮廷占い師の能力のことか。してやられたな」

コンクリートの双剣を握る男の手に力が入り、ちっ、と舌打ちする音が聞えた。すぐに刃の陣形を変えて防御の体勢をとる男を見て、あたしも心の中で悔しがる。

しまった、あっちには蟹の少年が居たんだった。視覚を封じる攻撃を仕掛けても、蟹の殻粉でつくられた巨大なセンサーの前では、全て少年に丸分かりだ。

「あらら、見破られちゃったねー！。どうする？ 魅首う」

足元から浮上してきたスイフィが、眉を八の字にしてこっちを見ている。どうするつたつて、あの少年が他の奴らに合図できないようにするつきゃないじゃないか。

好男の居場所を口で教えている少年に、険しい眼を向けるあたし。ぎゅっと拳を握るあたしを見て、スイフィが唇を尖らせた。

「スオン先生と約束したこと忘れちゃったの？」

「……約束？ ああ、そういうえばそんなことあったな。でもここはスイフィ達が居た故郷じゃないだろ？ あっちが完全に約束果たしてないなら、こっちだって生真面目に約束守る必要ないだろ」

それに、今蟹の少年を叩かなければ、こっちがやられてしまう。スイフィと自分に言い訳をしながら、あたしはその場で軽く屈伸した。少年までの距離は、だいたい百メートルくらいか。間にいる十四季は何故か少年を攻撃せず、その場に佇んでいるだけだ。あいつ、なんで蟹少年を攻撃しないんだよ。蟹少年の注意が仲間のほうに割れてる今が、絶好のチャンスだっていうのに。

悠然と立ち尽くすだけの十四季に不満を覚えながらも、あたしは走り出した。透明な地面をローファアの底で蹴る。体育の短距離走でも本気出したこと無いあたしが、これ以上ないくらい全足の筋肉使って駆けていく。足音に気付いたのかセンサーにひっかかったのか、蟹の少年がはっとしてこちらを向いたけど、もう遅い。

腰を落として、あたしは固い拳を少年の鳩尾へと繰り出した。ねじり込むような軌道の拳の周りに、紅の粉が纏わりついて勢いを削ぐ。半分ほどに威力が落ちた拳は、それでも少年に当たって軽い身体を吹っ飛ばした。かわいそうだけど、こっちも命が懸かっているんだ。透明な地面に倒れる少年を組み伏せようと、あたしは一步踏み出した。

「うっ
」

げほげほと咳き込む少年の周りに、蟹の殻粉が集まっていく。大

量の紅の粉が、よろめく少年の身体を起こした。……まさか、こいつも好男やヘッドホンの男みたいに、蟹の殻を纏って闘うつもりなのか？

警戒して足を止めるあたしの背後で、十四季が大きく息を吸う音がした。思わず振り返るあたしの目に、地面に左手をついて肩で息をする十四季の姿が映る。身体中が蟹の殻粉だらけだ。動かなかつたんじゃなくて、動けなかったのか。口の中に溜まった蟹粉を吐き出す十四季を見て、あたしの背中を冷や汗が伝った。

「あのとき決めたつす　もう迷わないって、もう挫けないって」

細かな蟹粉が音を立てて、あたしの背後で蟹の少年がゆっくりと宙に浮かんでいく。身体中の毛が逆立ち、振り乱れたあたしの茶色い髪まで重力に逆らい始めた。

何が起こってるのか、振り向かなくても分かる。

少年の鼻をすすり上げる音に、肩が強張った。逆に状況を悪化させてしまったみたいだ。今更気付いたけど、泣いて強くなるってのは結構厄介なことなんだな。

顔に纏わり付く粉を払い落とそうと、十四季が頭を揺らした。なんか、一瞬見えた銀髪の下顔がすごいことになってる気がしたけど。。

包帯を巻いた右手で顔を抑える十四季。なんだかすごく苦しそうだ。蟹の少年と闘って怪我したんだろうか？　十四季の身を案じて近寄ろうとするあたしの耳に、より一層大きくなった砂嵐の音が聞こえた。少年の能力のせいで、あたしの髪はまるで水中に漂うようにうねっている。その動きに合わせて、耳障りな砂嵐の音が空間を蹂躪していく。

「……なんだよ、結局こつちで闘っても、亀裂は広がるんじゃない

か

背後のもやもやした穴が広がり、図書館のオレンジ色の屋根がこ
つちに近付いてきている。いや、それだけじゃない。どこから差し
てるのかわからない冷たい光も、次第に明るさを増してきた。あ
まり考えないようにしてたけど、この光って。

冷たい白光の正体に薄々感付いて、あたしの眉間に皺がよった。
もし、予想が当たっていたら。この光の正体が、あいつの出す光だ
としたら……。

眩しさを増す光を見つめ、冷たい汗が背中を伝う。眩しさに細め
た視界の端に、紅の靄もやがちらりと映った。

「しまつ
」

思わず逃げようとするあたしの足が止まる。このまま避けたら、
十四季に直撃してしまう。どうしようかと悩む一瞬の間に、蟹の殻
粉の奔流があたしと十四季を押し流した。細かな粒があたしの肌を
削り、小さなミミズ腫れを沢山つくっていく。全身を猫の爪で引っ
かかれてるみたいだ。

蟹の殻粉でできた紅の霞は、渦状になってあたしを包んでいる。
あの少年、このままあたし達を颯り殺しにする気なのか。

渦の中でひたすら翻弄されるあたしの耳に、蟹の少年の声が聞こ
える。感極まってちょっとうわずってるけど、冷静に好男の位置を
仲間に伝えてるみたいだ。仲間の歩幅まで計算して、右に何歩前方
に何歩進むかまで指示している。

こいつ、前鬨ったときよりもずっと、精神的に強くなってる。

「 標的を固定したっす。また位置を指示するんで、どちらかは

幻術を使ってる女の子の方へまわってくださいっす」

涙声で少年がそう言い、遠くで好男の呻き声が聞こえた。きしきしと髪の毛絡まる音も聞こえる。　　ってことは、あの夜みたいなことになってるのか。

なんとかこの渦から抜け出して、少年を止めないと。　　おろし金みたいな渦の中でもがくけれど、小さな引つかき傷が増えただけで何の効果も無かった。心ばかり焦るあたしの耳に、赤いドレスの女と浅黒い肌の男の声が聞こえる。

「なんでわたしがアンタに獲物を譲らなきゃいけないのよ、アンタがあっちに行きなさいよ」

「……我が受けた任務は、副隊長とスイフィの魂を回収することだ。任務に関係の無いことで、労力を使う気など無い」

浅黒い肌の男が、澄ました声でそう言った。聞いていた赤いドレスの女が顔をしかめて、罵詈雑言を吐き出している。

「　　ちっ、わかったわよ。今回だけは、アンタに譲ってあげる」

悔しそうな声の後に、ピンヒールの甲高い音が、刈子のいる方へ向かった。やばい、あっちにはカンツアとか言うあいつらの仲間もいるんだった。

刈子一人じゃとても耐え切れない。　　そう思って焦るあたしの腕に、平べったい何かが巻き付いた。

「……？」

擦り傷だらけになったあたしの身体が、蟹の殻粉の渦から引つ張り出される。恐る恐る目を開いた先には、同じように擦り傷だらけになったスイフィがいた。その後ろには、右足で再び律動を刻んでいる十四季の姿が。

「間に合ってよかったあー。もう一人で突っ走ったりしないでしょうねい」

「じ、ごめん……」

安堵の溜息をつくスイフィの頬を、鋭い蟹鋏が掠める。白い頬に赤い血が滲み、あたしの頬にも痛みが走った。続けて聞こえた空を切る音に、スイフィの頭を掴んで一緒に伏せる。

スイフィが文句を言おうと口を開いたと同時に、あたし達の真上を大量の蟹鋏が過ぎっていった。スイフィの足首まである長い髪が鋏で切られて、ピンクと緑のカラフルな線が空中に散っていく。

「あわわ あとちょっと遅れてたら確実に天国行きだったねい！
ありがと魅首うー」

過ぎ去る蟹鋏の一群を見て冷や汗かきながら、スイフィが礼を言っている。魅首も髪の毛切れちゃったね、ごめんね、とか言ってる場合じゃないだろっ。

追撃を警戒して蟹の少年の様子をうかがうあたしの周りを、細かい蟹の殻粉が漂っている。こんなんじゃ、好男と刈子を助けに行くことはおろか、身動きすら取れない……。

思っていたことが顔に出たのか、スイフィが心配そうに声をひそめて話かけてくる。

「だいじよぶ、魅首？　なんか顔こわいよお？　……もしかして、また無茶なことしようと考えてる？」

「無茶って……おまえなあ、この状況ちゃんとわかってるのかよ。あたしがなんとかしなきゃ」

間延びした声にいらつくあたしを、カラフルなりボンが遮る。むっとしてスイフィを見ると、なんだかつらそうな顔をしていた。てっきりあたしのおちよくってるんだと思ったから、これは意外だ。

困惑するあたしの目を、スイフィが真直ぐに見つめてくる。

「魅首、落ち着いて。焦ってばっかりじゃ出来ることも出来なくなっちゃうねい。一人で抱え込めないときは、おいらがいるんだから」

だから二人で作戦練ろう、とかなんとかスイフィが言っている。そんなに真面目な顔されると、なんだか背中がむず痒いじゃないか。それになんだよ、急にかっこつけた台詞言ったりして……。

「とりあえず、一回深呼吸しようねい。はい息吸ってー」

「ったく、わかったよ」

もやもやした気持ちを抱えながら、あたしは大きく深呼吸した。うん、ちょっと頭がすっきりした。確かにさっきまで、頭に血が上りすぎてたかもしれないな。

深呼吸とまではいかないけどゆっくりと呼吸を繰り返すあたしに、スイフィが前方の様子を指差す。

「ほら魅首、あれ見てみるねい」

言われたままに好男が囚われている方向を見ると、コンクリートの剣が今にも黒い鎧を貫きそうに振り上げられていた。思わず声を上げかけるあたしの口をスイフィが塞ぎ、黒髪の鎧の足元を目で示す。目を凝らすと、全身黒に染まった好男がこっさりこっちに向かって匍匐前進していた。その左手首からは大量の黒髪が伸びて、コンクリートの剣を構える浅黒い肌の男の前に鎧をつくっている。言うなれば、忍者の使う変わり身の術みたいな感じだ。

目を円くするあたしの視線と好男のそれとがぶつかり、好男がそつと手を振っている。ああそうか、髪だけでも十分強度はあるんだよな。少なくとも人の形を保っていられる位には。

初めて蟹の少年と闘った夜なんか、髪で壁つくってたし。そう思い出すあたしの横で、スイフィが囁いている。

「ヨッシ無事みたいだねい。よかったよかったあー」

「う、うん……」

気の抜けた声に戸惑うあたしに、スイフィが満面の笑みを向けている。何か、一人で空回りして馬鹿みたいじゃん、あたし。ふつと息を吐くと、目の前を漂っていた蟹の殻粉が僅かに動いた。蟹の少年の肩が強張り、次の瞬間、蟹鋏の雨が降り注ぐ。

目前で床にぶち当たり粉々になった蟹鋏を見て、あたしは生唾を飲み込んだ。もし刈子の能力無しで相手に視界がある状態なら、間違いなくあたしは死んでいただろう。それも、蟹の鋏に脳天を突かれるという世にも間抜けな結末で。

激しくなる鼓動を抑えようと息を止めるあたしの横で、スイフィは刈子が居る方向に首を伸ばしている。

「魅首、見て見てっ」

「 ? 」

動かした視線の向こうに見えたのは、真赤なドレスを着た女が紅い靄に導かれて刈子のほうへ進む様子だった。どうしようかとうろたえる刈子を、紅の靄と赤いドレスの女が着実に追い詰めていく。それに、女の仲間のカンツアとかいう奴も一緒に。

今、助けに……！ そう呟くあたしを、スイフィが引き止める。

「ここからじゃとても間に合わないよう」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ？ 黙って見てるなんて あたしは御免だからな！」

カツとなつて叫ぶあたしの背後で蟹の鉗が空を切る音がした。身を竦めるあたしの脇をカラフルなりボンが通り過ぎ、蟹鉗を捕まえる。ぽかんと口を開けるあたしを引き寄せるスイフィ。鼻と鼻がぶつかるぐらいの距離で、スイフィがあたしの目を覗き込んでいる。

「図書館で言ったこと、覚えてる？」

真直ぐな深緑の瞳が、あたしに問い掛けている。光の加減のせい
か、スイフィの目は暗く翳^{かげ}つて、眉間にうつすら皺^{しわ}が寄つてるように見える。

じつと黙って返事を待つスイフィが、すぐ傍ににいるのに、まるでずっと遠くに居るみたいに感じる。見慣れない表情に複雑な心境になるあたしの手を、スイフィの大きくて暖^{あたた}かい手が包んだ。

図書館でスイフィが言ったこと ”世界”と、”世界”を変えられる能力のこと。そしてあたしが無理矢理訊き出した、手っ取り早く

強くなる方法。

まさか……。思わず呟いて伏せていた眼を上げると、スイフィが神妙な顔で頷いた。それを見たあたしの足が、無意識に一歩下がる。だつて。

二人が一心同体になるなら、強くなれるとスイフィは言った。刈子を助けるために、このイカれた状況をなんとかするため、それは必要なことだ。うん、わかつてる。わかつてるよ。

……。でも、と、あたしの胸の中で何かもやもやした塊が蠢く。恐くて踏み出せないんだ。首を傾げるスイフィの前で、あたしは俯き拳を握った。

何が起こるか分からなくて、怖い。

「魅首？ どうしたのねい？」

「……ちゃんと覚えてるっつの。図書館でおまえが言ったこと、だろ」

擦れた声を絞り出し、強がった口調でそう呟く。握った拳が震えている。そう、恐いんだ。未知なるものへと踏み出すことが。今までもよりも遥かに予想のつかない領域へと放り出されることが。

冷えた暗い空間の中で、そのままへたりこんでしまいそうだった。頭が冷えて目の前が見えるようになったら、見えたのは奈落の淵だったみたいだ。敵に囲まれて、仲間も自分も傷だらけで、故郷に帰れる保障も無い。こんな状況じゃ、夢も希望も捨てて何もかも諦めるよな。ちよつと前までの、あたしなら。

固く握った拳を解き、伏せていた顔を上げるあたし。背後では空間に出来た亀裂が耳障りな音を立てて、刻一刻と広がっている。き

よとんとするスイフィの肩の向こうでは、赤いドレスの女が真紅の炎を燃やして刈子に詰め寄っている。

前に進むために強くなるんだ。大切な人達を、守るために。

向こうで刈子の悲鳴が上がった。……もう迷ってる暇は無い……！

キツと目を開き、あたしはスイフィに真直ぐに言葉をぶつけた。強くなりたい、皆を守れるくらい強く　！

「スイフィ、あたしに力を貸してくれっ！　どんなに辛くて苦しくても構わないから　！」

スイフィの緑色の目が円くなって、その口がぽかんと開いた。　　たく、自分から言っつといてまどろっこしい奴だな。

順を追って詳しく説明するあたしに、スイフィは眉を八の字にして拳動不審になっている。

「えっ……ほ、本気？　ど、どうしよ……アズアちゃん」

泳ぐ視線の先に居た好男を見て、スイフィがアズアを呼んでいる。好男の左手首に着けられた腕時計がきらりと輝き、瞬く間に黒髪の鎧が好男の身を包む。匍匐前進の姿勢から軽やかに飛び上がり、漆黒の鎧があたしの隣に舞い降りた。決めあぐねているスイフィに向けて黒い鎧が頷き、細身の黒剣を構える。

「どうすればいいかは、そなたが決めることだ。もう答えは出ているのだろう？　魅首殿はわたしが援護する、安心して成すべきことをすればいい」

「そーそ。オレとアズアに任せといてっつて」

相手の攻撃パターンも分かってきたし、と好男が普段通りの口調で余裕そうに言っている。笑って軽口叩いてるけど、なんだか疲れが声に滲んでいた。

弾む息を整えて明るく振舞う好男を見て、スイフィは泳いでいた視線をあたしに向けた。おずおずと伸ばす手が、あたしの肩に触れる。瞬間、今までに感じたことのない力の奔流がどこかの世界からこっちに押し寄せ、あたしの視界は真白にフェードアウトした。

第四章 未来への行進 後編

黒い空間を白い光が貫く世界の中、ところどころ血に染まった茶髪をなびかせて魅首はその場にくずおれた。

背を向けて剣を構えていた好男が物音に振り返り、慌てて魅首を抱え起こす。

「み、魅首ちゃんっ？ 大丈夫か？」

肩を掴んで揺さぶるが、細い首がわずかに揺れただけで返事は無かった。黒髪の鎧に包まれた手が魅首の脈を計り、腕時計の中からアズアが声を出す。

「脈はある。少し速いのが気になるが。浅いけれど呼吸もしている、魅首殿は無事だ」

冷徹ながらもしつかりと容態を見るアズアの声に、ほっと安堵の溜息を吐く好男。しかしすぐに眉間に皺を寄せると、腕の中で死んだように眠る魅首の顔を見つめた。まだ少し子どもっぽさの残る顔が、時折苦しそうに痙攣けいれんしている。

びくびくと瞼の裏で眼球を動かす魅首。その髪色は次第に茶から緑と桃の斑へと変化していく。目の前で変わりゆく魅首の姿に動揺を隠せず、好男はうろたえている。その横を、ひらりと黄ばんだ電車の吊り広告が舞った。だらりと下げられた魅首の近くに落ちたそれは、なんの変哲も無いただの紙切れになっていた。足元に落ちた広告と魅首の顔を交互に眺め、情けない声で好男がアズアに尋ねる。

「なあアズア、いったい何が起こったんだ？ 魅首ちゃんはこんな風になっちゃっうし、スィフィは広告の中から消えちゃったし…」

……」

黒い髪に覆われた左手首を見つめる好男に、アズアは少し躊躇ためらつた後、口を開いた。

「レストランの最上階で、光剣を操る少女と闘ったときのことを覚えてるか？」

「え？ うん、まあ……。初めてのことだったし、結構鮮明に覚えているよ。なんていうか 群を抜いて凄かったよな。オレがまだ未熟つてもあつたけど、アズアが闘つても全然太刀打ちできなかったし……」

唐突に訊かれた好男が眉を上げてそう答え、アズアが再び躊躇した。鎧を形作る黒髪がざわざわと動き、隙間一つ無かった鎧に粗密をつくっている。

「好男……最初に契約したときに、わたしの力を生かすも殺すも、そなたの心の持ちよう次第だと話したな。故郷むこうを出て異世界いせかいで力を使うためには、『契約者』を媒介として使う必要があると」

ほとんど独り言のように呟くアズアに、好男が鎧の上から頭を掻いて首を傾げている。

「えっと ああ、そういえばそうだったっけ。能力に対する理解がどうのこうのとか説明してくれてたよな」

「……そう。異世界いせかいで使える能力は、『契約者』同士の心が深く作用している。その端的な例が『涙』だ。涙を流すほどの激しい感情が、封印の隙間を伝って流れてくる故郷むこうからの力を一時的に増幅さ

せる。ただし、それを制御することができなければ、魅首殿やスオンと契約したあの少年のように、能力が暴走してしまう」

ほとんど途切れもせず言葉が発するアズアに、好男はまた首を傾げて兜の下の眉間に皺をよせた。ってことはつまり、と口の中で声に出さずぶつぶつ呟いている。

まだ内容を整理しきれしていない好男の首筋に、冷たいコンクリートの刃が当てられた。

「つまり、異世界（いせかい）で能力を使うには強力な感情と、能力に対する理解が必要だということだ」

「！」

押し殺した低い声に、好男の額を汗が伝う。

コンクリートの剣を握る浅黒い手の向こうから、冷たく光る目が好男を睨んでいた。

皮膚を削る刃に息を呑む好男の背後から、赤いドレスを着た女の甲高い声が聞こえてくる。

「どう？ 視界が戻ったでしょう？ 感謝しなさいよね」

そう偉そうに言う女の足元には、腕を押さえて蹲（ひざまずく）る刈子の姿があった。水色の袖口を赤く染めて苦しむ刈子のお下げを引っ張り、女が嗤（わら）う。

「まったく、手間掛けさせてくれたわねえ。さてと……どうやって甚（たぶ）振（たぶ）ってあげようかしら？ そのかわいいお顔が苦痛に歪む様を眺めるの、楽しみでしょうがないわ」

かたかたと震える刈子に、女が鼻に皺を寄せて髪を引っ張った。無理矢理顔を上げさせられて、刈子が痛そうに顔を歪めている。その目には僅かに涙が滲み、噛み締めた唇は蒼白になっていた。もうそのぐらいでいいだろう、と刈子の表情を見たカンツアが眉を曇らせ、霞恋に頬を殴られた。

「っ」

「一々口を挟まないで。アンタ、ちゃんと分かってるの？ わたしがいなけりや此処こゝで何にもできないくせに。昇進こゝしたいんでしょ？ 生き残りたいんでしょ？ だったら綺麗事なんか言っていないで、素直にわたしに従えばいいのよ！」

激昂した赤いドレスの女は醜く眉間に皺を寄せてそう叫び、ぐいと刈子のお下げを力任せに引っ張った。付け根から引っ張られて、刈子が地面に倒れこむ。小さく悲鳴を上げる刈子の髪の一筋が、鈍く金色に光を反射した。

「刈子ちゃんっ！」

好男が刈子の名を呼び、立ち上がるうとするその腕をコンクリートの剣が切り裂いた。間髪入れずに第二撃が繰り出され、それを変形した黒髪が受け止める。

「御前の相手は我だ。今度こそ決着をつけさせてもらうぞ、副団長」

浅黒い肌の男が冷たい目を光らせ、右手に握った剣を構えなおした。剣の向こうには、人型をしたコンクリートの塊が、ゆらゆらと揺れながら好男達のほうへ近付いている。迫ってくる敵に、好男は

魅首を抱きしめたまま後退りした。幾本ものコンクリートの剣が、じりじりと好男を追い詰めていく。

「くっ……。大ピンチだな、こりゃ。そうだ、十四季は」

はっと思い出した好男が、剣を警戒しながら辺りを見回す。五、六メートルほど離れた、刈子達の近くに、十四季が地面に手をついて頂垂れていた。遠くから見てわかる位に、肩を上下させて息をしている。咳き込んで押さえた口元から、奇妙な色の液体が滴り落ちた。

服の上から見てもわかるほどに変形していく十四季の姿に、好男が目を凝らして戸惑っている。

「お、おい、アズア。十四季の様子が変だぞ？　なんていうか、あれじゃ今にも」

変貌していく十四季を見つめ、好男が左腕に着けた腕時計に話かける。すぐに返事がくると期待する好男の目に映ったのは、悲しそうに眼を伏せるアズアの顔だった。黒い眉間に皺を寄せるアズアに、好男が不安を露わにして問う。

「アズア……？」

「運命を決する時が、近付いているんだ」

硝子を針金で掻いたような声を絞り出し、アズアが呟く。

「うんめ……い？　なんだよ、それ。十四季は、それに魅首ちゃんと刈子ちゃんも、……あとオレも、どうなっちゃうんだよ」

顔を顰めて問い質す好男に、アズアは固く眼を閉じて黙っている。沈黙するアズアに戸惑う好男が、その腕に抱いた魅首の顔に眼を移した。十四季ほどではないが、魅首も髪や肌の色が変化してきている。そして魅首を支える好男の腕も、周囲の闇と同化するほど黒く染まっていた。

もう一度アズアの名を呼ぼうと、好男が口を開いた。声を出そうとしたその一瞬前に、好男の耳に男の鼻で笑う音が聞こえた。

「とうとう檻ぼろが出てきたようだな。まやかしの言葉で我らを惑わすのも、これが最後だ。」世界”が貴女の望むままになるなんて大間違いだということ、我が証明してみせよう」

無数の切先を好男の左手首に定め、浅黒い肌の男は冷たい笑みを浮かべた。好男を覆っていた黒髪がざわめき、漆黒の鎧が解けていく。

「アズア」

「……好男。魅首殿を連れて、武宮殿のところへ。レエンはわたし一人で相手する」

ほぼ同時に互いの名を呼び、躊躇した好男にアズアが指示を出した。え、でも……、と口籠る好男の左手首から腕時計が外れ、文字盤から溢れ出る黒髪が人の形をつくっていく。文字盤目掛けて斬りかかるコンクリートの剣を、主のいない黒髪の鎧が往いなす。

「安心しろ、文字盤には破片さえも近付けさせぬ。さあ行け、はやく！」

雨のように降り注ぐコンクリートの剣の一つひとつから好男を護りつつ、アズアが鋭く叫んだ。二人がかりの猛攻に少しづつ後退りするアズアと、黒髪がつくつた安全な道を交互に眺める好男。数秒の間アズアを見詰め、抱いていた魅首を担ぐ。その様子を一瞥した黒髪の鎧が、短く頷いた。

それきり振り返りもせず、剣を受けるアズアの背中に、遣る瀬無い表情の好男が口を開く。

「アズア、オレ……。オレは、おまえのこと信じてる」

せわしなく動いていた黒髪の剣が一瞬、動きを止めた。膠着するアズアと浅黒い肌の男に背を向けて、好男が走っていく。遠くなくていく好男を眺めながら、男がコンクリートの双剣を握りなおした。

「ふん、どこまでも愚かなものだ。『仲間』などというしがらみに囚われて、感情論でしか物事を量ることができないとは」

「それは、どうかな」

目の前の黒い鎧から発せられた声に、男が片目を顰めて口元を歪める。

中に好男の居ない、ほっそりとしたシルエットの黒い鎧が、剣を構える男を正面から見据えた。その周囲には、黒髪の剣が叩き落したコンクリート片が疎らに散らばっている。

何か含みのありそうなアズアの声に、浅黒い肌の男は心底面白くなさそうな顔をしてみせた。剣を握る手に力が入り、柄と手袋の擦れる音が緊迫した空間に響く。

「色々と足止めを喰らうこともあったが　この任務を受けてよか

った。忌々しい妄言を吐く貴女のその口を、この手で封じることができるのだから」

ぞっとするほど冷たい眼をアズアに向け、男は一步踏み出した。

「あらら？ アンタのお仲間、逃げ出しちゃったわよ？」

魅首を担いで敵に背を向け走る好男を見て、赤いドレスの女が意地の悪い声で刈子に言った。真紅のピンヒールにスカートを踏まれている刈子は、遠くで闘うアズアを心配そうに見詰めている。その眉は八の字に寄って、華奢な手は祈りの形に組まれていた。

眼を閉じて聞き慣れない祈りの詩を唱える刈子を見下ろし、赤いドレスの女が鼻に皺を寄せる。

「……何なの、もしかしてアンタ、神様とか信じちゃってる？ 馬鹿な子ね。アンタなんか、誰も助けしてくれるわけがないのに」

真赤な口紅を引いた唇を開いて毒を吐く女に、刈子は全く動じない。静かに祈りを続ける年下の少女の存在に、赤いドレスの女は尖った爪を己の拳おのこぶに食い込ませた。親切に本当のことを教えてあげてるのに、何よ、と女が左手を空中に伸ばす。手の平の辺りから、紅い炎が生まれていく。

はっと顔を上げる刈子を見下しながら、赤いドレスの女は右手を頬に当ててわざとらしく高笑いした。

「いいわ、分からないっていうなら、力づくで分からせてあげる。
アンタ達を助けてくれる神様なんて、存在しないってことをね！」

邪悪な笑みを浮かべ、女が燃え滾る炎を好男目掛けて振りかぶった。手の平から溢れる炎が投げつけられようとしたその瞬間、女の足に刈子が体をぶつけた。よろめく女の手から投げられた炎の塊は、あらぬ方向へ落ちていった。空間の割れ目近くに落ちた炎が燻って、図書館の橙色の屋根に焦げた色をつける。驚きの声を上げる群集の声、空間のねじれを越え、奇妙な呻りとなって響いた。

「　　っ何するのよ、このガキ！」

激昂した女が鋭い眼光を刈子に飛ばし、わき腹をヒールで蹴った。地面に手をつく刈子の襟首を掴む女。視線だけで人を殺せそうなほど刈子を睨む女に、傍にいた闇色の肌の男が声をかける。

「霞恋、子ども相手にそこまで怒らなくても　　」

「お黙り！」

叩きつけるように女が言い、文字通り烈火が男を襲う。両腕で顔を覆って炎を避けようとする男に、赤いドレスの女は罵声を浴びせている。罵られる男の、闇のような身体の中に灯る小さな火は、今にも消えてしまいそうだった。

味方に暴言を吐き続ける女に襟首を掴まれたまま、刈子が咳き込んでか細い声を絞り出す。

「わ、わたくしは……皆さんを、世界を助けたいんです……」

刈子の言葉に、女の瞳孔が開いた。わなわなと手を震わせ、女が

刈子に視線を戻す。くつきりとアイラインを引いた目の中に憎悪を燃やし、への字に曲がった真紅の唇からうわずった声が発せられた。

「バカじゃないの？ アンタ何様のつもり？ 自分が神の使いだなんて本気で信じてるわけ？ ……ふふっ。そういえばアンタ、どっかのカルト教団に属してるんだっけ。巫女だとかなんか言われて、随分ちやほやされてたんですってねえ」

女が一旦言葉を切り、震えている刈子を睨みつけた。燃え盛る炎のような赤みがかかった茶色の瞳に見詰められ、刈子が恐る恐る頷いている。それを見たと同時に、女の赤い唇の両端がゆっくりと持ち上がった。

「そう、じゃあ……かわいい巫女さんに教えてあげるわ。アンタは、只の女の子。特別な才能や力なんて、これっぽっちも持ってない。どこにでも居る普通の女の子よ。異世界の奴らと契約しなければ、何の力も使えない。誰でもよかったのよ。だってそうじゃない？ アンタより優秀な子は……この世にいくらでもいるんだから。そんなアンタが世界を救おうだなんて」

「……わかってます」

襟首を掴む女の骨と皮ばかりの手に、そつと刈子の小さな手が触れた。憎しみを湛えた女の瞳を、涙で潤んだ刈子の目が見詰め返している。目にいっぱい涙を湛えた刈子に、赤いドレスの女が一瞬だけ怯んだ。その一瞬を突いて、刈子が口を開く。

「わたくしが 自分が、取るに足らない女の子だったこと、なんの神通力も無い一般人だったこと……そんなこと、とっくに分かっていた。知っていました。でも、わたくしのことを信じてくれ

る人が居るんです。期待してくれる人が、待つてる人が居るんです。そう思ってくれる人がいるから……わたくしは此処こゝにいるんです。恐くても、辛くても、わたくしは逃げません。期待された務めを、きちんと果たしてみせます！」

青い目から溢れた涙が目尻を伝い、顎の輪郭をなぞって滴り落ちた。必死に訴え掛ける刈子に、赤いドレスの女が肩を小刻みに震わせている。

「……うざいのよ、そういうの……！」

紅蓮の炎が女の拳を包み、そして刈子の身体を包み込んだ。

「刈子ちゃん　！」

やっと近くまで来た好男が擦れ声で叫んだけれど、刈子を包んだ炎はあっという間に燃え尽きて消えてしまった。何も無くなった空間に、好男の声が虚しく吸い込まれる。

まだ燻るスカートの切れ端が宙を舞う様子を眺め、赤いドレスの女がこれ以上無く楽しそうに嗤い声を上げた。

「ほらね！　自分を救うことすら出来ないじゃない！」

頬に手を当てて高笑いする女の背後で、好男が地面に膝をついた。

「……う、そ……だろ……」

呆然として脱力した好男の肩から、気絶した魅首が地面にどさりと落ちた。びくん、と痙攣した魅首の腕が、すぐ隣に転がる十四季の服に触れる。その動きを追う好男の視線が、足元で倒れている十

四季に向けられる。もはや元の顔が分からないほどに変化した四季が、赤い目を薄らと開いて好男を見ていた。

微かに息をしている四季に気付き、好男が慌ててその肩を揺する。

「四季、聞こえるか？ 起きれるか？」

好男の問いかけに、四季が唇を開いた。その端から、濁った液体がぼたりと垂れる。生臭い匂いに思わず鼻を押さえる好男。

「と、四季……おまえ」

大丈夫　なわけないよな、と気後れしながらも呟く好男に、四季が弱々しく手を伸ばした。黒い血管に覆われ、皮がはがれて肉が露出する腕を、好男が凝視する。ぎらぎらと光る赤い目を瞬かせ、四季が伸べた手を開いた。幽かに青い光を発する手の平を見詰める好男の身体に、一瞬悪寒が走る。

「　っ？」

「力を……貸してくれるのか……」

背筋を襲った寒気に肩を竦める好男の耳に、四季の苦しそうな声が聞こえた。今度は顔に冷気を感じたが、そんなことは気に留めず、好男は四季の手首を掴んだ。蠟のような腕が、好男の触れている部分から血色を取り戻していく。しかしそれと同時に、漆黒に染まった好男の輪郭が、周囲の闇に溶け出た。

赤く光る目がその様子を見詰め、やや元気を取り戻した声で好男に尋ねる。

「……いいのか……虚空に消えることになるぞ」

四季の問いかけに、好男の表情が曇る。振り返ってアズアへ眼を向けると、空間に新たな亀裂が生じているのが見えた。アズアに当たらなかつたコンクリートの破片が空間の向こうに降り注ぎ、断続的な民衆の悲鳴が上がっている。

朱に染まる空間の裂け目を見詰め、好男が膝の上で拳を握った。

「四季　おまえはさ、聞いてるんだよな。この事態をどうにかする方法を、アズア達がやろうとしてる事を」

刻一刻と広がる亀裂を睨むように見詰め、四季に問い掛ける。肯定する四季に、険しい表情で亀裂の広がりを見詰めていた好男が独白した。

「恐いんだ、オレ……。オレの知ってる街が、人が、抗いようの無い力に蝕まれて壊れていくのが。これ以上知り合いが傷つくのを見たくないんだ。でも　オレは今、何をすべきなのか全然分かつちやいない。分かつてるのは、四季、おまえだ。……つまりどういうことが、分かるよな？」

首を傾げる四季に、好男は皮肉な笑みを浮かべた。その視線の先には、黒髪の剣を操るアズアの姿が。浅黒い男の操るコンクリートの刃達は、もうほとんどが空間の亀裂に落ちてしまっていた。アズアの鋭い剣裁きが、コンクリートの剣を弾き飛ばす。弧を描いて亀裂に落ちていく剣を、男が悔しそうに見送った。

無言で体勢を直すアズアに、浅黒い肌の男が齒軋りしている。男の手に残った剣は一本で、背後に立つ人型のコンクリートを残して、武器はそれしか無い。激しく息をしながら剣を逆手に持ち直し、男は一気にアズアを斬りつけた。

乾いた音が短く響き、コンクリートの剣がくるくると回って空間の狭間に吸い込まれる。咄嗟に後退しようとする男の左足を黒髪の束が捕らえる。体勢を崩し、男は地面に手をついた。浅黒い肌の上を、大粒の汗が伝い落ちる。

「……」

透明な地面に爪を立てて殺意の視線を飛ばす男の首に、アズアが無言で剣を当てる。勝敗が決したことは、誰の目にも明らかだった。ただ一人、アズアの前で歯軋りする男を除いては。

降伏の言葉を待つアズアに、男がその声に悔しさを滲ませる。

「我が負けたのは、ここが故郷でなかったからだ。貴女とその一味の言う『仲間』や『相棒』などという感情に基づいた不確実なものに、我が負けるはずが無い……！」

押し殺した感情を静かに燃やし、男は自分に剣を向けるアズアを睨んだ。好男が入っていたときよりも細身になった黒髪の鎧が、男に一步近付く。

「そうだな。土のあるところで、誰と契約することもなしに一対一で闘ったなら、わたしはそなたに勝てなかつただろう。……しかし、異世界のものに触れることで、わたしは変容した。わたしとそなたの違いが、勝敗となって現れたのだ。……そうだろう、レエン」

淡々と諭すようにそう言って、アズアは男から視線を動かした。男の背後で揺れているコンクリートの塊には、薄らと松郎らしき顔の形が浮かんでいる。髪の軋む音と共に兜が俯き、アズアの細い溜息が聞こえた。

「……レエン、彼を解放してやれ。戦いは終わった、もう十分だ」

コンクリートの隙間から赤い涙を流している松郎だったものに、男の鋭い視線が注がれる。じつとコンクリートの塊を憂いげに見詰めるアズアを、男がちらりと一瞥した。なめらかだったコンクリートの表面があわ立ち、鱗（トウ）のように変形していく。

「解放だと？　馬鹿な事を。まだ任務は終わっていない」

一瞬の隙をついて、男が地面を蹴り後方へ飛んだ。めまぐるしく変形するコンクリートの塊の横に降り立った男が、一際鋭利な突起に右手を伸ばす。

「使えない『契約者』だったが、征服し易いという一点では優れていたな。さあ、もう一度　っ？」

傲慢な言葉を吐く男の顔が引き攣り、見開かれた目が、己を右手を見詰めている。刀のような突起から突き出た幾つもの棘が、男の手を串刺しにしていた。何故、と喘ぐ男の腕をコンクリートが蛇のように這い上がり、次々と棘を刺していく。それを男が左手で剥がそうとするけれど、逆に左手まで串刺しにされてしまった。予想外のことだったのか、男は額に油汗を浮かべて必死に逃げようとしている。

「く、くそ、離れる　　放せっ！　　理性の欠片も無い下等生物の分際で　　」

罵声を上げようとした男の口を、そして鼻を、コンクリートが覆い尽くしていく。地に膝をつく男を、塊だったコンクリートがゆっくりと包んでいった。それと反対に、氷が溶けるように移動するコ

ンクリートの中から、赤く染まった何かの姿を現す。

足元に転がるコンクリートの塊を見下ろすそれを見て、アズアは思わず息を呑んだ。

黒髪の剣が解^{ほど}けていく音に、血まみれのそれは顔を上げた。直視できないほど崩れた目から血を流すその頭には、塗装の剥げたヘツドホンが辛うじてぶら下がっていた。

「そなた……まだ意識があつたのか……」

驚きを隠せず呟くアズアに、赤く染まった何かは暗い眼を向けている。血の滴る身体が大きく揺らぎ、それはたたらを踏んだ。踏まれた透明な地面に細かい輝^{ひび}が入り、空間の裂け目が生じていく。

広がり始めた空間の亀裂に、アズアが松郎に向かって手を伸ばした。

「危ない、はやくこちらへ！」

治療すればまた元に戻る、と説得するアズア。その様子を眺め、血塗れの何かは口元を歪めた。砂嵐のような音を立てて崩れていく空間のひび割れを踏み、それはゆっくりと後退していく。穴だらけの右手で位置のずれたヘツドホンを直すと、それはアズアを見詰めたまま亀裂の中へ落ちていった。血塗れのその顔に、自嘲しているような表情を浮かべて。

誰も居なくなつた空間に手を差し伸べたまま、アズアは暫らく固まっていた。空間を越えて聞こえる群集の悲鳴に混じって、自分を呼ぶ好男の声にアズアが気を取り戻す。すぐに好男達のもとへアズアが駆けつけ、黒髪の鎧を解いて腕時計へと戻った。

「……何かあったか？」

「アズア！ よかった、怪我は無いみたいだな」

二人同時に口を開き、好男の表情が暗くなる。腕時計の中から辺りを見回すアズアが、刈子殿は……、と訊きかけて口を噤んだ。膝の上で拳を握り、俯いて顔を歪める好男を見て、アズアも眼を伏せる。

沈黙するアズアに、好男がとってつけたような明るい声で尋ねる。

「そ、そうだ。十四季のこと治療したいんだけど、いいよな？」

空元気にそう言って、好男が腕時計を見詰めた。じつと腕時計を覗き込む好男の輪郭は、ぼやけて空間に滲んでいる。その様子を目に映し、アズアは戸惑ったように顔を伏せる。

「アズア……？」

首を傾げて再び尋ねる好男。その身体を、真紅の炎が照らす。

「あら、都合よく一箇所に固まってくれてるじゃない。しかも皆疲労困憊って感じだし、もしかして、お手柄独り占めかしら？ ふふっ」

真赤に塗った唇の端を上げて、赤いドレスの女が意地悪く笑っている。その両手に燃える炎が、ピンヒールが地面を刻む音とともに、じりじりと好男達に近づく。死んだように横たわっていた十四季の目が鋭く光り、一部だけ元に戻った手がぴくりと動いた。

炎のせいで上昇する気温の中、視界の端に映る紅の靄に気付いて好男が辺りに眼を走らせる。魅首に殴られた腹をさすりながら、少

年が好男達の方へ走ってきている。

最悪の事態が起こることを察した好男が、息を呑みながら腕時計に眼を落とした。

「な、なあ、アズア。治療しても構わないよな？ そりゃ、ちよつとオレとアズアの身体が溶けて消えちゃうけどさ」

迫ってくる二人の敵に眼を走らせる好男。その足元で気絶している魅首の茶色い髪が、少年の能力によってゆらゆらと動いている。頬を伝った冷や汗が左手の甲に滴り落ちて、腕時計の中のアズアが顔を上げた。

「……来る！」

「え、何が」

好男が全てを言う前に、腕時計から出た黒髪が三人を包んでその場から横に飛んだ。そのほんの一瞬後、好男達が居た空間を白い光の刃が貫き、新たな空間の亀裂を生み出した。

砂嵐のように耳障りな音を立てて広がっていく空間の亀裂に、好男が思わず目を見開いて固まっている。

強くなった白光に、相対的に霞んだ炎の揺れる手を眩しそうに翳して、赤いドレスの女が舌打ちした。女が見詰める光源に、バンダナの少年も緊張した面持ちを向けている。

ぽかんと口を開けている好男を黒髪が覆い、漆黒の鎧が黒髪の剣を構えた。

その音が聞こえたのか、光の中の何かが僅かに動く。白い光を発

する瞳を好男達に向けたそれは、レストランの最上階で闘った少女と同じ顔をしていた。ただ、全身が眩く輝いている以外は。

剣を構えて警戒しながらも、魅首と十四季を黒髪の中に匿う漆黒の鎧を見て、光の中の少女が唇を動かした。

「アズアールメイデン……。どこまでもしぶとい奴だ」

薄紅色の唇から発せられた声は低く、少女自身の声でないことは明らかだった。冷酷そうな声に少しの苛立ちを滲ませた少女の中の何か、ゆっくりと眼下に立つ面々を眺める。足元で広がり続ける空間の亀裂に眼を留め、忌々しそうに口元をゆがめた。

「ひどい有様だな 故郷だけでなく、異世界まで崩壊しかねん勢いだ。果たして誰がここまで事態を悪化させたのか……貴様も気になるだろう？」

白く光る少女の口から出た嫌味な言葉に、好男を包む黒髪の鎧がざわめき軋んだ。少しずつ後退りする鎧に向けて、少女の右手の指先から光の筋が伸びていく。光の太刀が黒髪の鎧を焼き、中にいる好男が思わず生唾を飲み込んだ。しかし鎧自体は微動だにせず、静かに剣を構えたままだ。

頬に冷や汗を伝わせ、好男が左手首の腕時計に視線を向ける。

「お、おい、アズア……。とても勝てそうにない雰囲気なんだけど……」

左手の指先からもそれぞれ五本の光剣を創り出す少女を、眩しそうに見詰める好男。全身から冷たい白光を発している少女に、腕時計の中のアズアも眉間に皺を寄せた。

「あの少女の身体、既に限界にまで達している。魅首殿が目覚めるまで時間を稼げれば、あるいは……」

「時間稼ぎ？ 逃げ回ればいいってことだな。……それなら一寸ちよこ気が楽だぜ」

光る涙をとめどなく流す少女を見上げ、好男が無理に笑って握った拳を開いた。少し間を置き、限界ってどうということだ？ と、好男がアズアに尋ねる。

「能力を使ったことによる身体の変容だ。そなたの身体が闇へ還りかけているように、あの少女の身体も光の粒子となって霧散しかけている」

アズアの応えに耳を傾けながら、好男が己の右手を眺める。黒髪の鎧の隙間から、滲んだ輪郭の一部が染み出でて、暗い空間に次々と消えていく。

「……あの子を助ける方法は無いのか？」

「ウエジユがあの子に見切りをつけて、新たな『契約者』と契約を結ぶなら、あの少女は解放される。けれど この空間にそのよゆうな者は居ない。彼女を助けることは不可能だ」

問いかけへの答えに、好男が頂垂れた。逃げることに専念しなければ生き残れないぞ、とアズアが忠告している。そのすぐ近くで、赤いドレスを着た女が少女を見上げて、耳障りな甲高い声を張り上げていた。

「ちょっと、何でアンタがここに来るのよ？ お城に籠って、大切な女王サマとやらを護ってるんじゃないの？」

棘のある女の言い回しに、両指先から光剣を出す少女が首を動かした。少女の中に居る何かが、少女の顔を通して冷たい笑みを浮かべている。

「カンツアの『契約者』か。長い間ご苦労だったな」

「ご苦労　　？　　なによ、まるで全て終わったみたいない方がいいじゃない。アンタの目的は、アンタの故郷を守ることでしょ？　目の前で崩壊が進んでるのに、寝ぼけたこと言ってるんじゃないわよ」

毒を吐く女を、その遙か上空に居る少女が虚ろな眼で眺める。涙の伝う頬が持ち上がり、少女の中から低い忍び笑いが聞こえた。何が起こっているのか解らずに憤然とするドレスの女に向けて、少女の中の何かが口を開く。

「……全て終わった、か……。まさにその通りだ」

円状の後光を背負いながら、少女がゆっくりと両腕を広げた。指先から伸びる光剣が不安定な空間を切り裂き、向こう側にある図書館の屋根を抉る。空間の亀裂から、冷たい白光がアスファルトに爪あとを残す様子が見えた。それを見て憤った好男が抗議の声を出す寸前に、兜の隙間を黒髪が覆った。

遠くからやつと駆けつけてきたスオンが、少女の中に居る存在に對して疑惑の眼を向ける。

「まさか、故郷は消えてしまったのか？　君はそれを黙って見てい

たと？」

長距離を走って息を切らし座り込むスオンを、光の中に浮かぶ少女が見下ろす。細い首が動き、少女は頷いた。

何故、と、顔を顰めてスオンが呟く。それを見た少女の口から、低い声が諭すように語り掛けた。

「悲しむことは無い。天も地も、そこに住まう民も、全てが始まりの許へと還ったただけだ。再び生まれ出づるときは別のものとなるうとも、永遠なる”世界”の中の一要素としてその存在が消えることは無い」

少女の口から出た言葉に、スオンが目を見開き、後退りした。首を傾げるバンダナの少年の横では、影のような男が同じように虚ろな目を円くしている。ただ赤いドレスの女だけが、鬱陶しそうに真紅の爪を眺めていた。

「はあ……、だから何？ アンタ達の故郷がどうなるうが、わたしの知ったことじゃ無いわよ。わたしはただ、好きなだけ暴れまわれれば」

減らず口を叩く女が、影のような男に横へ押しやられて言葉を切った。むっとした様子で睨む女を無視して、男が眩しい白光を見上げる。光に透ける身体の中には、蠟燭に灯る火よりも小さな火が燻っていた。本当に……？ と、男が乾いた唇を開いて白光に尋ねる。

「故郷が、無くなった……？ 父上も、母上も……まさか、クレアも」

うわ言のように呟く男に、白光を背負う少女は静かに頷いた。

その場に膝をつく男の肩を、赤いドレスの女が乱暴に掴む。

「なに絶望しちゃってるの？ 死にたくなかったら、わたしが生きて帰れるように力を供給しなさいよ」

痩せた女の手を、男が無言で振り払った。反抗されて醜く顔を歪める赤いドレスの女に、男が持っていた刃物の切先を向ける。震える刃先を一瞥して、ドレスの女がますます顔を歪めた。ただじゃおかないわよ、と無意味な脅しをかける女に、男は死んだ魚のような目を向けている。

「もう、たくさんだ。故郷も消えて、家族も居なくなつて、それでどうして生きる必要がある？ ……無い。無いんだよ、生きる意味が。異世界でおまえなんかと一緒に生きるより、死んだほうがずっとマシだ」

「何を言ってるの　っ」

女が口を開いた瞬間、男の握る刃がきらりと光り、己の胸を貫いた。

血のように赤い炎を胸から吹き出して倒れる男の前で、赤いドレスの女も胸を押さえて膝をつく。痛みに痙攣する女の指の間から、妙に白っぽい血が溢れていた。馬鹿な、と呪詛を吐く赤いドレスの女と倒れて動かなくなった男を、少女は無言で見下ろしている。

凄惨な光景を目の当たりにして、鎧に包まれた好男が思わず一歩後退りした。魅首達を包む黒髪の塊から、四季の声が聞こえる。

「……あの女、死んだのか」

「え？ い、いや　まだ生きてる　」

うるたえる好男の視界には、食い縛った歯の間から血を流しながらも立ち上がる女の姿が映っていた。暫しの沈黙の後、四季が再び好男に話しかける。

「ここから出してくれ。決着をつけたいんだ」

繭状の黒髪の中から聞こえた言葉に、好男は振り返って四季を見た。隙間から覗く、爛々と光る赤い瞳に見詰められ、好男は溜息をつくと腕時計に目配せした。文字盤に映るアズアが頷き、四季を包んでいた黒髪が腕時計の中へ戻っていく。

濁った雫を滴らせて、よろめきながら歩こうとする四季の腕を、漆黒の鎧が掴んだ。

「　？　」

眉を顰めて振り返る四季の額に、もう指の輪郭もわからなくなつた好男の手が翳される。

「持ってけよ、オレの命。半分だけだけどな」

笑って肩を竦める漆黒の鎧から、黒い筋が幾つも出て、空間に消えていった。その様子を生真面目な顔で見っていた四季の手が、固く拳に結ばれる。ありがとつ、と小さく呟いて、四季は漆黒の鎧に背を向けた。

さつきよりは確かな足取りでドレスの女のところへ向かう四季

を見送り、好男が鎧の中で首を回す。

「さあーて、命がけの鬼ごっこを始めるか」

「　　いいのか」

おどけた感じで笑い混じりに戯言をぬかす好男に、アズアが覇気の無い声で尋ねた。文字盤の中で申し訳無さそうに顔を俯けるアズアに向けて、好男がとびきりの笑顔で軽く頷く。

「大丈夫だいじょうぶ。これまでだって、なんだかんだ言って修羅場を潜り抜けてきただろ？ オレとアズアなら、魅首ちゃんが目覚めるまで逃げ回るくらい余裕だって」

へらへらと笑ってみせる好男。そういう意味では無く……、と咳きかけるアズアを、急に真面目になった好男の声が遮った。

「死ぬのは怖いさ。でも、オレの大切な人達が傷つくのは、もっと怖い。あの光を操る奴がオレ達の街を、世界を、自棄やけになって壊そうとしてるなら……オレは命がけで阻止するぜ。誰かを守るってのは、そういうこと　　だろ？」

無限に広がる白い光の中心に浮かぶ少女が、話を聞いていたように身動きみじろした。その指先から伸びる光の剣が、空間の壁を、そしてその向こうに広がる世界を破壊していく。空間の亀裂の向こうに見える世界は、最早、魅首達が居た世界だけではなかった。見たこともない不可思議な生物が嘗む憩いの場、息を呑むほど美しい景色、それらを冷たい光の剣が乱暴に引つ掻き回す。

眼下で壊れていく世界など気にも留めず、残酷な光が空間を切り裂いていく。剣をふるうことに、後光を背負う少女の向こうから、

真つ暗な空間の亀裂が近付いてきた。不気味な虚空に、好男が目を凝らす。

「なんだ　？　アズア、もしかしてあの暗い『向こう側』が、アズア達の故郷なのか？」

目の前を横切る光剣に触れないよう急停止する好男に、腕時計の中から声が聞こえる。

「　ああ、その通りだ。全てが滅びた虚無の世界……。 ”世界” と ”世界” の間にあるこの僅かな隙間が無くなってしまえば、あの虚無が他の ”世界” さえも蝕み始めるだろうな」

「全てが滅びた……？　でも今、あの中に白いものがちらつと見えただけだ　　うわっ」

好男が首を傾げた刹那、暴れ狂う白光の剣が黒髪の鎧の切り裂いた。切り離された右肩と、抱えていた魅首が真つ暗な亀裂に吸い込まれるように落下していく。闇色の輪郭が溶け出す右肩を一瞬押さえ、好男があわてて左手を伸ばした。その指先から黒髪が綱のように伸びていくが、魅首の落ちる速さの方がすこし勝っていた。

桃色と緑色に変色した魅首の髪が虚無の世界に吸い込まれようとしたまさにそのとき、何も無い空間から人影が現れて魅首を受け止めた。

驚いて目を円くする好男の前で、魅首を抱える人影が顔を上げる。二つ結びの長い黒髪が揺れ、清楚そうな純白のスカートの下で、魅首の体重を支える足が細かく震えている。その上気した頬を汗と涙が伝い、鼻の上で丸い眼鏡が白い光を反射する。

「か、刈子……ちゃん……？」

ぼかんと口を開けて放たれた好男の問いに、青い目の少女は満面の笑みを浮かべてみせた。

息を弾ませ魅首を抱えなおす刈子の前で、好男が左手で頭を抱えて裏返った声を出して疑問を連発している。

「え、何で　　というかその服　　さっきまで着てたのと全然違う……？　　髪も伸びてるし　　ブーツじゃなくてサンダルみたいなもの履いてる　　？　　ていうより身長伸びてない？　　え？　　どういうこと？　　本当に刈子ちゃんなのか？」

「はい、刈子です。今日よりずっと後の、未来から引つ張ってきた、香椎　刈子です」

混乱している好男に、すっかり成長した刈子がぐすくす笑って答えた。それを聞いてもまだ理解できない好男が呆然とその場に突っ立っている。腕時計の中から、半信半疑なアズアの声が聞こえた。

「時間を越えて能力が発動したのか……。いや、でもそんなこと可能なのか……」

「うーん、僕も何が起こったかよくわからなかったんだけど」

腕時計の中で不可思議な現象に頭を悩ませているアズアに、眼鏡の中からテンキイが口を挟む。身振り手振りを交え、テンキイが己の身に起こったことを説明し始めた。魅首と一緒に捕まえた右手を刈子から受け取り、切れた肩を直しながら説明を流し聞きする好男。

隙間の間から、また少し輪郭が溶け出て消えた。

「で、僕が思うにこれは、刈子の時間が吹き飛んだんじゃないかと。回避不可能な危機的状况にあった「さつき」から、刈子が危機を回避して安全に暮らしている「未来」までの全ての時間が無かったことになって、足りなくなった分の刈子の存在が未来から引つ張られてきた、って感じかなあ……」

段々と自信を失くして小声になっていくテンキイに、いくら変容が進んだとしてもそんなこと起こり得るはずが　と、アズアが困惑している。そっかそれで着てる服が違うんだ、と勝手に納得する好男の腕を刈子が引つ張った。

首を傾げる好男に、刈子が心配そうな顔で魅首を見遣る。

「好男さん、魅首さんの様子が　」

言われて好男も魅首を見ると、まつげに縁取られた瞼が薄らと開いていた。乱闘で欠けた爪が地面を掻き、魅首の上半身が起き上がる。

ドレスの女と闘っている四季が奏でる勇壮な行進曲に合わせるように、立ち上がった魅首の両足が透明な地面を踏締めた。滅茶苦茶に振り回される光剣が魅首に迫り、弾かれる。まるで見えない壁が魅首を覆っているようだった。

「魅首ちゃん　」

恐る恐る発せられた好男の声に反応して、魅首の頭が持ち上がる。桃色と緑色の前髪の下に見えた茶色の瞳から、無色透明の涙が一筋流れた。

第四章 再誕

誰かに呼ばれたような気がする。

そう思って、あたしは辺りを見回した。スイフィに触れられて気を失ってから、どれくらいの時間が流れたんだろう？ なんだか、身体のおちこちが痛い。でも、筋肉痛とか、怪我とかとは違う痛みのような……。

ぼんやりと考えて視線を泳がせていると、あたしは奇妙なことに気が付いた。……なんか、変だ。気絶する前まで見えていた景色と今見えている景色は何かが違う。でも、じゃあ具体的にどこが違うのかと訊かれても、すぐ答えられないんだけど。

白黒の世界を眺めながら、あたしは二、三回瞬きした。そうだ、何かがせわしなく動いてるんだ。黒とも灰色ともつかない巨大な剣みたいなものが、空間の中を暴れまわっている。そいつのせいで、亀裂がさらに増えてるみたいだ。あたし達がやってきた亀裂もすっかり大きくなって、橙色の図書館の屋根が？

あたしは目をこすった。いや、正確にはこすろうとした。もやっとした感覚が身体中に広がっただけで、手が全然顔に触れない。でも、図書館の屋根の色に比べたらそんなこと大したことじゃないと思っただ。

さっきまで橙色だった図書館の屋根が、妙に鮮やかな緑色になっている。図書館だけじゃない、よく見るとアスファルトもねずみ色から薄桃色になってる。蟻みたいに小さく見える人達の肌の色はまるで赤葡萄あかぶどうみたいだし。

この景色、何かに似てる……。少しズキズキする頭でそんなこと考えていると、また誰かがあたしを呼んだ気がした。よく知ってる誰かの声のはずなんだけど、ハウリングを起こしたマイクの音みたいに色々な割れた音が混じって聞き取りづらい。それになんだか、外側からじゃなくって、内側から声が響いているような……。内側？ それってもしかして、あたしの内側ってことか？

変な気分になって視線を動かすと、灰色の地面に三人の人影が見えた。真白な影に、白いお下げの女の子と、制服を着た女の子。皆、やっぱり肌の色が葡萄みたいな色してる。

じっと見ていると、段々焦点が合ってきて三人の顔までよく見えるようになった。あの白髪のお下げの子、もしかして 刈子？

丸眼鏡を掛けた女の子をじっと見詰め、推定が確信に変わる。間違いない、刈子だ。ということは隣にいる白い影は背格好からして好男？

ちょっと待て、とあたしは頭を抱えた。って言っても、また妙な感覚が身体に走っただけで、手が動いた感覚なんてこれっぽっちも無かったんだけど。亀裂の向こうにいる人達が変な色になってるのは、空間を通る光がどうのこうのでなんとか説明つくかも知れないでも、こっち側にいる好男や刈子まで、さっきと全然違う色になってるってのはどういうことだ？ それに、二人はそんなこと気にもしてないみたいだ。というか、気付いてない。

目の前の出来事に混乱していると、好男達目掛けて黒い剣が何本か飛んで来た。好男が刈子を抱えてそれをかわし、剣は制服の女の子に向かっていく。

危ない ! そう叫んだつもりだった。でも、声が出ない。

よく考えると、そもそも喉の感覚が無い。代わりにどこかで誰かが危ない、と叫んだみたいだ。女の子の身体に剣が当たって、弾き返される。ぐらりと女の子の足がバランスを崩し、丁度振り返ってこつちをみるかんじになった。ばつちり視線のぶつかったその子の顔を見て、あたしは絶句した。

写真や鏡でしか見たことのない『あたし』が、あたしを見詰め返していた。

もちろん例外なく、あの赤葡萄みないな肌色をしている。気持ち悪い色の『あたし』は気持ちよく眠ってたところを叩き起こされたみたいな不機嫌な顔をしていて、そして何故か泣いていた。なんだよ、これ。もしかしてあたし、まだ眠ってるのかな？ 夢見てるのかな？ できることならこれは夢ってことにして、何もかも無視したいんだけど。

眩暈みたいに視界が揺らいだ。誰か、何がどうなってるか、あたしに教えてほしいんだけど……。そこまで思っ、はたと気付く。

そうだ、スイフィ。二人で一心同体になるとか言ってたけど、さつきから全く姿が見えない。あいつはどこにいるんだ？

遙か上空から『あたし』と、その周りを見るけれど、スイフィのいる気配は無い。……。あれ、ちょっと待って。あたし今浮いてるってこと？ そのわりには虫眼鏡で見ると、遠くを拡大して見たりできるし。ただ浮いてるのとも少し違うのかな。平衡感覚の無い、本当に夢の中みたいな目の前に広がる光景。それを呆然と見ると、なんだか写真のネガをみるような気分になった。そうか、もしかしておかしいのは世界じゃなく、あたし自身なのかも。

考えを改めてもう一度視界に映るものを見てみると、変色には一

定の法則があるみたいに思われた。ということは、やっぱり、あたしのほうが何かのはずみでおかしくなったってことなんだな。うん。何かのはずみってのは勿論、てっとりばやく強くなるうとしたあれだ。　　ってことは、あたしは今、強くなっているのか？　そうだよな？　　そうでなくっちゃ困る。

ぐるぐる思考をループさせていると、段々視界がまたおかしくなってきた。以前に能力を使ったときみたいに、いくつかの世界が重なって見えるような感じだ。写真を印刷した眼鏡を何枚も掛けたような感じ、と言ったほうがいいかも……。

重なった視界の端に好男達が見える。この見え方、地面からの距離感、間違いなく『あたし』の、いや、あたしの視界だ。重なった視界が濃くなるにつれて、身体感覚も元に戻ってきた。手も自由に動かせるようになったみたいだ。

握ったり開いたりする右手を見詰めるあたしの耳に、大分普通の音に戻った好男の声が聞こえる。

「魅首ちゃん、大丈夫か？」

おいおい、そんな遠くから大丈夫かって訊くことは無いだろ。俯瞰視点から好男と刈子のいる位置を確かめて、一体何が起こったのかと尋ねる。ついでに気付いたけど、どうやら見下ろす視点だけじゃなく見上げる視点も重なって見えてるみたいだ。色んな視点が重なって、見えにくいにもほどがあるな。振り返りもせずに尋ねるあたしを、好男が不思議そうな顔をして見詰めた。

「……剣を弾き返したか……。どうやら本来の能力の使い方が解ったようだな」

好男の代わりに、誰かがあたしに話しかけた。色んな音が混ざっ

て聞き取りづらいけど、このむやみに偉そうな低い声には聞き覚えがある。あの巨大な剣が本当はどんな色なのか理解したあたしは、声のするほうへ振り返った。ありとあらゆる角度から、あたしの視線が灰色の塊へ向けられる。本来ならば目を開くのも耐え難い、眩まはゆい白光の中心へと。

見覚えのある光景だった。涙を流す年端もいかない少女が円形の翼を背負い、光を従えて宙に浮かぶ姿。その中に巢食う偉そうな刺客のことを思い出して、あたしは少女の中に居るそいつを思い切り睨んだ。女の子の顔を使つて、そいつが気味の悪い笑みを浮かべる。

「へいめい みしゅ、だったか？ 貴様のような直情的な人間に、とてもスィフィの持つ能力を理解しきれるとは思えなかったが 激しい感情が成せる業なのか。異世界の人間がここまでの域に到達するとは。陛下がご覧になったら、さぞ驚きになられるだろうな」

涙の流れる頬を歪めて、少女の中の何かが笑い声を上げた。それと同時に少女の手から伸びる剣が舞い、裂けた空間の壁をさらに切り刻んでいく。真上から振り下ろされた剣を思わず両手で受け止めるあたし。触っただけでものが消し飛ぶ光の剣なのに、何故か受け止めることができた。……いや、直接触ってるわけじゃないみたいだ。手のひらと光剣の間に、もやっとした何かが渦巻いている。見ようとしてもよく見えないそれは、空間の亀裂の縁によく似ていた。光剣を受け止めたあたしを見て、少女の下瞼がぴくりと痙攣する。不快そうに顔に皺を寄せて、そいつは白光の剣を引いた。忌むべき力だ、と、吐き捨てるようにそいつが呟く。

確かにそうかも知れなかった。冷たい目でこっちを見下ろす少女を見詰め、あたしは左手で拳を握った。ありとあらゆる角度から、

全てのものが見える。このちっぽけな身体だけじゃなくて、広大な空間の隅々にまで感覚が広がっている。そう、精神が空間に溶け出してゐるんだ。

目は光に包まれた少女へ向いているのに、すこし離れたところに居る十四季が赤いドレスの女と対峙しているのがよく見える。背後にいる好男や刈子の表情も、別の角度の視点から見れば、何もかも見える。……それに、あたしの身体を覆うこの何か。

気が付くと、身体が震えていた。どこからともなく湧き上がってくる、根拠の無い万能感。もう少し、あと少しで、何もかも超えられそう。この場を、世界を、自由にできる力。^{ちから}

「……」

無言であたしを見下ろすそいつを、あたしも睨み返していた。あの時とは違う。勝てる。どす黒い感情が腹の底から湧いてくるのがわかった。だめだ、あたしはこいつに勝ちたいんじゃない。こいつに操られてる女の子を助けたいんだ。こいつを持てる力全てで打ち負かしたら、殺してしまつたら、女の子も助からない。

早鐘のように打つ胸を押さえて深呼吸するあたし。暴れ馬のような感情に手綱をかけようとするけれど、なかなかどうして上手くいかない。まるで自分が自分じゃないみたいだ。頭の中に色んな情報が入ってきて、とても状況を整理しきれない。

頭を押さえて首を振るあたしを、光の中に浮かぶ少女が見下ろしている。細い両手が差し伸べられて、指先から伸びる光の剣が、あたしの周りに円状に突き刺さった。

「陛下が異世界^{いせかい}へいらっしゃるまでに、下準備を整えておきたかったのだが。貴様の能力は陛下に毒だ。完全に使いこなせるよう

になる前に、消えてもらおう」

陛下　？　それって、スィファイ達が言ってた『あのお方』のことか　？　何重にもなつて響くそいつの言葉に、記憶の網を手繰り寄せる。遠い記憶を探り当てる作業は、少女が剣を動かしたせいで中断された。狭まる檻のように迫ってくる光の柱を避け、なんかの塊に躓つまづいてよろめくあたし。なんでこんなところにコンクリートの塊が転がってるんだよ、危ないな。

脛を押さえるあたしの横に黒髪の鎧が駆け寄って、ふらつくあたしを支えた。ありがとう、と言うあたしに、鎧の中の好男が頷く。

「あなさ　あたしが寝てる間に何が起こったのか説明してくれる？」

刺突してきた光剣を弾き変えすあたしの問いに、アズアの声が答える。コンクリートを操る敵のこと、刈子のこと、赤いドレスの女と四季のこと、目の前の少女の中にある何かのこと。その何かがスィファイ達の故郷は滅んでしまったと言ったこと。

「ちよ、ちよつと待って……。あの女の子の中にいる奴は、確かその故郷を守るために、あたし達を追ってたんだよな？　その故郷が無くなつたつてのに、なんでこんなところで迷惑極まりないことしてるんだ？　もしかして、思考回路が弾け飛んで自暴自棄になっちゃってるのか？」

「……わたしもそう思っていた。だが、先程のウエジユの言葉。どうやら故郷は、異世界からの侵蝕で滅んだわけではなさそうだ。あの言葉をそのまま受け取るなら、故郷は……」

言葉を濁して、アズアが黙った。何か言うのを躊躇ちゅうちゆってるみたい

だ。もう、この際、隠し事なんかしないで全部話しちゃおうって！
そうハイテンションな声で言って、あたしは鎧の肩をばんぼんと叩いた。……今の、あたしはそんなこと全然思ってたんだ。

自分の行動にぎょつとしているあたしを見て、腕時計の中のアズアが困惑している。

「魅首殿」

「え、えつと、さっきのは違うっていうか。あたしはそんなこと言
うつもり全然なかったって……」

両手を振って必死に否定するけれど、アズアは目を泳がすばかりだ。どうすればいいかと頭を掻いている好男の背後から、光の剣が迫る。

危ない、と鎧を掴んでこっちにひっぱろうとした瞬間だった。勝手に身体が動いて、ありえない角度から蹴りを繰り出して光の剣を弾き飛ばした。バク宙して着地するあたしに、好男も刈子も点になった目を向けている。……間違いない、誰か勝手にあたしの身体を動かしてるな。誰かっつのは勿論、スィフィ以外の誰でもないんだけど。

あたしの気持ちなど露知らず、身体は軽快に跳ねて光剣の動きを目で追っている。揺れるスカートのポケットから、くしゃくしゃになった小さな白い本が輝だらけの地面に落ちた。

それが合図だったかのように、少女の指先から伸びる剣と、その周囲を漂う光弾があたし目掛けて降り注ぐ。なるべく触らないように、と、多角度から逃げられる道を探している間に、また身体が勝手に光を弾き返していた。跳ね返された光弾を剣で吸収して、少女

の中の奴が顔をしかめる。

短い悲鳴が聞こえて、あたしは視点を切り替えた。

蟹の少年が、ぐったりしてるスオンの肩を揺さぶっている。スオンの手には、さっきあたしが落とした小さな白い本が握られていた。泣きじゃくる少年にそれを渡すと、スオンはそのまま目を閉じてしまった。脇のあたりから、青い液体がじわりと広がっている。……もしかして、あたしが落とした本を取ろうとして、光の攻撃に当たってしまったんだろうか。まさか死んでなんかいない、よな。……だとしたら契約したあの少年も只じゃ済まないし。でも、蟹の少年はどこにも怪我してない……。

戸惑うあたしの視界の中で、少女の操る光とは違う灯りがちらついていた。少女の中の奴が呻く声が聞こえる。そして、赤いドレスの女の、甲高い耳障りな声も。

「冗談じゃないわ……。アンタの好きになんかささせるもんですか……！」

息も絶え絶えにそう言いながら、女が少女に向けた手を下ろした。真赤なマニキュアを塗った指先に、小さな炎が灯って消える。少女の胸には、こぶし大の穴が開いていた。少女の周りを飛んでいた光が次々に消えていく。赤い血の代わりに白い光の粒子を散らしながら、少女はゆっくりと落下しはじめた。よく見ると、剣を出していた指先も同じように光の粒となって散り始めている。

「っ」

新たに光の台座を作り出してそこに膝をつく少女。それを見て、赤いドレスの女が引き攣った笑い声を上げた。胸に開いた刺し傷を

押さえて、血の溢れる真赤な口で絶叫に近い声を上げる。

「どうせ死ぬんなら、皆道連れよ！ わたしが居ない世界なんて、存在するだけ無駄じゃない！ …… だけど、アンタが世界を壊すのは許せない。壊すのは、このわたし！ わたしなのよ！」

無茶な声出して咳き込むと、女は楽しそうに嗤った。あいつも、ちよつと見ないうちに完全にイカれちゃったみたいだ。狂った笑い声を空間にぶちまける女の肩を、黒い包帯を巻いた手が掴んだ。

こちらも息をするだけでやっとな四季に、赤いドレスの女が血走った眼を向ける。冷たく見下ろす四季の視線に気が付くと、女は醜く口端を歪めて挑発した。

「……アンタもこの先長くはなさそうねえ。どう、ほら、わたしが憎くて仕方がないんでしょう？ 殺してみなさいよ……ねえ。愚かな復讐者さん？ ふふふっ」

傍で聞いているあたしの腸が煮え繰り返るほどムカつく女の言葉に、四季の両目がざらりと光った。握り締めた左手の拳が、かたかたと震えているのがここからでもわかる。その手を胸の前まで持ってきて、そのまま女を殴るのかと思いきや、四季は女の肩から手を離してしまった。力を失って地面に膝をついた女が、四季を見上げて嘲笑う。

「殺せないの、腰抜けね。家族の仇を討つんじゃないの？ 遣された息子がこんな腑抜けじゃ、お父さんお母さんも浮かばれないわよ」

脂汗を流しながらも嫌味を言う女が、胸を押さえて蹲る。足元で喘ぎながらのた打ち回る血塗れの女を、四季はじつと見詰めてい

る。灰色の唇が開いて、かすれた声が聞こえた。

「生きているものはいつか必ず死ぬ。そう言ったのは、貴様自身だったな」

静かな声で尋ねる十四季に、女が瞳孔の開ききつた目を向けた。血で汚れた顔に嘲笑を浮かべ、女が十四季の言葉を肯定する。

「そうよ。……当たり前じゃない。わたしが殺してきた人たちだって、その死ぬときがちよつとはやくなつただけ。強いものが弱いものを駆逐する、それが自然の摂理でしょう？ わたしは何も間違っていないわ。それを逆上するなんて、自然の心理を真っ向から否定するもの」

違う、と、十四季が女の言葉を遮った。かすれた声が震えているのは、十四季が怒ってるからなのか、それとも泣いてるからなのか。どこが違うっていうのよ、と女は十四季に意地悪な顔を向けて開き直る。また持論を展開しようとする女に、十四季は両手を拳に握り締めてかすれた声を絞り出した。

「人はいつか死ぬ。それは真実だ。……でも、それと貴様が人を殺すのは、全く別の事柄だ。貴様はおまえは、論点を摩り替えて自分の持論を正当化してるだけだ。人殺しだけじゃない、ありとあらゆる非道を、勝手に論点を摩り替えて、『自分は悪くない』と壁を作ってる。都合のいい、嘘で固めた壁だ。そうやって虚構の世界を自分の中につくって、本当の世界から目を背けていたんだ。そうしなきゃ、誰も……おまえのことを肯定してくれないから」

淡々と、でも血を吐き出すように一語一句を話す十四季。ドレスを着た女の顔は、さっきとは全然違う表情になっていた。十四季を

嘲笑っていた口は血の気を失くして、貪欲に光っていた茶色の瞳は茫然と十四季を見上げている。やがて、血の流れる胸を押さえる手がわなわなと震えはじめた。違う、違う、と、うわ言のように同じ言葉を口の中で女が呟いている。嫌な音を立てて咽ると、女は十四季を睨みつけた。

「違うわ！間違ってるのはアンタなのよ！鼻水垂らしてるようなガキなんかには、説教される筋合いなんか無いわよ。それに、わたしは独りぼっちなんかじゃ」

女が咽こみ、言葉が途切れた。背を向けようとする十四季の足を、女の瘦せた手が掴む。

「待ちなさい！わたしを殺しなさいよ！アンタもこっちに堕ちるのよ！」

腹の底から搾り出した本音を聞いて、十四季が振り返った。期待と侮蔑の籠った女の視線に、十四季が囁くように答える。

「おまえを殺して家族が蘇るなら、何百回でも殺してやるよ。でも……、そんなことしても、父さんも母さんも、弟も帰ってこない。おまえはおまえの言葉通り、いつか死ぬそのときを、きちんと迎えてくれ」

静かな宣告に、女の表情は絶望に染まった。急に目の光が無くなったかと思うと、呪ってやる……、とだけ呟いて、女は目を閉じた。力の無くなった女の手を足から振り払い、十四季がこちらへ歩いてくる。その姿はとても勝ち誇ってる感じには見えなくて、なんかそのまま消えてしまいそうだった。

十四季……、と、あたしが声をかけようとしたと同時に、光の柱に膝をつく少女の中から、苦しそうな声が聞こえた。

「……確か貴様は……。少年、俺と契約しないか。こちら側へ来れば、再び父母と見えることも不可能ではないぞ」

そいつの言葉に、十四季が歩みを止めた。疑わしそうな目を光る少女へ向ける十四季に、そいつはさらに語り掛ける。

「今まで回収した魂は、契約者のものも含め全て陛下へお還したのだ。この計画が成功して、陛下が再び御力を取り戻されたら、亡くなった者を再生させてくださるかもしれない」

そんなこと初めて聞いたんだけど。光の粒子となつて散つていく少女を見詰め、あたしは眉をひそめた。十四季がそんなことに耳を貸すとは思えないけど、いやでも、あいつ結構家族のこと気にしてるみたいだし……。

そつと十四季の様子を窺うと、相変わらずすっかり生気の抜けた顔で首を横に振っていた。断られると思っていなかったのか、少女の中の奴は若干動揺している。そうこうしているうちにも少女の身体はどんどん光の粒子へ変化していく。ああ、なんとかしないと。でもどうやって？

「 だったら、ボクが契約します！ 」

組み立てた思考は、蟹の少年の一声によって掻き消された。あいつ今なんて言った？ 慌てて振り返ると、少年はバンダナを外してそれを捧げ持つようにしていた。その傍らには、静かに横たわるスオンの姿。少女の光を発する瞳がそれを見詰め、暫しの沈黙の後に頷いた。 まずい、こいつは弱つててこのぐらいの強さなのに、

あのぴんぴんしてる蟹の少年と再契約なんかしたら。

けれど、焦るあたしが止めに入る暇も無く、契約は完了してしまつたみたいだつた。少女の身体の回りを漂っていた光が消えていき、少女の指先と傷口から出ていた光の粒子が人の形をつくる。はじめに見るそいつの姿は、なんだか厳いしく近寄りがたい雰囲気だつた。ぼんやりとした輪郭のそいつが、光を従えて少年のほうへ進んでいく。見捨てられた少女は、支えを失くして落下しはじめた。慌てて落ちてきたところを抱きとめると、女の子はまだ生きていた。潤んだ黒い瞳があたしを見詰め、血の気を失つた唇が微かに動く。ありがとう、とか細かい声が耳に聞こえた。

「……ううん、こんなになるまで助けられなくて　ごめん」

また何か言おうとする少女を好男に預け、あたしは蟹の少年の元へ走つた。どうにかして、あいつらをなんとかしなくっちゃ。そう考えるあたしの目の前で、光で出来たそいつが止まっているのが見えた。え、どうしたんだ。蟹の少年と契約したはずじゃ？

そう思つて蟹の少年に眼を移す。バンダナを握つた蟹の少年は、口を真一文字に結んで光の塊を睨んでいた。緊迫した空気が流れ、少年がぼろぼろのバンダナを繊維に沿つて引き裂いた。光輝く男が呻き声を上げ、頭を押さえて後退する。

「な、何故だ。途中で器を壊してしまつては、契約することが出来ないのに」

訳がわからないと戸惑っている男を無視して、蟹の、いや、普通の人に戻つた少年があたしに向かつてはつきりと叫んだ。

「お姉さん、今っす！」

「お、おう　　！」

両目に涙を溜めた少年の声にあわせて、あたしは男に拳を打ち込んでいた。触れるだけで物質を消し去る光の粒子に、あたしを包むもやもやした何かが触れて、色とりどりの眩しい光が飛び散る。剣を出して斬りかかろうとする男の手を捻り挙げ、そのまま背負って投げ飛ばす。思ったよりずっと軽かった男の身体は、数メートル飛んで地面に叩きつけられた。

突然のことに、あたしも男も何かなんだかわからないって顔をしている。息を切らして少年を見るあたし。男が倒されて安心したのか、少年はへなへなと地面に座り込んでいた。

「おい……なんで契約しなかったんだよ。おまえ、あたし達の敵なんだろ……？」

遠巻きに尋ねるあたしに、少年は泣きながら首を振る。

「ボクはただ、姉ちゃんを助けたかっただけっす……。そのためには力が、強さが必要だって思ってたっす。でも、でも」

感極まったのか、少年は号泣し出した。そして何言ってるか聞き取れなくなってしまった。あれだけ大胆なことしておいて、そんな普通の男の子みたいに泣き出されても……。……って、こいつも元々は普通の子どもだったんだよな。

白い本を片手に泣きじゃくる少年の声がこだまする空間で、いつの間にか投げ飛ばされた男は立ち上がっていた。光る肩を上下させ、はあはあと苦しそうに口で息をしている。汗のかわりに、光の雫が

滴り落ちた。

「どうして 何故、受け入れようとしなんだ。テンキイもアズアも、ここに居る異世界の人々も。全ては廻る命の渦、その小さな一粒である我々が生を終えたとしても、また渦の中へ還っていただくなのに」

苦悶の表情を浮かべながら、男が電波な言葉をのたまっている。終いには、自分の上に広がる真つ暗な亀裂に向けて、祈りの詞ことばみたいなものを呟いちやってるし。やっぱりこいつ、レストランで闘ったときと何か違う。

性格が微妙に変わった男を怪しんでいると、どこかから男の詞に答えるように声が聞こえてきた。細い透き通った声なのに、空間全体が震えてる。驚くあたし達の目の前で、真つ暗な空間から白い手が男に差し伸べられた。

「サマンテ、そなたは与えられた務めをよく果たした。そなたの努力は、全てわらわの眼まなこが見届けた……。さあ、わらわの腕の中へ還ってくるがよい」

声に導かれるように、男はふらふらと差し伸べられた手のほうへ歩き出した。傷ついた胸から流れ出る光の粒子が尾を引いて、空間に男が歩いた軌跡をつくる。それがふつつと消えていく様は、まるで小さな銀河の動きを見ているみたいだった。

「あ、あれはいったい何ですか……？」

「故郷こきょうを統べる女王、『あのお方』。あの姿……自分の民と世界を食い尽くしてしまったのか」

怯えて好男の陰に隠れる刈子に、アズアが答える。黒い鎧が見詰めるその先には、白い二本の手が映っていた。身体は、暗闇に紛れてよく見えない。

白魚のようなたおやかな手に男が近付き、自らの手を伸ばした。伸ばされた手が触れたのは、巨大な人差し指のほんの一面だった。どうやらこの空間、ついに遠近感覚までおかしくなったらしい。目をこすってよく見ようとすると間に、白い手は男をそっと持ち上げた。暗闇の空間に、その身体が白く浮かび上がる。

絶望するほど、それは巨大だった。今までの苦戦がなんだったのかさえわからなくなるほどに。ちっばけな光る男を手に乗せて、それはもう片方の手を使って、空間をこじ開けた。生物の悲鳴のような音と、砂嵐のような音が一層強く鳴り響く。目覚めたとき感じた万能感なんて、もうすっかり吹き飛ばされてしまった。

とても人間の視界に入りきらない大きさの物体が、空間を越えて存在している。ただ茫然とそれを見るしかできないあたし達を、別角度から見た真白なそれが見下ろしていた。ぽかんと口を開けているあたしの上に、白い破片が降り注ぐ。

髪についたそれを手で掃っていると、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「おおサマンテ、そなたの働き、見事なものであった。見よ、ここかしこに広がる忌々しき異なる世界を……。これがわらわを苦しめ、わらわの子らを変えてしまった……。しかしそれも、今日で終わりとなるう。総てが、わらわの糧かてとなり、わらわが総てとなるのだ……」

それこそが終わりなき命の輪よ、と、それは誰に語るともなしに言った。何わけのわからないこと言ってるんだ、こいつ。どうすれ

ばこいつが亀裂の向こうに帰ってくれるかを考えていると、それはおもむろに白い手を近くの亀裂に突っ込んだ。幾つもの悲鳴が上がり、そして巨大な口の中に運ばれ消えていく。

「てめえっ……！ 止めるよ！」

考えるよりも先に声が出てしまった。その足元まで駆け寄って力任せに白い足を殴る。ぱらぱらと小さな破片が散ったけれど、大した損傷を与えられないのは殴るまでもなく明らかだった。

それでも女王さまの機嫌を損ねることには成功したみたいだ。それは空間の亀裂から手を抜いて、足元のあたしを巨大な目で見詰めた。硝子みたいな無感情な目からでる視線が、まっすぐあたしに注がれている。

「愚かな子　可哀想に。永遠を知らないから、刹那でしか物事を測れない……。わらわと共に来れば、何も恐れるものなど無いのに」

ふざけんな、そう言い返そうと口を開いた瞬間、光の矢が頭上から降り注いだ。また弾き返せる、そう思っただけで手には刺さる。な、なんで。

驚愕するあたしを、アズアの黒髪が包んで引っ張った。雨のように降る光の矢が、透明な地面に突き刺さった。その地面が意志を持つように隆起して、波打っている。

悲鳴を上げる刈子を比較的遠い場所に置いて、好男がこっちに走ってきた。輪郭の溶け出てる鎧が剣を構える。

比率でいったら蟻よりも小さいあたし達を見下ろして、女王は秀麗な眉間に薄らと皺を寄せた。

「……感情か。わらわの子らを変容させ、自立の心を生み出した忌まわしき異世界の侵略者よ。ゆりかごの中に眠っていた幼き子らを泣き出させ、わらわを苦しめた……この屈辱、忘れはせぬ」

細い声で空間を震わせると、女王は右手を動かした。それぞれの指先から、水の奔流、灼熱の炎、眩しい光に鋭い鉋物、生まれては枯れていく植物があたしと好男に襲い掛かる。それらはすぐ消えてしまったけれど、あたし達をこれ以上近づけさせないためには抜群の効果があつた。

「くそつ、手も足も出ないじゃんかよ」

「なあアズア、あいつについて何でもいいから知ってることを教えてくれるか」

他の世界を食べるにつれて足元から新たな生命を創り出していく女王の様子に、好男が険しい顔をしている。悔しいけど、あんなの倒せるわけがない。訊くだけ無駄だと唇を噛み締めるあたしの耳に、アズアの凜とした声が聞こえる。

「たとえ総てを支配する力があつたとしても、死にだけは抗^{あらが}えない。あのお方は既に自分の寿命を使い切つたはずだ。一見何の綻びも無い身体をしていても、どこかにその証があるはず……」

綻び？　そういえばさつき、でっかい足を殴ったときに白い粉みたいなのが出た。あれって、女王がこの空間に来たとき、降り注いだきたものと同じ？

何十にも重なった視界の中から、女王の身体が見えるものを選びすぎる。そうか、これだ。重なった視界の一つに、女王の左手から白い粉が剥がれ落ちる様子が映っていた。透き通るような白い肌が、

そこだけひび割れて、中心に黒い穴が開いている。

「綻びって、あの左手にあるヒビのことか？」

「え、どこ……」

遙か上空を指すあたしに、好男が首を伸ばして指した場所をみようと躍りになっている。腕時計を覗き込むと、目のあったアズアが神妙な顔で頷いた。

「じゃ、あのヒビをぶん殴ればいいわけだな！　っしや、任せとけ」

「ただ、いかにあのお方に気付かれないようにするか……。それが問題だな」

拳を握って腕をさするあたしに、アズアが憂いげに呟いた。緊迫した面持ちのアズアに、好男が軽い調子で笑い掛ける。

「そんなの、オレとアズアでなんとか止めればいいって。魅首ちゃんに攻撃する一瞬ぐらい、髪で拘束することはできるよな」

同意を求めて腕時計を覗き込む好男に、そう簡単に事が運ぶと思えないが……。とアズアが渋っている。迷ってる間にも、女王は空間の亀裂の中から手当たり次第に何かを掴んで吸収している。たまたま伸ばされた手が、図書館の屋根を剥いだ。

「アズア、頼む……！」

好男の言葉に、遂にアズアが頷いた。わたくしもお力添えさせていただきます、と、刈子がいつのまにかすぐ横に来ている。緊張し

た汗で滑った眼鏡を指で押し上げる刈子の後方、十四季が無言で音楽を奏で始めた。雄大なオーケストラの曲に、どこからともなく人々の歌声が混じって聞こえる。この声、どこから？

耳を疑うあたしの目に、女王の足元で蠢く生まれたての世界が見えた。どこかで見たような顔の人達が、女王の重みに押しつぶされて一つの塊のようになっていく。次々と生まれては消えていく人々の叫びが、まるで壮大な混声合唱のようだ。

痛いのか哀しいのかわからないけれど涙を流している群集を見て、あたしの心は俄然奮い立った。何が生命の輪だ、何が永遠の観点だ。この身勝手な女王は、自分の命が惜しくて他人を踏み台にしてるだけじゃないか。

握り締めた右の拳に、自分の爪が食い込んでいく。絶対に止めてみせる、そして約束を果たすんだ。　　スイフィとの約束を。

十四季の奏でる音楽のおかげで、身体中を色んなものが巡っている。悠然と『食事』を続ける女王の左手がゆっくりと下ろされた瞬間を狙って、あたしはその手にしがみついた。女王の硝子のような目が丸くなり、もう一方の手から雷の鳴る雲が湧き出てあたしに近づく。振り落とされないように必死にしがみ付きながら、あたしは拳を振り上げた。止めるんだ、この傍若無人な何かを。そう、このイカれた世界の物語を。

暴風で浮き上がる身体を、黒髪が引き止める。雲に囲まれて機能しなくなった視界の代わりに、刈子が見た未来の映像が目に映る。泣き叫ぶような合唱が大きく転調したそのとき、あたしは拳を振り下ろした。

「 しゅ、魅首」

名前を呼ばれて、目を覚ました。ぼやけた視界にピンクと緑の何かが映る。……この色彩、間違えようが無いな。

「 んだよ、スイフィ 」

目をこすって起き上がると、あたしがいたのは世界と世界の狭間じゃなかった。かといって、アスファルトとコンクリートのビル街でもない。雑草生え放題の田舎道でもなかった。ただ雪のように真白な、世界。

驚いて左右を見回すあたしの横で、スイフィが困ったねい、と長い髪をいじっている。こいつ、今までずっと吊り広告の中に居たからわからなかったけど、けっこう背高いんだな。頭一つと半分高い身長のスィフィを見上げるあたし。スイフィも同じように、こつちを無言で見詰め返す。……遊んでるわけじゃないんだけど。

大袈裟に溜息をつくとき、スイフィはちよつと肩を竦めた。

「 で？ ここはいったい何処どこなんだ？ まさか、死後の世界とか言っつなよな。この若さで死ぬなんて絶対やだぞ、あたしは」

「 んー、おいらにもわかんないねい。ただ、すごく懐かしい場所っていうか、暖かい気持ちになれるっていうか……」

両手を胸の中心に当てて、スイフィが瞼を閉じた。なんだそりゃ。

呆れるあたしの耳に、微かな物音が聞こえた。素早く音のした方向を睨むと、白い世界に白い人が倒れている。真綿のようなふわふわの髪の毛、白魚のように透き通った白い肌、贅をつくした白地のドレス……。どこかで見たような気がするな。

あたしが思い出すよりはやく、スイフィがその人のところへ駆け寄っていった。起き上がるのに手を貸そうとするスイフィを、白い手が叩く。

「近寄るでない」

か細いけれど威厳のある声を聞いて、あたしはやっと思い出した。こいつ、さっきまで散々好き勝手やってた異世界の女王じゃないか。あんなに大きかったのに、あたしと同じかそれより小さくなっている。

差し出す手を拒否されたスイフィは、哀しそうな顔をした。

「でも、おいら……」

「言い訳など聞きとらない。そなたのせいで、わらわが育てた世界は滅んでしまった。破滅の始まりよ、わらわの前から去るがいい」

真白な世界に場違いなほど色彩豊かなスイフィが、頭を頂垂れる。長い髪の毛が揺れて、白い地面にピンクと緑とのマール模様をつくった。

立ち上がって偉そうにしている小さな女王に、あたしがつかつかと歩み寄る。

「なんだよ、わらわが育てただの、わらわの子だの、まるで何でも自分の手柄みたいに」

口を挟もうとするあたしを、女王が視線で黙らせた。ガンの張り合いで負けたことないのに、シヨックだ。これがカリスマってやつなのかな。とぼけたことを考えるあたしの前で、女王はぴんと背筋を伸ばして姿勢を正した。指の先まで、気が張り詰めているのがわかる。

「その通りである。あの世界は、草木や羽虫に至るまで、全てわらわから生まれ出でたもの。言葉あるものも、言葉を持たぬものも、有なるものも無なるものも……。わらわから与えられた役割を健気に果たし、それぞれが世界の一端を担っていた。しかし、そこに居るスイフィは違った。わらわが与えた役目を拒み、自分の頭で物事を考え、周りに影響を与えた。眠る赤子に、糧を求めて泣く方法を教えたのだ。それがどんな結果を生んだか。そなたもその眼で見たであろう」

問い掛けてくる女王の目は、厳しい光が差していた。名指しされたスイフィは、おどおどと落ち着き無い素振りをしている。それを一瞥して、あたしは溜息をつく。スイフィの肩を叩いた。

「……ほら。ちゃんと向き合って、言うんだろ？ 自分の考えを。聞かせてやれよ。この偉そうな女王さまにさ」

「う、うん」

謀反者の言葉など聞く必要はない、と主張する女王を宥め、あたしはスイフィに先を促した。両手の指を交互にくるくるまわしていたスイフィが、おちゃらけた動きを止める。

暫らくの間、真白な世界は無音だった。一生懸命言葉を選んでいったスイフィが、その口を開く。

「その……ごめん、なさい……」

謝ってどうする！ 思わず突っかかりそうになるのを堪えて、スィフィの次の言葉を待つ。これで終わるわけが無い。もっと他に言うことあるだろ。泳いでいたスィフィの視線が、真直ぐ険しい女王の眼へと向かう。

「でも、思うんです。誰かの言いなりになっただけじゃ、いつまでも何も変わらないって。自分で考えて、試行錯誤して、それで一杯の結果を得たときの喜びは何にも代えられないって。初めてのことばかりで、上手くいかないことのほうが多かつたけど。そんな気持ちを、故郷の人達にも知ってほしかつたんです」

「思う、考える 変える……か」

女王の顔に薄らと皺が寄り、忌々しそうにスィフィの言ったことを繰り返した。恐れながらも顔を背けずじつと立つスィフィを、女王が白い眼で睨む。

「全てわらわにとっては邪魔なだけだ。何も変わらない？ だからこそ、よいのではないか。母の胎内でまどろむ子どものように、絶対なる支配者の言うことに身を任せる。何も考えず、何も感じない。苦しみも恐怖もない世界だ。それこそが、受けうる最高の世界だろう。そなたはその世界を、皆の安寧の寢床を台無しにしてしまった」

強い口調で言い返されて、スィフィはまた黙ってしまった。まったくもう、こんな顔したスィフィは見てられないっつもの。またスィフィに向けて批難の言葉をぶつけようとする女王の前へ、あたしが

一歩進み出る。

「眠ってりゃいい？ 何も考えるな、感じるなだって？ そんなの、あたしは嫌だ。痛くつても苦しくても、自分で考えた、自分で選んだ道を進むんだ。じゃなきゃ、何のために生きるってんだよ。ずっと眠ってるってのは、死んでるのと一緒だろ。そのほうがおまえにとって都合がいいから、ただそれだけだろ。考えることができるおまえが、同じことができる奴らに『考えるな』って言うのは、なんか矛盾してるんじゃないか？」

勢いだけでぶちまけた言葉は、女王の琴線に触れるところがあつたみたいだ。人形みたいに整った顔に困惑の色を浮かべ、女王が言葉に詰まっている。もうあと一押しだ。無意識にそう感じると、あたしはスィファイの手を握っていた。ぎゅっと握ったスィファイの手は骨ばつてごつごつしてるけど、暖かかった。その温度に後押しされて、あたしの口から言葉が溢れ出てくる。

「確かに、自分で考えて行動するのは大変だよ。ちゃんと責任とらなきゃいけないし、途中で放り出したくなるときもある。でも、だからって、最初から最後までお膳立てされてたら、全然成長できないじゃんか。面倒みってくれる親がいなくなったら、赤んぼうは生きていけないだろ？ おまえだつてその、『命の輪』の一端なんだし……。だから……そろそろ手を離してもいいんじゃないかな。おまえの子つてのも、もしかしたらもう一人で歩けるかも知れないから」

真白な世界に君臨する真白な女王さまは、自分の左手を見詰めた。そこにはさつきあたしが殴ったのと同じ、小さなひび割れができている。さらさらと音を立てて崩れ始める自分を静かに眺め、女王は溜めていた息をふつと吐いた。

「そなたの言うことにも、一理あるな……。永いながい時を生きて、わらわ自身も命の流れに浮かぶ一つの泡沫うたかただということ、忘れてしまっていたようだ……。この身から生み出した子らと離れることを渋ったからこそ、歪みが生まれたのやも知れぬ。どれだけ命を食べようとも、失ったときは戻らない……」

じゃあ、と顔を上げるスイフィを、女王が右手のひらを向けて制した。何かするのかと肩を強張らせるあたしとスイフィに、女王が静かに続ける。

「しかし、スイフィ。……そなたはわらわの全てを託すには、まだ未熟。その激しく波打つ感情を抑える術を、これからじっくりと学ぶがよい」

白い世界に散りながら、女王はスイフィに向けて微笑んだ。駆け寄ろうとするスイフィに、女王が首を横に振る。たおやかな仕草であたしの後方を指し示し、囁くように最後の言葉を口にした。

「行きなさい。そなたの歩む道は、これからもずっと続いているはずだ。何か世界いっせいを変えるのではなく、統べるようになるまで。その時が来るまでは、アズアに故郷を託すことにしよう。わらわの子、スイフィ。命の流れの中から、そなたの成長を楽しみにしている……」

白い世界は溶けるように女王を包み、そして消えてしまった。足元に広がる無色透明な見覚えなある光景を茫然と眺めていると、後ろから好男達の声が聞こえてきた。名前を呼ぶ声に振り返ると、最初に出会った姿のままの好男がこっちに走ってくるのが見えた。肌が普通の色に戻ってるし、髪もちよつと長めに戻っている。それに、

どうやらあたしの視界も感覚も元に戻ってるみたいだ。もうどうやっても視界を切り替えられないことに気付いて、あたしはちよつと落胆した。あれ、結構便利だったのになあ。

がつくりと肩を落とすあたしに、好男が息を切らして話しかけてきた。

「み、魅首ちゃん　よかったあー無事で……。どこを探しても見つからなかったから、オレもうどうしようかと……」

「ちよ、放せば。というか好男、おまえこそどうしたんだよ。あれだけ黒くなってたのに、普通に帰ってるし」

ちゃっかり手を握ってくる好男を振り払って、質問を質問で返すあたし。ああ、そうそう、と好男が左手に着けた腕時計を覗き込んだ。

「アズア　って、もうこっちには居ないんだっけ。おい、アズアー！」

振り返って名前を呼ぶ好男に釣られて、あたしも好男の背後に視線を向けた。腕時計の中にいたそのままの、でも大きさはあたしと同じくらいになったアズアが、長い髪を重そうに引き摺っている。

「えっ？　あ、アズアが腕時計の外にいる　っ？」

「あははー、魅首、その顔おっかしー」

頭の上からいつもの聞き飽きた声がして、あたしは嫌な予感を覚えて振り返った。広告から出て完全に人型サイズに戻ったスイフィ

が、腹を抱えて笑っている。嘘だろ……。さっきのは夢か心象世界だと思つてたのに……。

色々こつ恥ずかしいこと言っちゃったよ、ああもう。蹲すくまつて身悶えするあたしを、刈子が覗き込む。

「大丈夫ですか、魅首さん？ どこかお怪我でもしてるんじゃない」

「いや刈子、これは精神的葛藤が身体に現れてるんだよ。だからそつとしておくのが一番」

気を揉む刈子の横で、これまた実物大に戻ったテンキイが胡散臭い説明をしている。ああでもない、こうでもない揉める刈子とテンキイに挟まれて、あたしはその場から立ち上がった。

「どうなつてんだよつ！ 説明しろつスイフィ！」

こんなこと言つても答えてはくれないだろうけど、なんて心の隅で思っていると、口笛吹いていたスイフィがきよとんと首を傾げた。ほら、やっぱりはぐらかすつもりなんだな。ささくれた気持ちでむすつとするあたしに、スイフィが何かを取り出してみせる。

「どつって、契約書に書かれた内容を全部果たしたから。あと、あのお方がかけた呪いと封印も解けたからだねい」

そう言つて差し出したそれは、電車の中で見た謎の板だった。あ

！ と声を上げて手を伸ばした途端、それはスイフィの手の上で消えてしまった。もう持つてないよん、と肩を竦めるスイフィに詰め寄るあたし。

「ほんとに、ほんとにこれで終わりだろーな！ また何か企んでた

りしないよな？」

念には念を押すあたしに、スイフィは情けない顔で苦笑している。
……この笑い、信用できん。

思っていることが顔に出てたのか、テンキイがスイフィを押し退けてあたしに詳しく説明してくれた。

「世界の総てを統べる女王の力と、世界を変えるスイフィの力が互いに作用して、歪んでいた空間のつなぎ目が正常に戻ったんだ」

「つまり 何もかも元通りになったってことか？」

ほっとして尋ねるあたしに、テンキイはちよつと浮かない顔をしている。全部が全部元通りになったわけじゃないんだ、と呟くテンキイの言葉を、アズアが補足した。

「女王に吸収され、生み出されたものは女王が司る世界にしか存在できない。この闘いで失われたものは、わたし達の故郷に組み込まれてしまった」

哀しそうに眼を伏せるアズアの横で、じゃあ武宮さんのご家族は……、と刈子が口元を押さえている。そうだ、十四季は。

刈子の言葉で十四季のことを思い出し、あたしは辺りを見回した。思ったとおり、少し離れたところに十四季は一人で佇んでいる。声を掛けて手招きすると、はっと気が付いてこちらへ歩いてきた。

「あれ、十四季おまえカラコン」

まだ赤い左目を指して言うあたしに、十四季が包帯を巻いた右手

をさする。

「そもそも契約なんてしてなかったからな、俺は……」

ぼそりと呟く十四季の手には、うつすらと円い目の跡が残っていた。何て声を掛けていいか絶句するあたし達に、十四季が気を取り直して話しかける。

「こんなところで悠長に話し込んでいいのか。空間の歪みとやらが、塞がってきてるぞ」

十四季の言葉に、皆の視線が最後に残った二つの亀裂へ注がれた。一方は見慣れたあたし達の世界、もう一方はスイフィやアズア達の住む世界へと繋がっているみたいだ。それが少しずつ小さくなっている。

「うわ、大変だ！ はやくしないとここに取り残されてしまうよ」

慌てるテンキイに流され、皆それぞれの亀裂の前に移動する。こち側にはあたしに好男、刈子、それに蟹の少年と光を操ってた女の子。向こう側にはスイフィにアズア、テンキイに。

「十四季？ おまえこつちじゃないのか？」

何の躊躇いもなく向こう側の亀裂に行った十四季が、赤と茶のオッドアイをきゅつと細めた。黒い包帯を巻いた右手首を左手で握り、亀裂の向こう側を眺める十四季。

「俺……ずっと斜に構えて、かつこつけてたんだ。現実を見てなかったのは、俺自身なんだ。だから、家族にさよならも言えなかった

……。失われたものがこつちにあるなら、もしまた家族に会えるなら、今度はちゃんと、飾らない自分自身で向かい合いたい」

ぼそぼそ呟いて、十四季はちよつと顔を赤らめた。茶化すスイフイに強がった台詞を言つと、あたし達に向かつてはにかんだ顔を向けて手を振つた。

そつか……。それじゃ仕方ないよな。手を振り返すあたしの頭に、ふつと疑問が浮かぶ。

「なあ、また会えるよな？　まさかこれで永遠にさよならつてわけじゃないよな」

不安になつて尋ねるあたしに、ふざけて手を振っていたスイフイが急に真顔になつた。なんだか寂しい気持ちになるあたしに、アズアが静かに語り掛ける。

「この歪みが生まれたのは、運命の悪戯いたずら。魅首殿、刈子殿、武宮殿、……。そして好男のお陰で、その歪みは正された。二つの世界を結ぶ歪みは、これ以上存在しないほうが互いのため」

そう言つて、アズアは眼を伏せた。本当に、いくら礼を言つても足りない、とかなんとか言つてるけど、これって　もう会えないつてことかよ。あつけらかんと手を振る好男の前で、あたしは思わず鼻を赤くしていた。駄目だ、もうちよつとで泣いてしまふ。泣き顔を見られたくなくて背を向けたあたしを、誰かの手が抱きとめる骨ばつたあつたかい手に、生つ白い肌。へへっ、といたずらっぽい笑い声が耳に入ってくる。

「何々、もしかして魅首泣いちゃいそうなの？　らしくないなあー、どっかーんつて怒るかと思つたのに」

……うるさいな。そんなんじゃないってば。調子乗ったム力つく声に、何か言い返してやりたかった。でも、肩が震えて、目頭から熱いものが零れて、とてもそんなことできそうにない。頭の上から降り注ぐ茶化す声に、あたしは思い切り腕を払って振り向いた。

怒ったせいでびっくりしたのか、スイフィが緑色の目を円くして固まっている。その胸に飛び込んで、あたしは泣きながら大声を出した。

「うるさいってば！ 悲しいんだよ！ ……おまえのこと、絶対忘れないからな！ この、嘘つきで、ホラ吹きで、能天気な

「
思いつく限りのこれまでの所業を並べ立てるあたしの頭を、スイフィの手がそっと包む。もうわけがわからなくなっただけすら泣き続けるあたしの顔を両手で包んで、スイフィは大人びた笑顔を見せた。

「……うん、おいらも、魅首のこと忘れない」

ひよっとしたらあたしは、その一言が欲しかったのかも知れない。涙でぐしゃぐしゃになったあたしの顔をじっと見詰め、鼻水出てるよん、と言ってスイフィが何か差し出した。スイフィが入っていた電車の吊り広告だった。こんな大事なもので鼻がかめるわけないだろ、馬鹿。

相変わらずのデリカシーの無さにちよつと冷静になると、あたしはスイフィから離れた。と言っても、まるで電車に乗って離れ離れになる、遠距離の恋人同士みたいにゆっくりとだけ。隣で好男が眼を円くして、え、そうだったの？ オレの立場は？ とか情けない声出している。そんなんじゃないよ、友情だよ、と言い訳して、

あたしはスイフィを見上げた。

「……それじゃ、またねい」

「ああ。またな」

吊り広告を大事に握るあたしに、スイフィが改めて別れの挨拶をした。向こう側の亀裂の前で、アズアが不思議な呪文を唱えている。あたし達の身体をもちやもやしたものが覆って、手を振るスイフィ達の姿が段々薄くなっていく。思わず切なくなって千切れるほど手を振ったそのとき、向こう側の皆に混じって悠が手を振るのが見えた。

こうして、あたしと好男は花柄の待つボロアパートへ帰宅したのだった。

第四章 帰郷

揺れる電車の中、ほとんど空っぽの客車の中で、あたしと好男は並んで座っていた。好男の手には分厚い封筒、あたしの隣の席には、ぱんぱんに膨らんだ肩掛け学生鞆。花柄にアイロンをかけてもらった新品同様の制服のスカートの上で、あたしは真新しいファイルの中の紙に眼を落とした。

時代錯誤の古臭いイラストと、中学一年生という文字が黄ばんだ紙の上で踊っている。思わず笑いを漏らすあたし。流れる景色をぼーっと見ていた好男がそれに気が付いて、膝の上のファイルを覗き込んだ。

「……そういえば、魅首ちゃんとスイフィが初めて会ったのって、この電車の中だっけ」

あくびをかみ殺して尋ねる好男に、あたしは頷いた。ファイルの中の広告を見ると、何故か笑いが込み上げてくる。色んな意味で、だけど。

ゆったりとした周期で揺れる電車の背凭れに身を預け、きちんと並んでぶらさがる広告たちに眼を向ける。

「そうそう、丁度こっち側の席でさ。上り線の、この位置の車両でホント、びっくりしたんだよな」。あのときの顔、撮れるもんなら撮っておきたかったし」

軽口を叩いて笑うあたしに、好男は眠そうな眼を向けて微笑んでいる。疲れた？ と尋ねると、そりゃね……、と好男が答えた。左右に首を回す好男を見て、あれから大変だったもんなあと、あたし

は思い返した。ニューズ実況のカメラがまわる中、半壊の図書館から気絶した少年と少女を抱えて出てくれば、英雄として報道されちゃってもおかしくない。ましてそれが、数日前にバラエティー番組で謎の怪力男とか放映されちゃってたら。

またぼーつと窓からの景色を眺める好男を、あたしはそつと見詰めた。こんがりいい具合に日に焼けた首筋には、点々と黒い斑点が今も消えずに残っている。これ以外にもとても見せられないところが色変わっちゃってるんだぜ、とかふざけたこと言ってきたのを裏拳入れて撃退したけど。

物騒なことを思い出しているあたしに気付かず、好男が左手を上げて首筋を搔いた。夏の日差しにきらりと輝く黒い腕時計の文字盤には、もうアズアの姿は無い。

何も映らない文字盤を見てあたしがちよつとセンチメンタルな気分になっていると、電車が駅についた。懐かしい駅名を聞いて感傷に浸るあたしの横で、好男が慌てて身繕いをしている。

「ああー、やっぱりこのネクタイ、柄が派手すぎるかなあ。くつ、しまった。こんなところに寝癖がついてる……これってやっぱりマズいかなあ、アズア」

習慣で左手の腕時計を覗き込んだ好男が、何も映らない文字盤を見て肩を落とした。大丈夫か？ と尋ねるあたしに、好男はへらへらと笑ってみせる。

「あはは、オレってばまだ習慣が抜けなくって　　ごめん、ちよつと眼にゴミが入った。トイレ行ってくるから、魅首ちゃん先行つてて」

目頭押さえてホームから出ていく好男の背中を見送ると、笑い混じりの溜息が出た。つたく、好男の奴、泣き顔見られたくないなんて水くさいな。

くすくす笑ってるうちに、あたしの目尻にもちよつと涙が溜まった。それに気付いて、堰を切ったように涙が眼から溢れ出す。誰もいない田舎の改札で、あたしは思いつきり泣いた。どれだけ泣いても、もう力は湧いてこない。あるのはただ、ちよつと切ない気持ちだけ。

自分の泣き声よりセミの鳴き声が大きくなって、あたしは鼻をすすった。無人の駅は妙にがらんとしていて、町を出たときより広く感じた。そして、懐かしく。

涙の跡を乱暴に拭うあたしの耳に、バイオリンとピアノの音が聞こえてきた。たどたどしい演奏を、先生が優しく指導している。暑い日差しを遮る黒々とした木々の影、笑いさざめきながら夏休みを満喫する子ども達のさらさらの髪。

そして、町中に溢れる眩しいほどの色達。

快晴の空を見上げて、あたしはいつの間にか微笑んでいた。

セミの声が止み、人の足音がした。好男かな？ そう思って振り向くと、がま口財布を提げた爺さんがてくてくとやってくるのが見えた。切符売り場の前で止まり、ぶるぶる震える指で駅名を一つひとつ確認している。あたしは鞆を掛けなおすと、爺さんの傍へ駆けていった。驚く爺さんの隣に立ち、駅名がいつぱい書かれた路線図を見上げる。

「どこ行くの？」

「浜松へ行きたいじゃがのう……」

「んー……。あそこで乗り換えて、えーと わかった」

使い古した財布から小銭を券売機に放り込み、あたしは出てきた切符を爺さんに渡した。爺さんは驚いたみたいで、あたしの顔を上げしげと見詰めている。電車のブレーキの音がして、銀色の車両がホームに滑り込んでくるのが見えた。

「ほらほら、電車来たよ。じゃ、またね」

気恥ずかしくなって追いついてるように爺さんを見送るあたしに、振り向いた爺さんは首を傾げていた。

「はて、丙盟さんとこの長女にそっくりなんじゃが……。あの子がこんなにええ子なわけないしのう……」

ぶつぶつ呟いて電車に乗る爺さんを苦笑しながら見送って、あたしはホームを見回した。好男のやつ、いったい何処まで行って泣いてるんだか。……。あ、そういうえばこの辺ってコンビニの中にしかトイレ無かったっけ。

そう気付いたあたしの視界に、コンビニから出てくる好男の姿が映った。ごめんごめん、と謝る好男の手には、また新しい封筒が握られている。

「好男、それ」

「あ、これ。いやあ、手汗で宛名が滲んじゃってさあ。魅首ちゃんの家に着いたときに書き直そうと思って」

セロファンに包まれた封筒を見せる好男。正直、うちの親にはそういうの効かないと思うんだけどなあ……。果たしてそのとき好男はどうするかな、とちよつと面白がりながら、あたしは駅から出た隣を歩く好男が、時々舗装の剥がれたところに躓つまずいてコケている。

「ああー……それにしても、魅首ちゃんのご両親許してくれるかな」

「おいやめろ、他人が聞いたら誤解するだろ」

そうだね、と好男が笑って頷いた。いや、そこはちゃんと否定しろよ。変な噂が広まったらただじゃおかないからな。全然気にしてない好男に、あたしはぼそつと呟く。

「……で、いつ式挙げるんだよ」

あたしの問いに、好男が立ち止まった。ぼかんと間抜けに口を開けて立ち尽くす好男に、あたしはじれったくなって地団駄を踏む。

「だから、花柄との結婚式だよ！ まさか挙げないつもりじゃないよな？ もしそうだとしても、ケーキ作って押しかけるからな！ 入籍の日とか、毎年祝電送るんだからっ」

道行く人にくすくす笑われて、あたしは恥ずかしくなつてそこでやめた。眼を瞬瞬いていた好男が、しどろもどろになっている。

「え、いや、あいつとは腐れ縁くちまつていうか。他にもまだ清算せいざんしきつてない関係が残残つてるっていうか」

珍しく顔を真赤にして慌てる好男を置いて、あたしはさっさと家へ歩き出した。そうかまだ他に浮気相手がいるのか。もっと反省が

必要みたいだな。追いついた好男を見上げると、まだ何か言い訳を続けている。やれやれ。

「あのさ、二階の……、供養してくれた？」

また尋ねるあたしに、好男が不思議そうな顔して頷いた。そして、どうして魅首ちゃんがあんなこと知ってたんだ？ と尋ね返す。適当に言葉を濁すあたしに、好男はそれ以上深く訊かなかった。晴れ渡った空を見上げ、好男が独り言を呟く。

「供養したとたん、ぱったり女の人のとの出会いが途切れちゃってさあ。もしかして、守護霊だったのかな」

実に残念そうに目を閉じる好男に心なかで突込みをいれて、あたしは黙って歩いた。手入れしてない生垣が続き、懐かしい表札が出た家に辿り着く。

案の定、両親が家の前で待っていた。

謝るあたしに父さんが拳骨ケンコウを落とし、母さんがビンタをお見舞いしてくれた。ひたすら謝罪を続ける好男の声が、セミの鳴き声と混ざって聞こえる。

見上げた空が、どこまでも青かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4047i/>

クライ・クライ・クライ

2010年10月9日18時09分発行